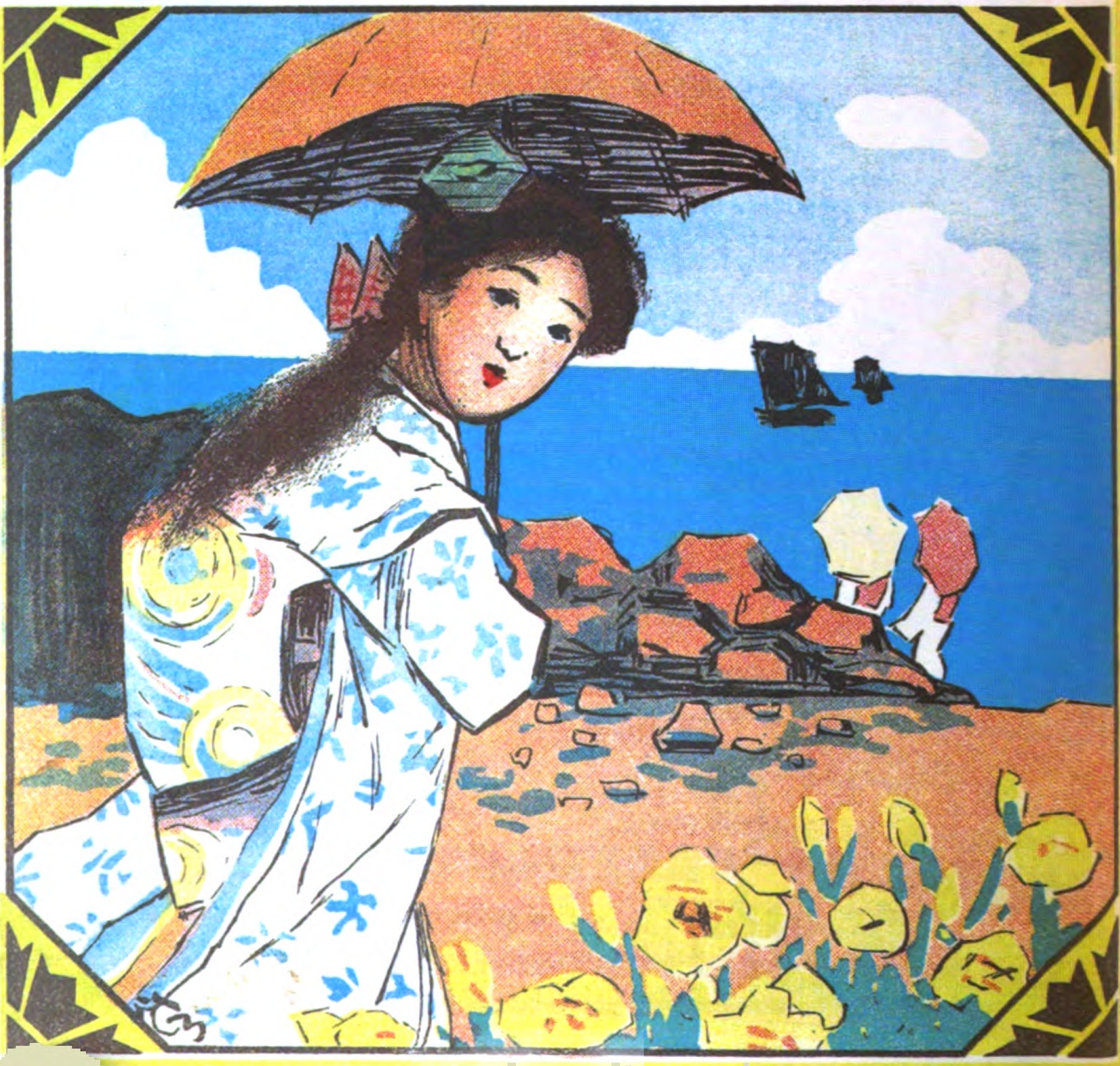
七月

女子文壇

第五年第九號

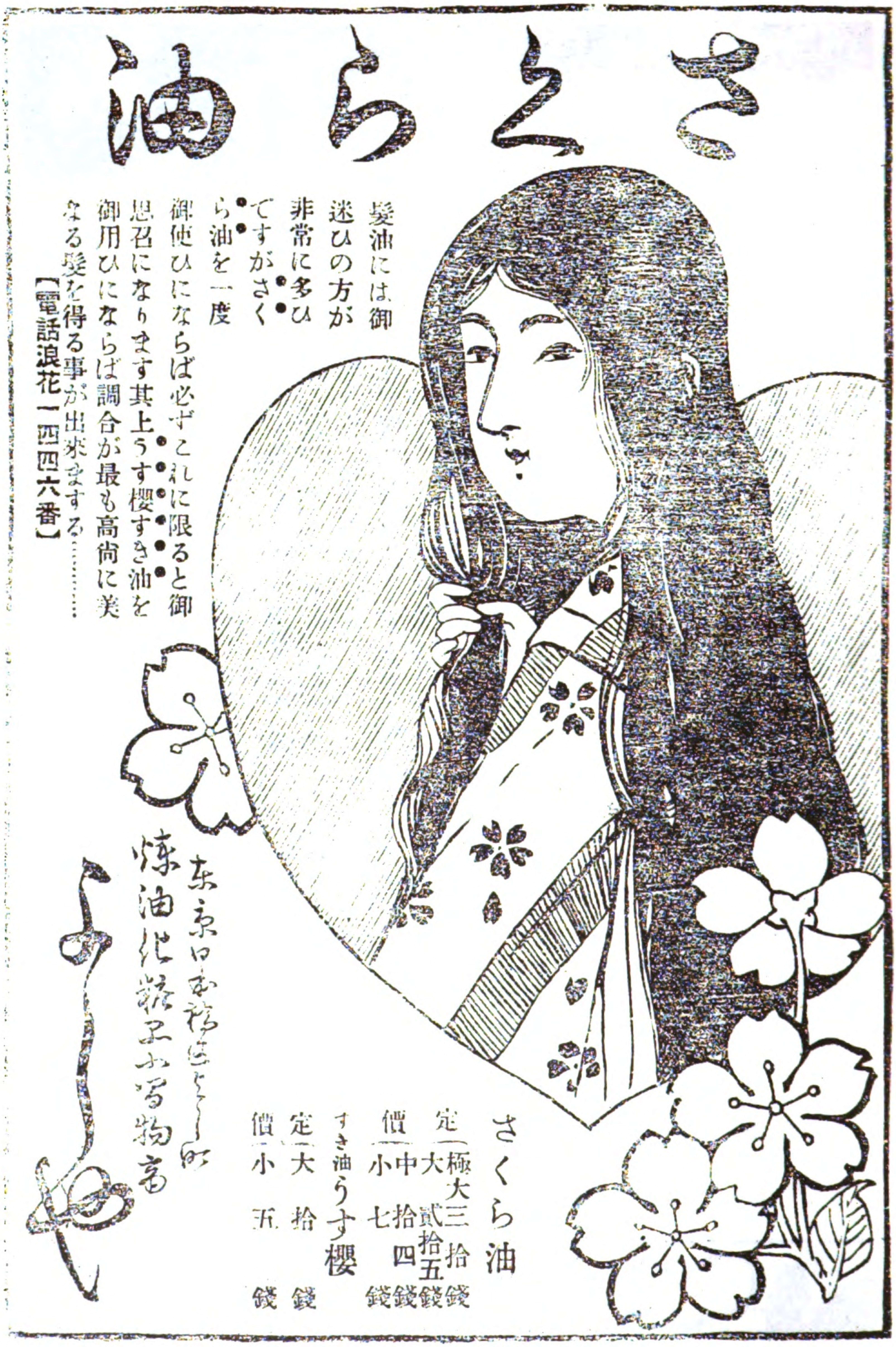


本品は最も完全なる白毛赤毛染なり又本品を以て赤毛を染る時は有に半ケ年以上を保つと云ふ奏効禮狀日々多大なり

全國到る處の小間物化粧品店藥店に有り



本舗
東京市日本橋區通鹽町一番地
服部重右衛門商店


さくら油
髪油には御迷ひの方が非常に多ひですがさくら油を一度御使ひにならば必ずこれに限ると御思召になります其上うす櫻すき油を御用ひにならば調合が最も高尚に美なる髪を得る事が出來まする……
【電話浪花一四四六番】
さくら油
定價 極大 三拾錢
大 貳拾五錢
中 拾四錢
小 七錢
すき油うす櫻
定價 大 拾錢
小 五錢
東京日本橋
煉油化粧品小間物商

女子文壇
第五年第九號

【本欄】

目次

清涼



（大江原色版製版印刷）

第廿七回貸借對照表

借方　負債ニ屬スル分

株金	二、〇〇〇、〇〇〇・〇〇〇
諸積立金	二七九、三三三・七〇〇
預金及保信金	五八、五三七・一五一
得意先勘定	三一、五八九・三一〇
支拂手形	九四四、八三八・五九〇
未拂金及借入金	七二二、〇八二・一一五
前季繰越金	七、〇九〇・一二五
當季利益金	九〇、五〇八・五七〇
合計金	四、一三三、九七九・五六一

貸方　資産ニ屬スル分

新株未拂込金	五〇〇、〇〇〇・〇〇〇
地所及建物	五八七、六九一・九五八
器械及什器	一、〇四三、五〇〇・二四三
石炭需用品備品	五七、四一〇・〇一五
原料、仕掛物、屑物	九二九、七九七・六四五
製品及製品送荷	二五〇、八七二・四三〇
約定済製品	六九九、五七七・〇七〇
職工貸金及假拂金	四四、七〇一・〇二一
消費税勘定	二五〇・三五〇
銀行當座預及現金	一七、六七八・八二九
有價證券	二、五〇〇・〇〇〇
合計金	四、一三三、九七九・五六一

利益金處分

一金九萬〇五百〇八圓五十七錢也　當半季利益金
一金七千〇九十圓十二錢五厘　前季繰越利益金
計金九萬七千五百九十八圓六十九錢五厘

內

金二萬圓也　建物及器械代消却
金五千圓也　法定準備金
金四千圓也　役員賞與金
金四萬圓也（舊株一株に付金二圓即年八分）　株主配當金
金二萬圓也（新株一株に付金一圓即年八分）　同上
金八千五百九十八圓六十九錢五厘　次期へ繰越金

右之通り候也

明治四十二年六月

東京モスリン紡織株式會社

取締役會長　杉村甚兵衛
專務取締役　端善次郎
取締役　山崎作次郎

右檢査候處相違無之候也

監査役　坂本金之助
監査役　人見新助
監査役　金子良吉

（いノ一）

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

本誌を讀まざるは婦人の恥辱

婦人世界

七月一日發行 四卷第八號 一冊拾五錢 郵稅一錢五厘 半年分郵稅共一圓五錢 一年分二圓五錢

◎人倫の鑑とは斯かる人の事なり……村井弦齋

▽三人が命を投げ出して妹の操を取戻す▽驚いた娘の知らせ▽茶ばなし

△十七歳にて會津籠城中に實驗せし苦心……山川操子（山川健次郎氏令姉）

▼女子大學の倫理の講義を傍聽する記▼弦齋夫人の料理談▼家庭笑話

△三十歳にて女學校に入學せる婦人 森田信子（女子商業學校生徒）

▽女學生と弓のお稽古▼新講談烈女吉村れつ……細川風谷▽家庭の重寶

△入澤博士の改良お臺所を見る記……一記者

本誌を讀むと讀まざるとは

婦人禍福の分れ路

△子供と避暑地で樂しき夏を送りし話……竹越竹代子（衆議院議員夫人）

▽八十五歳で道成寺を踊つた老女の健康談▽分娩時の注意……榊博士

△乳飲兒を抱いて良人と未開の地を探險す 鳥居君子（帝國大學講師夫人）

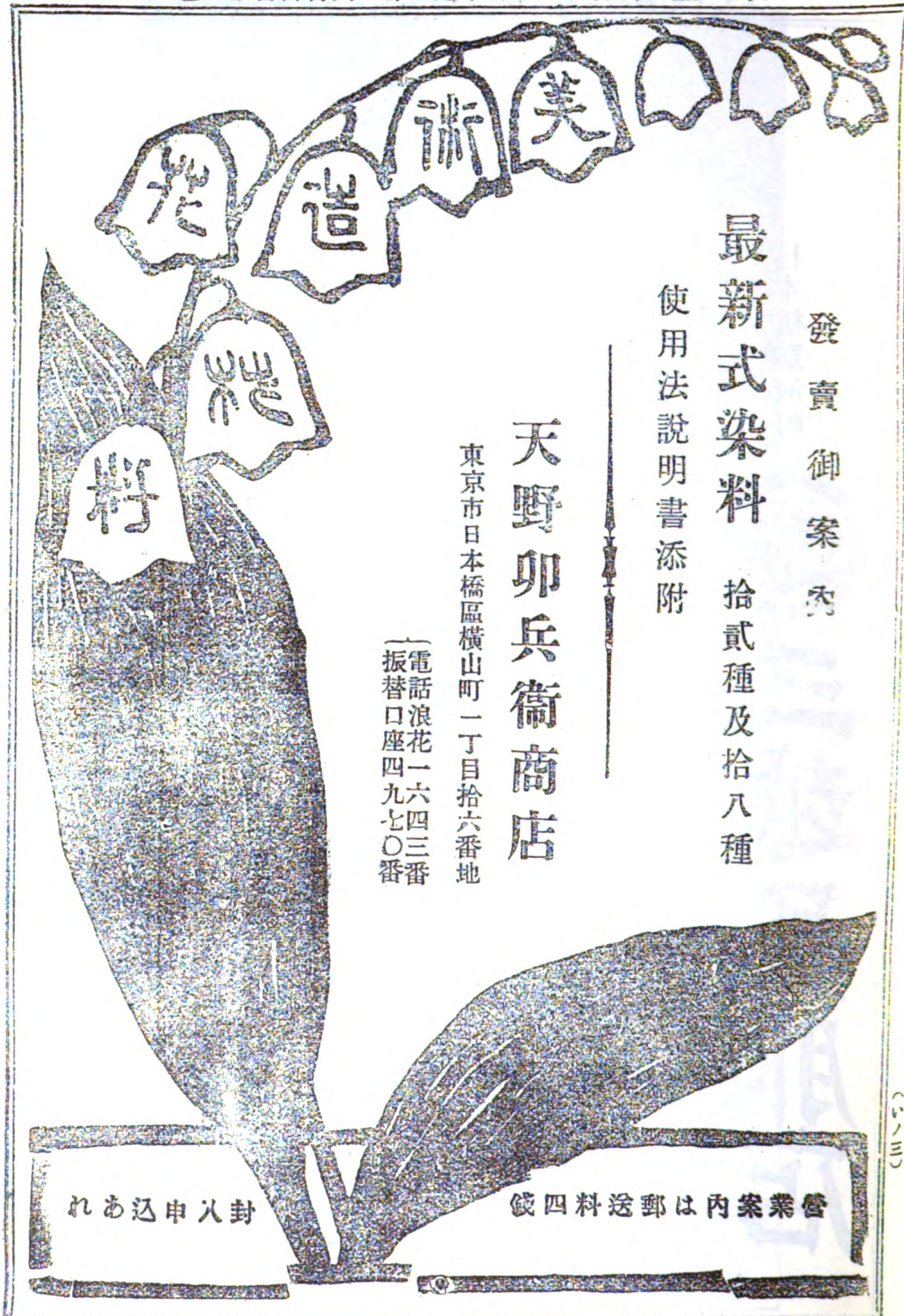
▽冷水浴を實行して健康を增した實驗……向井秀子▲古今文藝談……白水

△出産の時に惡産婆に罹りて困難せし話 岸田孝子（愛讀者）

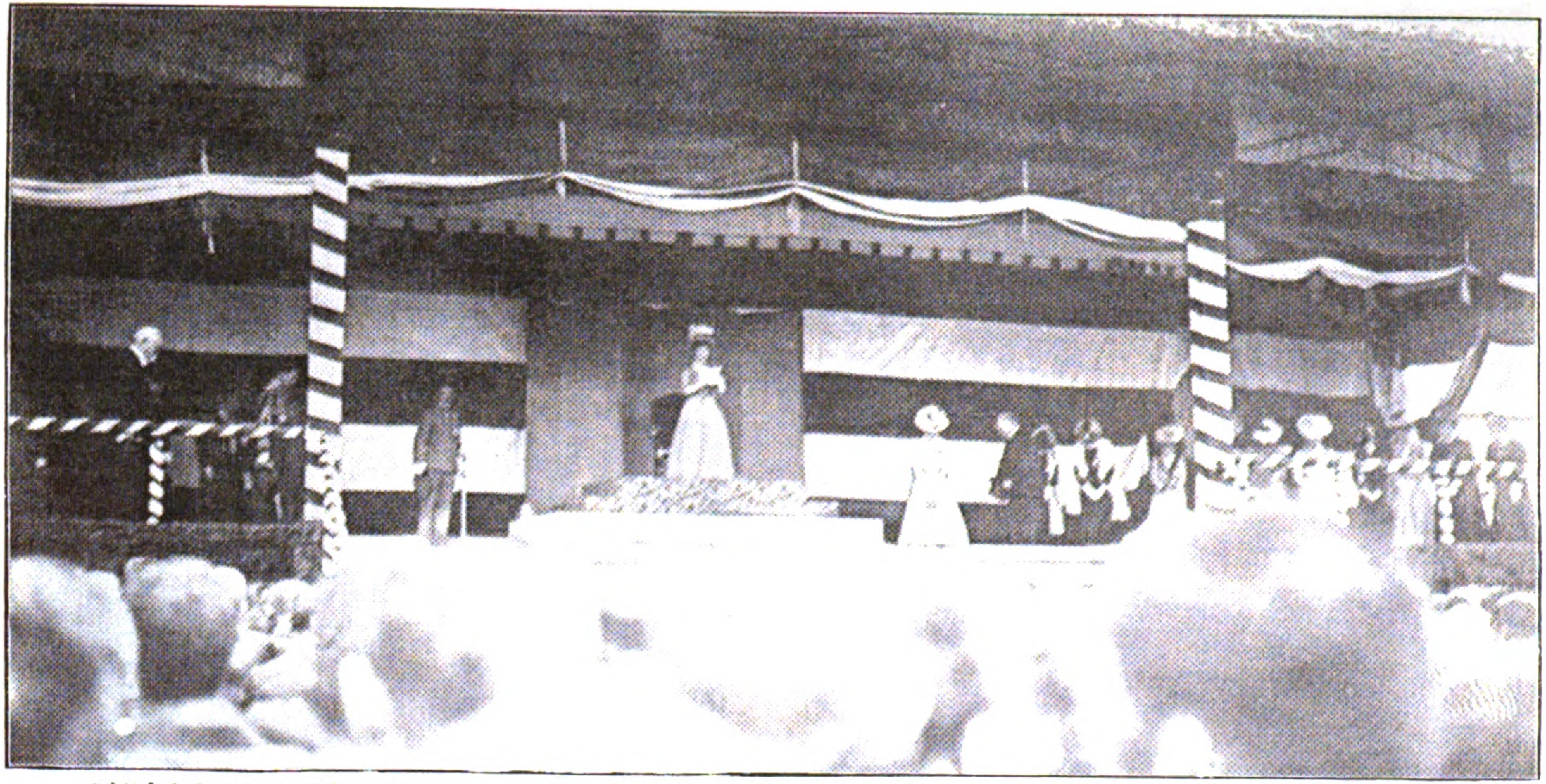
▼初めてお眼にかかる記（當代一閨秀作家）▼（懸賞）感心な女中の實例

◎私の家では女中に臺所一切を任せる 星常子（山脇女學校講師）

東京京橋南紺屋町十二 實業之日本社（郵便振替貯金口座參貳六番）（電話新橋八七四番）賣捌全國書店


美
術
造
花
材
料
發賣御案内
最新式染料　拾貳種及拾八種
使用法說明書添附
天野卯兵衛商店
東京市日本橋區橫山町一丁目拾六番地
（電話浪花一六四三番
振替口座四九七〇番）
營業案內は郵送料四錢
封入申込あれ

皇后陛下　令旨を賜ふ



六月四日東京日比谷公園にて開催の日本赤十字社第十七回社員總會式場（中央は國母陛下　其右の方東宮妃殿下　左の方東宮殿下）



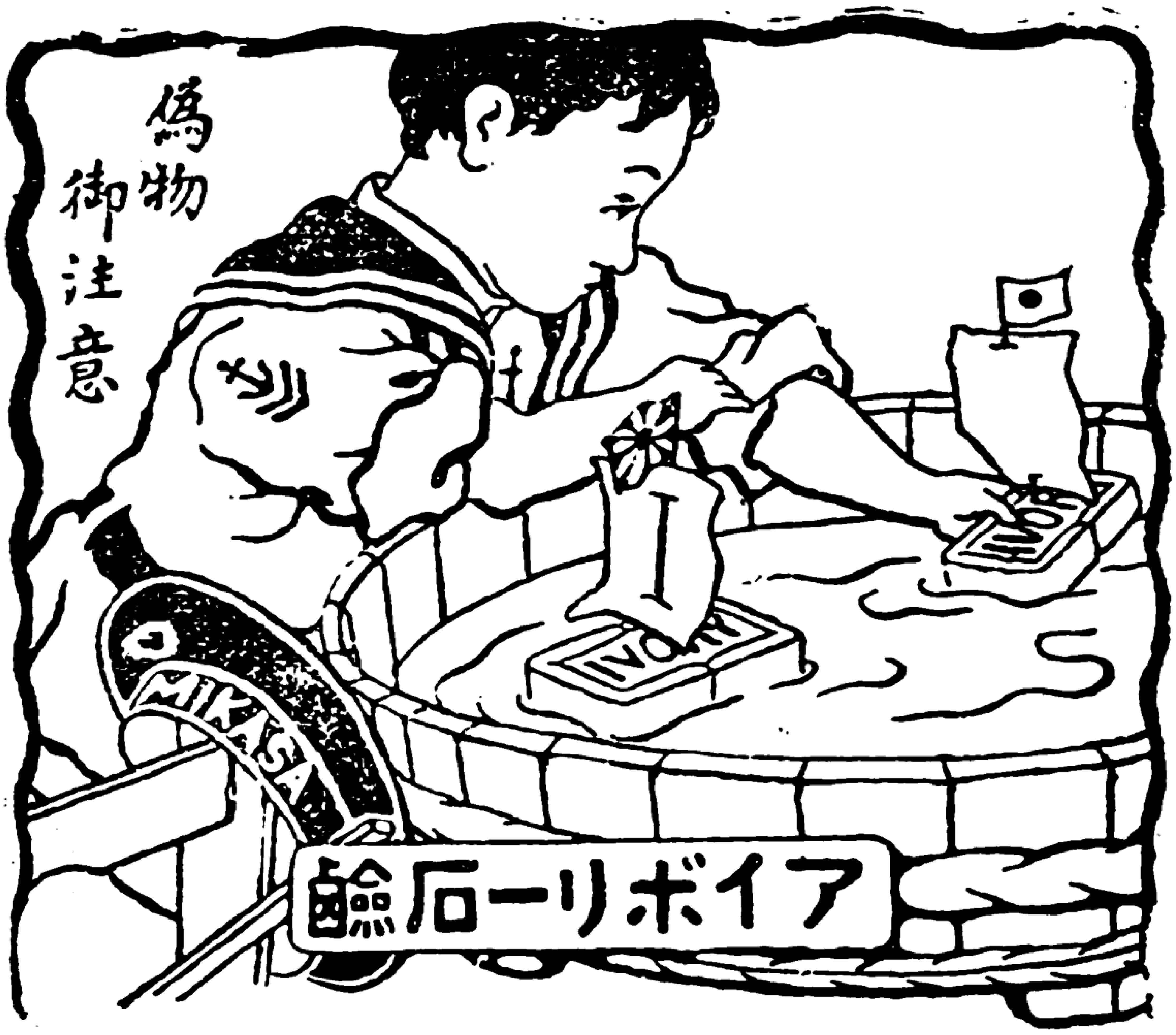
田添幸枝女史と其家庭



清藤秋子女史（向て左端）

旅ごろも





燈火

白晝の如く黃と白とを見分くることが出來る位光力が強う御座います、普通用ひられて居るのは五十燭光で一時間の瓦斯代は僅か四厘しかいりません

（取付の費用は一文も戴きませぬ是非御試し下さい）

瓦斯竈 七輪

御飯なれば二升が十七分位で出來、瓦斯代は一錢四五厘御湯なれば四五分で沸きます、取分け竈は月三十錢の損料で御貸致しますから至極御手輕であります至急御申込下さい

神田錦町

東京瓦斯株式會社

梅毒根治新劑

唯一のばい毒根治特効

本劑（藥名ドクトル）は數多の研究實驗を重ね多年辛苦經營の結果成功したる最新最良の藥物なれば現世紀に於ける

梅毒より[illegible]皮膚及[illegible]に[illegible]して續發する諸症（即ちばいどく。ひゑ。かさ。しつ瘡。かんそう。よこね。ようばいそう。たいどく。瘡毒。ろいれき。骨がらみ。べんどく。ふしぶしのいたみ等）ならば如何なる頑固難症にても特別製誓つて根治することを確證す從來醫療賣藥等百方手を盡すも全治の効なくして困難せる患者は速に本劑を試服し其病毒を根底より驅逐斷絶し天賦の生命健康を保全せよ。

藥價壹劑分壹圓拾錢貳劑分壹圓九拾錢特別製分參圓六拾錢

生殖機病特効新劑……（獨逸新輸入藥）

内服 ヨヒンビン

男女 生殖機不能即ち陰萎病。腎虚神經衰弱。遺精。夢精。早漏。過房。元氣衰弱。老衰無力。生殖虚弱。生殖機能障害。早老者。精液精蟲缺乏。不姙娠。冷症。發育不全等に用ひ輕症は參四劑重症は五六劑慢性難症は八九劑にて根治の目的を達する天下無比可驚奇効ある最新發見藥也精力を増進し生殖器を強健ならしめんと望む者は早く試よ峻烈偉大なる特効眞に如電光世にありふれたる誇大なる廣告を臚列する内地製無効賣藥と同一視することなかれ本劑の卓効は高名なる醫師に就て承合せば明白也

拾錠入壹劑藥價送料共壹圓九拾錢郵券貳割增

本劑は獨逸國伯林大學教授博士スヒーゲル氏の發見に係る

奏効確證 美容新劑 やせる藥

本劑（藥名ヨードチリン錠）は學理實驗に徴したる現世紀唯一の發明劑にて血ぶとり、あぶらぶとり、酒ぶとり、顔赤くほてり、のぼせ症、卒中症等總て肥滿質多血質脂肪過多質の人用ゆれば無害にして著しく體量を減じ脂肪を適度に脱し美容健康を保ち程よくやせる特効藥なり故に彼の見苦しくふとりたるを苦にする諸君は速に本劑を用ひ其驚くべき偉大なる奇効を知られよ

壹劑分價送料共參圓廿錢貳劑分六圓廿錢特別製分九圓拾錢着金即刻送藥す

△世界唯一 麻病消渇の根治新藥

麻滅（りんめつ）

麻滅は最も進歩したる最新の麻病消渇即治模範藥なり、本劑はありふれたる普通の賣藥と異なり殺菌學上効力顯る峻烈な一新藥を主劑とし麻病消渇の病原たる「ゴノコッケン」を殺滅する處方に基き製したる是を内服して滅殺劑せし新藥に付輕症は壹劑重症は特別製分にて必ず根治確證するなり佃して彼の普式洗滌劑の如き迂遠無効有害の姑息藥と異なり奏効確實峻烈なるだけその藥價不廉なり用藥者は豫め之を諒せられだけ

藥價壹劑壹圓拾錢特別製貳圓拾錢郵券代用貳割增しの事

腋臭 わきが 根治確證新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても誓て根治し決して再發或は他病的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脱せよ

價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓廿錢着金即刻送藥す

毛の必ず生る確證藥

本劑は米國醫學博士の發明に依り學理實驗に徴したる世界無比の毛髮速生藥なり、即ち男女共腫物の痕、はつぼうはげの痕、やけどの痕、頭髮及はゑぎわの薄き人、陰部に毛なき人、まゆげ口ひげの薄き人、其他總て毛のあるべき所に毛のなき人等本劑特別製分を用ゆれば忽ち毛髮着々と發生する特効あることを確證す本劑は從來ありふれたる種々雜多の毛はゑ藥とは其効勿論同日に語るべきものにあらず眞に天地月鼈の大差あるに付寧に玉石混同視すること勿れ

特別製分金五圓三拾錢大瓶貳圓卅錢中瓶壹圓廿錢

以上專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新舘藥房（電話下谷五四六番）

婦人畫家　（巽畫會）



武谷朧女史

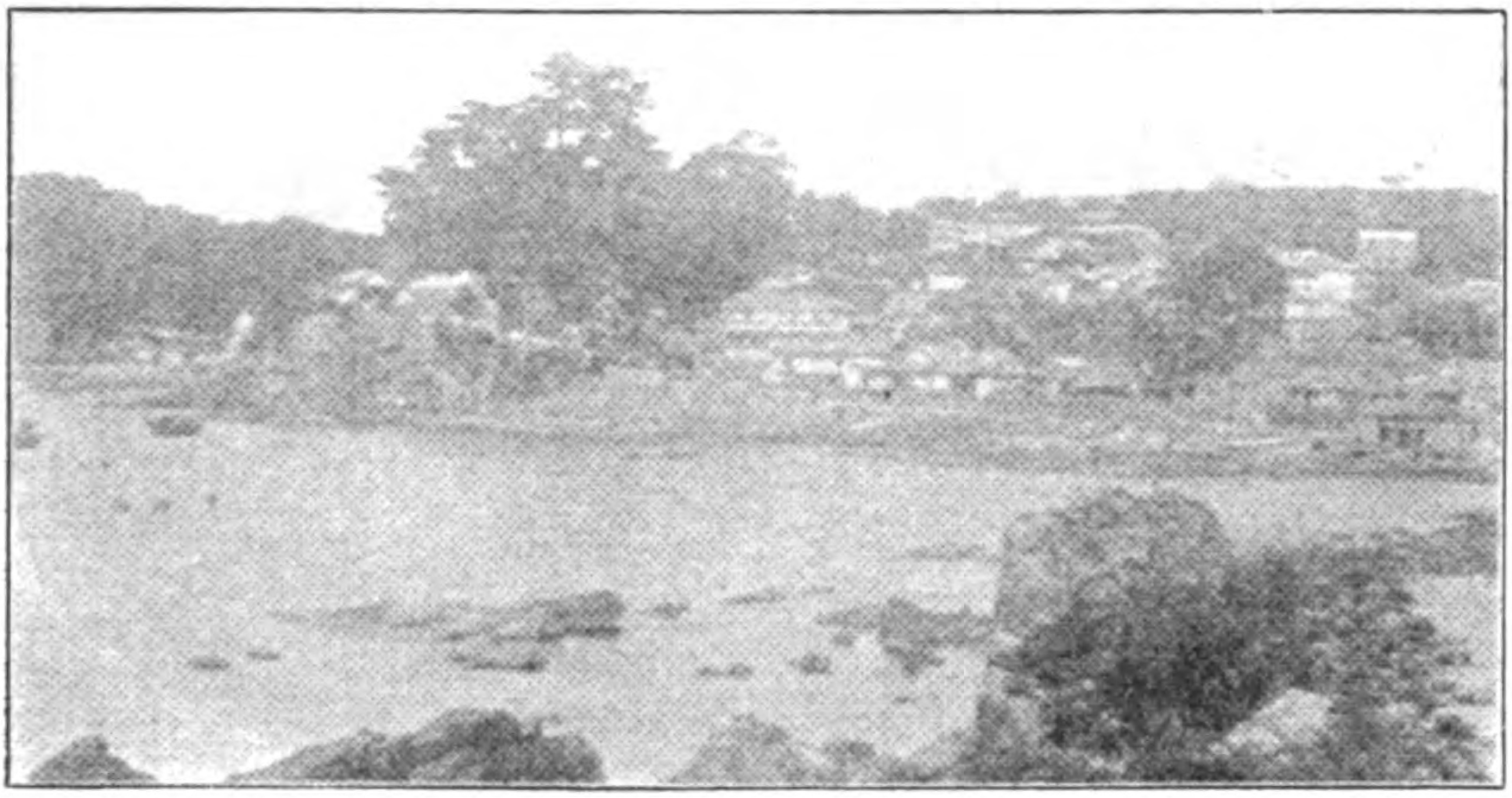


山田松琴女史

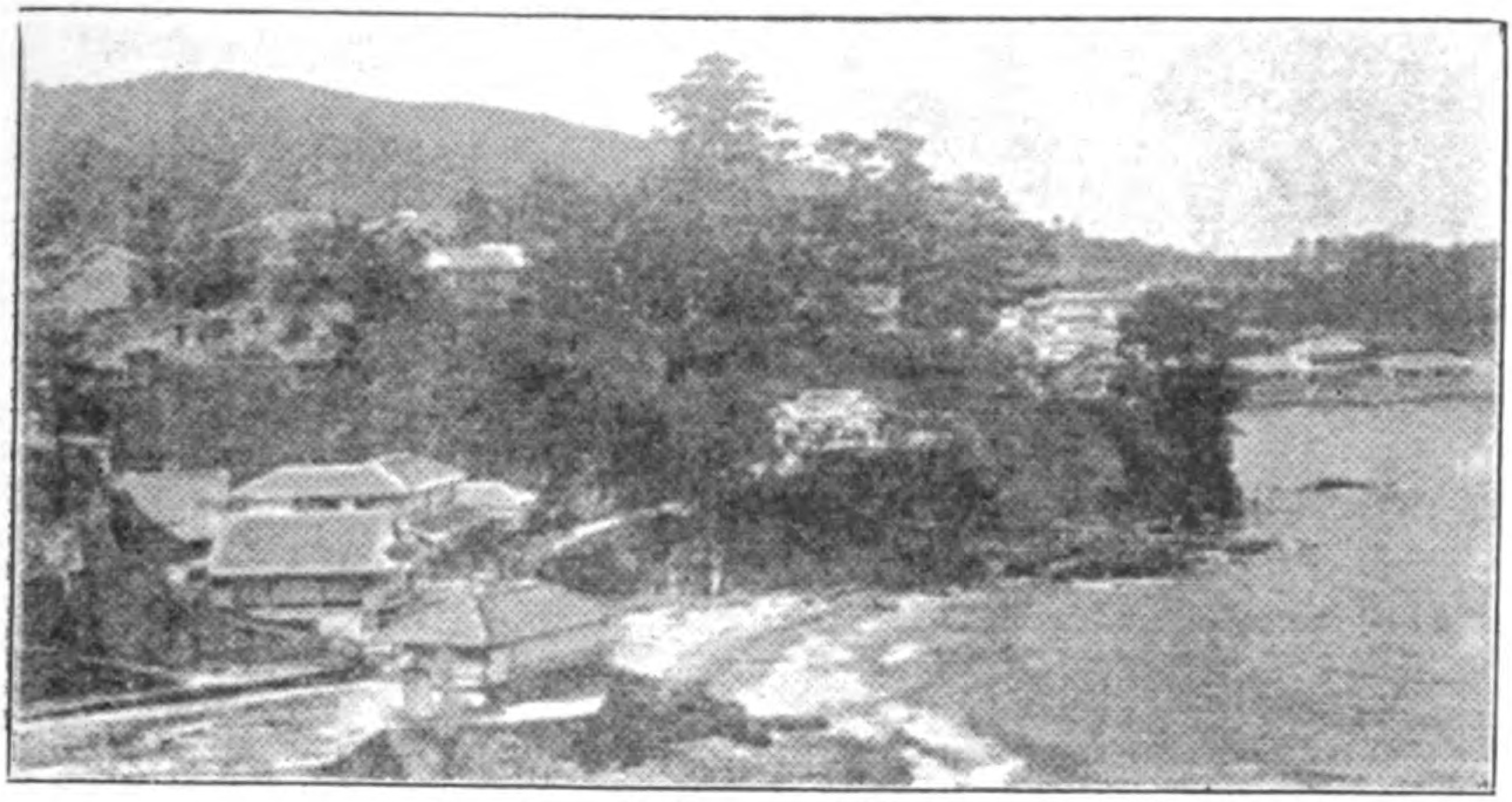


大久保鏡湖女史

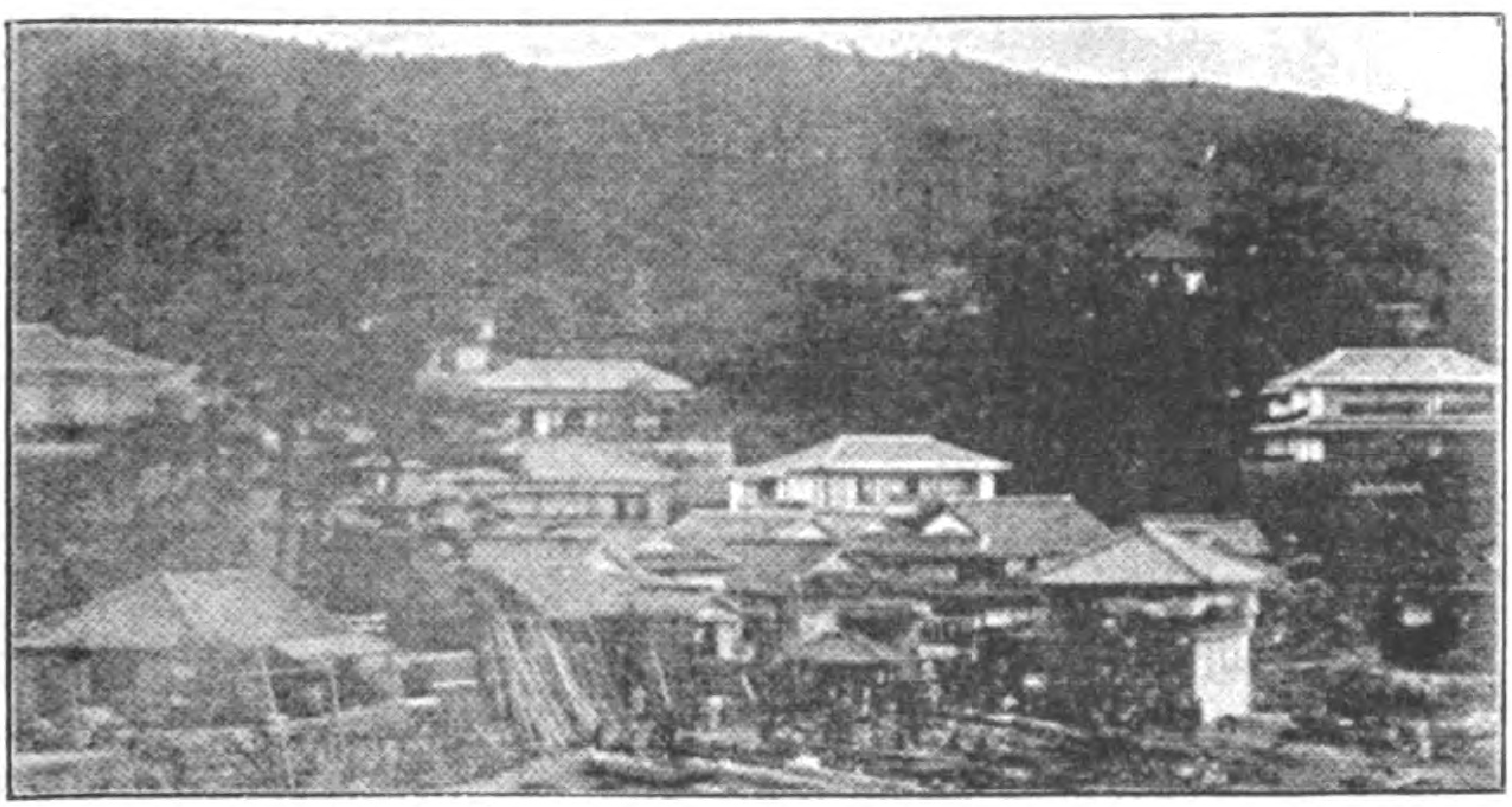
紀伊鉛山温泉



(其一)



(其二)



(和歌山 山西千代子寄贈)

(其三)

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ



女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

第二回新學期開始

實用女學講義錄

今や入會の最好機なり

此の好機を逸して悔を遺すこと勿れ

▲自宅に在りて業務の傍、高等女學校程度の學術技藝を修得せんと欲するものは速に本會に入れ、本會發行の實用女學講義錄は前記學課の外に我國家庭の事情に參酌して女子必須の諸學藝を遺憾なく講究せしむ。

▲會長　尾崎行雄氏自ら會務を監督し取扱親切也

▲講師　斯道に經驗深き專門大家拾數氏之に當る

▲組織　高女課程以外家政技藝等を加へ實用的也

▲講義　言文一致讀入れ假名付きにて誰にも判る

▲質問　不明の處は何回にても自由に質問を許す

▲雜誌　會員には講義錄の外機關雜誌を毎月進呈の詩歌文章俳句は添削して雜誌に掲載す

▲本會は中學講義錄を發行して成功せる深き經驗を基礎として新式の教授法により丁寧懇切に教授す、小學校卒業位の學力あらば何人にても容易に了解することを得べし

▲會費　全學期の會費は都會半月の學費にて足る

▲入會　何時入會するも講義錄は第一號より送る

▲章票　會員には會員章、修業證、卒業證を送る

▲特典　此際至急入會者には入會金を免除すべし

先づ規則書を要求せよ

見本付き規則書無料進呈すべし

東京神田區駿河臺

大日本國民中學會女學部

（電話本局三〇〇四番　振替東京四二〇〇番）

吹奏



（兵庫縣）加藤美加子

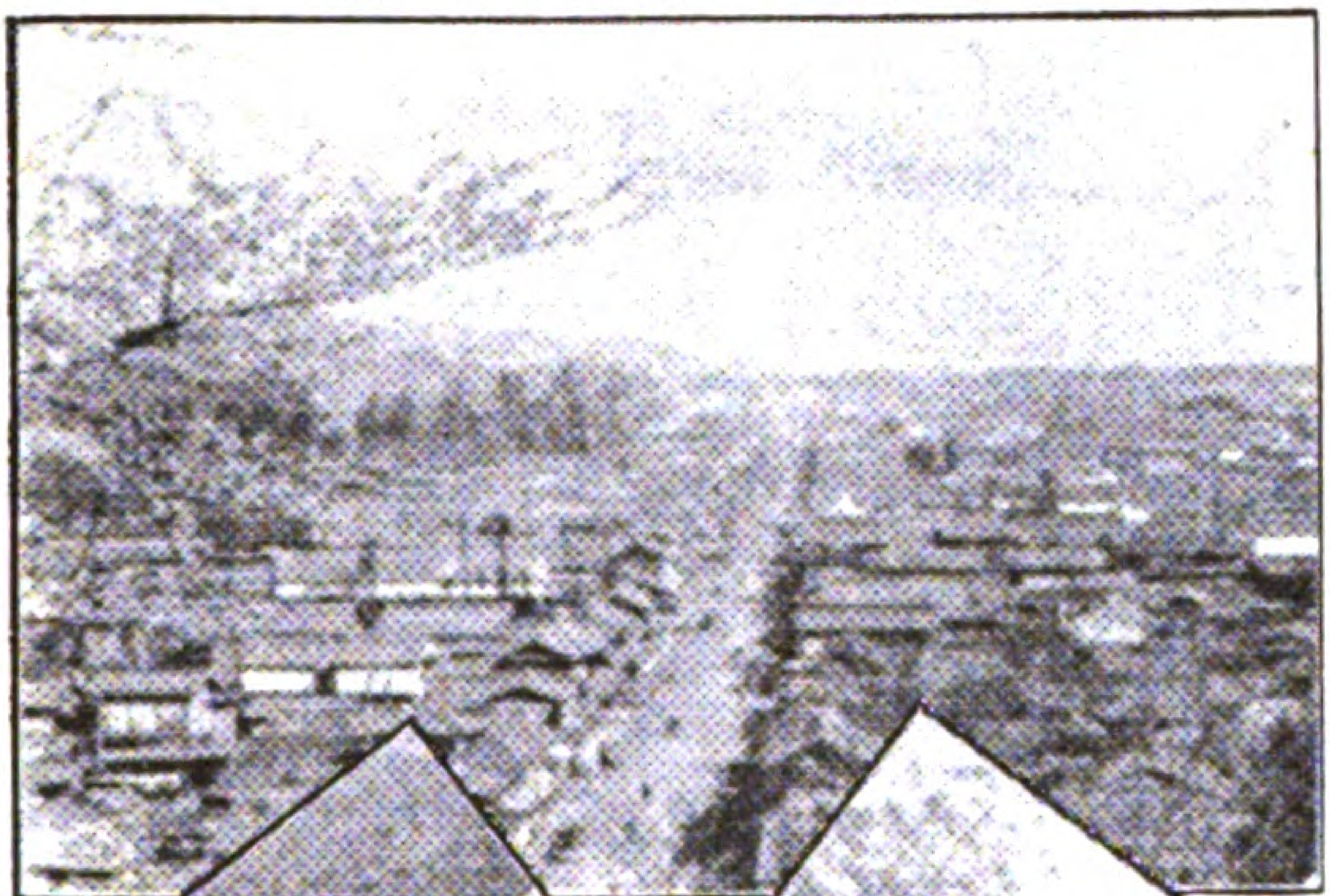




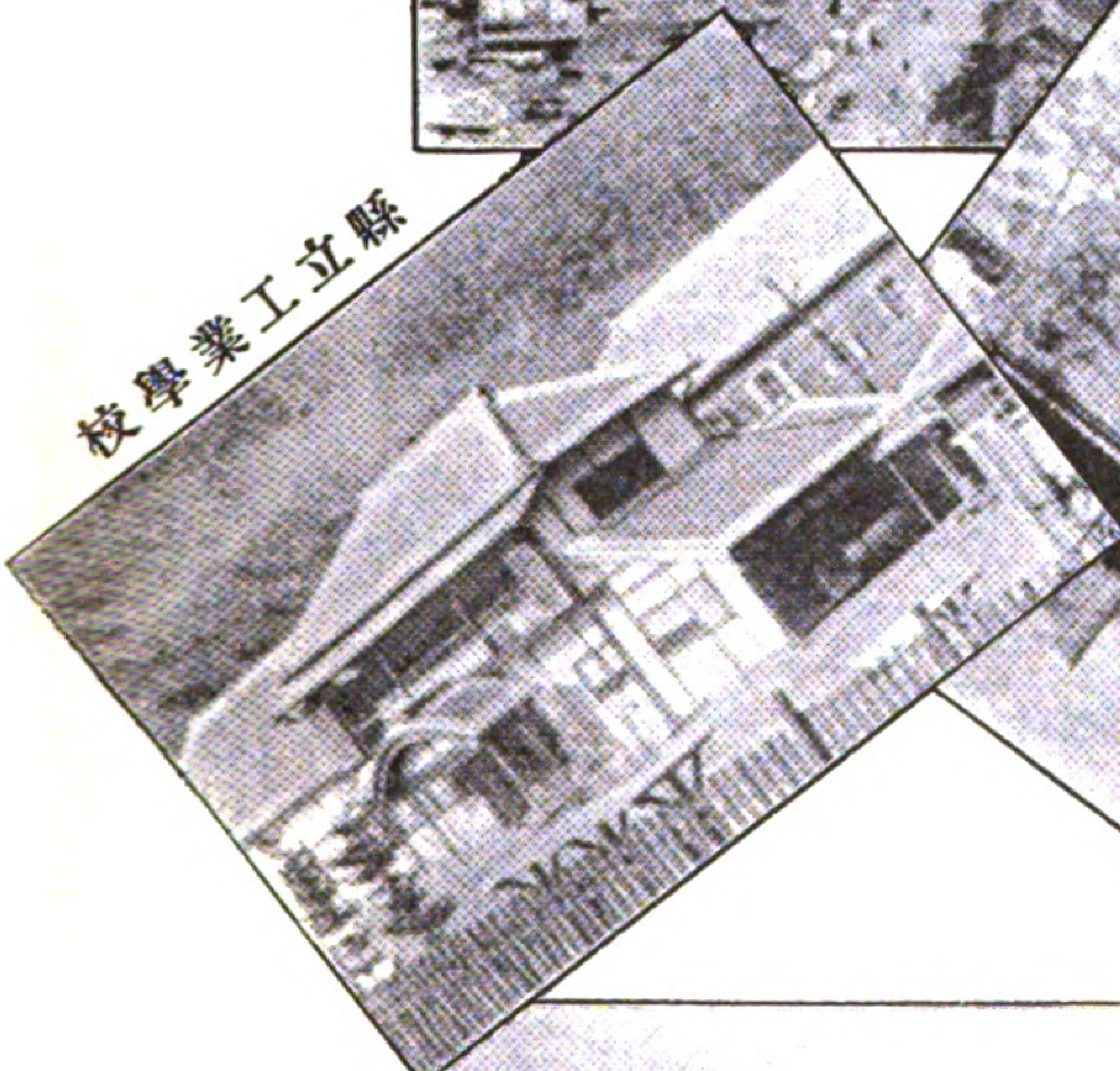


（大阪）藤田淸子

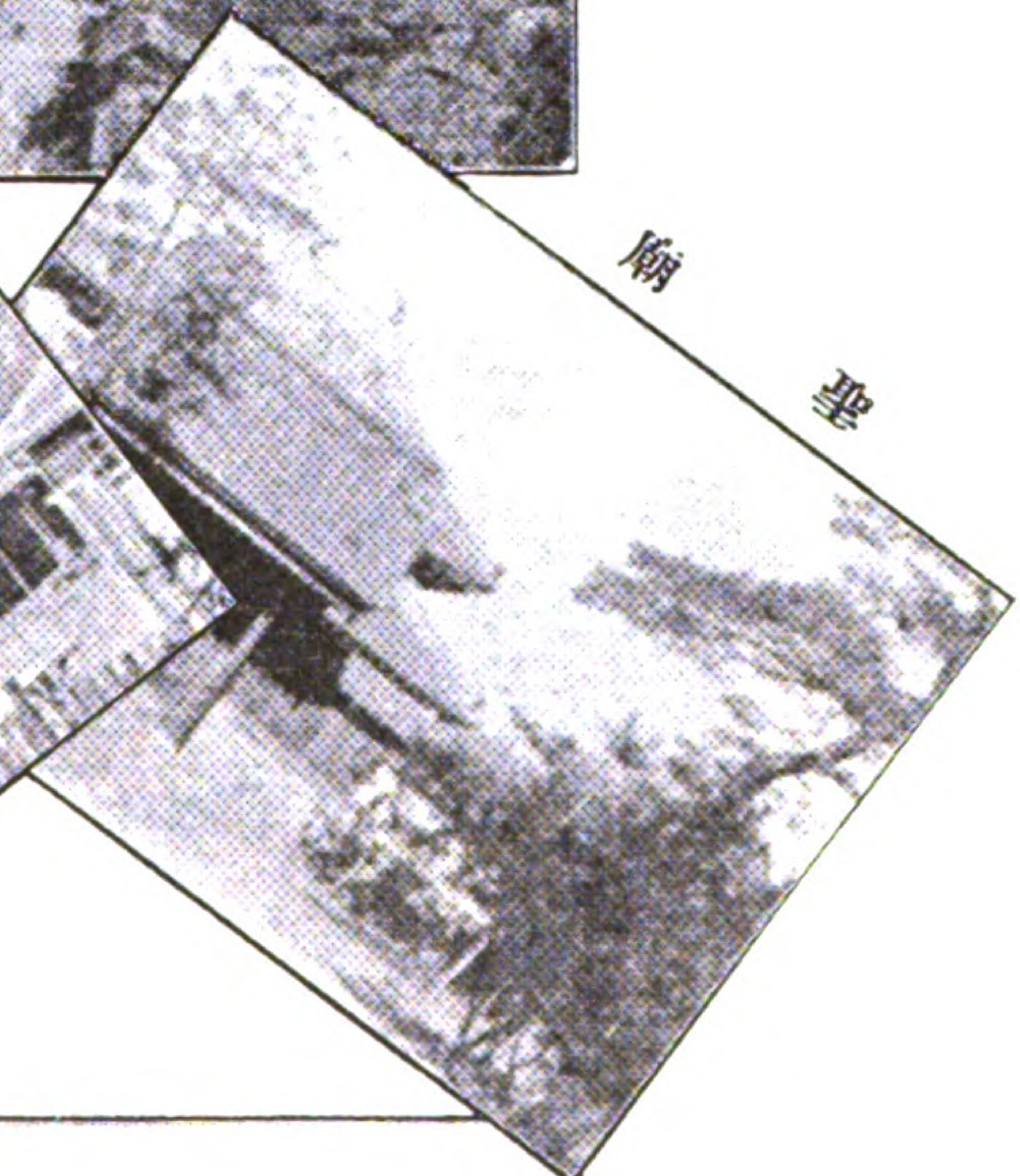
下野足利町全景



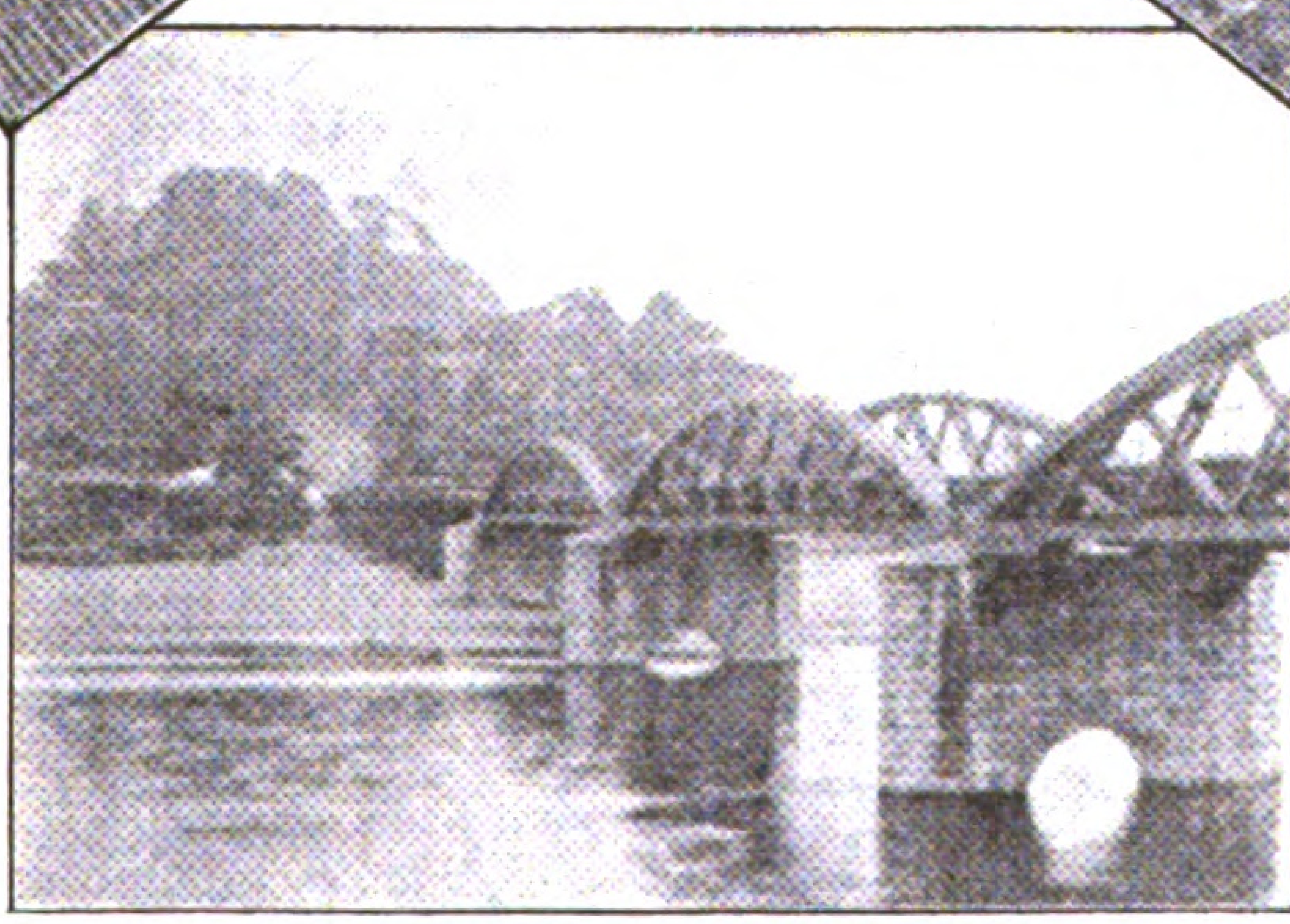
縣立工業學校



聖廟



（足利絹川たて子寄）



渡良瀬橋

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

習字特許速成通信教授

六ケ月卒業

字の上手は一生の德

速に入會して頗る能書家となるべし本會の方法は全く好果顯著なり

書者 文部省習字檢定試驗委員 高等商業學校習字教授 稻川雲谿先生及 玉木愛石先生

女子部書者 小野鵞堂先生講師は大家數名

見本 詳細會則 無代進呈

東京市本郷森川町 電話下谷三〇壹壹番

帝國習字速成學會

わが寫眞帖

（東京）佐藤いつ子



（大阪）服部喜代子

（沼津）四方ひろ子

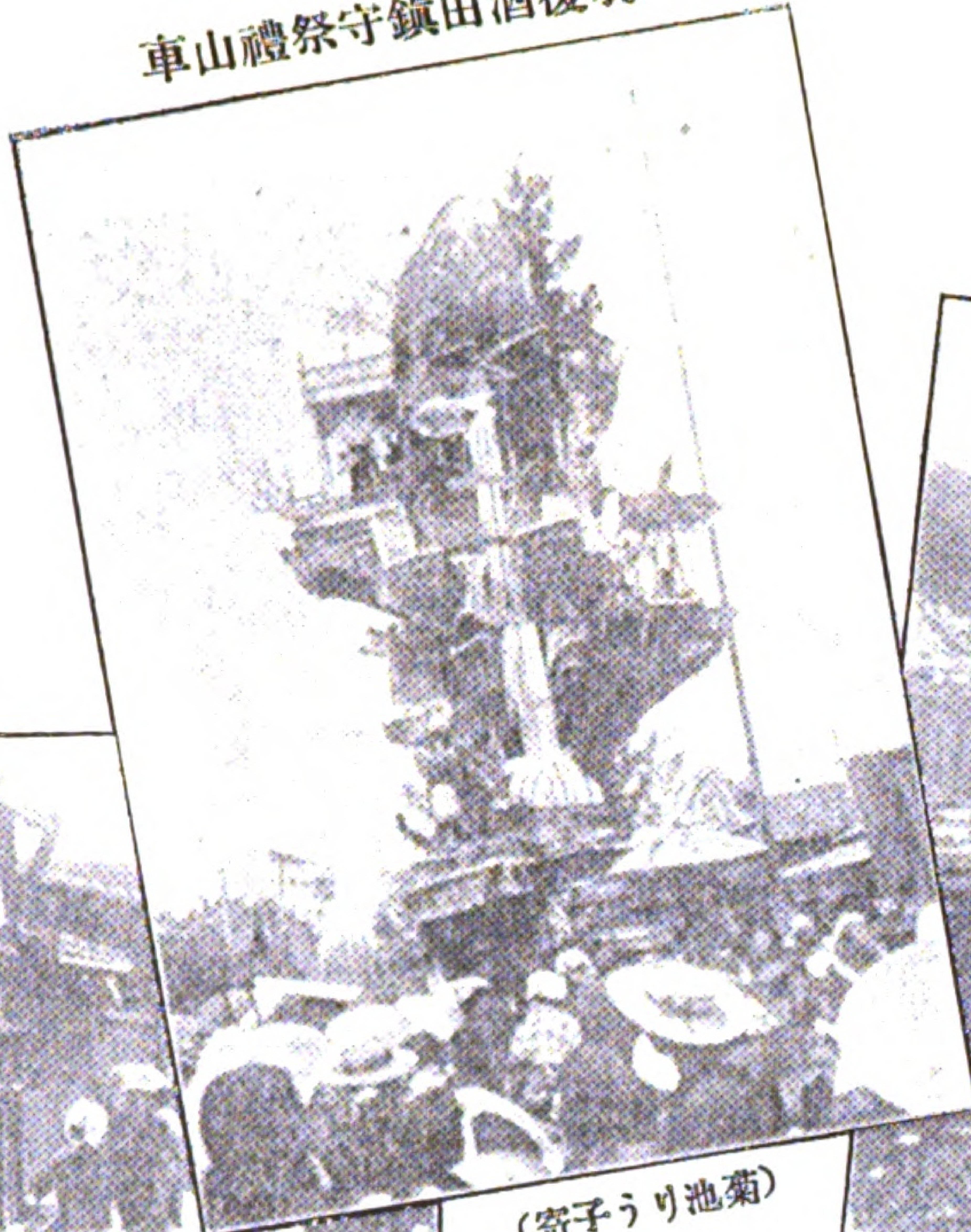
（靜岡）濱崎照子

佐渡相川鑛山祭の山車



（池きみよ子寄）

羽後酒田鎮守祭禮山車



（菊池りう子寄）

相川鑛山祭の盆踊



女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

日本一の少年少女雑誌

少年之友

立志成功

四巻七號 七月一日發行

△猛虎狩……英國陸軍少將アルシイマネイ
△梅の實……理學博士松村任三
△大探検船日東丸……長田令二
△運動のすゝめ……高等女子師範教授井口あぐり
△歴史小説六代君 △少女小説牛乳配達 △燕と乞食の兒 △那翁の生涯 △三越の店員になれる少年の資格と其の待遇 △卵の色々……黒川技師 △七月の花 △少年十二訓 △玩具と手工 △少年日記 △初夏の植物園 △繪探し、筆蹟、笑話、作文、短詩、和歌、俳句其他

(口繪) ○大英雄ナポレオンの少年時代 ○清國皇帝 ○田植 ○大角力 ○紐育ニ於ケル獅子ツカヒノ少女

正價 一册郵税共金九錢 六册同金五十一錢

少年諸君座右之寶鑑 (最新刊)

全壹册 上製美本

高濱虚子先生選 中村不折先生装釘 鳴雪先生戯墨

虚子選 新選俳句集

正價 四拾五錢 郵税六錢

(最新刊) 金文字入

△挿畫石版、密畫、寫眞、銅版、木版色刷六十四葉入△

文學士久保天隨先生評釋

附録 俳文評釋

目次 一、柴門辭芭蕉翁 二、鉢扣辭去來 三、松島賦芭蕉翁 四、五、百花譜許六 六、簑蟲説素堂 七、十八樓記芭蕉 八、九、丈草誄去來 十、十一、祭猫文支考 十二、示僧古鏡辭李由 十三、長雪隱解許六

發行所 東京神田旅籠町一丁目 文光堂 (振替口座一九五五五)

賣捌 東京堂○北隆館○上田屋 東海堂○良明堂○至誠堂

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

月ざらへ新藥

本劑は學理と實驗より得たる新發見藥にして二三ケ月の月經閉止、月經不順、又は如何なる難澁の滯りも最も安心に流下する不思議の專門藥劑なり、他藥を用ひて効なき人試み給へ、早く

藥價〔壹劑 六拾錢 三劑 壹圓五十錢〕 二劑 壹圓拾錢 五劑 二圓

●送料不要但し八錢送れば密封送付す

東京市京橋區具足町十四番地

發賣元 濟生藥院

はげ 拔毛 直し

●本品は歐米數十種の毛生藥を分析し其有効成分に特種の發毛及ぬけ毛止め奇藥を化學的に集成せる新藥にして實驗成効者頗る多し

◎原名ヘアリン ◎定價壹瓶金壹圓五拾錢 ◎內地送費拾五錢

毛ぬき藥

ヘールピンは數種の脫毛藥より其有効成分を化學的に集成せる最近の無害の奇藥なり此れを塗れば直に脫毛し皮膚を損せず毛深き人毛多き人安心して試みよ

●原名ヘールピン 藥價壹瓶壹圓 送料拾五錢

東京市牛込區北山伏町壹

百合園製藥所

毛のはへる藥

多年實驗の生毛劑にして特効驚くべき奇藥

一圓●一圓半●濃厚二圓半●三圓半送料十錢

美容散 やせる藥

●血ぶとり、あぶらぶとり、酒ぶとり、顔赤く、のぼせ症等總の肥胖質の人用ゐて害なく身體美容となる保證藥なり

●定價(一週)七十錢(三週)二圓(五週)三圓廿錢送費十錢



にせ物御注意

皮膚病專門藥

あせも いんきん たむし

あか鼻 ざくろ鼻 あざ

ぜにがさ ひぜん わきが

本劑は獨逸國皮膚病研究所專用法劑にして特製一瓶に全治保證又おいこむの憂なし

小瓶五十錢中瓶一圓大瓶一圓五十錢特製二圓送料十錢

專賣本舖 東京本郷區本郷三丁目 電話下谷二一二九番 新宮藥館

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

女子文壇（第三增刊）大懸賞募集

本誌第三增刊として玆に懸賞大募集を行はんとする『短篇小說』は其名の示す如く、短篇小說を主とし、併せて詩歌美文の各種文藝を含有するものなり、今回は文學中の文學、創作中の創作とも云ふべき小說を主位に置き、隠れたる天才を世に紹介せんとす。今や文運天下に普く、多少文學に志あれば小說を讀まざるものなし、讀んで之を作らんと思ふ才人また雲の如く多し。是等の諸君は本社の企に賛同し、平素の修養を傾倒して寄稿せらるべきを信ず。選拔は公平にして且嚴正、批評は親切にして且忌憚なし、寄稿雜誌中の模範たる本誌が最上の努力を此處に注ぐべき證據は、其發表の曉に到りて明かなるべし、

短篇小說

懸賞方法

小說　一等金貳拾圓。二等金拾五圓。三等金七圓　四等金五圓　五等金參圓（凡て正金を贈呈す。原稿は振假名付廿四字詰二百行限）

美文（天賞金七圓。地賞金四圓。人賞金貳圓（凡て物品を贈呈す）（原稿は廿四字詰七十行限）

書簡文〇日記文〇新論文〇新體詩〇和歌〇俳句　各天賞金五圓。地賞金貳圓。人賞金壹圓（凡て物品を贈呈す。原稿は書簡日記論文は廿四字詰四十行限り、新體詩は振假名付三十行限り、和歌俳句は一人十首限り）

圖畫（三寸に二寸五分の大きさにて薄き用紙に描く）

別賞十等迄圖書切符贈呈

投稿愈よ六月三十日到着にて〆切

▲內容は八月號に於て詳告す

八月十五日發行

定價金貳拾錢　郵稅壹錢五厘

投稿所 發行所　女子文壇社　東京京橋區大鋸町



第五年第九號

明治四十二年七月一日發行

自分を載せた汽船は、一度は遠く岸邊の景色も見分かぬほど、廣い沖合に出たが、軈て再び靜な陸地に添うて進んだ。晴れ切つた青空に滿渡る明い夏の日光は水平線上に浮ぶ眞白な雲の峰、平な海水、枝も重氣に茂つて居る岸邊の樹木を照して、雲の白さ、水の藍色木葉の緑に、云はれぬ愉快な光澤を與へて居る。見渡すと、沿岸は一帶に牧場でも有らうと思はれる低地つゞきで、水面には處々に、高く茂つた蘆荻の洲が現れ、其の陸をば、眞白な小舟の帆が走つて行く、鷗の群が花の散る樣に飛ぶ自分は此う云ふ水彩畫その儘の小山水を、偶然無名の里に見出す時の嬉しさ、世界に知れ渡つた名所古跡に遊ぶの比では無い。

永井荷風氏『あめりか物語』より

暮れゆく日、血に濁る床の上にひとりやすらふ。
街しづみ、窓しづみ、わが心もの音もなし。

載せきたる板硝子過ぐるとき車轢きつゝ
落つる日の照りかへし、そが面曀びあかれば
室内の汚穢ばた、古壁に朽ちし鍼
一齊に屠らるゝ牛の夢くわとばかり呻き悶ゆる。
街の子は戯れに空虚なる乳の鑵たゝき、
よぼよぼの飴賣は、あなしばし、ちやるめらを吹く。

くわとばかり、くわとばかり、
黄に光る向ひの煉瓦
くわとばかり、あなしばし。——

北原白秋氏『うめき』

若き婦人の根本修養



羽仁もと子

第七　誰にでも出來るよき學問のしかた

無學なる女髪結

本號には學問のしかたといふことについて、お話することを約束いたしました。

私は此頃或人に次のやうな實話をきゝました。或所に、名人の女髪結がありました。大層賢い婦人で、また世故にも長けて居ります。さうしてひどく勝氣な質て、どんな人にても一目置いてつき合ふといふ事は大嫌で御座います。それて自分は十二三から、女髪結の弟子になつて、朝早くから夜遲くまで働き通し、殆ど目には一丁字もなく、人となつたことを殘念と思ひ、どうかして學問がしたいと思ひました。諺に六十の手習といふこともありますけれど、四十女がいろはから習ひ始めるのは、この樣な勝氣な人にとつては、殊に

苦痛てありました。何かよい工夫もがなと思つて居ります中、古くから髪結に來る人の中に、大層書物好きの奥さんがありまして、いつの間にか、その心を察してゐたものと見え、斯うして四日目〳〵にはお前さんのお世話になるのだから、來るたびに讀みませう。世間とは又異つて面白いかもしれないと、置いて行つたその本は福翁百話で御座いました。さうしてその奥さんは來るたびにその本を讀んでくれました。

福翁百話を讀破す

平易通俗に書いてあるとはいひながら、始めは殆ど分らぬ勝て、たまに會心の文句が耳に入る位のこととてありました。けれども書物といふものは、面白いものだと思ひました。讀み手の方ではます〳〵氣を入れて、六ヶ敷い言葉だと心附いたものには時々註釋をさへ加へては讀んで行くといふ樣に致しました。勿論中で特に分り惡さうな議論は飛ばしましたけれど、兎に角一回終りまで讀みました。さうして又始めから繰り返しました。二度目には餘程分る所が多くなつたと見えて、所々に質問を挿む樣になりました。讀む方も根氣よく、度々繰り返してゐる中に、根が賢い女であります故、なか〳〵よく福澤先生の思想が腑に落ちて、非常なる興味を持つ樣になり、外にもこの樣にして同先生の一二の著書を讀みました。

讀書の興味

今度は人から讀んで貰はずに、自分に何か讀みたいと思ひまして、前に福翁百話を讀んで呉れました篤志の婦人より、その豫ねてより愛讀して、一年分づゝ合本にしてありました、私の編輯して居ります雜誌を借りて、假名を拾つては讀みました。前の婦人のお蔭で思想も可成に進み、また平易な文章に用ゐる樣々の言の意味なども、餘程覺えて居りますので、大層分りよく、なほ六ヶ敷い所は、質問して一層讀むことが樂しみになりました。

讀書の感化

もとこの婦人は前にも申しましたやうに、年少い時から、當時全盛を極めてゐた、女髮結の弟子になり、今はまた名人と云はれる程の身になつて、朝から晩まて並々ならぬ贅澤な婦人や、賤しい職業の婦人ばかり相手にして、所謂名士貴婦人などと云はるゝ人々の、卑しむべき裏面を窺ひ、種々の弱點を知り拔いて居りますゆゑ、その氣の勝つた傲慢な性質より、自然に人世を蔑視するやうになり、人を人とも思はぬやうな、ひどい女で御座いましたが、書物に親しむやうになつてからは、數年の間に著しくその人柄が變つて參りました。さうしてこの節では、敬虔の態度を以て、高尚なる宗教の話に耳を傾けるやうになりました。

學問をするために最も大切なる事

學問するといふことは、必ずしも高等の學校に入るといふことではありません。高等の學校を卒業したといふことも、またそれて學問をした人だといふことは出來ません。學問は、私共の人らしき人となるために、是非とも必要なものでありますが、高等の學校に入るといふことは、どうしても必要といふことではありません。即ち學校と學問とは同じものでありません。學校は學問をするために便利な所でありますけれど、學問をするために、何よりも大切なものは、學校では無くして、學問をしたいといふ心、及びよき書物を本當に會得して、多くの興味を持つまでに深く讀むことであります。

目に一丁字なき前の女髮結でも、學問に志し、初めは兎角分らぬ勝てあつても、ボツ〱と其の分らぬ所を人に聞き、忍耐して同じ本を三度も四度も繰返して讀む中に、段々に會得が出來て、彼れ是れと世の樣などに思ひくらべ、興味を催すやうになつて來ると、知らず〱氣を入れて(うはの空ではなく)讀むやうになり、自ら讀書の力もつき、わが思想を高尚にすることも出來ます。

此節では、この婦人の髮結のやうに、一字も讀むことの出來ないといふ人は、殆ど稀れて、小學校位は大

概済んで居りますし、また何所の田舎でも、一人二人の時々不審の所を教へて貰ふ様な人は居りますゆゑ、本當に自身の修養の爲めに學ぶ心がありますならば、それは必らず出來ることとて御座います。

如何なる書物を讀むべきか

まづ前の髮結か福翁百話を擇んだやうに、めい〳〵の年齢とその學力、境遇などによつて、餘りにむづかし過ぎぬ位の度合に於て、一冊の名ある書物を擇び、初めは分らないと思つても失望せずに、折を得ては適當の人に、その分らぬ所を、折々でも質問して、兎にも角にもまづ一度だけ通讀し、更に繰り返して詳しく讀み、幾度でも充分に全篇を會得するまで讀み通すのて御座います。

一冊の本で本當に分らぬ所なく、讀みこなせるやうになつたならば、特種の學問に屬する書物でない限り、殆ど何でも讀み得ると云つてもよい位のものであります。

普通の新聞は固より、挿繪澤山の雜誌なども、いろ〳〵の人が思ひ〳〵の様々のことを書き列ねたものてありますゆゑ、假名附きてあるといふ便利はありますけれども、思想を養ひ、及び自ら文章の妙味を味はうなどゝいふことが出來ず、却て浮薄な思想と、俗惡な文章のくせを覺えこむ様になりますゆゑ、學力とよき頭腦をつくるための材料としては、甚だ不適當て御座います。

若しも最初に讀む書物は、假名附きの方が都合がよいならば、むしろ八犬傳、弓張月などゝいふやうな馬琴の本などがよいかも知れません。近來の書物には、假名のあるよき本も段々あります。

書物の讀み方

本當に自分のためになるやうに、讀書しやうとするのには　まづ何よりも、ぞんざいな讀み方をするのは禁物です。一冊の本に半年また一年、或は二年かゝつても構ひません。よき書物を一句も疎かにしないとい

ふやうに、よく味はつて、念入りに讀むことです。荻生徂徠といふ學者は、十年の間唯大學諺解一冊を友として、遂に一の學派を開くほどの人になりました。まことの讀書は、書物の數を澤山に讀むことでなく、よき書物を深く讀むことであります。それゆゑ本當に讀書するのには、多くの金も多くの時もいりません。日に三十分でも一時間でも、日々缺かさずによき書物を讀むといふ根氣があればよいのです。

學問の徳

かくして養つた讀書の力は、生涯の間に益々進歩し發達し、得たる思想は、また永く私共の心を高尚にし、正しくし、趣味深くし、各人一生の行程を、誤りなき方向、慰め多き方向に導いて、生きて甲斐ある生涯を送らしむるものになります。

高等の學校に入學することの出來た人は、更に幸ひてあります。しかし學校に行つてゐさへすれば、ひとりてに學問が出來るやうに思つてゐては間違てす。さうしてまた學校に行くことの出來ない人も、決して一生無學に終らねばならぬなどゝ失望することはいらないと思ひます。若しまた四五人よい友達があるならば、一週に一二度位一二時間づゝも集つて、土地の學校の先生にでも助けて頂き、よき書物を詳しく讀む會をこしらへて、互の利益をはかることは、殊に便利な企であらうと思ひます。

▲勉强するのに當て、只管模型を覗つて其れに嵌まり込まうとする人がある、其れは其樣數へる向もあるから一概には言へないし、又初學にありては、規律を立てたり虛線をうつたりする必要もあるが、要するに重な事ではない、學問に必要なる第一義は、其氣分の持ち方態度の構へ方である、古人は讀書するに正座して氣海丹田に氣を沈めてかゝつたものだと云ふが、これは形式上の事だが、全く心を決めてかゝらねば力が入らない、『態度は人を作る』と云ふ古語もある、ひとり學問のとに限るのでは無い。

▲『死學問が何になる』と云ふ人があると、直ぐに其氣になつて書籍を輕んじる、『無解決無理想』と云ふ思潮があると、直ちに其れを標語に押し立てゝ其氣分になる、若い人の心の動搖は止むを得ないにしても、何か自分に信ずる根據を置かれば飛んだ破滅を見るのである、人には其れ／＼通過の時代がある、之を言ふ人も幾多過去の關門を通た後の事である、今日は昔の樣に人が方便的の教訓をしない、又其樣な遑も無いのであるから、どうしても奮發一番個人の自覺に待たればならぬ。但し兎もすれば偷安懶惰に都合よきもつの迎へて可ならざるは殆んど疑ひ無きもの〻樣です、何となれば其れらは心身を錬る所以でないからである。

都會に出た時の第一印象

新橋

北原白秋

私が東京に着いて一番に鋭く感じたのは新橋停車場の匂でした。門司ではバナナや鳳梨の匂を嗅ぎながら税關の前に出るとすぐ煤烟のなかを小蒸汽に乘つて關門海峽を渡つたので都會と云ふ印象よりも殖民地といふ感が深かつた、究竟、都會としての歴史や奥行といふものがなく出口と入口とが同一になつてゐるからであらう。その他、神戸大阪京都名古屋と云ふ順序で東海道の各都會を通過しては來たものの、それはただ旅愁の對象として味はれたに過ぎぬ。夜見た處は女の横顔の樣に月光と電氣燈とで美くしく、晝間一瞥し去つた處は汚ない芥蘚病の乞食の背部を見るやうで醜かつたにせよ、何れの停車場附近にも一種の明狀し難い都會と田園とのアランジュメントがあつた。即ち汽車に附着いて來た新らしい野菜の匂が新聞やサンドウキッチの呼聲に交つてプラットホームの冷え冷えした空氣に滿ちわたつてゐる。殊に賣子の急がしい哀れげな聲は人をして自分の旅中にある寂しさをしみじみと自覺させる。新橋はそれと違ふ。此處には調和と云ふよりも寧ろ舊都會と新市街との不可思議な對照がある。東京の隨所には敗殘した、時代の遺骸の側に青い瓦斯の火が點り、強い色彩と三味線とに衰弱した神經が鐵橋と西洋料理との陰影に僅かに休息を求めてゐる。それて、その當時、私の乘つて居た汽車が横濱近くに來る頃から私の神經は阿片に點火して激しい快樂を待つて居る時の不安と憧憬とを覺えはじめた。都會が有する魔睡劑は煤烟である、コルタアである、石油である、瓦斯である、生々しいペンキの臭氣と濃厚なる脂肪の蒸しっぐるしい溜息とである。神奈川邊から新しい材木とセメントの乾燥した粉が鎚や鶴嘴のしつきりなく

音してゐる空に泌みこんで潮風に濡れて來る。夜だつたから猶更東京近しとの暗示が何となく神秘に聞えて、街から街へ殖えてゆく電氣燈の色までが、一刻一刻に少年のみづみづしい心を腐蝕してゆく中毒症の斑點の樣に美くしく見えた。而してその時私は考へた、都會は美くしいが實に怖ろしい處だ、彼處には黄金、酒、毒藥、藝術、女、凡てが爛壞に頻してゐる。一度彼女の冷酷なる微笑に魅せられた者は自己の破滅は豫期しながら何時の間にかひきつけられて了ふ。そして迷ひ込んだが最後逃れやうたつて離れられるもんぢやない、次第に惡因緣は靑い蛇のやうに柔らかに絡みつく、どうせ死ぬまでは白い齒形が靈の底までも喰ひ入らねば放すもんぢやない。

燥々しながら立つて毛布をはたいた、煙草の灰が蛇の拔殼のくづるる樣にちる、私は熱湯の中に怖々と身體を沈める時に感ずる異樣な惡感に顫へながら强ひて落着いた風をして沈と坐つて見た。品川高輪芝濱を通り越す時分には、私は黒い際立つた建築や車庫や獸類の臭氣に腐れたまま倒れかかつてゐる貨物車の影と、その濕つた九時頃の暗碧な夜の空に薄紫の孤燈がしんみりした光を放つてゐるのを見た。愈停車場の構内に着いたと思つた時には旣に面と向つて驕奢な而して冷酷な都會にブッツカッてゐたのである。此處には最早旅愁をそゝのかされるやうな物質の呼聲を聞くことができぬ、意外に空氣は急忙だしいが嚴肅なものであつた、私は押し流されるやうにして、この魔宮の正門に達する大理石の舖石の如く、又は、監獄へゆく灰白色の坦道に似た長いプラットホームを顫へながら急ぎ足に歩いた時の心地は今にも忘れることができない。而して私が歩行きながら第一に受けた印象は淸潔な靑白い迄消毒されてゐる便所から泌み渡つてくるアルボースの臭氣であつた。即ち都會の入口の嚴肅な匂である。その他、停車場特有の貨物の匂、燻らす葉卷、ふくらかな羽毛襟卷、强烈な香水、それらの凡てが私の疲れきつた官能にフレッシュな刺戟を與へたことは無論である。

改札口へ出るとすぐ私は迎へにきてゐた數名の友人から取り卷かれながら、強ひて平氣を裝ひつゝ正面の階段へ押されて行つた。高貴な人々はこゝから幾組となく幌馬車を驅つてゆく、俥がゆく、電車がゆく。そしてそれらの行手に電氣燈の黃色と白熱瓦斯の綠金色とが華やかに照り輝いてゐる市街が見えた。それが銀座だと教へられたばかり、美くしい「夜」の横顏を遠くから見たまゝで、私は暗い烏森の藝妓屋つゞきの路次をぬけて、汚ないある街の某と云ふ素人下宿に辿りついた。そうして冷たい女主人の顏を見、友人の誇らしい浮薄な風采を見、牢獄同樣に仕切られた狭い一室に、疲れはてた身體を休めた時に、つくづく私は何だか都會の幻影に欺かれてゐたやうな氣がした。

その後、私は寂しくなると何時も新橋停車場に出かけては五年前に經驗した都會の入口の臭氣と感覺とを新たに嗅いてくる。而して靈も顫へながらなほ新しい官能の刺戟を求めたかの時のみづみづしい心をあちらこちらと拾ふてあるくの



が何時となしに私の習慣となつた。

少年時代の悲哀

前田夕暮

都會に出た時の第一印象――と言つたゞけでも、腦が痺れるやうに感ぜられる。私の少年末期時代の最も強い追憶は、初めて家を出奔して上京した當時に迄何時でも私を惹きつける。

私は十七歳の夏、腦を病んで田舍の中學を中途で退學するやうになつた。半年ばかり死ぬやうな思ひをして、毎日〳〵痛い頭を抑へて懊惱して居た、その頃は誰も同じで、若い心の全躰は、智識熱に燃えて居た。空想に煽られてゐた。上京――遊學――などと思ふと一日でも一時間でも靜粛としてゐられない時代だ。私は自分自身が現に執拗い腦病に罹つてゐるのを意識しながら、もうどうしても我慢することは出來なくなつて、あらゆる幼稚な手段を盡して兩親を瞞着して、病氣が全快したやうに見せかけてみたが、親戚の醫者から注意があつたので、父は頑として許さなかつた。とはいへ私の惡い腦は一層熱して自ら抑へることが出來ず、忘れもせぬ明治三十三年三月十四日午後、怖い父の視線を纔に逃れて、愛讀の書籍數册を風呂敷包にしたのを小脇にして家を飛出した。懷中には汽車賃を差引いて稍餘裕あるだけの旅費が這入つて居た。追ひ駆けられるやうな不安と一種の恐怖を感じて、もしや家で感づきはすまいかと、わざと三四里隔てた東海道松田驛方面に道を取つた。平塚停車場へ行くべきが順路なのを、殆んど反對の方向を取つて村を出た。長い土手に差しかゝつた、下ばかり見て急いだ。突然自分の名を呼んだものがあつたので、跳上らんばかりに驚いて凝視すると、それは私の伯父だつた。伯父の家は私の村より一里程離れた秦野といふ町にあるので、伯父は當時上京遊學してゐたのを、用事の爲め數日歸宅して、その日出京するその途中、自分はバッタリ行合つて仕舞つたのだ。伯父が何か感づいたやうな眼つきをして「何處へ行く」と突込まれたのを纔かに引き外し

て、二人は西と東に別れた。私は二時間餘りして松田驛に着いて新橋行の汽車に乗つた。伯父よりは一汽車遅れた筈であつた。汽車が平塚驛を過ぐる頃、自分の村の大きな鐘のある山が、遙か雲烟模糊の間にみえる。私はそれをぢつと眺めて、淡い／＼哀愁に打たれた。二時間半ばかりて汽車はわたしを新橋驛にはこんでくれた。

私は鐵道馬車に搖られて銀座を過ぐる時、別に銀座美を感ずることは出來なかつた。私の頭は内部が熱して居たので、外界の刺激を餘りに感受する餘裕が無かつたのだ。それから黄昏頃うす暗い根津の伯父の下宿に着いた。伯父はまだ歸つてゐなかつた。私は疲れた軀を、うすら冷たい下宿四疊半に横へて、自分が斯うして上京したのを、伯父が歸つて知つたら、どんな顏をするだらうかと思ひながらも、後頭部に一種のいふべからざる不快の壓迫を覺えてゐるのを知つた時、あゝ自分の病氣はまだ癒つてゐないのだと感じた時、父のこと、母のこと、家のこと、今日の自分の出奔した跡の光景などをまざ／＼と思ひ浮べて、何とも名狀しがたき不安と寂寥とに打たれたのてあつた。私はその時の心持、それからどつと病氣が重くなつて、すごすごと家に歸つた時の心持などを、何時か詳しく書いてみたいと思つてゐる。

生のすがた

川路柳虹

私は五歳のときまでは東京で育てられた、生れたのもこの都會だ、それから十二三歳のをりにも一寸來た、自分の今の記臆には其の當時のとりとめもない幻げな印象がおりおり浮ぶが、それは過ぎた夢を思ひ出すのと同じ事である物心をおぼえてから東京へ出たのはつい近頃だ、しかし自分には突然山中から飛び出て喧噪の巷の有樣を見た人のやうな云はゞ自然の驚愕と云ふやうなものはなかつた。

都會と云つても今云ふのは無論この東京を指すのだが自分のこつちへ來てからの第一印象と云へば雜然た

る街路の噪音と、雜然たる都市の色彩とが疲勞と苦闘との陰影のうちに輝く何んとなき不快な不安な感じてあつた。

自分は暫く古都の人てあつた、空の比較的透明な、山の紫な、松の青い、そして人の閑雅柔美な京都はもの靜かな都市てある、山もある、森もある、東京のやうな野原の眞ん中の天氣の好い日丈けに富士か筑波が見えるやうな處と違ふ、東京の人は眞の秋の味を知らぬと或る友が自分に云つた事があるが、山や森のない東京の町中にゐては實際しみ〴〵とした凋落の味とか、秋の野の爽々しい氣分とか云ふものは味はれぬのは無理もないことてあらう。今兩都市の比較をするてはないが舊都はたしかに山出しの人間にもレフレッシさせるやうな美しい印象を與へる所てある、自分の少年期は大半南海の孤島てすごされた。波と、磯と、黑い磯馴松の風と、それに自分の周圍をとりまく日々の印象てあつた、それが古都へ出たとき未だ足らざる色彩の感能に美術的な豐麗を加へられたとき、島の松の色の何故黑く、こゝのそれの何故綠なるかを疑つた。更に山の紫色に匂つてるのは生々した色の感じを自分の頭に深く刻ませた、それが再び東京へ出るとすべてのものが皆んなどす黑く、灰色な沈んだ、そして噪しいもの音に實際何となき不安の思ひが絶えずした。

しかし、またこれは第一印象てはないが私にとつて重大な印象とも云ふべきは東京へ來て、都市の擾然たる間に「生」と云ふもの丶活動、乃至「生」と云ふもの丶爭闘する有樣――抽象的の觀念のやうだが――と云ふやうな感じがあり〳〵と見えた事てある。それは所用があつて電車てある時間内に所々方々へ飛び廻ると云ふやうな塲合、飛び乘りや飛び下りも餘義なくせねばならぬ塲合、このときはむしろ、不快、不安と云ふやうな念慮の反對に、活動と云ふやうな積極的な意味を明らかに自覺さる丶事てある。

本屋町の柳が烟る時分「歩く方が早うおます」と云はれる京都の電車には夢想も出來ぬこの强い印象は東京へ出たとき重大に感じた一つてある。

淡い夢

三木露風

私が初めて東京へ來たのは三十八年の八月で、十七歳のロマンチックな少年であつた。何でも一圖に「詩をやりたい」――と云ふのが目的で、學校の事などはろく／＼考へてもをらなかつた。その頃のことを思ふと未だに冷汗が流れる。「貴樣が成業しやうとは俺は少しも思つてはをらぬ」と云つて父は玄關迄送つて呉れた。

新橋へ着いたのは日は忘れたが非常に暑い午後のことで、この光の動く炎天の下に東京が横はつてゐるのを見ると無性に胸がワク／＼して急に嬉しさと幽かな不安とがこみ上げて來た。しかし此時若し同郷の有本君がゐてくれなかつたなら私はどうしていゝか分らなかつたに違ひない。有本(芳水)君は此時私よりは一年も早く上京してゐたので、もうスッカリ東京化してゐたのだ。それで兎も角當分のうち同君と一緒に居る事にして私は麹町一番町の今でもおぼえてゐる、夏菊の咲いた野中と云ふ後家さんの家に寄寓をした。その家は今は如何なつたかついそのまゝになつて訪ねもしないが、隣は湯屋になつてゐて、毎晩遅くなると夜終まひをする三助の眠さうな唄とカタン／＼といふ湯桶のひゞきが哀れに聞えた。私たちはその六疊の間で盛に詩や歌を作つて互に批評をし合つた。實際有本君の方がいつも味のあるものを書いてゐた。たゞどちらも幼稚であつたことは無論いふまでもない。

その頃本郷座で高田や藤澤が「女夫波」か何かをやつてゐた。二三回もつゞけて二人はそれを見に行つたと記憶する。電車に乘つて歸つて來る時私は餘程疲れて無言でゐたがそれでも心の中では都會と云ふもの〻愉快なこと、花やかで美しいこと、文明といふものがどんなに我々を魅するか！といふやうなことをわけもなく只しみ／＼と感じてゐた。

都會に於ける第一印象と云へば即ちこんなことでゞもあつたらうか、とりとまりのない淡い夢見るやうな

感じ、その頃のロマンチックな少年の瞳には何を見ても、夫がもうたゞ花やかな幸福であつたに違ひない。しかし間もなく最後に編入した水道橋側の商業學校を四度目に出された時、親からして嚴しい勘氣を受け、哀れな私は忽ち悲慘な境涯に墜落した。勿論、都會に對してもさま〴〵の違つた感想を持つやうになつた。

モニカ

馬場孤蝶

御婦人の雜誌へ出る話しだから、餘り猛烈な話しも如何かと思つて、其れは差し控へる。處で、可成婦人に關する小說が宜からうと思ふので、ポール、ブルゼエの『モニカ』と云ふお話しをする。

御存じでもあらうが、ブルゼエは佛蘭西の現代文學者で、千八百五十二年に生れた人である。此人の作品は、長篇が五つ程、短篇集が三四冊英譯になつて居る。て、『モニカ』と云ふのは、英譯では他の五つ程の物語りと一緒に一卷になつて、紐育のスクリブナーから千九百二年に出て居る。代價は參圓である。今私のお話しするのも其本からである。

巴里にヒポリツト、フランクトオと云ふ、古い家具即ち机とか椅子とかの名作を修繕することの名人が居た。職人ではあるが、如何にも人格の宜い正直な職業に忠實な男であつた。いろ〳〵彫刻などのある家具の缺けたところだの、折れたところを繕つたり足したりするのであつて、なか〳〵難かしい仕事であるから、巴里中でフランクトオの處へ持て來るより外に仕方が無い。それで内では職人を四人使つて居る。處が此職人が、皆親方同樣感心な心掛の人間で、殆んど利益などは眼中に置かない樣にして働いて居る。一體此男には、タペルニエと云ふ甥があつて、彫刻の手腕などはなか〳〵達者であつたから、伯父のフランクトオは行く〳〵は自分の跡を繼がせる位の考へて居たが、タペルニエは本統の彫刻家になる心算で美術學校へ入て了まつた。それでフランクトオは甚く失望はしたけ

れども、どうにも仕樣がないので、僅かに養女でもあり弟子でもあるモニカと云ふ娘が、椅子を張る帛の縫取りを巧くやつて自分とは趣味を同じくして居るのに慰められて日を送つて居た。

此モニカと云ふのは、フランクトオが或る時拾つて來た棄兒である。もう二十一年程前であるが、五月の初めの或る夜十一時頃に歸つて來ると、近くの家の花園の塀の上に大きな籠が置いてある。今し方其處を通つた巡査の背影がまだ向ふに見える位であるから、其籠を置いたのは眞個に間もないことであるのが分かつた。て、其籠を卸ろして見ると、中に小さ



い女の兒が入つて居る。乳吸ひも添えてある。て、巡査を呼止めて引渡さうか、如何しやうかと思つて、子供の顏と巡査の背影を互み交りに見て居たのであつたが、子供が警察などで手荒く取扱はれる憐れさを思ひ出して、如何にも可愛さうに思つて自宅へ抱いて歸つた。て、女房に相談すると、丁度家の娘が生れてから一年半程てあるから、今に拾つた兒が其兒の好い友達になるだらうと云ふて養女にしやうと云ふ。それてモニカはフランクトオの家て、今年二十一になるまて育つたのてあるが、年を取るに從つて、家の娘のマルグリートとは丸て違

つて、まことに品善く育ち、容姿も佳し氣立も良し、覺えさせた縫取りなどは、ひどく巧くなつて、大變フランクトオの氣に入つたので、自分の實の娘よりかモニカの方を可愛がつた。

フランクトオの女房は、田舍から出て來て、巴里の或る家に女中奉公をして居た女である。何故フランクトオが爾う云ふ女と結婚したかと云ふに、是れはよく藝術家などにある事で、妻などはどうでも宜いと云ふ考から、一寸した機會、云はゞ行き當りばつたりに結婚したと云ふ樣なわけてある。だから夫とは丸で趣味も合はず、妙に片意地なところもあつて、夫を手古摺らする事も尠くない。娘のマルゲリートも母親に似た處があつて、なか〳〵利かぬ氣の娘である。て、何となく其二人とモニカとの中が穩やかに行かぬ。ところて、フランクトオ夫婦、殊に母親の考へではマルゲリートを前に云つたタベルニエエの妻にしたいと云ふ考へてあつたが、肝腎のタベルニエエはマルゲリートとは趣味が合はず、却てモニカと接近し初めた。

處て或る時或る貴族から古い名作の椅子の修繕を頼まれた。て、先づ其椅子の床を剝ぐと何か紙に包むだものがある。其れは巴里の不動産銀行及巴里市の割增附債劵て皆無記名てあつた。一番高いのが五百フランて、其他種々あつて總計て三十七枚あつた。て、他の椅子にも入つて居はしないかと思つて、皆床を剝いて見たが、他の椅子には何も入つて居なかつた。其れて午過ぎ持主の處へ持て行かうと思つて、仕事場の机の抽出の中へ投入り込んて置いた。フランクトオは正直な男の事であるから、人を疑ふなどといふことは無く、其儘職人は自宅へ辨當を喰ひに歸り、自分も其室を明けて食堂へ行つて食事を了つた。午後になると、フラルクトオは其債劵を机から包の儘取出し、ポッケットへ入れて出て行たが、軈て少し經つと變な顏をして歸て來た。て、云ふには三十七枚慥かにあつた債劵が、先方へ行て出すと三十二枚しか無い。自分は自宅の店て物が失くなると云ふ事は店の名譽に非常に關係する事てあるから、ひどく弱つて居ると、先方の貴族が云ふには、此方は何枚あつたか知らないのてあるから、如何だ、三十二枚有つたと云ふ事にして、此事はお仕舞にしやうぢや無いか、て、此中二枚持て行て職人に遣つて呉れと云つたけれ共、自分は決して爾う云ふ事は出來ない、私の店て失くなつた事てあるから十分私が責任を帶びる、是れから出來る限り詮議した上て、

愈々出て來なけれやア私の金を出して償ひをすると云つて、今歸つて來たのであるが、誰れか此部屋にあの債券があつた事を知つてる者はお前達四人の外になからうか。と云つて聞くと、宅へ歸つても別段話さなかつたと云ふのもあるし、女房には話したが何處に有ると云つた事は無いと云ふのもあつた。結局どうしても分らないから、二階から降りて女房に警察沙汰にしたものであらうか、如何であらうかと相談する。女房は田舍者であるから、警察官が來て家中を探したり、家の者が調べられたりするのは非常に厭である。だから警察へは持出さぬ樣にしたらよからうと云ふ。フランクトオも素より警察へは訴へたくないのであるから、暫らく事を秘密にして調べる事にした。母親は娘とモニカには知らせぬ約束であつたのを忘れて、自分の娘に丈けは債券の失くなつたことを話す、さうすると、娘は、モニカの此頃の樣子と云ふのがどうも變てある。此二三日一向に寐ない。て、モニカは早晩家を出る心算てあらう。昨日の晩方六時頃に何處かの兩替屋へ行つたやうてある。多分自分の持て居る債券が籤に當つたか如何かを見に行たのてあらう。と云ふ。て、母親は、其れは變だと思つて、娘にいろ〳〵訊いて見ると、其話し口ては如何にもモニカが怪しい。て、娘と二人てモニカの室へ入つて、方々探したあとて、掛けてあるモニカの着物に觸つて見ると、一個所ガサ〳〵云ふ處がある。見ると近頃綻ばして又縫ひ直した痕がある。これは變だと思つて糸を解いて調べて見ると、中から紙に包むだ債券が四枚出て來た。て、愈々モニカが盜んだに相違ないと云ふ事になつて、フランクトオを呼んてモニカが歸つたら詮議をしやうと待つて居る。其處へモニカが歸て來る。と、フランクトオは債券が出て來た經過を話して、如何したのかと訊く、モニカは呆れて居たが、見ると債券を縫ひ込むだ糸は平常自分の使ふ糸てある。が、此糸は二三日前に少しマルゲリートに分けてやつたことのある糸だ。それから氣を附けて縫方を見ると、慥かにマルゲリートの縫ひ癖が現はれて居る。さてはと悟つて、一切を打ち明けて云はうとしたが、是れまで自分を可愛がつて呉れたフランクトオに其實の娘が這麽惡い事をして自分を陷れやうとしたと云つたらば、嘸ぞフランクトオが弱るてあらう。二十一年來の恩人に自分の口から失望させる樣な事を云ふには堪へない。是れは默まつて居るのがよからうと思つたし、又昨日も今日も外へ出たと云ふ用は、

タベルニエエと自分との相談がだん／＼進んで來て、いよ／＼その日の午後にはタベルニエエが伯父の處へ來て、二人の關係を打ち明けて夫婦になる許しを得やうとする爲めであつたのであるから、自分の潔白を此處で證明するとなると勢ひ其の事を云はねばならぬ。さうなつて來ると、どうしても母親とマルゲリートの二人にも甚く失望させるわけになる。爾う自分一人の口から大勢の人に失望をさせうと云ふことは如何しても辛らひ事であると、モニカはフランクトオが何と云つても默まつて居る。終には流石のフランクトオも腹を立てゝ、ては急に決心も着くまいから、一時間ばかり猶豫を與へる、其間よく考へて惡い事をしたならばしたと藏さずに云ふが宜ろしいと、モニカ一人を室に殘してフランクトオは二階の仕事場に上り、母親とマルゲリートとは他の室に行つて了まふ。其後で、モニカは飛んでも無い濡れ衣を着せられたのにます／＼腹が立つて來て、又愈々眞箇の事をフランクトオに打明けやうとは思つたけれども、又思ひかへして默つて居る事にした。だが、もう直きにタベルニエエが來て、二人の關係を打ち明ける頃だと思ふので、今自分が此處に居て家中の騷動を見るのは如何にも心苦るしい事だと思つたので、そつと窓から忍び出て庭の木の間をくゞつて外へ行て了まふ。其れて何處か小さい宿屋を見つけて泊る事にして、其晩方タベルニエエと會ふ約束の公園に行て待て居る。が、タベルニエエが伯父から自分にかゝつて居る、物を盜んだと云ふ疑を聞いたらば、自分の事を如何思ふであらうか、あの人に限つて自分を疑ふなどと云ふ事は有る筈は無いが、しかし實際は如何であらうかと、とつおいつ心を苦しめて待つて居ると、やがて向ふからタベルニエエがやつて來る。其顏付を見るとモニカはホッと胸を撫で下ろした、と云ふのはタベルニエエの樣子てタベルニエエがモニカを疑つて居ないと云ふのが一目に分つたからてある。其處でモニカは實際の事をフランクトオには如何しても打ち明けぬと云ふ約束をさせて、マルゲリートが自分を憎むで自分に罪を着せる爲めに开麼事をしたのであると云ふ事を打ち明ける。タベルニエエは初めは言はぬと云ふ約束をしたけれども、爾う云ふ事ては如何しても勘辨ならぬから、フランクトオに云つてマルゲリートの奸計をあばいてやらうと云ふ。モニカはタベルニエエが自分と生涯一緒に居るつもりなら、決して實際の事をフランクトオに云つて異れるなと、い

ろ／＼タベルニエエを宥めたので、タベルニエエは納得して了まつた。

一寸云ひ落したが、モニカは家を出る時に有金二百フラン程を債券の代の一部と書いて卓の上に置き、其れから宿を取てから自分の貯金の中から三百フラン程を引き出して、債券の代の殘りだと云つてフランクトオの處へ郵送した。其れてフランクトオの方ては債券を盜んだのは確かにモニカである、で無ければ恁う金を返して來る氣遣ひは無いと思つて居るのである。處で翌日タベルニエエはフランクトオの處へ行つてモニカと結婚をする承諾を得たいと云ふ。と、フランクトオは怒つて其んな承諾は與へないと云ふ。するとタベルニエエはモニカも私も最う法律上では親族の承諾を得ずとも結婚の出來る年齡であるから、貴下が承諾して呉れなければ法律の力で結婚すると云つて、下へ降りて行つて伯母にモニカの荷物を引渡して呉れと云ふ。すると伯母はひどく怒つて異議を唱へる。けれども、タベルニエエはモニカはもう獨立した人間だから其荷物をあなたの方で押へて置くわけには行かぬ。若し八釜しく云へば法律に訴へてても持つて行く。兎に角今日は運搬人も連れて來ず、からげる繩も持て居ないから明日來る事にする。其時は何も云はずに渡して呉れ。と云つて、タベルニエエは歸つて了ふ。伯母はあとでモニカの樣な奴に、自分の娘の婿にと豫ね／＼思つて居たタベルニエエを取られるのは如何にも殘念の事である。此結婚は如何しても妨げねばならぬ。タベルニエエは全くモニカに欺まされて居るに違ひないから、モニカの罪惡の動かぬ證據を突き留めて見せるのが一番宜い、其れには兩替屋のある町へ行つて、モニカの債券を賣つた兩替屋を見つけ、債券を賣つた受取の筆蹟を確めて、モニカの面の皮を引ん剝いてやらねばならぬと思つたので、伯母は兩替屋のある町へ行つて、とある人の善ささうなかみさんと娘の店番をして居る處へ這入つて調べて貰ふと、恰度其の家がモニカと言つて來た娘が債券を賣つた家であつたので其受取を見せて貰つた。すると債券の金高が二百十五フランとなつて居る。是れは不思議だと思つてモニカと云ふ署名を見ると、喫驚して眞蒼な顏になつてそこ／＼に禮を云つて、あたふたと店を出て了ふ。署名は慥かにマルグリートの手である。平常書く字躰よりか態と少し大きく書いてはあるが、どうしてもマルグリートの手である。で、大急ぎで歸つて來て、臺所の小遣ひ

帳をつけるペンとインキとを棚の上から下ろし、紙の切れを何處からか探し出して、娘を呼ぶ、マルゲリートは何だらうと思つて來て見ると、母親は名前を書いて見ろと云ふ。少し大きいのと小さいのとを書いて見なと云ふ。それから今度はモニカと平常の字とは少し大目なので書いて見ろと云ふ。マルゲリートはサア顯はれたと氣が付いて手が顫へて書けない。とう／＼ペンを手から落して了まつた。母親は其れを見て愈々娘の仕事だと認めて、娘を甚く叱る。隨分固意地なところはあるが、田舎生れの女であるから、そんな事になるとなか／＼正直なのである。て、父親を呼んで其事を話す。父親は娘にお前の爲た事は、頼るところの無い孤兒を家から逐ひ出し、兩親を欺いて自分の味方として了つたと云ふので、重ね／＼怪しからぬ事だ。て、お前が此處て罪を悔いて、以來さう云ふ心を起さぬと云ふなら宜いが、若しさうで無くば俺はお前を娘とは思はないと云ふ樣な風に諭したのみて、別に罰しはしなかつた。て、夫婦差し向ひになると、母親は何故あなたは娘を罰しなかつたのかと訊く。すると、フランクトオはイヤお前達二人ばかり惡いのては無い、お前達二人とまる／＼性質も違ひ生れも違つたモニカをお前達二人と一緒に置いて、而かもモニカの方を私が大事にしたのであるから、いろ／＼衝突も起り嫉妬も起つたのてあるから罪は十分俺に在る。だからお前達をさう責めはせぬ。が、お前には俺が命令する、もう一遍モニカに此家へ歸つて貰ふから其つもりて居ろ。俺はこれからモニカの處へ行て自分て謝まつて來る。と云ふと、女房が貴郎の樣な他人に對して是れまで決して惡いことをした事の無い人が決して人に謝まる必要は無い。謝まる必要があるなら私が行て謝まると云ふ。フランクトオは否是れは主人の責任であるからして、どうしても自分が行て謝まると云つて、タベルニエエの處へ行く。て、其部屋へ入ると、モニカも居て仕事をして居る。フランクトオが、イヤ今日は謝まりに來た。娘が一切云つて了つたが、誠に飛んでも無い間違ひをやつて濟まない。と云ふと、モニカは椅子から飛上る樣に立つて、イヤお父さん何も仰しやるな。さう事が分れば、もう私は何も云ふ事は無い。よく御親切に早く此事を云ひに來て下すつたと云ふ。て、フランクトオがモニカに是非一遍家へ歸つて呉れ、てないと私の顏が立たぬからと云つたが、もう歸らぬ。自分はあの家にもう居る人間てはない。一遍から出た以上又

歸つてあなたの家の平和を破ることは決して自分には出來ない。と云つて斷はる。て、とう／＼三人が打ち解けて話しをして、爾うしてフランクトオは二人の結婚の祝ひに自分が一生の手腕を揮つて椅子だの卓だの家具を拵へてやらうと云つて別れる。

モニカの居る時分には仕事場と縫取場の間を明けてモニカの仕事をして居るのを見て、フランクトオはモニカの大きくなるのを樂しみにしたのであつたが、それからはモニカが居ないのであるから、間の戸はいつも閉め切つて、老人はタベルニエエとモニカの二人の氣に入つた弟子を失つて、甚く力を落して鬱々として居ると云ふのが此話しの梗概である。（談話）

教育を普及する外に途はない

文學博士　元良勇次郎

女子が多く感情に支配されると云ふのは素より左樣でありますが、昔しは唯一國内の範圍に於いて教育したるものなるが故に、女子の性質を十分發達さすと云ふ事よりは、寧ろ女子をして卑近な事柄に滿足して居る樣に教へ込むだものと思はれる、貝原益軒の『女大學』などを見ても左樣思はれる、然るに今日では、多少是れに教育を與へて知識を開發せしめやうとした結果、いろ／＼な弊害が起つて居る、最も甚しいのは風俗に關係する事であつて、世間にはさま／＼の宜く無いやうな話しがある樣でありますが、一躰是れに就いては、日本人と云ふものが一般に西洋の風習を誤解して居るやうに思はれる。例へば自由結婚の如きは其れて、西洋では若い男女が自由自在に交際する事、恰かも日本の僻地の村落などの、風俗の良くない處に於けるが如きもの丶樣に思つて居るのではあるまいか。しかし自由結婚と云つても、決して締りの無いものでは無く、其れには各習慣的の風俗禮義社會の制裁等が有つて、決して猥らな事の無い樣に出來て居るのであ

ります。又例へば舞踏會にしても、何處の何者とも擇ばずして組合ふものでは無く、これには習慣上の規則があつて、平生知り合つて居る者とか、或は相當の紹介者に紹介せられるとか、其他相當の禮義に因て或る男子が女子に舞踏を頼むと云ふやうな　ちやんと定まつた禮義作法が出來て居る、さう云ふ事を解せずして、誰れても自由自在に舞踏の相手にして宜いものと思ふて居ては、風俗を紊すに至るは疑ひも無き事てある。

斯くの如く一つは古來の束縛的習慣に對する反動として、又一つは西洋の風俗を誤解して居ると云ふ點からして、今日の青年間に弊害が生じたと云ふ事は蔽ふべからざるもの丶やうてあります。其れらの事及び其他西洋に於いて、女子が極端に自己の權利を主張する事より起る弊害を見て、世人の或る者は近來女子教育に對し、多少躊躇する傾きがある樣に思はれる、しかし私は素より弊害の有る處を避けねばならぬと云ふ事は、世人と共に同情する處てあるけれ共、所謂感情を制すると云ふ唯一方法は、女子の教育を盛んにして身心の發達をさせると云ふより外はあるまいと思ふ、故に教育が方針を誤まれば之を正して行くと云ふ事は勿論てあるが、教育そのものは益々盛んにせねばならぬ、其れから思想力を養成すると云ふ事が必要てあつて、思想に養はれたる感情ならば、高尚なる美妙なる域に達する事が出來るのてあります、其れてありますから今日は過渡の時代として、隨分極端な不釣合な事のあるは免かれないが、其れが爲め引込思案をして教育を怠ると云ふ事てはいけない、女子の煩悶と云ふ事にしても、社會の風儀と云ふ事にしても、是れを矯正するには教育を普及する外に途は無い、其れてあるが女子の教育は、殊に其の發達の程度、國の風俗等に依つて、多少の手加減を要することてありますから、其れらは又よく研究して誤まらぬやう注意せねばならぬ、故に左樣云ふ風に見る時は、是れは教育の普及と云ふ一言に依つて解決することが出來やうと思ふのてあります。（談話）

男女間の
不文の制裁

海老名彈正

歐米の社會家庭個人に於ける宗教的感化を、日本の其れに對して論じやうとした處で、其れは迚も比較にはならないのである。一體從來日本に於ける宗教に倫理的權威あるものが無い、殊に男女間の問題に於いて一層力が無かつた、神道然り、佛教然り、唯儒教に在ては一つ有夫姦と云ふものが大層八釜しく言はれたもので、是れのみは今日猶ほ牢乎として拔く可からざる社會的制裁となつて居るのである。即ち古來から訓鍊されたものは良いので、若い男女の關係の如きも斯の如く訓鍊を經て來なければならぬ。しかし是れは決して短日月に來るものでは無く、百年二百年を俟たねばならぬと思ふ。

歐米に在ては其の訓鍊が既に出來て居て、女子に對する惡戲は無論、男子が密かに云ひ寄る樣な事をして、平手に拙くてもならば散々に辱められる、のみならず一度パッと表はれてもすれば、其れこそ其の人は生涯社會に立つ事の出來ないやうな目に會ふのである、懸かる制裁が



チャンと出來て居るから、相互共に戒愼するのである、て、今日では斯樣な習慣が自づから人をして嚴肅な心念態度を持せしむるのか、又嚴肅な心念態度の人が有るから、此の良き風習が存するのか、何れか分らぬ樣になつて居る。勿論歐米と雖も腐敗は隨分ある、會〻下層の暗黑面に入つて其れを紹介して、其の墮落腐敗の狀態が全躰なるが如く云ふ人もある、が、要するに其樣云ふ人は左樣云ふ處を見て他を觀ないのである、彼地に行て紹介され案內さるゝ所が其れだから仕方が無い、けれ共前云つた樣な健全なる制裁の支配は社會の中樞を占めて拔く事が出來ないのである。で、是れらの點を是れから學ぶに於いては、個人の心念を振肅せしむる必要は素より、一面社會の慣習も定めねばならぬ。

古書を見ても、太古に在ては父子相婚し、兄妹相婚して怪まなかつた樣である、近古に於いても伯父と姪の結婚など云ふものもあつたが、そんな風習がだん〱破れて、其れらが蠻風視せらるゝ樣になつた、是れ一面から云はゞ風俗慣習の變遷てはあるが、又倫道の訓錬なんて正に斯うなければならぬ。

しかし又自然に逆つて極端な抑壓をすると云ふ事は勿論惡い、こんな昔話しがある、多分眞だらうと思ふが、ある町に寺院があつて僧侶と尼とが居たが、それが別々に隔離されて相互一步も外出する事を許されなかつた、僧侶もよく戒律を守つて外へ出る者も無かつたが、姑らく年月が經つと、其の寺から彼の尼寺へ通ふ墜道が出來上つて其處から往來した、其れも町の端から端までのことゝて、可成距離の有る間であるから驚かざるを得ない、餘まり極端な抑壓をすると又極端な反抗を行るものである、と云つて斯く墜道を拵へてまで通ふ樣な者を、直ちに開放して同居させると云ふ事も問題である。

今度女學生の取締の樣なものが出たが、其戒めの如きも今日に在ては必要なのは又止むを得ない事かと思ふ、けれ共元來制裁と云ふものは形で定められたものては無い、不文律てあつて而も自から隱然動かし難い重力となるべきものでなければならぬ。自分の希望するところは其處にある、さうして男女關係は支那風の隔離では無く、何處までも自主自由で有つて、儼たる操守を持し、毫末も過ちの無いと云ふ處になつて來ねばならぬのであります。（談話）

最近に見たる八丈島の女

松原海雨

私は少し健康を害つたので、其養生の爲め八丈島に參たのですが、何分離れた島であるから、屹度目新らしい風物や、異つた風俗などがあらうと、いろ〳〵想像して參りました。横濱を出發したのが、一月十日の午後二時で、翌朝五時には島附近まで着きましたが、世界で有名な黒潮の寄する處で、島に港が無く、八時頃に上陸する事が出來たのでした。

噂に聞いた椿の花は其頃尤も盛りなんで、木は林を成して茂つて居る、幹も隨分太いのがあつて、椿の木で臼を拵えたりして居る。山には死火山の三原山と、休火山の八丈富士と云ふのがある、島中全躰熔岩で黒い、中には幾十丈の絶壁がある、又海岸の砂地に松の木が茂つて居る様な個所もあるが、沙の色が黒いから白沙青松と云つたやうな觀は無いのです、植物の發育は勿論宜い、――尤も梯を掛けて上るやうな茄があると云ふ樣なのは噓だが、杖にする樣な唐辛はある、――その花の中に繡眼兒が來る鶯が來る、時鳥も聲ばかりでは無く形を見る事など決して珍らしくは無いのであります。

女は額に鉢巻をして黒紋付を着て居る樣聞きましたが、一寸見た所ではそんな者もありません、あれは重もに大島邊の風俗ださうです、又書物に依れば美人が多いと云ふ事ですが、衣裳などの所爲でもありますかさうでもありません。しかし輪廓からは兎も角、色は白い、それは藷や里芋を常食とするからだと云ふ事です、それから髮の長いのは事實で、身躰から五寸も一尺も曳くものがある、それが房々と黒いので實に立派なものです、それは椿油をつける爲めだと云ひますが、實は島ではさう矢鱈に椿油なんか用ひません、つまり髮を自由に發育させて結んだり縛つたりして苦しめないからなのでせう。其れから八丈では未だに殘つて居て珍らしく思はれるのは、處々の水溜から水を汲んで其の水桶を頭に載せて運ぶことです、これは水を捧げると云ひますが、水のみならず凡べて重いものは、一般に頭に載せる習慣で、物を容れた籠などでも、内地で肩に掛けたりする處を、矢張り紐か何かで頭にかけるのです、それで平氣で九段などより猶ほ急な阪でも、水一滴こぼさずに、昇降をします、さう云ふ處から姿

勢が大變に佳い、躰格も立派です。
あの邊の他の島の事は知りませんが、八丈の婦人は餘まり仕事はしない樣です、其れは昔し八丈紬を織るのが婦人の仕事で、其事業は神聖なものだから、他の勞働はしてはならぬと云つた習慣から來たのださうて、今は時季になれば養蠶をやるか、淺草海苔を製造する位で、介藻を捕るやうな仕事は餘まり致しません。又煙草を好むで吸ひます、それも手製の煙草で、――尤も近頃は專賣局で八釜しいので自宅には餘り作らないさうですが――葉のまゝを丸めたのを、長い煙管につめこんでスパ／＼やる、それをなか／＼離さないので、便所に行てさへ猶ほ燻らせて居る。

女が妙齢になると、廻り宿と云ふものに寄り合つて、自宅では寐ないことになるのです、又若い男子の方も若い衆宿と云ふものがあつて其處に寄る、尤も其方は唯集まる丈けなんで、宵の程は世間話しをして、それから名々其の志す所に從つて廻り宿に行くと云つた風です、是れ等は我々から聞くと風俗上良くないと思ふ樣な點もありますが、島の習慣としてはあれが宜いのですか、今でも猶ほ殘つて居るやうですが、それで何等痴情の爭ひもなく、一夫一婦的に撰擇が出來ると云ふ事です、女も其れて身を堅めると云ふ位の考へであるらしい。

其れから結婚となりますが、これには奈良朝時代の風が、そつくり遺つて居ると云ふのですが、昔しは左樣だつたのかどうてすか、自由に撰定が出來ると、結婚式を夫の宅で擧げ、女は三四日目に實家の方へ歸つて仕舞ふのです、其れから後は夫の方から妻の方へ通ふ、て、妻の方で今頃來るだらうと思ふと御馳走して待て居る、其の間三四里も離れて居る事があつても通ふのです、其のうち夫の方で親が死ぬとか或は隱居をするとか云ふ事で戶主になると、初めて女や子供を自宅に迎へ入れるのださうです。結婚の式は別に變つた事はなく、杯事など行る樣です。

それから是れも奈良朝時代の行り方ださうて、明治の初年まで遺つて居たと云ふ事ですが、經水中の婦人は、「他火」或は「他家」と名くるものに入る、これは別に邸内か或は山の中に持て行て建てる、（邸内以外のものは共用）、其れから平時に復して自宅へ歸るまでに、「三日家」と云ふものがあつて、其處に滯在するのです、子産屋と云ふのもあつたさうです、畢竟神島と云ふところから、かゝる不淨を隔離するのださうて、代官の

方からなかく入釜しかつたけれ共、維新に至つて漸く廢するに至つたもの丶由です。
姙娠すると細い紐て腹をメめ、食物を減じて勞働をする、勞働と云つても荷造や何かそんな事ですが、兎に角十分身體を苦しめる、すると難產しないさうて、今も幾分是れは殘つて居る、全く島の女は安々と產をするさうてす。

島の物產は織物で例の八丈縞てすが、昔しから將軍家の御用品なり貢なりに納めたものです、八丈と云ふ名は何時頃ついたものか知れぬ、或は島の名から出たと云ふのと、八策（八寸が十て一丈に當る）と云ふのが一匹に當るのですか、何でも其織物の丈から來たと云ふのとあります。昔しは其の染め方が殊に叮嚀て、草根木皮を染料として一種に付いて四十回染めては乾し、染めては乾したものださうてすが、今日は漸く八九回しか染めません、又其の縞は弓數が少く、竪の糸が細く横の絲が太いので、意外の所から摺り切れると云ふ難があるので、廢絕とまては行かないが、甚だ衰頹して居る、其の結果養蠶しても多くは絲で出して仕舞ふさうてす、尤も其れでも昔の儘に地租は織物て納め、黃紬七十反と云ふのが標準ださうてすが、もつと改良して盛んにする必要があらうと思ひます。

其れから椿油てすが、これは幾ら椿の木が多くとも、さう油がどし〳〵出來るものては無く、搾る時は彼處から一合此處から一合と集めるのです、尤も椿の實の殼を破つて黑い皮の儘て搾るのと、其の皮を剝いて搾るのとて差違があるので、一番二番三番と搾ります、島でも一升貳圓と云ふ位で、決して廉くない、それが石油箱一つが東京へ持ち出されると一圓二十錢と相場がつく、其んな事で贋物があるわけは無いのです、島て特約して居るのは大坂に一軒ありますが、其他は雜ぜ物があります、雜ぜるものは大抵鹿角菜を煮たものて、其れを震盪するのです、試みに油を透して見てそれが若し透明てなく濁つた沈澱物があらば、それが雜ぜた布海苔なのであります。

八丈の西二里に小島がある、これが爲朝終焉の地と云はるゝ處で、爲朝神社が祀つてあります、南二十里に靑ケ島と云ふのがある、これは例の鬼ケ島或は男島と云ふので、其れに對して八丈が女島或は女護島などゝ云はれ、女ばかり居て南風の吹く日に磯に出て孕んだとか云ふ口碑が膾炙されて居ますが、その地勢等を見ると、南風に帆を揚げてこの靑ケ島から船て遊びに

來たものだと云ふことがよく分ります、女ばかりだつたと云ふのは、自然陶汰で男が去つたか其んな事なんでしやう。

島の風俗は一般暢氣です、全く外の者でも其處へ行くと伸んびりします、其の爲めか誰れでも十歳位は若く見える、子供の成長も早く八九ケ月から歩き出し、十五六歳にもなると立派に成人します、婦人の結婚も大抵其れ位に行はれます、其れから生活難に逐はれる樣な事もないから長生きをする、八十歳以上の者等を見るは決して珍らしからぬ事です、其の代り一面から言ふと懶惰で不可ません、いくら怠けても事足るわけでせうけれど引締まつた所がない、又島人根生と云つたことも免かれないので猜疑心もある、皆個人主義で、それが又煮え切らないのだから一致するやうな事がない、加之困まつた事には、島の交通先が直ちに東京だから、内地の田舍と云ふものを知らない、で、漫然東京の表面丈けを見てそれに感化れて了ふのです。一年行事と云つて別にないが、一年中の樂しみは天長節です、正月も盆も大した事でも無いが、天長節丈けは樂しむで遊ぶやうです、これは明治二十年頃から行はれて居るさうです。(談話)

敬遠すべき美人

福光東衣譯

完全なものには冷めたいところがある。一點の瑕も無い絶對の美人は、塑像と同樣、藝術眼に訴へて床の置物にするには良からうけれども、其他には別に取所の無いものだ。幾分の欠點があつてこそ、そこに初めて溫みがあり愛嬌があり生命がある。何點も彼點もきちんと調つた人形のやうな美さよりも、鼻が心持空に向いて居るとか、上唇がほんの少々上反つて居て白い齒が仄に見えるとかいつた樣子の女の方が、何ほど愛嬌があつて懷しいか知れやしない。完全な美人の前に居ると、自分は何んだか悚う身體が痺れるやうで、衣服がすれ〲になる位ゐに近く駢んで居やうものなら、それこそ素裸の儘で北極に倚りかゝつて居ると全樣、血管も何も凍て着いてしまうやうだ。

完全な美人は一體に高慢チキなもので、何時見ても、美しいとは思ひこそすれ、それが爲めに精神が愉快に飄搖するといふやうなことは藥にしたくもない。其の立つて居る姿は壯嚴といふもの丶歩哨よろしくて、歩

いても座つても一々ちやんと型にはまつて居て、輪廓を顧すやうなことは決してし無い。

かゝる女を妻に持つたら最後、恰も古風な清教徒の家に這入つたやうなもので、椅子といふ椅子が悉く一定の間隔を保つて壁を後に、氣を付け！の姿勢て列んて居て、一寸手をかけて亂してもすると大變であるから、迂濶腰も掛けられたわけではない。と云つて何時迄も帶のやうに棒立になつて居るわけにも行かないから、已むなく腰を下すと、もう終焉た。秩序を紊した罪を謝らなければならぬ。窮屈どころの話ではない。一生の間絶えず、妻のどこかを皺にしなければ良いが、整形を破らなければ良いかの心配の爲通してある。



所詮、完全な美人は或る距離を保つて讃美さるべきもので、ルーブル博物館に於けるミロワヴイナスの如く、接近すべからざる壯嚴美てある。仝時に又孔雀てある――見るべきもので、聞くべきものてはない。

予は下の如き意味に於て、完全無缺といふことを排する。而して美人と雖この除外例には置かぬ。即ち、完全は予に於て慾望の絶無を意味する。望ましいものが無い時に、如何

して予は幸福であらうものぞ！
愛すべき人々は決して完全ではない。幾分かの缺點瑕疵があつて、モデルに成濟せないからこそ、愛嬌が有るのだ。モデル、手本、氣鑑、これ等は慄へつゝ敬ふべきもので、愛すべきものではない。
一寸した假裝、一寸した編執、一寸した癖、是等を全く除き去つて婦人に何の愛嬌が殘らう？　果然、愛嬌といふものは畨の形の上の瑕疵のみに由つて生起するものでは無かつたのだ。
婦人が、其好愛する者の上に些かの力――愛護の力――を加へんことを欲し、其者が我が愛護の手から離れて全く獨立してしまうのを見た時、これ迄の自己の心盡を悔いる心が、靜かに柔かに婦人の胸裡に滲出るが如きは、明かに其一例である。嚴正なる意味の親切とか愛情とか云ふ點から見れば、この悔恨の情哀愁の感は不德として却けらるべきであつて、即ち完全圓滿のものでは無いけれども、しかも軈て半面に於ける婦人の愛すべき心を表明する點ではないか。我が子が一人前の男となつて世に出るに至つたのを喜ばない母は恐らく無からう。と同時にいつ迄も〳〵我子を自の翼の下に蔽ふて置き度いのが母の心の常であらう。この矛盾こそ女の女らしい點で、而して完全といふものは此の矛盾を許容しないではないか。幼兒が乳を離れて、單獨で遊びに出るやうになつた時に母が懷く傲は、最愛の者が自分の力を藉らないやうになつたといふ幽な悲哀の情を混へずには濟むまい。
心からなる熱心を捧げて病人を勞る看護婦の感情も、母の情と變つたことはない。
予は只頃日まで佛蘭西病院に入院して居た。其際、誠に親切な、注意深い、而して愉快な看護婦の世話になつた。寢臺に横ること五週日の後、床を離れて時々は椅子に倚つても良いと云ふ許可を得た時の予の歡喜は非常なものであつた。が然し未だ全くの一人では二分間とも立つて居ることが出來なかつた。それが其翌日になると、身も心もヅーッとシッカリして、寢臺から這ひ下りて、そこらの物に摑つて立ち上り、終に室の向隅にある安樂椅子の處まで歩いて行くことが出來た。丁度其時看護婦が室に這入つて來た。まだ寢臺に横つたまゝて居ることと思ひ、手を藉して起して衣服も着せようと思ひつゝ這入つて來た所に、予の其有樣であつたのだから、「まあ」と云つた限り、少時は凝乎と予を見詰めるのみであつた。予は其時彼の女の面

に、驚の情と共に失望の情の表はれて居るのを明かに認めることが出來た。勿論その女は予が意外に早く元氣付いたことを甚く喜んで呉れた。夫れは予に充分能く解つて居る。が然し、この時彼の女の僞らざる内心を直白せしめたならば、恐らく恁う云つたであらう、「まあ、何といふ喜しいことでしよう、ほんとに。けれども、未だ二日間……いゝえ、せめては明日一日の間は、全くのお一人でお歩きなさいますよりか、妾の肩にお掴まりなすつた方がお爲で御座んしよう。

いくら何でも、まあ此のやうに早く妾の手からお離れにならうとは……

（マックスオーレル）

美文の作法（四）

西村酔夢

八　直喩

直喩と申すのは英語の Simileのことで、一番多く用ゐられる修辭法であります。それは明らかに一つの事物を他の事物に比べる比喩法でありますから、自然、本義と比喩との區別は明瞭で御座います。故に直喩のある文章には、必らず「如し」とか「似たり」とか、「例へば」とか「宛然」とか「宛かも」とか、かやうの文字が附してあります。今その文例を示して見ましやう。近松の「此の世も名殘、夜も名殘、死にゝゆく身を譬ふれば、仇しが原の道の霜、一足づゝに消えてゆく、夢の夢こそ哀れなれ」の如く、死にゝゆく身と、仇しが原の道の霜とは儼然區別されて居ります、又「頭髪白くして雪の如し」と云ひ、「髭のむしや〳〵生えた樣は、蛹に似てゐる」と云ひ、「彼女の顏は白百合を宛がら」と云ふのは、皆直喩で、何れも比した物と、比されたものとが、明瞭に區別されて居ります。クワッケンボスといふ人は『直喩は何うしても、だら〳〵と長くなり易いから、感情の高い時には、決して用ゐてはならぬ』と申してゐます、これは學者の大に注意すべき點であらうと思ひます。

九　隱喩

隱喩は即はち英語の Metaphorのことで、直喩と同樣、よく用ゐらるゝ修飾法で御座いますが、これは直喩のやうに、「如し」とか「似たり」とか云ふ文字を用

ゐないで、秘かに一事物で他事物に比擬する修辭法であります。故に隱喩は、一般に直喩よりも緊縮して、文の響きが強くなります。一例すれば、豪い人が他に嫉まれることを「喬木風多し」と云ひ、或る夜若い娘が死んだ、と云ふことを「一夜狂風花落散りぬ」と云ふやうなものである。これは隨分面白い句法ですが、ヘヴンも申しましたやうに、出鱈目に用ゐますと、意味が朧ろに成つて分らぬ事がありますから、情の激した時と、特別の注意を促がす時と、冗漫を禦ぐ時との外は、成るべく使はぬやうにした方が可う御座います。

一〇　活喩

●●活喩と申しまするは、一に擬人法とも申し、英語の Personification の事で、情のないものは、情のあるものゝやうに云ひ做す句法であります、手取り早く云へば、あらゆる物を人間のやうに云ひ廻すので、歲月は心がないけれども、それはあるやうにして「歲月は吾を待たない」と云ひ做し、又蛙は唯だギヤフ／＼と鳴くのみであるけれども、それを「手を突いて物申し上ぐる蛙かな」と云ふやうに、總て非情を有情に云ひ做す修辭法が、即はち此の活喩で御座います。「狂風」とか、「怒濤」とか、「おのゝく木の葉」とか、「ほゝゑむ柳」とか云ふのは、皆此の活喩でありまして、情の激した際とか、滑稽の際とかには、極めて面白い句法であります。

一一　諷喩と聲喩

●●諷喩は即はち Allegory の事で、一つの說話の中に、他の意義を含ませる修辭法でありまして、昔から陽はには云へない事は、よく此の修辭法を用ゐて諷刺的に記述されて居ります。一例すれば、韓退之の「雜說」の如きは即はちそれで、自分のことを陽はに自慢し難いところから「龍噓けば氣雲をなす、雲は固より靈ならざるなり。然れども龍此の氣に乘ずれば、茫洋として玄間を窮む——雲もまた靈怪なる哉。雲は龍のよく靈たらしむる所也、龍の靈の如きは則ち、雲のよく靈たらしむる所に非るなり」と云つて、秘かに自分が俗物共の自由にならぬ事、自分さへ立てば天下は意の儘だといふ事を諷喩してゐます、これは言論を曖昧にする爲め、極めて必要な修辭法であります。

●●聲喩とは一に擬聲とも申し、英語のいはゆる Onomatopeia の事であります。これは「雀がちゆう／＼と

鳴く」とか、「雷がごろ〱と鳴る」とか「ぴかる」とか、「さんざめく」とか云ふ風に、物象の音その物を採りて直ちに我れの文中に置くものでありますから、即はち擬聲に外ならないのでございます。かの支那の「虫聲曲々」といひ、「伐木の音丁々たり」といふのは、キヨク〱とよみ、テイ〱に訓んでは、聲喩に成らないが支那では「チユイ〱」と訓み、「チン〱」と訓むからして、眞の擬聲に成つて面白い、故に音の違ふ日本では、必らず支那的形容詞を用ゐぬことにし、「梅花片々と散る」と書かずに「梅花がヒラ〱と散る」と書き、「水聲淙々たり」の代りに、「水音ざう〱」と書けば可いのであります。

巧妙なる男子の手段を看破したる事實（つゞき）

原の女

それから……夜の十一時……泊れ……次の話……割引電車……なれ〱しい書生風の男……停車場までつけてくろ……清淨なる梵刹……歸途……河童坂……果然、曲者……しまつた！……强てお送りします……嫌でも何でも……お生憎樣……夢中に駈出す……今から見れば淋しかつた

と生憎留守でして、暫く待つて居ましたが中々歸りません。いつその事そのまゝ引返さうかとも考へましたが、暫くの訣別だと云ふのに、折角訪れて來て逢はないのも口惜しく、今暫く、今暫くと待ちました。九時過ぎに歸つて來て、話して居るうちに遲くなつたと見えて、下宿の下女が、

『お客樣はお泊りで御座いますか。』と訊きに參りましたので、私は驚ろいて了つて、大急ぎで否と云つて、時間を訊きました。と十一時だと云ふぢやありませんか、私は最う困つて了つて途方に暮れました。其頃は牛込の早稻田から麹町三番町に轉じては居ましたが、何しろ女の身空で、夜の十一時過ぎ、あの暗い細い土手つ緣を歩いて歸るのは中々如何して大抵ぢやありません。

『困つたわれえ、私。』

『送つて上げやうか。』

『いゝえ大丈夫！』

『併し亂暴者に出會したら如何します。』

『……めつたにそんな事ないでせう。』

『無いとも限らない。』

『困るわ私。』

『だから、一寸と好い事……』

云ふより早く私の肩に手を置いて、

『泊つてらつしやい！』

はぢかれたやうに飛び退いた私は最う最う驚ろいて了つて、兩手を顏に押當てゝ泣きました。

『虚言だ、虚言だ、怒つちやいけない、サア早く行きませう、僕がどんな男だか、最う大抵知つてるでせうに、そんなに怒らないで好いでせう。』

一生懸命辯解する男の顔を、私は何とも云へぬ恐ろしさと忌はしさに、只押默つて睨み返したまゝ、會釋もせずにとつとゝ逃げて歸るのでしたが、途々何うにも悲しくて、情けなくて、兎角に斯うした誘惑の多い處女の身をなげきもし、憤慨もしたのてした。

それからまだ斯樣な事もありました。

私が師事して居ました某先生の御郷里は、何州何々の町でして、御父君御沒後母樣につれられて六つの年から、十六までをお過しなすつたと云ふ、その可懷しい御故郷とはどんな處か、先生の御著書○○を讀むにつけ、其中に記された山沼森家川、皆な可懷しく戀しく是非一度訪れて見度くて堪りません、私は土曜日の朝急に思ひ立つて、信玄袋に櫛だの鏡だの、一寸した旅行用の必要品を取り揃え、小紋縮緬の袷にカシメヤの袴を穿き、五月の初旬、ほがらかな朝まだき早稻田の奥の家を出て、其頃はまだ外濠は江戸川線もない頃なので、幼年學校の横手から河童坂へ出て、四谷傳馬町二丁目の停留場で電車に乘り、兩國停車場へと志しました。

とまだ七時前なので、澤山な學生だの勞働者だの、一杯乘り込んで居て、とても腰掛けられない處か、どうかするとつかまつて立つ吊革さへ奪ひ合ふと云つた有樣です、私は仕方なしに人と人との間にもまれながら、やつと立つて居りました。すると、

「貴女、此處へ被入いまし。」

と聲をかける人があるんです、見ると二三人先きの向ふ側に、飛白の袷を着て白つぽい袴をつけた、二十歳格好の書生風の男が立つて居て呉れるのでした、私は斯樣した場合よくある事と、別段辭退もせず、直ぐ樣禮を云つて其男の腰掛けて居たあとへ腰掛けました。

男は私の直ぐ前に立つのでしたが、『如何もとんだお氣の毒樣』と、私が禮を云つたのを好いきつかけに、何處へ行くかの、何時頃歸るかの、いろ／＼な事を訊いては話しかけるので、私は其日すぐ引返して歸つて來る豫定で居たのですけれど、わざとに虚言をいつて、『明後日』と云つて了ひました。而して心の中で妙な男、嫌な男、最う／＼これつきり、電車の中で、幾ら込んで居て困つても、決して男から坐を讓つて貰ふ事てはない、うつかり腰掛けてとんだ煩さい思ひをしたと思ひ／＼するのでしたが、やがて兩國の何とか云ふ停車場近くの停留場へ參りましたので、私は一寸と其の男に會釋して下車しました。

兩國で發車の時間を待ち合して居る間に、どうしたものか曇つて來て、果てはポツポツ降つて來ました、折角來たものを引返へすのも口惜しく、如何と云つて何々の町へ行つた處で此雨では見物して歩く譯にも行かず、何したものかと思つて居るうち、ふと思ひついたのは、先生の奥樣のお兄樣にあたる方で、新體詩人なのですが、何々町から僅か三里はなれた田舍町の禪宗寺の方丈樣ていらつしやる、その方を訪れて、久しぶりにお目にも掛り、泊らせて頂いて雨のあがるのを待つて、それから一番の汽車て志す何々の町へ行き、終日遊んで終列車で歸京しませうと決心しました。て切符を買つて、ふと見ると、電車の中の男が矢張り場内に居るんてす、私は急いでプラツトホームへ出て、折柄來合せた列車に乘り込み、其日のお晝過ぎお寺につきました。方丈樣は喜んで迎へて被下いましたが、困つた事には其翌日も雨なのです、而して引とめられるまゝ其日も泊つて、方丈樣と二人都の人達の噂を致したり、文學談を承つたり、終日雨の音を聞いてしめやかに打ち語らひました、其翌日は拭つたやうな好天氣！

私は一番の汽車て何々町へと參り、舊城趾の士族屋敷、先生がいゝさい草をとつてお遊びなすつたと云ふ淺地沼、さうした處を見歩いて、四時幾分の終列車て一直線に兩國をさしましたが、兩國へ着きましたのが九時前、少しく買物などして居るうちに遲くなつて、四谷傳馬町二丁目の停留場へ下りましたのは、最う彼是れ夜の十時過ぎ、どちらかと云へば十一時に近い頃てありました。

それから女一人て早稻田の奥の家へ歸ろうと云ふのてすもの、幾らお轉婆の私ても少し不氣味てない譯には行きませんてしたが、辻車は却つて危險だとおもへたので、急いで歩いて河童坂へと差しかゝりました。

と後ろに男が居るぢやありませんか、加之に、出立の朝電車て乘り合はした書生なんてすもの、全く驚ろいてハッとして了ひました、尤も傳馬町二丁目の横町から、ずつと幼年學校前へ下りやうと云ふ、彼の何とか云つた大きな坂に掛つた時から、後に誰か居るやうて、薄氣味惡くは思つて居たのてしたが、ツイと私の前を通り越して、新宿の方へ行く道へ入つて行つたものてすから、まあよかつたと安心して居たのてす、てすから又後ろに人が居て、おまけに電車の中の書生と知つたときの驚ろきと云つたらありません、

『しまつた！』何かしらず、私は刹那に斯う思ふのてありました、併し今更ら仕方もない、出來る丈け避けて、一時も早く明るい街へ出たいものと、私の直ぐ後ろについて來る男を避けて、向ふ側へと斜めに歩きます、すると男はついて來るので、又反對に向ふ側へと參ります、と又男も其通りに追つかけるやうにして來ます、私も最う仕方がないと思つて了つて度胸を据ゑました。而して立止りますと、

『大變お遲いぢやありませんか。』と先方から聲をかけて、

『最う貴女幾時だと思ひます、十一時てすよ、女の一人歩きは危險だ、僕お送りしませうお宅は何處てすか。』と斯うのべつにまくし立てゝ申しますので、

『否、御心切は有り難う御座いますが、一人の方が却つて氣樂て御座いますから、最うそれには及びません。』ときつぱり、切り口上て以て斷つてやりました。而して左樣申すうちにも、明るい處へ早く早くと、急ぎ足に、殆んど駈けるやうにして歩きました。

『併し危險てす、僕見のがして居る譯に行きません、それが見ずしらずの人と云ふなら兎も角、お互お馴染て居て、こんな夜更けに貴女を一人歩かせる事は、どうしたつて僕には出來ないてす、强てお送りします。』

『否、嫌てす。』

『嫌ても何ても！』じつと私の顏を見据ゑるぢやありませんか、私は最うぷり〳〵して、斯うした癇性てすから堪りません、

『嫌だつて云ふに、失禮ぢやありませんか！』と睨み返してやりましたが、

『失禮？　それは貴女の誤解てす、僕心切て以てお送りすると云ふんてす、誤解なすつちや困ります。』

『左樣てすか、折角てすがお斷り致します、貴君にしたつて、人の心切を無にするやうな女に對して、左樣した御心切をお盡しなすつたつて、れつからつまらないぢやありませんか』

『いや、貴女のお爲めばかりぢやない、白狀すると實は僕斯うして貴女と一緒に歩き度いのてす、貴女は毎日二丁目の停留場からお乘りてせう、僕久しい前から御交際したかつたので……』

『併しお生憎樣、私貴君のやうな方大嫌ひてす、失敬なお歸んなさい！』

『ナニ何方が失敬だか、よくも男子を侮辱したな、如何するか覺えてろ。』

併し其時は最う私は駈け出して居ました、男の足と女の足、それに私

は靴を穿いて居ますので、雨あがりの道をすべりそうてすべりそうて困りましたが、必死と駈け出して、突然薬王寺前町の交番へ駈け込みました。而して暫くは息をきらして、ものも云ひ得ませんでしたが、如何した譯かと巡査に訊かれて、只外を指して男が男がと云ひ續けるのでした、て巡査は外を探して見ましたが、其時は最う其男の影も見えませんてした。私は巡査に頼んで早稲田の家まで送つて來て貰ひました。それからと云ふもの、河童坂は通らぬやうに致しました。併し最う今では、あの邊一體に開けて賑かになりましたから、まさかそんな亂暴者も出なくなりましたてせう。

—完—

地方處女の生活狀態

（二）大阪

▲大阪一般の處女の氣風と云ひますと、先づ深窓に育つた處女は概して保守的です、從つて意志は薄弱です、他出するにも下女なり小間使ひなりに必ず供させて、パラソンで覆うた顏は伏目勝に、其引退的な氣風を代表してゐます。

▲町娘は一般に早熟です、妙齡になると、水の垂さうな高島田の亂れ毛を氣にして、襟のかゝつた衣紋をトンと突出したい方です。

▲女學生の氣風は必ずしも保守的とは申されませんが覇氣のある方ではありません、矢張町娘風に感化されつゝあるやうです、それでも何迄か教育があるだけ町娘との間に一線を劃して居るやうです。

▲女に虚榮は附物ですが、大阪の處女を町娘と女學生に二分したら、女學生の方が虚榮は強い樣です、最も女學生の方が人目に付き易い行爲が多いからかも知れませんが——宗教を根底として立つ學校に育てられる處女でも、固い信仰に依て身を處する事はまだ六ケ敷樣です、動作も柔順ですが町風のと云ふ事は免れません。

▲嗜好は一概に申されませんが、心に感ずる事と云ふよりも、單に耳目を樂します方に走る樣です。

▲芝居、淨瑠璃の好なは先天的大阪人の特色でしよう。三味線、琴、生花、茶は熱心に稽古します、親達も亦習はさせるのです、別ても三味線と琴は、大阪處女の最も多く持囃す樂器です、春の宵、夏の夕、大阪の町々から洩れるのは、皆此三味と琴の音色です、最も女學生は、町女の江戸唄地唄の兩道掛けるのに反して、主に地唄のみを習ひます。

▲そして此二つは早きは七八つ、遲くも十二三から仕込みますから、俗曲なども中々堪能です、バイオリン、

風琴、ピヤノも此に次いて流行します。

▲言葉は一定しません、左樣て御座いますか、と云ふを、上流。さよごあいますか。町娘。そうだつか。女學生。さう。さうてすか。と云つた樣なのてす。殊に女學生間の言葉は、校内と家庭とも違ひます、寄宿舍内の言葉は、他府縣からの寄合てすから、ごつちやになつて特別な發音になります。總じて女學生の言葉は東京化して居ます。



▲衣服は、上流てすと勉めて上品な飛白ても矢がすりと云つた風です、町娘はきらびやかな物、つまり奥行より幅のある、人目を引安い、襦袢ても襟は赤味がかつた、惣じて派手な色物を好みます、女學生は矢張白襟にさつぱりした飛白、柔かいものでも底光りのする方を好みます。

▲髮なども汚れても後毛のない、水々しい油て光る島田が町娘、洗髮に香水、風に毛の亂れを喜ぶ風が女學生一般の傾向です、然し女學生も卒業しますと大半は町娘化しますから、什麽しても上方風の名は免れません。

▲何れにしても衣服調度は、經濟的て華かな

物を撰びます。裏長屋の熊さん八さんの内儀さんでも娘さんでも一通りの晴衣を貯へて居るなどは大阪の特色です。よく大阪の喰倒れと申しますが、あれは間食の事で、矢張女は着倒れです。

▲女學校は、堂島、清水谷、夕陽丘の三府立、宗教を基礎とする、プール、梅花、浪花、相愛、私立の大阪、金蘭會、それに女子師範を數へますが（裁縫學校、割烹學校等ありますが。）格別優劣はありません、二三に就て述べて見ましよう。

▲堂島が質素、清水谷が華美、夕陽丘が何と云ひますか、其は何かの柏子で附和雷同されたものでしよう。堂島の校則中には「着物は綿服、掛物は紙、木綿又は護謨製、履物は校内は飾なき靴、校外は疊なし利休下駄」云々と具體的に示してますのに、清水谷では「服裝、髮飾、履物、傘の類は女學生に相應し、禮節に戻らざる限りは質素、輕便を主とし且衛生主旨に適すべし」と、まあ恁うです、から到底區分は出來ません。

▲どの學校でも生徒の團體から成立つた會があります。卒業生の方では堂島の金蘭會、清水谷の清友會、梅花の北勵會、相愛の相愛會、在校生の方は、夕陽丘の「ちとせ」會、其他同窓會校友會は、皆同じ型に陷つて居ます、年に一二回の機關雜誌は勿論發行されますが、其會の中で、清友會は、日露戰爭の紀念事業として、圖書館と倶樂部を折衷した形の濟美館と云ふものを拵へて、在校生、卒業生の圖書の縱覽、洋式作法、集會等にあてゝ居ますが外部の活動はありません、金蘭會では金蘭會女學校を設立して、堂島に入學し切ぬ生徒を收容して、母校長監督の下に、同一の教育を施すと云ふ主旨で、謂はゞ社會に向つて活動の一歩を踏出して居るのです、ちとせ會では、會の事業として修養日誌を發行して教育上教師が參考資料として少からぬ働をして居ます。

▲元來大阪の家庭が、已に學校教育より、實社會に、重きを置く方ですから、從つて學校と家庭と甘く調和して、文明的良妻賢母の資格を付する事は、六ケ敷ばかりでなく、一般家庭の注目の焼點は、むしろ實用的、世話女房的に仕立てる方に重きを置てるやうです、尤も上流社會の、進取的、文明的空氣の滿た家庭は除外例ですが——

▲猶古風の家ですと、學校は餘り出さずに多く遊藝を敎へて傍ら勉強させると云ふ様な工合です、殊に町家の（重に商人）娘さん達は、大抵小學校で止めて、裁縫

屋や音曲の師匠の格子戸を潜るのです、其は親達の考へですが、娘自身も强て反抗せずに從ひます、其原因は早婚が與つて力ある事と思ひます、

▲約言ますと、大阪の處女は、遠大の思想、――女の誇も加はつては居ますまいか――と云ふた樣な觀念に乏しいです、早く自己の安心立命の場所を探つて、夢の樣に暮したい人が多いやうです、町娘には係うした傾向は一貫して强い風土病になつて居るかの樣です、私の目についたのはまあざつと此位です。(丑女)

▲船場邊の舊式の家に育つた町娘は、まア縫物屋通ひが唯一の仕事て、一六には茶花の稽古、家ではお母さんと芝居の話位を樂みにしてゐると云ふ風て、極く平凡な生活てす、それても本人は世の中を面白く可笑く思つて暮してゐるのてす。

▲女學生となると多少違ひますけれど、別に新しい知識を得やうとか、深い修養を積まうとか云ふ考を抱いて居るのてもなく、卒業證書一枚を大切なお嫁入道具にしたい位の人が多いやうてす。

▲女學生となつてゐる間は大抵家へ歸つても家事を手傳ふ者は少く、編物をするとか、小説を讀むとか云ふ方が多いのてす。

▲女學校も相當にありますが、先づ評判のあるのは淸水谷女學校と、堂島女學校とてせう、前者はハイカラて進歩的、後者は溫順だとの定評てす、服裝ても前者は筒袖の外は着ない、夕陽丘は前の島の内女學校て、こゝも仲々生徒はハイカラて、一番華美なやうに見受けます、基督敎の女學校の生徒は英語が進んて居るさうてす、宗敎的の感化と云つて別に言ふほどのことはないやうてす。

▲運動はやはりテニスが流行てす、編物や造花は盛んになりました、割烹はさうてもないやうてす、學校はたつた一つありますけれど。

▲音曲は琴を第一とし、ヴワイオリンと三味線が次てす、琵琶や謠曲も一部の人には行はれてゐます、

▲文藝趣味のある人は少いのてすが、それて小説は皆讀むやうてす、獨歩や白鳥の作は見向きもされませんが、幽芳などは最も好かれてるやうてす。

▲芝居を見ると云つても町娘は只俳優を見に行き、女學生は技藝よりも小説て泣いた浪さんや、宮さんを見に行くのてす。(F女)

花言葉

水野葉舟編

せ。ぜ。せう

センヴイ　　無頓着。等閑。
錦葵　　温和。
錦葵—沼の—　　善行。
錦葵—シリヤの—　　戀故の衰へ。
錦葵—ペチチヤの—　　心こまやかな美人。
松露　　驚き。
石竹　　勇敢。
石竹—印度の八重—　　いつも愛しい。
石竹—印度の一重—　　嫌惡。
石竹、山のなてしこ—　　熱望。
石竹—赤の八重—　　清く熱心な戀。
石竹—一重—　　清純な戀。
石竹—雜色の—　　拒絶(雜色とは一つの花に種々の色が班になつて居るもの。)
石竹—白—　　鋭敏。才能。
石竹—花瓣の大きく垂れたもの—　　肉慾(この石竹はなてしこをも含む。)

そ。ぞ

素馨　　可愛らしい。
素馨—カロリナの—　　別離。
素馨—印度の—　　私は自分をあなたに結び付ける。愛着。
素馨—スペインの—　　淫樂。好色。
素馨—黄色の—　　美態と雅致。

た。だ

蒲公英　　田舍の神おろしをする人。

花言葉

水野葉舟編

鷹草（ハウクウヰード）　慧眼。

たねつけばな　親ゆづりの欠點。

女貞　禁制。

「旅人の喜び」（ツラベラース、ジヨイ）　安全（クレチマスビルバタ、と言ふ花。）

たちぢやかう草（きたちぢひやくりかう）　活潑。

ち。ぢ

馬齡薯　仁惠。

馬齡薯の花　穗にあらはれかけた戀。

チヤムピグノン　猜疑。

チエラニユーム　詭計。

──、──暗色──　憂愁。

──、──槲葉の──　眞の友情。

──、──深紅──　恍惚。

──、──繪にかいた──　敏捷。

──、──ばらの香のする──　選擇。

──、──銀葉の──　呼び返す。思ひ出す。

──、──野生の──　ナツト固り付いたやうな戀しさ。

チエヴヰル──園の──　眞實。

チーゼル　人間嫌ひ。

ちしや　冷い心の人。

きくぢしや　節儉。

地衣　孤獨。爽氣。

麝香の木（ムスクプラント）　薄弱。

つ。づ

家菌　掛念。私は如何してもすつかりあなたが信じられない。

A Loving Letter from an Eighty-year-old Lady

My dear—,

Did you, dear child, think I had quite forgotten you? Indeed I have not,—not have my daughters either. We very often think and talk about you and the nice times we used to have together when you came to see us in your college days. And how you would enjoy a sight of our place just now in all its spring glory. In the orchard, the apple-trees are pink and white with blossoms. The English daisies, the violets, the pretty yellow dandelions and the cowslips all adorn our lawn, and the grass is green and beautiful in the sunshine. All these beautiful things in nature speak to us of the bountiful kindness and love of the Creator, Heavenly Father, who watches over and care for you away off in Japan as He does for us here in America. That is always a lovely thought to me that though we are separated by sea and land and far apart, yet the dear Lord is just as near to each of us.

Now good-bye. Do not forget us here, for we love you very much and shall not forget you.

I am always

Your loving friend

M. Haines.

八十歲の刀自よりの手紙

親しき者よ,

私は貴女を忘却したと思ひてすか. 決して然うてはありません, 又私の娘共も御身を忘れては居りません. 私共は屢々貴女の事を語り, 又昔し貴女が在學中, よく拙宅へ來遊されし面白かりし頃を偲び居ります.
今春陽の美を裝ふて居る此屋敷の光景を貴女が御覽になれば, 嘸かし悅びなさる事てしよう。
果園は林檎の花盛りて紅白の色を呈し, 野菊や, 菫や, 蒲公英や, くりん草は芝生を飾り, 青草は日光を浴びて云はん方なく美しく御座います。
凡て是等の自然界に於ける美しきものは, 創造物なる天父の愛を豐かなる愛と惠とを語りて, 彼が遙なる日本にある貴女をも又米國に斯して暮し居る我等をも同樣に守護し給ふを知らせます。何日も私に取りて嬉しき思ひは, 海山遠く相離れ居るとも, 神樣が各自に近く居給ふと云ふ念て御座います。

左樣なら, 私共を忘れ下さるなよ。常に私共は貴女を愛して忘るゝ事はいたしません。

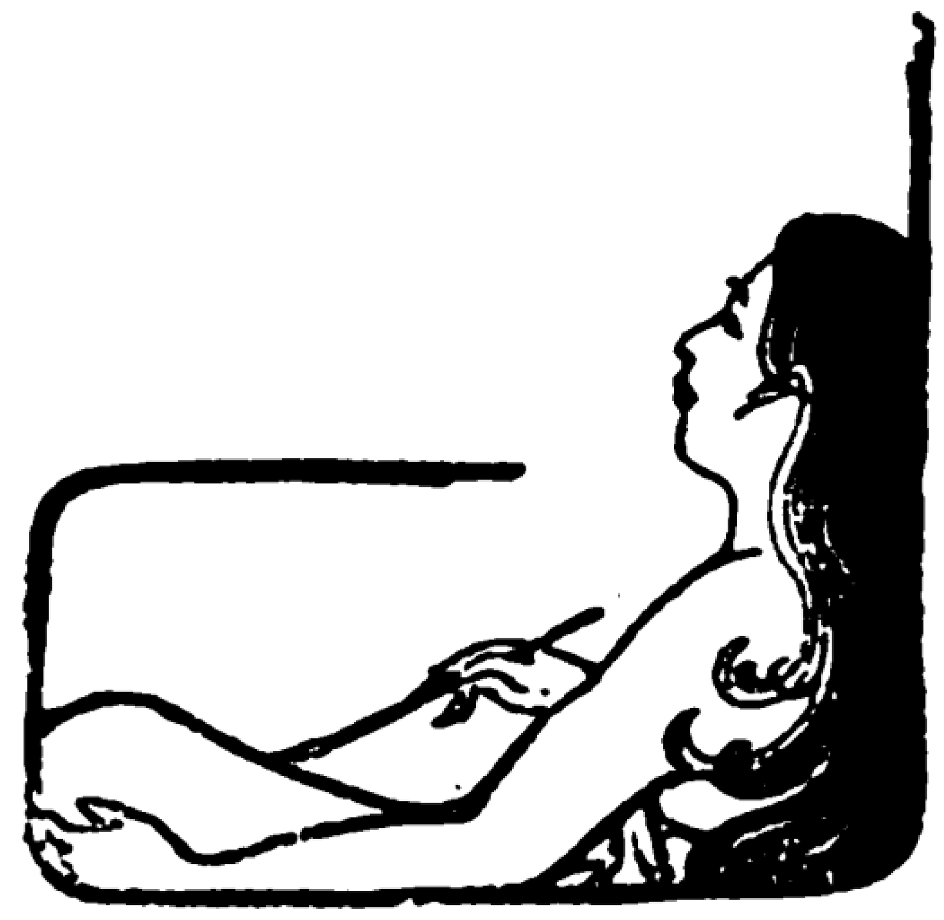
貴女の親しき友なる

エム. ヘインス より

英　　文

(第五年第七號)

女子英學塾講師 河 井 道 子



The Song of the Grass

Here I come creeping, creeping everywhere;
By the dusty road-side,
On the sunny hill-side,
Close by the noisy brook,
In every shady nook,
I come creeping, creeping everywhere.

Here I come creeping, creepin everywhere ·
You cannot see me coming,
Nor hear my low sweet humming;
For in the starry night,
And the glad monring light,
I come quietly creeping everwyhere.

Here I come creeping, creeping everywhere:
More welcome than the flowers,
In Summer's pleasant hour;
The gentle cow is glad,
And the merry bird not sad.
To see me creeping, creeping everywhere.

青草の歌

我は這ひ出づ　何處へも，
塵に汚るゝ　路の邊や
大陽照りそよ　山腹に
或は涓々の　小川沿ひ
日影の隅も　見殘さで
我は限なく　生ゆるなり。

我は這ひ出づ　何處へも，
我の來るは　汝は得みじ，
低き歌をも　君聞かじ，
星の輝く　小夜半や
嬉しき朝の　光明に
我は靜に　這ひぬれば。

我は這ひ出づ　何處へも，
花より遙に　愛でられて
夏の心地よき　永き日に。
柔しき牡牛は　悅ばん
樂しき小鳥も　悲しまず
限なく徐行する　我をみば。

小情集

若山牧水

松咲きぬ楓も咲きぬ初夏のさびしき花の咲きそめにけり

はつ夏に咲く木の花のさびしさと男のむねのこのさびしさと

わが友の妻とならびて縁に立ち白晝楓のはなをながむる

郊外に友のめうとのかくれ棲む家をさがして麥畑を行く

かくれ棲む友のめうとの家に行きこゝろおきなく泣きてかたりぬ

影のごとくこよひも門を出てにけり戸山が原の夕雲を見に

皐月ゆふべ梢はなれし木の花の地に落つる間のあまきかなしみ

けふも來てけふの落日を見おくりぬさらばよ岡よ街にかへらむ

水無月のたそがれがたのつめたさの身にしむ時よ栗の花ちる

わが戀の終れるころよほのぼのと初夏の花の咲きそめにけり

見しやあらぬ見ずやありけむさだかにはさだめもかねし懐しさかな（まだ見ぬ人へ返し）

夏白晝うすくれなゐの薔薇よりかすかに蜂の羽音と聞ゆる



○規定　題材凡て自由なり一人一篇を限り半紙又は罫紙に振假名をつけて明瞭なる楷書にて認むべし長さは二十四字詰八十行以内とす賞は甲賦に據りて送呈す▲本欄以下本誌の投稿は凡て女子に限るものとす

○喪（天賞）

佐世保　ひさ子女史

町子さんのお父様は、永い肋膜の病氣でこの程遂に亡くなられた。

家は田中尾と云ふ屋號で、シャツや半物類の仕立を商賣として居られる。職人や弟子も二三人居る、お父様は色の白い頰骨のたッた人であッた。夏の蒸暑い晩などは肌着一枚になッて切々と仕事をして居られた、精氣の勝ッた面影が、人事ながら今もなほまざ〳〵と目に殘ッて居る。

華やかな、繁盛な町の家並の中に、朝明けても夕暮れても、冷たく戸を閉めまはした一軒の忌中家ができた。夜は「忌」の白い張紙が暗闇の中に讀まれた。

賑やかな町の大通に、一軒の忌中家ができたと云ッて、それが無論町の繁盛な狀態に影響すべくもない、兩隣も向ひ二軒も相かわらず高い愛嬌をふりまいて買客を呼んで居る。賑やかな人通、旺んな人聲は夜となく晝となく間斷なしにつゞいた――。

紋服、袴の扮裝で弔詞に入る人がある、その人達が出てくるときは、必ず二三人の人達と連になッて居る、戶口を出ると忽ち「景氣」とか「流行」とかと云ふ話が迭される、商人特有の忌な、咽喉先から出るやうな甲高い笑聲が交ることもある。

死は人生最終の日である、何よりも怖ろしい、何よりも悲まねばならぬ。悲痛の空氣はわずかに同族の一家中を籠めたばかりで。外圍の旺んな競爭の騷ぎに壓せられて居るやうに見える。家を外にしては何の同情も、どれ程の不安心も挽くにとゞまらぬとは――私は都會を呪ひたいやうに思ッた。

私がお弔詞に行ッたときは、町子さんの友達と悟られてか名刺を直ちに奥に通ぜられて、間もなく悄然とした歩み風で町子さんが出てこられた。重々しい瞼が、紅う濕むだ瞳をつゝんでみるからに同情の思にたえない。町子さんは涙の限り泣きつくされたものと見える私は何とも云へず、たゞ無言で頭を垂げると
（致方ありません――。）
と、強いて淋しい笑を浮べられた。

葬式は三時出棺が四時になッて、いよ／＼動き出した時は四時半頃であッた。生憎の小雨は霏々として降りそゝいで四月盡の黄昏の



町は濛々と煙ッた。軒を櫛比た町家の店先の装飾も、とぎれ／＼の人足も、雨か霧かの中に曇ッて、大通の眞中に葬式の長い一列が、目にしるく横ッた。

町子さんの家は黒住教の信者で、葬式は無論神葬である。眞先には二旒の白旗、雨にぬれて旗竿にくッついて居る。風が吹くとはた／＼とはかない音を立てる。その次は竹筒に榊を挿して、御靈前――何の某とした白札をうッたのが幾對ともなくつゞいた。二人の神官が車上で、輿物の前に行ッた。お母さんと町子さんも車で輿物の後につかれた。その後は、蝙蝠や蛇の目の傘が隙間もなく組み合ッた會葬者の眞黒い列である。

お母さんも町子さんも痛ましい白無垢の姿で黑い垂髪の根元に白い紙を巻きつけて居られた。幾對もの靑々とした榊が雨にぬれてつゞいたのと、町子さんが若い姿で垂髪の根元を白紙で巻いて居られたのが、何よりも痛く私の思に殘ッた。

會葬者は、葬式が墓地に着くや否や歸ッた人が多かッた。私等は灯のつく頃歸ッた。町子さん等は夜になッて歸られた模樣である。

雨がはれゝば四月盡の天氣は極めてうらゝかてある。商家の高い瓦屋根が左右に遠く建ちつゞいた上に、碧々と晴れ渡ッた日の出前の空が仰がれる。塵もとゞめない靜かな朝の大通をけろりとして、昨日の夕小雨の中に田中屋の葬式を送ッたことが嘘のやうである。

やがて朝日の光が射す。おもての陳列棚に日覆をしたり、引幕をとり廻したり、町家の忙がしいことは夕方ばかりぢやない。市役所の撒水車が二尺ばかりの幅て廣い道をかたづけてぬらして行く。だん〲人が出盛る。自轉車が飛ぶ。腕車が走る。廣告隊が賑やかなマーチの曲て練り歩く。繁盛な、目眩しい町中の狀態は昨日と毫も變らない。

田中屋は昨日の如く忌中札を張ッて、戸を閉め切ッてある。葬式がすんだ今日は出入の人も極めて少ないやうに見えた。

（評）緣者知人が死人を中心にして動いて居る有樣が、よく出て居る。左に右く新しい作だ。が、死は人生の最終の日云々と、作者の人生觀めいた淺い文句が寧ろ無い方が好い。

○柳小路（增賞）

美濃　藤井みどり

「私、伯母さんに叱れるから厭だよう。」

「なにいゝつて專よ、ほんの一寸の間だから。へ、、人の戀路の邪魔する奴は、さ。オイ來な、構ふこたねえ。」

芳原つなぎの浴衣に博多の平ぐけの脊の高いのと、唐人髷に紅匹田の帶の可愛いのとが、よれてもつれて闇に吸込まれた時、お京は思はず唇を嚙んだ。

「エ、お手は？」

「オヤ又かい、五月蠅え奴だな。ホラ。」

「エ、ト、金銀に香車に歩が三枚……。」

ハッと心附いたお京は故意と元氣よく、

「まだ勝負がつかないの？隨分根氣がいゝわね。」

腰掛けた儘でにじりよる。

「之から面白くならうてえ處なんてさ。まあ見ておいてない。」

「面白さうね。」とは云つたが呆然向うを眺め出した。

橋一つ隔てた佐竹ッ原の、夜店のカンテラが眞赤な息を吐いて、柳盛座のアーク燈が靑白く輝いてる。引切りなしに通る下駄の音、雪駄の音が入亂れてザワザワと、下町の夏の宵は賑やかだ。

「いやに呆然してますね、又思出したんですかい？」

ポンと肩をたゝかれて、

「まあ吃驚した、酷い辰ちやんね。」と優しく睨む。

「エヘ……。物思ひはきつい身の毒てすつてさ。瘠せますぜ。」

左程高くは無いがスラリとした色白の優男。

「大きに憚り樣、そんな粹なんぢや御座いません。」

ニッコリして、

「まあ掛けなさいな、緣臺は廣うございますよ。」

「有難う、一寸一ッ風呂浴びて來やうと思ふんで。」と云ひ〳〵腰を下す。

「辰ちやんは感心に何時てもキチンとしてるわね。全く職人らしくないわ。」

涼しいが權のある眼て流眸に。

「家が商家てすからね、親父が喧ましいんてさあ。だが職人は矢張り申ちやん見たいに、イナッコイ方が好うがすね。」

顏色を讀むやうに凝乎と見る。お京はすまして、

「さうね、夫や何方かと云やイナセな方が好いわ、男らしくつて。辰ちやんも一つやつて御覧なさいよ、きつと似合ふから。」

「斯樣不粹な野郎が粹がつて見た處で、根ッからはえませんやね。」

「大丈夫よ、辰ちやんならきつと似合ふわ。私が受合つてよ。」

「有難いね、お京ちやんが……」云掛けて、「オッ噂をすりやあ兄いが來た。」

「エ？」

振向くと芳原つなぎの其人が、曲り角の柳の下へポッカリ浮いて出た。

「アラ申ちやん、米ちやんは如何したの？」

作り笑みして問うと、

「アハ……。とうと逃げられちやつた、未だ初心さね。」と面白さうに笑つてドッカリ腰掛ける。

「ヨー好男子、如何したい。」

女子文壇の妹生る

少  女

月刊

『少女』は讀み易く。分り易い雜誌です

『少女』は親切です。誠實です。少しも大人ぶらない子供子供した雜誌です

『少女』は學校以外にためになることを教へます

『少女』を讀むとお友達とお話をしてゐるやうです

『少女』を讀むと新しい智惠がつきます

『少女』を讀むと珍しいことが分ります

『少女』は愛情の深い天使です

『少女』には繪が澤山あります

『少女』は假名さへ讀める方には必らず讀めます

『少女』は毎月一日に必ず皆さんにお目にかゝります

次の頁を是非御覧下さい

(とノ二)

「如何もしねえ、之からお湯へ行く處さ。どれ。」と立上り、「皆樣おやかましう。」

〽こぼれ松葉をあれ見やしやんせ——。小聲でそゝり乍ら柳を左へ、螢がフラ〳〵と葉陰へ隱れた。

「何時まで下らねえ眞似してやがんだ。いゝ加減に止せやい。」

「いゝよ、下つても下らなくつても此方の勝手だい。」

「チヨツ血眼で、まるで氣が狂れてやがら。呆れもしねえ。」とクルリと腹這ひになつて煙草を吸附けつゝ、後ろむきになつて團扇をいぢつてるお京を見て、濃い眉をピクリとさせ、ニヤ〳〵笑ひながら、

「お京ちやん。」

「なあに?」

「辰の野郎がね、お京ちやんに首つたけで此方ア毎日中てられてるんてつせ。お安くねえやな、この罪つくりめ。何か奢んな。」

「痛いわねえ。」と初めて心から笑つて辰治の姿を思ひ浮べた。が、筋向ふの白家の格子が開いてお米が顔を出した時には、又美くしい面が颯と曇つた。



（天賞）　登校　名古屋　渡邊みつ子

四五日たつとお米の姿が見えなくなつた。お京は、「餘り我儘て手におへないから歸したのよ、如何しても母無し子は強情ね。」と忌々しげに話した。

其夜、例の通りに涼んで居ると、申吉が横町の氷屋の娘と手を引きあつて通つた。お京は團扇をズタ〳〵に引裂いた。けれど涙はこぼさなんだ。

辰治は昨日に變る角刈に置手拭て、ツイと柳の陰を折れた――。

(評)好い作だ。お京の性格や周圍の空氣などがよく出て居る。文章も旨い。作者は男て無ければ可いが。

○田舍醫師(入賞)

羽後　菊池りう子

午後の四時頃である。此頃中更かした爲か又頻りにちくちく痛む右の頰を抑へ乍ら「齒科醫園田健」と半はげた表札のあるせまい門をくゞつた。入口の所には矢張くだらなく三四足の下駄がぬぎすてられてある。其中についぞ今迄見かけない華奢な流行の男下駄が一足きちんと揃へられて有のて、はてなと思ひ乍らずんずんあがつて茶の間(兼手術室)の戸を開ると、ぷーんと味噌汁を煮る香と藥の香とが交つて、胸惡い其と共に人のいきれに白くなつたぬくみの有る空氣がもんと頰に當つて、私はいふ樣なき壓迫を感じて、無言に挨拶をして目を伏せた。烈しい日光に刺戟せられて來た目はよく物を見分ける事が出來ぬ。人の顏が赤になつたり黃になつたり――。暫くすると漸々落ついて來た。窓際に主人は相變らず一生懸命にこつ〳〵やつてる。一寸小いきな女のあほに寢た、頭から腰の邊が見える。いきな女だな、どんな顏だらう此方をむくといゝが。でもこういふのに案外醜婦が多い物だ。顏をみて失望する事がまゝある――抔と思ひ乍ら凝とみて居たがいつ迄經ても身動もしないので飽いて了つて橫に目をそらすと隅にすえてある小机に輪の大きい銀杏返に結んだ十八九の小造な娘がちよんぼり、よりかゝつてうつむき乍ら藥指の細い寶石入の指輪をいぢつて居る。如何も目覺えの有る顏だ。小柄な刻んだ樣な鼻、口元、如何も見覺がある。誰だつたかと目を離さず見守つてると其娘はふと顏をあげる拍子に私の瞳と其娘の瞳とはたと合つた。私は驚いた。そして「まあ金さ……ん」と口元迄出かゝつたのをぐつとのんだ。古い記憶は突さの間によび起された。其はまだ尋常科の頃である。一級上の平組に園田金といへば村中なり響たおてんば

者であつた。そして常に彼は五六の部下を率ゐて弱をゐぢめて居たのである。私抔はろくに外にも出ず眞の箱入りで育つた物だから、もう金樣と名をきいた許りでもぞつとして震へる位だつた。けれど如何してか金樣は私に許りは妙に柔しく嬢ちやん〳〵といふ。そして金樣は皆に嫌はれ〳〵してる内に、私が高等科に昇つた時から突然其姿が運動場に見えなくなつた。如何したのだらうと不思議に思つたのも二三ヶ月。後はもう名さへ忘れはて丶今迄過して來た。今目の前にみる金樣、何といふ變り樣だらう、女は年頃になると皆美しくなるといふけれど。まあこんなに變る人も珍らしからう。其に風俗といひ身の擧動からどこかに艶つぽい所が見える。園田、園田といへば何れこ丶の主人の娘だらうが。其にしてはみなりも華美過る。一體如何したのだらうと私は一生懸命に考へ出した。と「おい金ちやんお茶を入れてくれないか」と出しぬけに聞えたので、私は自分を呼ぶのかと、どきまぎ窓の方を見ると主人は依然としてこつ〳〵やつてる。金樣は立ちがけに私の髮をしりめにかけて出ていつて了つた私は愈々好奇心にかられて、居ずまいをなほして聲のした方に向なほつて見ると、自分を見守つて居た男の目とあつた。不快な感じがして直叉うつむいて自分の指先を凝とみてると横合の襖がすつとあいて、金樣がお茶盆と木葉煎餅をいれた菓子器とをもつて嬌態かに入つてきて、媚を含んだ目に微笑をみせて男の傍にぴつたり座つて、美しい小さい手でお茶をつぎ乍ら「石山樣けふは何も甘味い物ないの、堪忍して頂戴な、其代りに此次にはきつと甘しいの奢つてよォホ丶丶」私は益々瞳をこらして注意をはらつて居た。がつぷり肥つた卅四五の男は正座に傲慢らしく座つておうやうに頷いた。赤く硬つた太い左の小指に金の打消がはめられて鋭くぎらり光る目には金縁をかけて居る。白けた絲織の羽織を着た、一見職業の見分がつかない。隅の方にいつもの妻君は襤褸物をつ丶き〳〵眼鏡の曇りをふいては小さい鍋の味噌汁をかまして居る。味噌汁は白いゆげと一種の臭氣とを放ち乍ら盛んにえたつ。金樣は一寸眉をひそめて苛々した樣に妻君を見乍ら「母樣晩の御飯はもうたけたのかい」とぞんざいにきく。妻君はおど〳〵し乍ら「否まだの、今之を煮てからと思つて」「まあ五時じやないかね今時分裁縫なんかして今日は石山樣もおいでなのに。さつさと何か製らへたらい丶ぢやないか」と突樫貪にいふ。妻君は「はいは

いしと裁縫をおしのけてちよこ／＼厨にいつて了つた。金樣は勝ち誇つた樣に其後姿を見送つて居たが、此方むく拍子に又私の瞳といやといふ程あつた。金樣は狼狽てうつむいて了つた。男はにや／＼笑つて金樣の銀杏返をみ乍ら袂から何か新聞紙躰の物を出した。何だらうとみて居ると小聲にひそ／＼何か話し出した。折々鑛山、別莊杯といふ聲がもれて聞えた。けれど金樣は何だかこう沈んで居て眞身に聞いて居ない樣だ、時々そつと目をあげて私をぬすみ見ては微に吐息をつくのが耳に入つた。何だか大變氣の毒に感じて見ぬふりをして居た。男は煎餅を一枚口に入れてそして眉をしかめたかと思ふと、ぷーつと出して了つた。金樣はおど／＼見守つてた、けれど以前の樣に媚をみせるでもなくどこかに氣を置いてる樣だ。「噫悟つたかなあ」と思つてると、療治を終つた人が私の傍に座つた。と主人が「はい今度貴方」といふから私は其男がたつかとみて居たら、男は私に向つて「私は後でいゝんだから貴女お先に」といふ、私は禮をしてたつた。又消毒もしない金器でこつ／＼やる。好奇心にかられて痛いのも凝と我慢して、男の聲を聞うとしたけれど相變らずひそ／＼して解らない。此度は考へ出した。金樣の變化、母樣に對する金樣の勝ち誇つたしうち、男に對する媚の目……。そして私は或事に考へついた時、不快な堪らない感じがした。間もなく私の療治が出來て「じや失禮致します、御ゆつくり」とたつて障子をしめる時ちらと又中を見たら筋肉のゆるんだ疲れきつた樣な金樣の沈だ瞳と、情慾に輝やく男の鋭い瞳とが自分を守つて居た。私はぞつとして障子を荒くしめて、出しなに何といふ事なく暫く土間の所に立つて窺つて居たら高い男の聲で「今の娘はどこの娘だ、えゝ、金樣どこの娘だ？」「ホ……石山樣は亦、どこの孃樣でもいゝぢやありませんか」私は兩手で耳を抑えて急いで町に出てほつと息をついた。男は別に齒の療治にきたのでもないらしかつた。主人は無頓着にこつ／＼まだ何かけづつてる。厨の方では齢とつた妻君がかちや／＼晩餐の仕度をして居る。金樣の言葉の樣子は餘程垢ぬけして居た。私は町々色々事を考へ乍ら歩いて家に歸つたらもううす暗くなつて居た。

（評）何年も會はなかつた娘に、偶とした事で齒科醫の所で顏を見たがお互に言葉も交さずに默つて見て居ると、終に、其娘は來て居た男とふざけ出すと云ふ筋である。暗い父なる齒科醫の家庭がよく描かれてある。文章は餘り旨い方では無い。

【秀逸】

○寂れ

大阪市　西戸政江子

母のお富は所用でこちらへ來た序に娘のお里が嫁付いて居るさき、此の頃は長らく音信がないがどうして居るのだらうとつい氣に懸つてフラフラと寄る氣になつた、て四五町後戻りして兎ある横町へ入つた、お里の嫁いで居る家は荒清と云つて荒物屋なので、丁度お里の嫁いだ當坐は中々相應に手廣くやつて居た、この廣い店の間も所狹きまで品物が多くさん並べてあつた。おまけに店だけで入れ切れなくて向ひの納屋へも多くさんの品物が詰め込んであつた、尤もそれは今の主人清三の父親が居るときなので父親の死んだ後は清三が引継いでやりだしたが元來無口な商人には適せん性質なので店は段々寂れて來る、自暴氣味からフトよくある相場に手を出したのが誤りお里の來て二年立つか立たぬに財産の殆んど全部を失くして仕舞つた、向ひの納屋もつい二ケ月程前から床屋と變つて居る廣いからと二つに仕切つた店の半分は洋服の仕立屋が這入つた、二間間口の小さな店に僅かな品物が竹箒や七輪や塵取と云ふやうなものが雜然と塵をかぶつて敗殘の姿淋しう並んで居る、たゞ帳場の傍に積んである五六個の新らしい麥藁帽子が可笑しく目に立つ、

「寂れたな――」とお富はつくゞ思ふて家へ這入つた、



地（賞）　花つみ　下谷　佐野良子

「今日は、おや淸さん御無沙汰を暑い事ですね」上り框はほこりで眞白になつて居るので腰掛けもせずに立つたまゝそれでも一寸笑顔を見せた、

「あゝ叔母さんか」緣先に向うむいて何かして居た淸三は一寸振り向いたゞけ無愛想に未だ何かして居る、

「今日はお里は居ませんの」とお富は裏口を覗いた、そこらに居らんかなお里つ」と喫驚するやうな聲で呼ぶ、母の聲を聞きつけてお里は嬉しさうに裏口から這入つて來た。

「まあお母樣よく來て下すつて」洗濯物して居たのか濡れ手を拭き〳〵窮屈さうに子兒を脊負うて居る、「今日はどこへ行つたの暑いのにまあお掛けなさいな」と嬉しさうに、いそ〳〵して「まあお茶でも入れるわ、」

「なに一寸そこの橫山さんまで來たのやがね餘んまり暑かつたので一寸寄つて見た、でも變りがなくて結構だわね、まあ暑い事」と思ひ出したやうに團扇をとつてあふぐ「一寸出て來る」とあはてたやうに立ち上つた淸三は手拭片手に無性に足で下駄をさぐつて居る、

「どこへ行らつしやるの」とお里はけはしい目をして見返へす、「一寸控そつて來る、まあ叔母さん御ゆつくり」と板の樣になつた下駄を引づつて出て云つた。

「お母さんあゝですわ、いつもあゝなんですの」

「可笑しな人だね、」腹立ちさうに「妾が來たら出るなんて何と云ふ人だらう、あんな風だから商買の繁昌しないのも無理がないよ」と今更の樣キヨロ〳〵と邊りを見廻した、今までと違つて何だかあたりはガランとした樣、天上裏から暑そうに煤が下つて居るのが嫌に目につく、

「まあその兒を下ろしたらどうだい暑いやらうが」と團扇であふいでやる、「眞實に暑いわね、あゝ辛度」と子兒を下ろして膝へ乘せた、汚ない何度も水をくゞつたらしい縞目もわからない單物を來たお里の肩から背にかけたあたりの細々しい姿を見てなぜこんなに貧相になつたゞらうとお富はつく〴〵所帶の苦しさを思ひ遣つた。

「やせたね」と泌々言つた、

帶も締めずに細紐のまゝのだらしない姿を瞶めて、

「帶も締めずにお前それで淸さんは八釜しく云はないかい」と頭の上から足の先きまで見下ろす、「でも暑いですからね」と頰に縺れる束髮の後れ毛をうるささうにかき上げながら眠つた子供を五月蠅そうに傍えおく、蠅がうるさく眠つた子の顏へとまる、時々子供は

ピク〳〵として居るがお里はそれを見て居ながら敢えて拂うてやらうともしない、暫くボンヤリ見て居たが思ひ出したやうに目を上げて、

「その後家は變りなくつて」

「別に變りはないがね、やつぱり嫁の我儘も變りがないよ、眞實に此の頃は餘計に酷いよ、お前なんか居たら直ぐ喧嘩だね」

「兄さんが穩なしいからだよ、義姉だつて惡いけど」

「あゝそうだよ兄は意氣地がないからね、傍で聞いて居るだけて腹が立つ事が何度あるか知れやしない、そんなときは堪まらんので妾が出て思ふ存分言つてやるのだよ、妾や性分が性分だからね、默つて居られないよ、どこもかもうるさい事ばかり女はつまらないね」

と言ふたがそのまゝ默つて仕舞つた。

心の中ては二人ともお互に何か云ひたいが妙に二人とも何も言はず俛れて默り込んで仕舞つた。

フト店の帳場に人の氣配がするのでお富は振り返りながら小聲て「お前誰れか來て居るじやないか」「えゝ」とお里は氣のない返事だつたが、「ナアーに」と小聲で「親類から一人來て居るんですよ、中學校に入つて居るそうてすが此の頃休暇なものですからね、暫く預つて吳れと言んてすよ貧乏所帶と云ふ事は知つて居る癖に、」お富は頻りにうなづきながらも店へ氣を兼ねながら「厄介だわね」「眞實によ、身體ばかり大きくて何も出來ないのですからね、夫婦二人てさへ喰い兼ねて居る處へあんな壯氣盛りの人に來られたんですもの堪りませんよ、そのせいて此の頃は餘計夫が强く當るのですよ、もう此の頃はすつかり嫌になつた、子供さへ居なかつたらさつさと歸るのだけれど」

「女はどうしてもつまらないよ」と吐息をついて「それても今にどうにかなるだらう、子供が出來てからはもうどうする事も出來ない、その內淸さんだつてどうとかするだらう何ても辛棒が肝心だからね、」と諭すやうに云ひきかせて立ち上つた。

「もう歸るよ淸さんにもよろしくね」「なあお前どうしても女はつまらん役だから短氣を起さんやうに、またそのうち一度歸つてお在て、左様なら」と外へ出た、お富の歸るとき、食客さんは暑い西日を眞向に受けて帳場て一生懸命ボール細工に餘念がなかつた、淸三は向ひの床屋て碁を打つて居る。

（評）事業に失敗した男の辭も無く縁者などを避ける所や、それから其の妻の知らず〳〵暗い方にしびれて行く狀態、疲れ切つた人の母親などが可成りに描けて居る。が、何うも此作者のものは毎ても

上すべりして居るやうな氣がする。

○裏の家

熱海　花菖蒲

裏に一軒の藁家がある。

家根には青い苔が一杯だ。

あの草が毛ほど出たのを見つけてから八年にもなるがまだ新らしい白々とした藁はつまれない。

さつき大老人の婆さんが、火のつく様に泣兒をすかしながら、きたない流れ物の横で、焚木を積んでた。

穴のあいた下駄、燒からしの板なんかを、こわれた德利、くさい藻の中を、てくてく歩んて、さがしてゐるのだらう海岸て。

もう婆さん七十ださうな。

横の小さな藁小屋の處へ茣蓙をしいて、淸さんはひげをそつて貰つてる。

てら／＼と燃る晩春の陽を、まぶしさうにながめてる眺めては何を思つてるのであらう。

足はたゝない、手は始終ぶる／＼振えてるので仕事が出來ない、毎日青い顏して雲ばつかり眺めてゐる。

もう四十の總領だ。

旦那よりもふけて見える。

次の子も男、頭の大きい、何時見ても、口もきかずに顏じろ／＼眺めて、いやな人だと思つてたら啞なんだもの、毎日海へ出かける。

いつだつたか晩、飲酒店の路地を一寸のぞいたら、立つてたので、びつくりした。

先日世とりの娘の養子がにげて歸つたので、お竹さんは三人の子を抱へて歸つてきてるらしい。

子が泣く。餘所の子が煎餠をかぢつてりや、くれと云つて何處までもついてゆく、

始終鼻を垂して、いやな眼つきして、裏の田圃で泥を弄つてゐる。

近處の人は皆こんな事を云つてゐる。

「へえ、あすこは代々養子娘でね、年寄婆さんも、次のも、今のもさうですよ、お竹さんの弟が今十八て魚やへ奉公してますが、これがまあ一番いゝてすがそう長く世とりをおかずにはゐられませんて、お竹さんに、むことつたてすがね、家は厄介者ばつかりだて、養子はとうとう歸りましたよ、なに村の者だすけ――、

人間はまこと、そろつた、いゝ人てすがね、どうい

ふもんだてか、あのずつと前の爺さんがどつかて死んで行衛がわからねえて、其爺さんが佛を海へ捨てたつていゝますけ、それだてたゝるのてござんすかねー。」

中婆さんは朔と晦日には僅かの賽錢と花とをさげて、スタ〳〵とお山の寺へゆく。

物小屋のわきに赤い〳〵つゝぢが咲いてる、屹度あすは、あれを持て行だらう、スタ〳〵と。

（評）スケッチのやうなものだが、何所かに懐う味のある作だ。文章は餘り粗雑なので注意して欲しい。尤も作者は初めて書いた作だと附記して居る。

○十九の春

長野　大口　巨樹



人（賞）　初夏　青森　松尾千代子

百合子は、この三月松本女子師範を卒業して、郷里の學校に任命されたのてあつた。

久し振て、懐かしい故郷へ錦を飾つて歸つたのてあるから、心が何となし落付かなかつた。

それて今日は、自分より三つ下の妹の政子と、去年お嫁にいつた姉と、三人て公園の方へ散歩する事に定めた。

丁度善光寺御開帳の第一日目てあつたから、其賑やかな事まづこの山中の信州には、珍らしい位であつた。

立派な若紳士も通れば、若い令嬢も通る、又其中には、お白粉を眞白に塗りつけた、田舎のお嫁さんも通

る、それは〳〵、種々な人が行きつ戻りつして、宛ら活動寫眞の樣、百合子も面白くて、思はず見入らざるを得なかつた。

善光寺東側の階段を下りると、活動寫眞やら芝居やら輕業やら……が、所狹しと一ぱい立並んで、互に聲をからして、客を呼んでゐる。

百合子等一行は、自づと其方へ足を運んだ。

左側の公園は、まだ何の花も咲かぬ、早咲の梅が蕾をふくらました許であつたが、一躰に春めかして、どことなし陽氣となつた。いつもならすぐ誘はれて下陰を彷徨うのであるが、目の前でドンチャン〳〵囃し立てるものだから、百合子もつひ引きつけられて、姉や妹と芝居や何かの看板を、片端から見初めた。

興に入つて、知らず〳〵四番目迄見て行つた、ふと我に返つて振り返つて見ると、姉と政子は、まだ二三間も後の方で、自分を見ながら何やら意味ありげに、笑つて居る。百合子は、不審に思ひながら、

「まあ姉さん達は、如何して居るの、」と、はがゆそうに又戻つて側へよつた。

姉と政子は、百合子の顏を見て、

「オホ…………………」と、突然高く笑ひ出した。

百合子は唯、呆然にとられて、二人の顏を見つめたが、暫らく言葉もてなかつた。稍あつて、

「政子どうしたの、え、」と、漸く不審の眼をよせた。

「あのね、百合さんの側に、小田先生が居らしたのよ、それで笑つたの、」

「おや！」と百合子は、事の意外に吃驚した、同時に何を思つたか、急に顏をぽつと紅くした。

「そうしてね、お前はだん〳〵小田樣の側へよつていくものだから、おかしくて〳〵ほんとうにたまらなかつたわ、」

と、姉も側から口を添へた。

「まあ、そうだつたの、私ちつとも知らなかつたわ、」と、其方に輝く眸を動かしたが、もう遲かつた、其人の面影は何處にか消えて、見えかつた。

小田といふのは、四年前に長野師範を卒業して、この地の小學校に奉職して居る敎師である、丁度政子が高等四年の時、敎を受けたのであつた、今の姉婿はこの人と同級で、しかも親友の親友である。

暫らく三人は、無言の儘步いたが、百合子の胸には絕えず、こんな事が浮んできた。

三年前、まだ自分が師範へ入學しない時分、既に小

田との縁談のあつた事から、今年の一月寒中休に、義兄や姉から、頻りにその縁談を纒めるやうにと、勧められた事や、又度々手紙て自分の心を引かう〳〵とした事などが、それからそれへと續いててくるのてあつた。

「百合子、小田さんがまだあそこに居らしてよ、」右に並んて歩いて居た姉が、突然かういつた、思ひに耽つて居た百合子は、はつと驚いて、思はず顔を上げたが、又急にあはてて顔を下ろした。二三間眞向うに、中折帽を被つた、其人が此方を見て居たからてあつた。中脊な色艶のいゝ、愛嬌のある忘れられぬ顔、百合子はほんとうに、二年振りて見たのてあつた。

「一寸、こんな縁談のてて居る最中だから間が惡いわね、如何しやう、」と、姉は思案顔に二人を振り向いた。

「姉さん、靜かにいけばいゝぢやなくつて、もうあんなに居らしたもの、」と、政子は一ばん子供だけに、かういつて歩き出した。

春の麗らかな日が照つて、道の兩側は、草が青々と萌えはじめ、風は吹くか吹かぬかの、極穏やかな日てあつた、三人は四圍の景色を眺めながら、城山へと登つた。

今日の不意の出來事に、百合子は小田の事を思はずには居られなかつた。

小田は確かに自分を愛して、結婚を求めるのだらうか？　あくまで自分の力になつてくれるだらうか？などのいろ〳〵な空想に、頭を惱ました。

城山館を右に、縣社の前迄くると、善光寺平が、一望眼下に廣がつた、青い麥畑の中に、點々と見える人家や木立、丁度友禪の布ても敷た樣てあつた。

三人は思はず立止つて、口走つた。

「まあいゝ景色ね、」

左側の公園は、丁度梅の蕾が七八分ふくらんて、稀に一輪か二輪、開いた花が見えるのてあつた。

百合子は獨り先きへ、花に憧がれて木蔭を彷徨つたが、遙か向ふの石碑の傍に、小田の立つて居るのを見て、再び胸を躍らせて出てきた。

「ね、姉さんまだ向ふにいらつしやるよ、はあもう歸らないの、」と泣くやうにいつて側へよつた。

「あゝそうしやう、今日はほんとうに間が惡かたわね」

「え、ほんとうよ、さ、さ、」

と、三人は蝙蝠て顔を蔽つて、知らず顔に通り越した。

紀念公園近くると、はつと一息して東屋に腰をおろした。

百合子は、何だか小田に對して、大罪を犯かした樣な氣がしてならなかつた。併し又何となし嬉しい樣な氣がして、思ひ出しては獨り微笑むのであつた。

見るともなしに眼をうつせば、南の崖には、名を知らぬ草が青々と茂つてゐる、其下は一面の平地、今しも信越線が黑い煙を吐いて、汽笛勇ましく平野を横切つて、長野停車塲に向つて進行しつゝある。

（評）よく書けて居る。此の筆を持つてもつと好い材料を取りあつかつたらと思はれる。

葡萄圃

「即興詩人」をよみ奕姫アヌンチヤタを夢見て

ヴエスピアス山より噴き立ちて、天心に燃ゆる火の勢も、猶ナポリ市人が、アヌンチヤタの前に捧くる崇拜の熱には得勝らず。ナポリ市の若人等が、我を爭ひつつアヌンチヤタが乘るべき花もて滿飾したる車を押して劇場より内外する事も連日となりぬ。見よや。詩人は昨日も今日も心をつくし詞をつくしたる歌を、紅花とともに、舞臺になげたり。畵家はひつしの技をこらして、ヂドが妖艶なるに扮したる彼女が無双の容色をあらはさんとす。アヌンチヤタ!! そも如何なる女なるぞ。

彼女が定められたる一室は旅館に於ても最上等なり。華なる幕を垂れたる窓は庭園にのぞみ、庭園の半を領して葡萄圃あり。彼女が室に人の聲す。花の灯の光すてに室に明く、壁畵中の天童の面生ける樣にみゆ。卓をかこめる二人の男はナポリ市の貴人にもやあるべき。一つの椅子は主なくしてのこれる二人淋しげなり。わかきは言ひぬ「姫はいづこに行きし。復とは逢はれまじき今日の訪に於ての情、あまりに淡く思はるるはいかに。わが心づくしを知らぬにもあらざらんを――。」

「されば？」と老ひたる一人言へば一室の隅にうづくまれし姫がつきそひの嫗。「今に。――」と慰めぬ。

アヌンチヤタは窓外に立てるなり。靜なる夕闇を葡萄圃の下に立てるなり。累々なる果實大なる青葉は、そがブロンドの髮にほとんど觸れんとす。姿はしなやかなり其眼いかにかくまでの輝かしさぞ。其よそひ、いかにかくばかりあてやかなる。指をくみ胸におしあて、いたくいたくうれひに沈めるいぢらしさはよ。アヌンチヤタは美なる女なるとともに戀の女也。彼は「アントニオの上」をぞ思へるなる――。――（長曾我部菊子）――

新體詩

横瀨夜雨選



○規定 題意も材料も律格も凡て自由なり要するに眞情を歌へば可なり三十行を越ゆるべからず一行には一句以上を書くべからず凡て振假名をつけること字體は明瞭を要す乙種の賞を送呈す

○顫音調（天賞）

四谷 まきばしら

我影は壁にうつれり。
微かにもうち顫ひつゝ、
蠟燭のうすき光の
漂ひに白く浮べる
小枕の淋しき樣かな。
眠らんと衾かつぎて
ふと聞くは
樫の木の暗き歔欷音
否其葉摺れにまがふ
細きさゝやき……
……生きながらのおくつき……凶き
夢の棲家……

蠟涙は音もなくしたゝりて
たゆげにも喘ぐ火の葉よ
またゝきて、瞬きて
終りの大き一揺れに脆くも消えぬ。
痛手を負ひてさまよへる魂か
仄白みたるその焔は
そもいづこにか漂ひ行きし——。
とみる窓の間より
さながら蛇と
闇をあやどり
渇ける胸に流れ入る
青き光——
慕ひよりてつと吸ひぬ……
うち顫ふわが唇に
するどく刺す酒精の香の如き……！。

あゝふりそゝぐ明と暗の
高調のゆらぎの中に
酔ひしれ顫ふ
草よ木よ、輝く家よ星の光よ
淋しきかな
目はとづれど胸はおほへど
たゞひとり醒めたる心。

銀色の楊の葉が落ちる……ちらちらと月に輝いて暗き湖の上へ落ちる。
ひかりとかげとのソプラノの揺曳の中に、草も木も人の家も窓の星もゆら／＼と動いて……それは樂の音である。
ほのぼのと明るき闇のうちに青色の星にみいりてすすり泣く彼女の瞳ん開け、心もかたちも花やかなる多くの友に交りて、つれに暗き思ひをたどる子は悲しむべきかな、『ひとり』は寂し、『人』はさらに寂し、母の膝にそそぐべくわが幼き涙はすでに盡く……
……蠟燭は滅した。

○河岸（増賞）

丹波　鹽見喜代子

曉の鐘は今し口をつぐみつ、
綠の木々の穗末を、
夢の如くに漂ひ行きて、
消えぬ薄れぬ。

葉楊の並ぶ河岸、
眼覺めし千草
歡びに黄なる花、
かすかに顫ふ。

かゝる時、我一人、
地にさびしき影ひきて、
そこはかとなくさまよへば、
胸ぞわなゝく。

あゝ我胸、常若の、
透影ぞ心地よく閉しぬる。

かくて日出てぬ。
物皆は生の努力に、
思ふさま光を吸ひて、
言無う立ちぬ。
刻々に仲び行く草の芽も、
吐息靑き葉楊も。

あまり時間が飛びすぎる、他人は刹那の心の動搖をゑがくにすら苦しむのに、胸をわななかした鐘が、かくて日出てぬてさつさとかたづけられてはと思ふけれど、生氣があふれてゐるのでたのもしい。

○落伍（入賞）

信濃　イリス子

君！君よ!!!
呼ぶとすれど
聲は唇をもれず――。
熱する額
ああ、青春き血のひゞき。
頭もたげて、
見はるかす愛戀の草原
白、緋、紫、
勁き香の吸引力、
君は花に飛ぶ蝶々よ。

せめては――聲の嗄るるとも……あ
ゝ……。
青春き血のひゞきいたづら
くめる手の冷えゆくまでも
さゝやき、口づけ、抱合は
えあはじあはれかへらぬ『時』に。
思慕のあせりに咽喉かれ
くるめく、まなこ、
みどりふるふ愛戀の野に
かへらぬ青春き『時のながれ』を
あがきしてきく、つかれの身、
とりのこされし吾れぞかなしき
君！君よ!!!――。
君よ!!!あゝいづこ。

涕涙ともに下る激越の情おもうべし。知らず誰をしたひ誰を追ふのわづらひぞ落伍者はひとり君のみならず。

【秀逸】

○夕鐘

岡山　高木清子

夕日は靜かに、
暮れ行く一むらの楢の
梢に、
また菩提寺の大銀杏に
接吻けぬ――懐かしげ
に。
此時を夕鐘ひゞく。
默して立てる鐘樓よ
り、
一杵また一杵、
薄明に匂ふ空を渡り、
待ち設けたりし里人の
耳に、
誇り立つ高き銀杏に、
妙なるさゝやきを奏でつゝも、
あゝそのひゞき寂の聲、滅の音、
信心深き故老の耳に、
若き夫婦の野歸りに、
深くも物を思はする。
鯨音は暮れ行く闇をいみて、
淨樂の星の世界へ消えて行く。



舞子　八月　稲垣かをる

「淨樂の星の世界に消えて行く」この一句生命あり。老翁や夫婦や出るとすでにおそし。鐘樓にしやうろうの假名を振れるは、ひとり君の爲に惜むのみならねど、龍頭をりゆうたうと讀むのたぐひならずんば幸なり。

○二見が浦

麻布　關口冬子

目をはなつと彼方の
岸が眉の樣に、
日は水平線をはなれ
た。
きら〳〵と日の光が
水の上に、
ダイヤモンドの珍樹
をかけた。
遙にたゞ一つ片帆のかげ、

だれか――そうだ
戀しい母樣が、
のぞいてらつしやる樣な氣がする。
白無垢の御姿で――
早く舟の中がのぞいて見たい、
近づいた、岩むろの向うに、
見える、見える、艫も舵も
七五三繩を越して――。
けれども舟はたまゆらに
變岩のかげに隠れてしまつた。
日は微笑んだ。

この方は醉茗さんが謂ふ所の若い奥樣の一人であるはなやかな召し物や帶や、夢に見る樣な灯のかげに詩を考へるひまがあるのはたしかに幸福だ。

○我命

本郷 T W

王者、冠を輝かし白のみ馬に鞭打ちて
黄金眞珠よ珍寶山とつみつゝ來るとも
何にか換へん我命思ひ惑ひし若き哉
君が身此の身燒き盡す、熱血三斗胸に盛り
來りし人を疑はで、捧げまつりし此の命
横たへられし處女子の若きむくろを
ふりかへり
あゝ今さらに涙しぬ、細き腕にあらがひて
拾ひ逃れし生命なれ黒髮梳づる其度に
この一すぢもみだりにはあだし人手にふれまじと
固く誓ひしが君がみ胸に燃ゆる血に
笑みて熔けん第二の死
精神よ三度死はありなん

ひと度は〇〇川のほとりにかくれて淒艷たぐひなきかんばせをかへらむ水にうつし、今は上京して桎梏な脱せんとしてかへりて人の手に横へられし尸となる、第二の死！
ああ君も亦……

○靜夜

小石川　海老澤得子

障子を明けはなしたまゝ斯してぢつと窓に寄つて居ると何處からともなく快よい風が吹いて來る
灯影の屆く果ては若葉が白く浮いて見える空には星も無い暖かい靜かな晩だ
あゝなんだか今夜はたまらず人なつかしい
あの街を行く男女の後影
それか皆赤い灯に照らされて
艶かしい聲や若々しい身振
行き逢ふ人毎にいつか何處かで見た樣な親し相な笑顔を見せては行き過ぎる
灯、街、聲、あゝ私は何かしちやつた

それでも、うしろからそつと手を肩へおくものがあつたらあなたはびつくりするだらうか。町ではよくかうした女を見かける。

○二つの若き胸

鳥取市　桑本きさ子

春の宵なり、
美し部屋、燈の下に
對座の美き少女二人、
華やぎの笑をつゝみて――、
たゞ無言なり、いつまでも、
唯無言なり――。
温らぎの靜寂の中に
吐く息の一つ〳〵に
青春き香の溶けて漂ひ
重なりて熱き血潮の
たぎり立つ二つの胸を
幾度も出てつ、入りつ。
かくて更たくるもなほ無言なり、
いつまでも――。
對座の少女は若し。

女同士が一ばん中にらみくらをしたと見える何とかありさうなもんだが、お坐敷で羽子突くお嬢さんに似合はない

○紅の花

越後　横山文枝

ふと手に觸ぬ！君が手に、胸は戰き
血はたぎり、
頰は燃えけり紅に。小指のはしに觸
れてさへ、
つらくも頰光る吾なるに、何を惱む
と柔肩を
君に打れて、
かゞやく瞳に見おろされ、まぶし光
にめくるめく、
やは風なぶるおくれ毛を、ほほ笑み
ながら
手まさぐり、愛のさゝやきさゝほけ
て、
君の情の胸にこそ入れ、

給のごとし、

○生の火

安房　安堂富美子

迷へる魂は生の火に
燒けぬ、滅びぬ。寂寞と
灰に歸れる冷かさ。
また生の火の燃えざりし
始めは、魂の健かに
清き生命の水吸ひぬ。
彩雲薫る朝空の
高きあこがれ、はた夕の
理想の烽火、ほほゑまひ。
面も若えの耀きや、
美し露はくちびるの
花のくれなゐ濕しき。
ふとしも宿る暗愁は、
胸なる肺を蝕みて、
黑く縮める病桃。
生命の水は涸れ涸れに、
濕ひもなき皮膚の色、

不安の瞳顫きぬ。
一日一日に刻まるる
胸の扉は、苦しみに
悶えつ、咳のごほごほと。

あゝ堪へかてや、慰めは、
あえかの花に接吻けし
一瞬にして去りにけり。

迷へる魂は生の火に
燒けぬ、滅びぬ。寂寞と
灰に歸れる冷かさ。

ほん當に肺病にかゝつて作つたのか、どうか、まこと病まばもつと深いものが出てこればならぬと思ひます。病桃をつかつたのはよかつた。

○いとぐるま

岐阜　篠田とみ子

白日われ机によりてかしましき
蛙を半夢にきゝつゝ隔りし妹とは知れど
合點かぬ我魂のやる瀬なきかな。
日和下駄カラコロと
紫の包小脇にかいこみて
愛らしき微笑片手に藤色の
洋傘携へつゝうち振ふ子もあらばやと
街道にさへ
幾少女子をみかへりし
紅雲に乘りて來ずや妹夜の幕垂れし
その刹那
白蠟の火の華傘を高くかざして我は
迎へん
美き花も咲くものを。

いゝいゝ、いとぐるまの意味がわからぬけれど、質屋の孃さんの詩もよくなつて來た。鬼がやぶれからかさを曲げに來て、もうこはいとはないでせう。

○往かんかな

日本橋　宮本君子

美しみ夢のささ流れ——サラ〳〵
音こそ響けハンモック
浮世の塵こぬみ山の奥
風は、青葉は我友よ
いや遠き天國
もすそ薰ずる月の宮
笑みかたむくるよき人の
なつかし言の葉きかまほし
送れ風——
思出の青葉蔭
夢に消えにしほがら音の
行方戀ひて、そゞろ歩きに尋ぬれば
ふとこそ思ふそこはかとなく暮れてゆく
青ば梢の嘆きかと——
往かんかなみ山の奥
我影秘めん青ばかげ
我魂とくるいさゝ川
寂しらの微風呼ぶ蔭に

單純過ぎる、苦勞も何もないからといへばそれまでだが

○胸の脉

代　東條志宇子

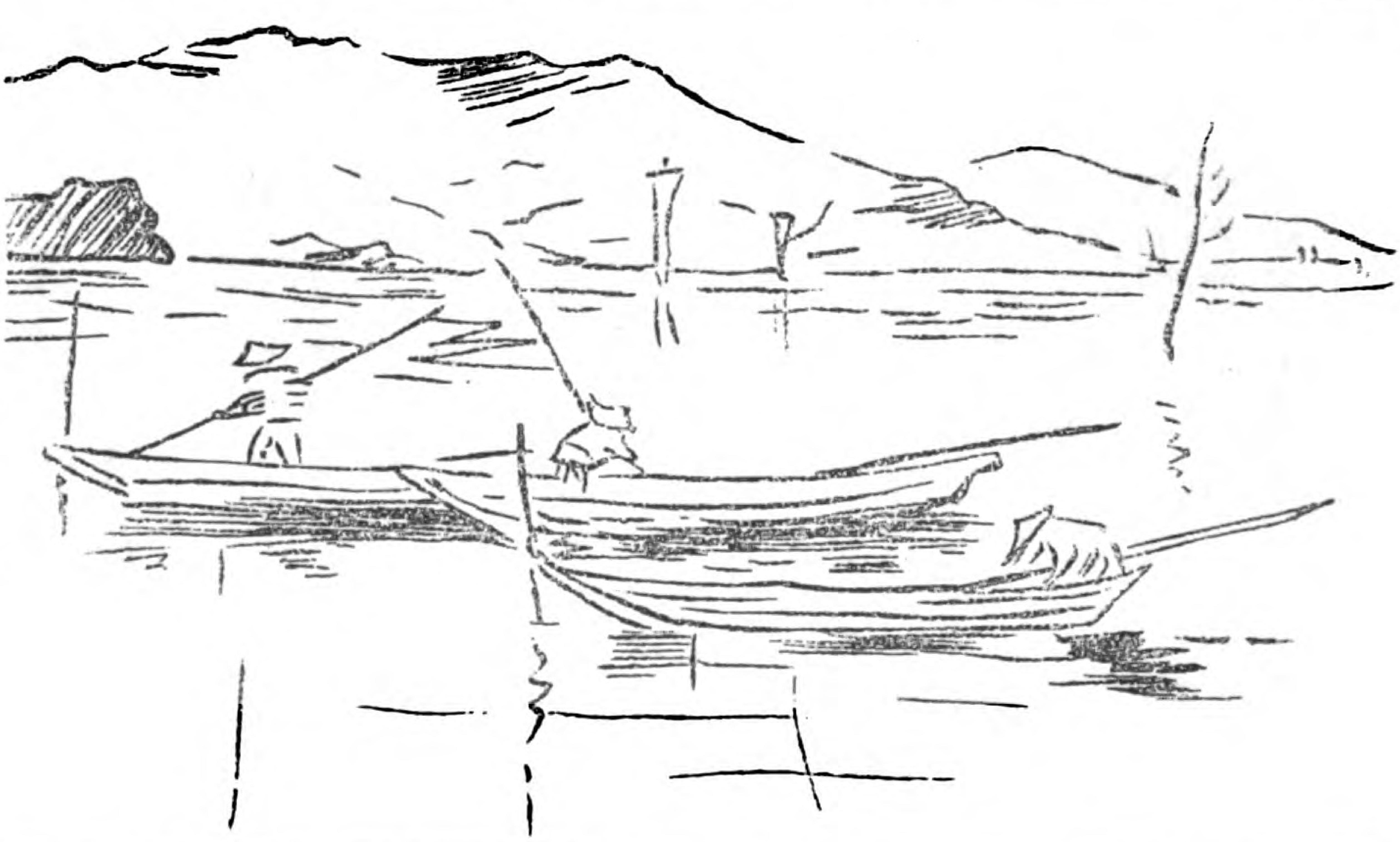
コツ／＼ホームの響
今日も昨日もてやみなく
あゝそれの如、胸の脈
ホームの刻み
コツ／＼生の油を吸い行きぬ
生は限りのあるものよ
胸の脈
反響す、胸の
脈のおのゝき
吐く息に肉は震へぬ
あゝされど胸の脈
生の此の世の、端にある
死階を數へて行きぬ。

ホームのきざみとは何のことかわからぬ、胸の脈が死階をかぞへるといふのもインケリッシとおぼゆどなたか通辯の勞をとつて下さい。

○疲れし町

明石　田中ますゑ

塵吹きて　焔の如く



藻刈舟　神田　白井津奈子

狂ひにし　風今死して
人皆は　いと足早やに
何處へか　默して去りぬ
荷車は　生に疲れし
人や馬に　引かれて過ぎぬ
轍のみ後に　殘して——、
何處より　何時來たりけん
汚れたる　藍服着たる
男あり　煉瓦にもたる
ポケットに　手をさし入れて
失意の色は　面にみちたり
あゝあゝ汝も　生につかれて
故鄕を思へるか
汽船の笛のまだなりやまず

いはゆる現代の生活に觸れたる詩。獨創ならば尊むべし、流行に追ひて作れるに過ぎざるを如何せむや。

○鐘は鳴る

愛知縣　庫屋敷政子

鐘は鳴る、

灰色に片野の面は
黄昏れぬあなうたてしや
いつしかに空はうるみぬ。

鐘は鳴る、
華のみだれ、花のちりばひ
しかすがに一日の果の
憂きしらべ、悲びの歌。

鐘は鳴る、
冷え〳〵と涯りも知らぬ
奥處より薄らの闇は
ゆらぎ出ぬ――光の萎へ。

鐘は鳴る、
灰色にわが魂は
黄昏れぬ、生の極みの
淋しみにあはれ顫く。

上手だけれど、人まねをしてゐのが氣にいらない大の男（？）が何のこッた。

○春は逝く

鎌倉　上原露葉

春はゆく――
るり鳥の囀霞にながれ、
鶯の姿青葉に老いて、
散る白梅の夢――泥にそむ。

しぼれば――
紫の血潮わなゝく菫は、
青き石に伏し、――
戀にあへぎし蝶は
花の吹雪に彩羽破りぬ。

牡丹の床に育ちし雲雀は、
花落ちて――
啼きならふ蔭無きになく
詩人は筆をかみ、
伶人絃を斷つ。
かくて人は――、
煩悶しげるシーズンに、
逃げ行く影に泣きつゝ、
憂愁を味ふの時となる。

散り殘る花の上に――
玲瓏として月はのぼる
この夜、この時――
春靈は、花よりぬけて、
御空にかへる――。

梅の實は若葉に肥えて、
孤蝶、雨夜の夢をわびしみ、
あけぼのを、魂鳥啼いて、
色なき春は葬られ行く――。

梅が散つたばかりなのに實が大きくなつてゐる、るり鳥が飛ぶかと思うと魂鳥とやらも啼いてる、青葉やら牡丹やら春夏をひつくるめてしまつた上は、序に秋と冬とのお景物を添へればよかつた。

○田植唄

秋田縣　田口かねよ

背戸の柳がそよろとなびきや
白い雲湧く青野原
娘いくたり揃ふて植ゑる
笠は秋田の菅の笠
お絹は小女郎の小唄節

美文



○規定　抒情、叙事、叙景等凡て他欄になき文章一切を含む字體は明瞭に認め必ず句讀を切るべし一人一章に限り半紙又は罫紙に認むること匿名を要する者は本名を別記せよ二十四字詰三十行限甲種の賞を送呈す

○夕の星（天賞）

東京　江森美

冷やかな凄みを帶びた光、見て居る瞳を射貫かれはすまいかと思ふ樣な澄ぎつた夜半の星よりも、私は光り弱く輝き初むる夕の星を深く愛し、又懷かしと仰ぎ見るのである。あゝ美しい夕星の影、私が夕星の美しさを覺えて、懷しと愛し始めたのは、まだ幼き春の夕暮であつた。或る時巴里の叔父樣が、美子にとてゴム人形を、送つて下すつた、其の人形は實に可愛い姿であつた、罪のない天使の樣な愛らしい姿であつた、もし現世にエンゼルと云ふ者があるならば、あの人形に生と云ふ物をあたへた者であると、今でも私は思つて居る、あゝあの櫻色をした頰に一滴の溫たかい血潮が流れて居たならば、幾人の人にキッスされたてあらうか、幼かりし私も其の人形を見て、深く〳〵愛の心を覺えたのである、其の頃幼き私の心に漲ぎつて居た愛なる物はあの一尺にたらぬ人形の身體を十重廿重に包んで居たのであらう、私は、可愛くつて〳〵身邊を、はなさなかつた、ある日「ふめば惜しふまでは行かん方もなし心づくしの山櫻かな」と赤染右門の其れの樣に美しく散り亂れた、櫻の花を綠り色の松葉に貫きながら庭で遊んで居た、可愛いゝ人形は背にをぶつて、其の時外をあめやが面白さうに太皷を叩きながら通つたので、私は夢中で馳け出して二町餘りついていつて、母樣に呼ばれ、急いで歸つて來た、其の時、人形は、落した物か取られた物か、背になかつた、私は悲しい樣な、淋しい樣な、うらめしい樣な、思ひが一時に胸に込上げて來て泣いた、母樣が優しく慰め給ふ言の葉も耳に這入らずして、たゞ泣いて居た。幾時間かを夢にすごして、目を開けば何時か私は溫たかに蒲團の上に寐て居るのだ、そうして人形を、なくした事が今見て居た夢でもあるかの樣に思はれて笑つた。何んの事なく笑つて夕空を仰いだ時、夕の星を見た、其の星の

影を仰ぐと、失うた可愛い人形のことが思はれて懷しいと思つた。其の心を今もなほ忘れやらず夕の星を仰ぐ毎に私の心は幼き春に立ち歸るのである。

諸孃は此文を讀んで何と感じますか、人形を失ふて泣寢入した後、夢さめて仰いだ星の美くしさを、作者と共に幼き春の夕に返つて、其時のことを見るやうには思ひませんか、選者は確にをさなくものなつかしき昔の春の夕暮の心持に返りました、文に表はれて居る心持が眞に人を動かすのです（評）

○夕闇（地賞）

木邪鳥子

暗い暗い憂愁は又胸を閉ぢた、それは、もう夢のやうな少女らしい不安ではなく意志と戀と義理と……噫何れを――太陽は夕雲に薄い色を殘して沈み去つた廣い眼界はどこ迄も――家と家とが折り重なり合つたせゝこましい有樣……兩國あたりは白い夕靄に包まれて市街の半面はもう赤い青い電燈が點じられた、ふと思ひ浮んだのは昨日雨上りの午後に未來の生活、何時もながらそんな事を考へ込んで上野の廣い路を步いて行くと看板屋の角で見た柿色の衣を被せられた彼の囚人――蒼ざめた頭に口髯をたくはへて括られた細い手の痛ましさ、どんな犯罪者か戀か生活か何に苦んで噫古の八百屋お七⁉ 私の行く末もそれてはあるまいか斯んなに意志が弱くてどうして生活難と戰へやうか？ 反抗に反抗した末人の愛は利己的である事を初めて知つた、それでさへ其の冷寂に痛み慄ふた此の胸！ あらゆる嘲罵を浴びて漂然とさまよい出てた十八の若い弱い女の身！ 餘りに自分の力を信頼しすぎたのだ然し平凡な人と一點の愛もない結婚して人形のやうな奥樣になつて子供でも生む。是れが女の天職か？ あゝ私は厭だ！ 反抗！ 反抗！ 是れも一種の罪惡かも知れぬ、

噫苦しい此の胸！「屹度墮落するさ」「學問すべき女ちやない」、誰とも解らぬ憎い奴が私の耳にさゝやくと思うと「それ見た事かと笑はれない如にしてお呉れ」涙含んだ母の聲！「意志の爲には戀をも犧牲にするのですか」それはうるんだ戀の聲であつた、もう私は堪へ得ずなつて犇と胸を抱いた時ピーと凄まじい滊笛が肺腑を貫く如に闇を蹴破つて胸に泌みた、此の此の暗い夕闇をさつきのなつかしい青葉の香りが杜の方から動いて來る。

噫！ 私は勝てやうか？

現代に於ける青春の女子、誰しも此感を抱かぬものはないらしく思はれます、只、其人に據りて深く想ふのと、淺く考へるとの相違があるだけでせう、「噫、私は勝てやうか」皆これは惱まされてゐるのです、畢竟は安と不安と此一語に盡きてゐます、先づ茲に一人の決心したる女子の首途を祝福します（評）

○がらす戸（入賞）

長曾我部菊子

秋雨繊く降りくらして物佗しき正后下り、衽をなほしてゐた針の手を止めて、縫物おしよせて曇つたガラス戸ごしに外を見はらした。外は往還てその門木の傍から生垣にかけて、矢筈萱、馬棟などが生ひ茂つてゐる。見る見る其がさあと揺れ立つて、一しきり白い露がばら〳〵と散る。風が吹くのだ。おッとがらす戸に身をすりよせてゐると、幽かにもるる柔かい息がかかつて、じきに朦平とくもる。



姉　小櫻　鈴木とみ子

今日は人通りがない。何を思ふともなく耳をすましてゐると、西の方から、こちらへさして、生垣の上を新らしい蛇の目傘の上部だけ半圓をゑがいて動いてくる。長靴の人でもあらう――。「づ、づ、」と泥をこねかへしてくる音が聞える。と門前にあらはれた人かげ――あ、――思はず身をかへして壁にかくれて、わなわなと私は、すくんでしまつた。それは私が始終怖れて逢ふまじ見まじとしてゐる人だつた。あ――、何といふ思ひがけない事であらう。血の迫るが如く平ならぬ胸をかかへて、

今度は何だかさそはれるやうに再び冷たいがらす戸によつた。

驚いたのも一瞬なれば再びたつて、眼を徹したも一分時とはたつてゐなかつた。それて人の後姿はまだそのむかうに見える。

何を考へるのでもない。——佗しいとも憎いとも憤らしいとも思はない。ただ涙が散るほど、そゞろなる異常の感じばかり胸をいつぱいにする。見てゐると、見てゐると、……人の瞳はこちらへ閃いた。かくれるにかくれられぬ私は戸によつて立つてゐた。人は一度また一度——また一度あるきながらにふりかへりみて、東に遠ざかる。

雨はじと〳〵と降りつづいて、見上ぐる空は、境涯も分かず一面にうす暗い。雨の往還は、右も左も畑の草がぬれにぬれて冷たげにふししづんでゐる。

傘の人は益々遠くなつて、消えてしまつた。

叙景の方が好く描かれてゐる、何となく淡々しい哀愁は漂ふてゐる、要するに文章にうまみがあるからです（評）

【秀　逸】

○大　木

岡山市　高木清子

廣い〳〵野の中に、枯草に埋れて千年の大木が横はつてゐる。自分はじつと其側に立つて見てゐた。

黄色い月が見てゐる間にずん〳〵野の果から上つて大木を照した。其光りの物凄さ。蒼白い光は次第〳〵に大木に食ひ入つて腐蝕する樣があり〳〵と眼に見える。

やがて月が落ちると同時に日が出た。美くしい日はまばゆい光を矢張大木に投げて同じく半空に半圓を描いて西に沒した。

また月が出た。以前のよりづつと小さい月だ。テニスボール位の大きさだ。相變らず凄い光を放つて居る。

また日が出た。すぐ曇るかと思ふと急にザーッと雨が降り出した。

日はいつか隠れた。もう月も出ない。北斗星が北の空で凍てついた樣に光つてゐる。大木はと見ると木の心の處が少し殘つてゐるばかり。いつしか其側に見てゐると思つた自分が朽木の樣な姿になつて野中に横たはつてゐる。

街

自分は今名も知らぬ見た事もない町の中を孤獨で歩いて行きよる。眼の前へスーット黒い物が顯れた。よく見ると人だ。女とも男とも分らぬ薄黒い顏は、にやりと笑つて自分の顏を覗き込んだ。氣味が惡い。

それでも私は是町を何處迄も何處迄も、行けるだけは行かなくちやならない。私の心は思ひ切り泣きたいけ

れどもう眼は乾き切つて涙も出ない。知つてゐる者にでも遇へば、縋りついて今の境遇をうちあけて泣いて見るのだけれど、何處迄行つても低い家並がうす黒く續いてゐる切り、たまに門口から顔を出してゐる人は煤けた顔して、白い歯を出してにやりと笑ふだけ。取り付く島もない。もう夕暮だのに軒燈は軒にかゝつたまゝ、火もつけない。家といふ家が皆大戸を閉め切つてある。行つても行つても孤獨だ。

あゝ自分のからだはだん／＼小さくなつて、何處かへ消えて仕舞ひそうだ、けれども自分はまだ歩いてゐる。

純然たる散文詩、此を美文欄に投じたのは欄が違ひます、けれども好い物は好い、大木の方が殊に好い、空想の産物でも意味が深い（評）

○枯れゆく血

横濱市　さゝ川

さつき、いそいで階段をかけ上つたとき、激しい胸の動悸にえたえず疊につツ伏して仕舞つた。

わづかに沈まつた胸を抑へて、立ち上つたが若しやとふつと閃めいた恐怖と疑ひに又くづをれた。あゝ左の乳の下が疼々と痛む、若しや、もしや喀——。二年前だつた、重いろくまくを患つてやつと治たとき、再發すれば肺になると醫師に云はれたが、とう／＼肺かしら、こんなに胸がいたむのだもの。ああ血を吐いて、頬の肉も落ちてしまつて、みなぎる血汐も枯れはてた時、青春の少女は盡きぬ恨を抱いて逝かなければならないのか。ほろ／＼と涙がおちて

一息毎に胸の血がへりゆくやうで。噫華やかな少女のまゝで死にたい。黒髮長く頬豊かな儘で、紅あせぬ唇に名殘りの笑みうかべて、白布に横たはつた少女はどんなに美しいだらう。美しく死にたい。

けれどあの、血汐が、絞り出されて熱い涙が冷えてまでも、肺病む身は生きて居なければならないのだらうか厭だ。いやだ。花と散ればこそ人も惜む。肉も血も枯れた形骸に誰れが惜慕の涙を注がう。

青春い血汐を胸に秘めて、匂ひいてたうらなつかしい想抱いたまゝ、死ぬのが私の願ひなのだ。肺といふ忌まはしい病ひに日毎やつれゆく身。老ひといふ日を知らずに逝く少女は、あの世に招かれて神の愛て子となるのだらうけれど、色も香も褪せてゆくのは悲しい。

鏡臺の前に力なく座つた。くしけづらぬ髮は額にかゝつて、色もない頬には暗い影が漂よつて居る。花をかざして何にならう。紅にいろどつたとて、どうせ／＼朽ちてゆく身なのだもの。やけに引出しの中から愛でて常にはさゝぬかんざしを出して、緋の房をもいてしまつた。姉樣のお友達から戴いた紅皿も力任せに割つて、くれなゐの散り亂れた座敷の中に、私は身を伏し

てひた泣きに泣いた。

哀絶凄絶、人間は胸に病氣があると自覺した時ほど深い〳〵哀愁に陥る時はない、あとてそれが然うでなかつたと知れるにせよ、其刹那の不安、恐怖、哀愁は全く此作者の如く物狂ほしくなるでせう（評）

○影なき影

金澤　むらさき女

垣によりかゝつて、じつと氣を落つける。空はどんより曇つてゐるから、月は見えないがどこか明い光が滿てる。あたりの木は、さつきの雨で折々ぽたり〳〵雫が落ちる。――まるでだれかしら高い下駄と低いのとを片々にはいて、ばた〳〵とかけてくるやうに――林檎の大きな白い花瓣がひら〳〵とちる。私の息がきこえる程靜かだ。――おやどこからともなく八方から、蚯蚓の歌がきこえる。永く〳〵つゞいて‥‥私の魂をすーつと連れてゆく。――露の深い、月の光りがぼーつとした道を私は後をふりかへりながら、とぼ〳〵とゆく。――どうして後をふりかへるのか？それは誰かしら影は見えぬけれど微かな聲で、私をよんでるのがきこえるもの。――私はとまらうとするけど、どうしても足はひとりでに急ぎ足は前にすゝむ、もや〳〵した、ずつと川上の方に影のない黒い人が小さく、見えた。濕つた空氣を傳うて、細い聲が私の皷膜にひゞく――と影のない黒い人は、俄に早くなつて、もう私の後まできた。‥‥そして私の影の中に――。はつとして我にかへると私はもとの垣に、よりかゝつてゐる。あゝそうだ。私の魂は、今し方までどこかへいつてたにちがひない。あの影のない人は、私のからだだつたのだらう。死といふのは、もしやこんな所を、長く〳〵はてしなく、辿るのではなからうか？。蚯蚓の歌は皆やんだ。雫が又ぽたり〳〵おちる。そして思ひだしたやうに、一齊に林檎の花が、雪のやうに散つた。

迫らず、急がず悠々と筆を行る態度は見上げたものです、根本に詩人的の深い冥想があるか何うかは未だ斷言は出來ませんけれども、見たところ末頼母しくおもひます（評）

○觀音樣

羽後　菊池りう子

ふと氣づいて、見たら私は又苔の繁つた何だか息のあり相な石に茫然腰をかけて居ました。まあ今迄何をしてたらう、如何して私は家から出てきたらう‥‥‥もうこう氣がついて考へ出しちや又苦しむのだな？と直ぐ思つてはおつかない樣な厭あな氣になります、もう物音一つしない靜かな〳〵是が矢張地の一端かと思はれる樣な所です此處は。寂しいとて眞晝てさへ若い人抔はめつたに來ません。其に私は十八のみそらで暗の夜も更けてからこんな所にずん〳〵來たり、そうかと思へば、緋綾綵錦抔を散らした室で皆と話して居乍ら

急に襲はれる様な氣がしてどことも無く逃げ惑つて人のないこんな所にきてはほつと息つく事や——母様は何て此子許りは盛りの年頃をこんな變な氣性だか！と涙ぐまれちや私も泣いちまひます。町を離れた廣い大きなお寺に生れて私は幼い時から寂しい子だつたと申ます。先生は「あなたは動搖してる」と仰有る、眞に昨日の心とけふの心とは——否今方迄の心はもうどつかへ行つてる。こうだ物明日は如何なるだらうと思つちやさは／＼します。私とは先生がいつも私に仰有る御言葉——。



女工　本所　安藤エイ子

は此頃餘りに烈しく惱を刺戟した爲か全く疲れちまつて時々茫然——ふと覺めて氣がつくと思ひがけぬ所に立つてる事が有ます。其茫然してた瞬間、胸中は無一物。最も空な時そんな時がせめて二日三日とつゞいたらどんなにいゝか苦しみがなくて——。けれど其は考へないのぢやない餘り思つて／＼疲れてそんなになるのだ、そうすりやまだ考へてる方がいゝのかも知れない——。深刻なる煩悶、博くみよ深かれ——どうもせまい嗟私の此頃

悶此苦惱はまだ〳〵淺いのか――淺薄なる煩悶は誠に困る――とも仰有つた。私は先天的に深い感想を與へられないのかも知れない、一夜も二夜も寢ずに作つた詩だとて文だとて自分の切な切な此思ひを充分に、否三分一も現せる物はないぢやないか――深い價値ある煩悶――私には如何しても出來やしないのか、こんなに苦しんでも此苦しみは皆詰らない苦しみ――噫いつその事自己をも僞つて、姉樣や芳樣等と美しい帶や衣服簪に生き樣か――女はそうした物かも知れぬ――そしたら母樣初め皆に喜ばれる――いつそもう何もよして。そうすりやおど〳〵隱れて筆もつ心配もなし、氣樂な、うき〳〵した華やかな世の中に生れか樣――噫けどもそうすりや私の追うてる。すい〳〵した水色の光明――其は永遠に握られずに了ふ。

悶えて〳〵悶えた末には微乍らも、光を見出す事が出來るのでは有まいか。光ある野に貴い神樣の御胸にすがる事も出來るのぢやないかしら。私の光明はまだまだ遠いけども。今こそ私の見る夢は灰色で暗い此の水海の樣な、夢迄も苦しみ許りだけど。いつかは可愛らしい詩の神樣の御使に光明の期を賜る時は來ないのかしら。學校の先生も神樣は老人の樣だ若い人はもつと〳〵元氣で快活でなきやならぬといはれた。時々私の體を巡つてる血は彼冷いお墓の石に溜つてる水――彼ぢやないかしら、戀といつても人と違つた求めて暗い寂しい終に敗北の――と思つちや泣きます。木立の繁つた中に高く聳えた本堂の裏、觀音樣の立つて居らつしやる傍の苔石――こゝが私いつち好きです。こうやつて私思ひますわ十年でも廿年でも。すい〳〵した水色の光を見とめる迄は。山櫻がもうばら〳〵ばら〳〵觀音樣のお肩やお胸に隙間なく散ります、私の髮にも帶にも。或時は眞中から破れてついだ其お姿無性に懷しくすがりついて貴いお顏を仰いだり或時は又地にひれ伏して只け高さにうたれ――或時は又凝とお面を仰いでるとぞく〳〵自分の罪が――何だかこはくつて〳〵罪のおびえとでも申ませうか、もう後も見ず逃げ歸つた時も有ます。けどもどんな事しても觀音樣は依然として微笑せられた儘、此、私――可愛い罪の少女を哀れませられる樣に、じいつと御覧遊して居られますもの――。

あなたの情の純潔なことはもう能く分つて居ます、自己中心はよろしいが、眼先を變へて考へて御らんなさい、煩悶なんかしないで虚心平氣の時の自分を、つまり自分も客觀化して萬象に對して御らんなさい、それも文學上の大いなる方便です、餘り一圖に同じことばかり繰返して居ると進むべき途に進みません（評）

○あそび

備後　百合子

たゞ獨りの室で今女子文壇を讀んでゐる。流石は夏の夜だ、もう十時過ぎてゐるのに街は未だ賑やかだ、早く皆寢靜まつてくれゝばいゝに、今誰人も此室に來ぬ

ばいゝが、讀書してゐるのを家人に見られると何だか氣兼だ、誰一人小言云ひ手も叱り手も無いのに……而して自分も今は全く遊んでゐるのだと思ふ。投書なさる方は皆私の樣に思ひながら其の遊び事がやはりして見たいのか知ら自分は文學が一番樂みだ、困つた道樂だ、それも上手ならまだしも下手の癖に投書して見たい氣が可笑しいと記者樣が御笑ひなさりはすまいか？でも自分は皆樣の樣に文學に斗り熱注する事は出來ないのだもの、せめて一月に一夜は投書を書いて出して見るより外に上達の道はないのだもの、今文學といふ事を全く取上げられやうものなら何の樂しみもない。

琴!!! さうだ琴も好きだ、調べ出すと止められぬが、これも調べると音がするので餘程折を見て調べぬと氣兼だ、調べても誰人も叱り手も小言云ひ手も無いのだけれど……あゝ、仄かに琴の音がする、あゝやつぱし琴は好きだ、外の通行人の下駄の音が耳に這入らなくなつた、琴の音ばかり聞える。何だか氣が晴々して來た、お向ひの花子樣の爪音だ、手に取る樣に聞える、調子が一寸齒痒い樣だ、六の弦が高いのか知ら

『聲はせて身をのみ焦す螢こそ』

と大きな聲で歌つて被入る、玉鬘の四切目だ、小節は出來てゐないが聲が善いので上手に聞える。文壇の事も何もかも忘れて聞いてゐると嬉しい氣がする。四切目斗り彈いて被入るので聞き厭いて歌の内容を考へる、源氏の御甥兵部卿の宮が玉鬘に御心を掛け給ひし事を追想してみる。五切目は彈かずに歇められた。急に寂しくなつて來た、お向ひも隣家も戸締りをせられた、家人も皆寢靜まつた街も靜かだ。

何故か文壇も讀みたくない、筆も持ちたくない、たゞ寂寥を感ず斗りだ。でも騒々しい晝よりは今の方が嬉しい。

こんな時に人の手前の無いものなら琴を調べて遊びたい。

自由を欲する若い人の情が正直に現はれて居る（評）

○未明の入湯

姫路市　山百合子

思ひがけなく早くに眼が冴えて寢つかれず、邪氣なくすやすやとよく寢てゐらつした辻村さまを無理に搖り起して、溫泉て黃色に染まつた手拭と楷杓とを携へて旅館の階段を下りた。年中戸締をしない表戸を一二寸開くと、待つてゐたやうに冷い風が颯と頰に觸れた。人目なき川沿につゝ立つた、浴衣も伊達卷の彼方此方する街も、聞慣れぬ鳥の聲する山も、森羅萬象、たゞ皆鼠色に包まれてゐるその中に明けかゝる東の空と、

立ち騰る溫泉の烟と、僅に殘る街燈の灯とだけである。耳を傾けたが、風に弄られる林の訴へと、礫に堰かれる水の歎きとの外、何をも聞き得ない。透き徹つた空氣は、氷のやうな寒氣を私等の皮膚に與へるのである、私は思はず「寒い夏よ」と云つたら、辻村さまは微笑れた。

橋詰の一の湯に行つた、今は並湯に浴るのだ、晝ならば肌と肌と擦れるほどに賑ふが、未明の今は一人も浴らず、ほの暗い洋燈に調和した白い湯氣がぐるぐる木造の室内に舞ふてゐる。

手早く衣類を箱に入れて浴槽の片側に蹈んだ、終夜人が浴らないので湯は漲り溢れて凄じい勢に板場を走つてゐる、なれぬ始は笑つた杓で掬つてかけて身體を溫めることも、なれては何ともなく、ぼつぼつと熱いのになやんでゐる顏を暗い方に向けて地に掘られてあるこの浴槽中の人となつた、「朝湯は何んだか心淋しいことね」などゝ、語りつゝ笑ひつゝ浴槽から出たり入つたりしてゐた。

やがて身體の燃えるやうだと思つた時分に、粗拭をして衣類もそこそこに着て、街一つ隔てた向側の洗面所？に入つた。夜の氣と朝の氣と相半した街には、まだ通行する人もないらしい。栓をねじた、水道の水はいさぎよく出て瞬く間に眞鍮の洗面鉢からこぼれた、ちよつとそれに指先をつけると、その冷いこと！　戰慄きながら冷水摩擦をすました、手を携へて旅館に入つて私等の室に歸つた。

愛宕山は半ば散つた霧の中に衝つ立つてゐる、此處彼處の室から人の起きる音が聞える、料理場の方にも物の音がする、今からこの溫泉の町も起きるのだ。

夜明の入湯、既に其事が清い爽かな感じを惹く、文章も生氣があつて、誠に讀んでゐても心持がすがすがとします（評）

○女貝男貝

熱海　花菖蒲

今私は魚見崎の崖の下で海苔をかきをへた。はづかしながら赤い下着をみせて。

うちよする新潮は華やかな思に耽る此胸を躍らせる若い男も女も皆素足で、砂地に足あとを印してゐる。私は打上げられた女貝男貝を拾ひ初めた。空は瑠璃色にすいて、日の女神の彩衣は七彩の色と化して女貝男貝にてりそふ。光るは貝のみならず、砂も、海も、此胸もある強い光が流れてゐると思ふ。

眞紅のハンカチを取だして女貝男貝をうるはしと包みこむだ貝は此中で何を囁きそめる事だらう、私はこんなに思ひながらしきりに紫光りの砂をふむて、瑠璃にてりそふ沙丘を眺めつつ磯にさまよつてる。新しほは脛をぬらして去つた。私はぼんやりと沖を眺めてゐる

と砂地に黒い影がやどつた、五つ。若い血の張つた漁師。あゝ彼等の胸は、此潮にあつて海戀ふ心否一生海と別れまいと云ふ執着心がますのであらう。彼等の鐵の樣な胸にも、この廣い海の風がしみ入るのでせう。「いゝなぎだな――おい」と云ひながら、エーエーと船を滑らかし初めた。若い血はをどつて。腹一杯の聲を絞つてこいでゆく。赤い鉢卷五つ沖へ見送つた後、私は崖を上つた上の小屋で老漁夫がしきりに網の破をなほしてる。たゞ默然と、新助です。すぐ「爺さん何してるの」と云ふと、「おう孃さんてすか、へゑ、はやもう、こう年くつちや仕樣ねえてす、



町はづれ　仙臺　佐藤たすく

こんな網すきばつかして。私は思つた、爺だつて若いく―青春の血湧く時もあつたのだ「爺さん今、乙さん沖へいつてよ、唄上手ね」といふと、「へゑ、行つたてせうよ、私だつてもつと面白い唄うたつて沖へ行つたものです、私ら唄きかすべゑかアハゝもう年をくつちやだめてす。」とさも感にたへぬらしく言ふ。

海邊の風光と人物の點出と、わざとならぬところに天然の印象が强く感じられます（評）

○祝ひの式か悲みの式か

よき日の思出世に立ちての心定め出て立たせよ――

四谷　靜江

悲痛な調は静かな歌聲と共に胸に入り、知らず〳〵頭たれると此度なく熱涙が頬を傳ふ。「いざ去らばいざ」と聲を飲んで歌ひ畢つた送別の歌に此の華やかな式は閉されて、手には六年の勉强の結果なる榮ある優等卒業證書が殘された。

幾年か睦みし友の誰彼に、「お芽出度う」と祝はれて、どうして嬉しく無からふ。さすが小さい胸は跳るのであるが――。

試驗に苦んだ教室、叱られて泣いた教室も、今は慕しくて不二見ゆる窓によつて十四人の姉妹は思ひ〳〵の考えに耽つて居る。嘗ては咲き亂れた花の根方に卒業の喜びに醉ふた友も、今は別れの悲しさに泣きくづれるのを見ては、私の弱い胸は痛き迄にみだれ〳〵て。明日からは誰のに成るやら自分の席に、も一度と座つてなつかしい昨日を思ふた。

學校に來ねば一生知らずに識られずにしまふ方にも、こうして幾年か共に學び共に樂んだのも、何か目に見えぬ不思議の糸が結ばれて居るのだらふが。いつか私が「私等は屹度前世に同じ枝に飛んだ小鳥よ」と云ふて笑はれた事もあつた。其の親しい人が只一日の式で、別れ〳〵て東に西に國の涯から果に、又知らなかつた昔に返へるのが辛らい、

「お手紙はいつ迄もね」と、堅く契ふて別れても毎日過ふてはなし、いつからうとく成るは仕方がない。仕方がないけれど、然したら私は――孤ぼつちの私――はどうして慰められやう。廣い世の中に血を分けた同胞とてない私の、すがる可き膝は友こそと頼んで居るものをこれからはあの空を行くちぎれ雲の樣に獨でさすらはねばならないのだらふか。

いつそ〳〵此儘にこうして皆手を結んだ儘、一緒に消えて仕舞ふたら……。

悲しみの極にはこんな愚かな事迄考える。

氣付けば夕闇は次第に迫つて來た。私等の一生の榮ある一日もやがて過去の中に入るのである、私はうるんだ眼を上げて起つた。そして「皆樣長い事御世話になりましたのね、お別れが辛らふ御座います、何卒思出しなさつた時にお便り下さいませ」云ふ聲は恥づかしい迄戰く。

此處に集るも今日限り、級長と云ふ務も畢へた。再び今日を思出づる日よ皆何處に散つて居るやら、行先長い友の上幸多かれよ。「さよーなら」靜に云ふて見合した時私は得堪へず友の肩に顔あてゝすゝり上た。そして心の中で、

海山へだてゝ身は離るとも心と祈りは共に行きかい

と讃美歌の一節をくりかへした。

（三月廿九日日記）

事柄はありふれても感情は新しい、女の情の美くしさは此邊でせう（評）

○大爆烈

大阪　今西春江

ズドヲウン!!!――。突然はげしい音がしたかと思ふと、私の身體は後ろの襖を突き抜けて次の室え飛んでゐた。ハッと思つて四邊を見渡した時には、モウ室内に黒煙黄煙が渦を巻いて漲ぎり、何が何だか和解らなかつた。

私は夢中で駈け出した。かどへ出ると眞つ蒼な顔をした多勢の人が入り亂れて、東の方へ走つて居た。私も其中へ交つて走つた。二三町程走つたと思ふ頃、呼吸ぎれがして私はバタリと倒れた。倒れながら四邊を見ると、人は尚走つて居る。

「何處へ行く――」

私は不圖こんな事を思つた。だん／＼頭が靜まるにつれて、自分も現在目的無しに此處まで駈けて來たのも忘れて、走つてゐる人々がお可笑くなつてきた。

「退け!!――退け!!!――」

ガヽラン……ガガラン……と鈴音かしましく、走る人を押し退け突き退け、何者か私の前を過ぎた。赤い筋――黒い釜帽――鷲口――劒光――そんなこんながこぐらがつて眼に這入つたそうして私は頭がグラッグラッとして前えのめりさうになつた。ハッとして片手を地にさヽえ、片手で頭を抱えた。すると手の平えベッタリ、生溫いものがついた。靜かに手を頭から離して眼の前へ持つて來ると、手の平は一面に眞ッ赤に染まつてゐる、血!!――血!!!――其れを見ると共に私は前へうつ伏しに倒れて、氣が遠くなつてしまつた。（四月十日午前十時。眞實の出來事）

先月大阪に於ける火藥爆烈當時の實感でせう、是も散文詩風の形式ですが、事實を知つてゐるものには物足らぬ感じを起させはしないかと云ふ疑ひがあります、勿論詩は事實の報告とは違ひますけれど、今一歩踏入つて深い力の籠つた描寫が欲しかへゝやうです（評）醉茗曰、お書添のことは確に拜見しました、御熱心ゝ欣びます、何か申上たいやうに思ひますけれど、あなたが散文詩ノ方に向はれると云ふことに就ては何等の異存なきのみか、至極贊成を表します、大いに努めて下さい、何れ折があつたら詳しく申しませう。

○鸚鵡

伊豆　鈴木安子

庭の葉櫻の下の小さい墓は鸚鵡の亡骸が埋めてあるのです、鸚鵡の死んだのは丸窓を掠めて花吹雪のする夕べでした、妾は藤村の「春」の勝子が岸本に會ふ最後の「まあ大いに話さふぢやありませんかと岸本が言ふ所まで讀んで其所へ栞を挿んで机を離れ廊下傳いに母屋へ行かふとすると、急にキリ／＼と悲しい聲がしました、若しやと思ふて直ぐ妾は書齋に引返して來て鸚鵡の籠を覗いて見ると、最う目も口も固く閉じて居ました、が、とり出してかたく冷やかになつた其の骸を確と頰に押しあて「鸚鵡ッー」と心の底で呼んだけれど喚いたけれど鸚鵡の夢は永遠に醒めないのでした、この鸚鵡は二三日餌も食べず鳴きもせず、うつら／＼として居りましたが病氣に囚はれて居たのでしよう……其の夜妾は寢もやらず鸚鵡の「死」を泣きました、

鸚鵡の家へ來たのは去年の秋です、稻の收穫も濟んでお爺樣が京見物に

出た歸途、道中のとある小茶屋の軒端につるされた籠の中から「いらしやい〳〵」と人眞似によく鳴いて居るのが餘り愛らしさに買ふて戻つたのです、其後姿の文机の傍に籠を据えて、私も「やあちやん」(私の名)と鳴くのが嬉しく、可愛がつて居たのでした、赤だあの「やあちやん」と鳴いた聲があり〳〵と鼓膜に殘つて居て、詩集を手に庭を逍遙ふ時など其の聲が新しく胸の琴線にふれます、

あゝ今鸚鵡の魂はどこに迷ふて居るのでしよう。

鸚鵡の來歷を語つたのは用意もあり感興もありました(評)

○豐原行

樺太　敏子

これで四度目、母樣は、何度も〳〵同じ處をよくまあ飽ないものだねー、つて被仰る、でも面白いのですものーつて今度のお使も私が引受けて豐原に行く事となつた。

房ちやんが停車場まで送つて呉れたので、私は無痕の窓から首を出して、房ちやん有難うつて云ふと、房ちやんは大きな聲を出して、姉樣、お土產を澤山ねーつて、呼笛を持つて立つて居る車掌が笑ひながら私の顏と房ちやんの顏とを變る〳〵見て居る、可笑しな人と思つて私は首を引込めた、房ちやんは踊つて行つた黑い煙が車窓をかすめて、石炭の香が鼻をつく、と列車はそろ〳〵進行しはじめる、七時半だ、車窓の硝子に强い旭が反射してきら〳〵と光つて居る、私は開け放つた車窓に倚つた、見渡せば、廣々とした雪の原はてもなく銀色に强く輝いて居る、この前豐原に行つた時は怒濤の猛り狂ふ青海原で有つたのに。

私は反對側の車窓に身を倚せてそゝり立つ崖を仰いだ、あれ程の岩燕の巢は一つも見えぬ、ま白い綾絹の幕を下したやうに、年の暮から降り積んだ雪は、餘す處もなく崖を蔽ひかへして居る。

ふと室内に烈しい笑聲が起つた、

ふり返つて見ると、私の向に乘つて居たお婆さんが、よぼ〳〵ずゝ體を赤毛布でくるみ、一生懸命に車窓を横の方に引張つて開けやうとあせつて居る、可笑しいやら氣の毒やら、私はそつと立つて開けてやつた、お婆さんは、その脂の溜つた目に嬉しそうに笑をたゝえて水鼻を啜りながら、どうもはや、と腰を屈めた、私は只笑つて答えた、お婆さんは車窓から首を突き出して機關車の方を見て居る。

乘合が七人、小さな丸いストーブを圍んで高聲に談じて居る、髭の生えた人が二人横柄にかまえて、じろじろつと人の顏を見て居る、印半纏が三人、女は私とお婆さんと二人、見渡す處一人も偉らそうな人は居ないポカ〳〵と生暖かい室内の空氣は身も解かすやうだ、ウト〳〵する目を强いて大きく見張つて居る、頭は茫然として來る、豐原——、豐原——、と勇ましい驛夫の聲にふと眠りから覺めたやうに私は立上つてプラツトホームに出た、切符を渡してホツと溜息を吐くと、お馬車は如何でと云ふ、私は引かるゝ儘にと有る馬車にうち乘つた、空は晴れて居る。

私はこれから叔母さんの家に行くのだ。

北海の景色を表はした處が一寸好い(評)

美文の投稿はいつでも非常に澤山集ります、沒書の多いのは無論ですけれど、沒書と云ふのではなくして載せ切れない爲に其儘埋れて行く作に就いて少しばかり評言を加へてみました、作つた御當人の參考のためになることは申すまでもありませんが、其他も讀んで頂けば、何かの心得になるでせう

選　者

▲小姑となつた姿(作物の題だけを示して名は省きます、以下此例に倣ふ)勿論秀逸の價値はあるのですけれど只完全に書いてあると云ふだけで身にしみません小姑となつた心持としては餘りに通有的でした▲春逝く日。復雜したとを餘り短くつゞめた爲に讀む人はそれ程の興を惹くまいと思ひます▲聲。讚美歌に感動して暗黑から光明に移つたと云ふのです▲無題。(東京みどり子)何うかして病氣になつて見たいなど言つた日もあるが斯うして病氣になると淋しいといふ心持がよく表してありました▲無慘なるこほろぎの死。逃してやつたこほろぎの死んでゐたこと▲

情美。凡ての人に惡く云はれるけれど只一人の人に愛せられるといふのでゞ――▲不思議な色。姉様が死んでから不思議な幻視が色になつて現はれると云ふのです▲默否の或實。相慕うてゐる女の友人が向ふから絶つた人の心は何う解して好いのか迷ふといふのが主意▲歸省。五年目に歸省する途上の心持は偽りなく現はれてゐます家へ歸る嬉しさと都を去つた淋しさとがこんがらかつてゆくあたり然もあらんとうなづかる▲小い鼠。夜中に鼠があばれて眠られないから床の上に起き直り窓からさす月を見たといふのです▲尼さん。毎朝美くしい尼さんに會ふ何うしてこんな美しい人が尼さんになつたのか分らない▲夜汽車。上野から長野まで夜行列車に乘つた記事普通の出來と認めます▲田舍の夕暮。美くしい夕雲の華やぎを見ながら一寸でも東京の人が見たくなつたといふこと▲破れたる私の心。昔の戀人と妹とも思つて目をかけてやつた女との間には子まで出來るほどになつた自分の姿は少女だけれど傷いた胸には優い慾情も消えす只嫉ましく呪はしく何うして他に愛を求めることが出來やうといふのが主意です熱烈には書いてありましたけれども出すのを憚かりました▲兄様。死んだ戀人のことを書いてある前半學校の中で「みだれ髮」を讀んでゐると皆にからかはれる處は甚だうまい文章もハキ／＼として達者だ無論秀逸の價値はありますが外の欄にも出てゐるのですから此度は遠慮してもらひました▲夢の野。あなたはこういふ空想から出たものよりも矢張現在の目前を描寫することに天分の才がある様に思はれます世間がよく見える方ですから其方に今一歩才を伸ばして御らんなさい▲手紙の主。其少年が十七私が二つ上の姉で其家に宿つてゐたが或る日山に上つた時少年は甘い言葉と共に私の膝に顏を埋めた私はすげなくしたがそれからまる四年少年の歳は二十一になつてゐる今日當時の迷夢を覺ましたといふ手紙が來た私は昔の通りに小學校の教鞭をとつてゐる哀恨の情に堪えぬといふ淡い戀物語文章より事柄の方が面白かつた▲わが煩悶。何んなにすれば好い文が作れるでせうといふ煩悶です▲河内國星田山。河内の星田といふ山に緋の衣きた嚴めしい行者を訪ふた記事文に甘味なし▲別れ。汽車に乘る時萬感交々生じ一言も發しえないで只握手したといふあたり友情の深さが思はれました▲浴場で。湯屋の姿見に映つて居る美人を見て恍惚としたことを書いてゐる

▲離別。北海道へ出稼ぎにゆく昵い友人を渡邊まで見送る處を書いてあるが其友人も自分も男か女かさつぱり分らぬ▲春雨の夜。春雨の降る夜わが待つ人は一年さきか十年さきか百年さきかいつになつたら親しく語られやうか今にも又來るやうに思つて心が躍るけれど待つ人はもうお嫁様のある身だといふ痛切な戀を書いてありますがこれも出す事は出來ぬ▲牛。くらがり路を歸つてゆくと牛ひきに會ひモーと鳴く牛の聲を聞いて恐怖を感じたといふのです▲初奉公。春雨の冷たく淋しい晩行のわるい兄のために零落したわが家のことや母の言葉など思ひ出して奉公する身の悲しみがます▲道ゆく記。輕き病の診察を乞ふべく山道を越えて醫師の許に行く記です流暢たる文體さへ珍しいのに八才になるわが子を連れてゆくといふのが更に珍し今少し短き文を寄せ給へ▲淡路島。美文と稱するには餘りに小説めいてゐるし小説にしてはあつけない帶には短く襷には長しとも云ふべきか▲手紙を抱いて。雨の日にさま／＼の人から來た手紙をしらべて見た工女になつてゐる妹からの手紙もある不幸だと訴へる妹よりも自分の方が遙に不幸だと思ふといふのが主意▲芝居ごつこ。鎭守の杜の草小屋に男女三十人許の子供が集つて芝居ごつこをしてゐる、琵琶歌や石童丸の眞似だから面白い文章が少しうまかつたら採用したものを▲春のわが庭。尋常科の先生が校庭で子供と一處に面白く遊戯してゐる處▲出産。良人の着物を縫ひかけて居ると陣りて男子が生れた行つて見ると大きな子自分も…と顏を紅くした▲私。早く母に別れ冷たい人間になつたといふ懺悔文章が荒すぎる▲迷の悔悟。初の戀の失敗を悔むといふ主意ですが説明にすぎて感情が出てゐません▲夕の思。初めてのお作としては極くたちのいゝ方です今二三度變つた作を送つて御覧なさい出るやうになりませう▲戀しくなりし日。雨の日の嫁入を見たこと▲美しい夢。お伽噺にしてしまつた方がよいでせう▲何故私はかく戀されるのでせう。別にハイカラでもないのに高等三四年の頃から男子につきまとはれて仕方がない遂に先生まで誘惑しやうとする私は困るといふ主意ですが文章は眞實ですけれど事柄があまりあからさまに書いてあるので出すのを憚りました。

家庭日記



○規定　家庭を主として書いた日記文を云ふ實際的の日日の出來ごと又は心得となるべき事若き奥樣の新しい經驗談も宜し二十四字詰三十行限り半紙又は罫紙に認めること希望の賞を送呈す

○わが室（天賞）

本郷　千とせ

四月廿五日、びしよ〳〵降り續いた雨がからりと晴れたのでお庭に出て見たら、石燈籠の陰に可憐らしい櫻草が三輪咲いて居た、床の間の海棠はもう開き過ぎたから折よく來た花屋て牡丹を求めて活けて居たら、貞さんが庭口から這入つていらして「ヤ未だしねくつて居るの……もう三時間も立ちましたよ」「アラ嘘、やツと一時間位てすわ」「朝から晩迄花だの茶だのつて不生產的な事計して居るのだなー、こんな奥樣は持ち度く無いものだ……一生貧乏するから」「大きにお世話樣、貞さんの奥樣に成り度いとは云ひませんから」「云はれた處て拒絕仕升」「ホ……又喧嘩かへ、大きなお子さん達には困るねー、サ貞さん構つて居ずにこちらへお出て……お茶ても入れませう」漸く母樣が連れて行つて下さつたので此の間にと大急ぎて活けて了つた、未だ氣に入ら無い處は有るが、明日なをすとして……、

五月二日、久し振て自分のお部室を綺麗にお掃除してきちつとお机の前に座つて見るとまるてよそから家へでも蹄つて來たやうな心持がする……が何やら物足り無い、妙に寂しさを覺えて好な本にも一向身が入らず何を考へるでも無く只呆然り仕て了ふ……吁貞さんは今頃どの邊迄いらしたらう、水戶あたりかしら……始めて貞さんが入らして此の部室を取られた時は本當に厭だつたわ、何せよ從兄とは云へ一度も逢つた事が無かつたのだもの、けれど貞さんは氣さくい丶方だ、快活て勉强家て氣が優敷くつて、貞さんの居なさる時は家中笑つて計居たつけ、僅半年だが賑かに馴れた身にはこれからがどんなに寂しからう、あ丶つまらない、本を投げて的も無く中庭を眺めるといつの間にか常夏が細長い莟を持つた、そう〳〵貞さんは此の燃ゆる如な紅い花が大好きだと仰在つたつけ、譬へ色香は失せるとも咲いたら封じて送つて上げやう……。

情あり趣あり、しかも所謂現代風の露骨輕佻な點は微塵もなくて奥床しい（評）

○遠足前記（地賞）

越後　あすか女

靜子さんが、學校から歸るや否や「只今」とおぢぎするのも急き込んで「母様明後日は、彌彦迄て一晩泊掛けに遠足旅行てムい升、是非遣つて頂戴」「エッ泊り掛け、あぶないよ病身のお前が」と叔母様は遣り度く無さそうな顔「既うお友達とも約束しましたわ」はや泣き聲になつて言ふ「受持先生の注意が届いて居升から……」と側から私が口添へたら靜子さんも媚びるやうに莞爾して「本當ヨ、咽喉など全然癒りました、母様、々々」つて膝につかまッてねだつて居る「ホヽヽ、困るヨ」遂々叔母様は負けた、嬉れ敷い〳〵と靜子さん雀躍して奥へ駈け込んで了ふ。



さみだれ　千駄ヶ谷　かれ子

私がお湯へ這入つて居たら、新家の從弟、讓さんも風呂に入りに來たらしい「コレヨ叔母様、今日帽子買つて貰ひました、遠足旅行て」となか〳〵威勢がいゝ、又靜子さんも出て來た様子。「ヤー女生は彌彦までだつてヤー、僕等は寺泊まてなんだ、海岸から眺めると、佐渡島がボーと秋葉山の如に表はれて居るツて、先生が仰有つた、いゝな、鰯網も見て」と讓さんが云ふ。と靜子さん「彌彦の、伊彌彦神社は越後國の一の宮だつて、そして浦濱の景色は何とも云へないつて」と二人が威張り合ひの押問答。私も矢張り恁うてありましたッけ、とお湯へつかッて居たまゝ、窓前きの梨の青葉の隙から、勁くとも見えず流れて居る如な空を仰ぐ。幼な時の遠足旅行――。始めて汽車に乗つたこと。始めて海を見た時、松原の砂を踏んで、遠くから見ると白い布が澤山

フワ〳〵漂ふて居た如なのが、實地見たら白波だッたことや。ぢッと立つて居ると際限も無い浪に、身はとらはれて了ふ如に目の眩ふたこと。どんな小さい纎たなげの貝でも喜んで拾つたこと。胸の中はくすぐられる樣に昔の懷しさと、現の寂しさとが迫つて來るので有つた。お湯からあがつて行つて見たら、とき色リボンやら紅の脚絆、桐油紙、とお机の周圍は大狼藉。洋傘や風呂敷、信玄袋には尋常六、○○靜子と札を付けて「もう大概仕度も調ひましたわ」と今にも出掛る樣な靜子さんの騷ぎ、不覺失笑した。

從弟妹の遠足を描いて、自分の幼な時代を懷ふと云ふのはよかつた、殊に此場合、湯に浴つて居ると云ふのが、なほさらふさはしい情緒を催ふす（評）

○祖父の七年（人賞）

備中　篠原しげ子

四月九日、今日は祖父樣の七年の法事、私は朝薄暗い中から起きて掃除をする、昨日來て泊られた大橋の伯父樣が若い者は行き届かぬなあと、あちこちを仕直して下さる、すると早や料理人二人手傳人三人來る、先づ私は火焚きを命ぜられる、大變暑い、料理人が釜に寒天を入れた時、私は火をよく燃やそうと思つて火箸で焚木をつゝいたらボッと火の粉が上つた、料理人は私の顏を一寸見て、人が來てる時には火をいろう物ではありませんぞと云ふたので大に恥ぢた、九時十時になるとどや〳〵とお客が來る、やあ死んだ祖父樣娘が參りました孫がまいりましたない孫が參りましたとおせや子供等が佛壇の前に行つてかん〳〵鐘をたゝく、すると内の子供等も悦んでどんどん騷ぎ出して中々賑はしい、時計が鳴る、おやもう正午、すると僧さんも見える、さあ此方では酒や肴の仕度する、と御經が始まる、其が澄んで墓に詣て歸られる、すぐに酒肴を出す、其間に膳部の仕度する、私は料理人に敎へられて池盛を盛る、汁をつぐ、其から皆なて膳組をする、皆なは自分が食べる樣に向けてなさるのに、私はわざと向ふから見てして居ると又料理人が見てあなたは發明ですね、人の反對をなさると云つて笑はれる、其から酒が濟んで膳をすえる、漸く上座がすむと此度は女や子供等にすえる、大變大ぜいで給仕に忙しい其が濟むと澤山な食べがらを洗ふ、何ぼ洗ふても〳〵はてぬ、と早やお客が歸り出す、ぞろ〳〵續いて挨拶に暇が無い、後はあんまり淋しくなつた、此度は料理人手傳人等が上つてゆつくり飮んで食べて歸る、私等が夕飯食べる時は何もかも冷えて終つて味は無い、夜の九時頃迄に漸く流しをかたづけて座敷に上る、足がだるうて十里の道も踏んだかの樣、今夜は吉田の姉樣許り殘つて

泊られた。

田舎では能くある法事の日のありさまが、要を摘んで書いてある(評)

【秀逸】

○襖張日記

韓國　青葉女

如何に假り住ひとは云ひながらも、此の家に移つた時から、襖の破れて居るのが氣に掛つてたまらなかつた。繪葉書や繪草紙を破れた處々へ、張つてあつたが、臺所や、居間の方は、其れても辛棒するとしても、お座敷の方は、お客樣のある度に、襖ばかり見て被居る樣に、思はれて仕方がない。さうかつて表具師に頼む品でも無いし、今日は日曜日で、良人は魚釣りにと、お留守を幸ひ、一つ驚かして上げ樣と唐紙と糊とを買ひに走つた。

菜根譚を引きずり出して、何の句に仕樣かと、暫く迷つたが遂に「居逆境中……の句と、「春日氣象繁華云々の二句を二行づゝ、軟かい行書て四枚に書く。久しく大きな筆を取らない爲めか、字が乘らない、まあ仕方がないから、座敷中廣げて干す。緣をはづして、元の樣に、出來なくては困るから、引手だけ漸く、てじ退けた、以前の破れたのが寫りそうなので、神戸洋紙を下に一面張る、それから恰好を考へ乍ら寸法を計つて、有り合せの黃紙をぐるつと回りに張つた。さあ之れから大變だ、唐紙の表を中に二つに疊んで、襖の上に置き、水刷毛をさつと引いて廻りへ薄く〳〵といた糊を着けた、たゞても破れ安い唐紙に水が引いてあるから、一寸さはれば音も無く切れるので、そつと置くやうにして又上から水刷毛をかけた處が濡れた字の上を刷いたので一面黑ずむ。今度は殘りの半分を今張つた方に、折り返して始めやつた通りにする。やつと出來上がつた一枚を立てかけて、一寸退つて見る。獨りほゝ笑まれた。後と三枚を一生懸命に濟ませて時計を見ると、オヤ〳〵もう四時近くだ。お歸りを待ち兼ねて居ると、足音がそれらしい。さあ何と仰つしやるかとニコ〳〵後から附いて行くと、「やあ之れは美事々々お客が見えても大丈夫。」嬉しくてたまらない、「これでも中々骨が折れましたよ、あなた張り物刷毛一つて、水を引いたり、糊を附けたり、致しましたもの。」と、大得意。早速引手を打つて下さつたので、釣つて入らしためばるを、お肴に一本つけませう。

健實な文章、恐らく字體にかなつてゐるでせう(評)

○前日

日暮里　細谷けふ子

兄樣のお立ちもいよ〳〵明日の十時五分の汽車と定たので今日は其送別會が開かれる、母樣は何や彼やと荷ごしらえに御餘念ない、私はお料理番と云ふお役を仰つかつたのでお松を八方へ買出しに走しらせながらあ

らかじめ用意して置た品々を取り出した、昨晩書いておいた献立が先づ是だけ、ビーフローフ、オムレツ、牛のスチウ、其から兄様特別お好のカキのフライ、重だつた物は此四品だけれど手なれない料理番には中々の重荷てある、明日の今頃はもう兄様はホームをガチャ〳〵と洋刀の音さして被居るのだと思ふと何だか心細くなる、昨日私が泣たら僕の妹にはそんな弱虫はないつもりだつたと被仰たけれど‥‥カキを洗つて水氣をさりながら玉子を割つて居ると、「お料理番どうだ子」つて兄様がお顔をだす、「あらいけませんよお勝手を見ては」つて申上たら「どうぞはなとよだれは御注意願いますよ」つてまあひどい事‥‥私が向なをつた時はもう廊下をぎし〳〵と彼方へ被行る、お松に馬鈴薯の皮をむかせて私は食卓の上へ矢車草と美人草とをさす――三時を打とお客様が大抵お揃になつたのていよ〳〵手製のお料理を恐る々々運びだす、兄様が「是は妹の手料理て‥‥」つてお斷わりになるのでなほさらきまりが惡るかつた、はじから二番目の中井様、あれがお癖なのか、いつもながらヂロ〳〵私の顔を見て居て何だか嫌な方だ‥‥「是ア妹君お上手だ」突然横合からお聲がして、はつとしながら見ると、片手にホークをにぎつた中尉の木村様――いつも元氣な面白い方‥‥十時頃皆様お歸りになる、後かたつけを濟してづと空を見ると一面に星‥‥是なら明日のお天氣も大丈夫と安心して十一時半床に就く。

好き妹を持たれたり（評）

○五月の日記のうち

内藤千代子

五日、曇、今日はお節句でお隣りからお柏餅をいたゞいた、池の葉菖蒲一かゝゑと紫白のあやめ二十本ばかりきつて上げたら大喜び。午後先生のとこへ遊びに行き二階で歌留多が始まる、キリンも老ゆれば何とやらいかに多勢に無勢といひ乍ら勝代様達ごときを相手で散々に大敗す。まア秀夫さんがお留守てよかつた、これでも嘗て和泉會撰手たる熊谷さんの膽を寒からしめた自分かと思ふと情ない。お柏てお茶頂いて五時過歸宅、夜入浴す、去年は瀧口さんへ招かれて嘉鶴さんと菖蒲湯にはいつたり、夜もおそくまで遊んだ事など思出し胸の痛い程人懷かしい。寢しなに雨がバラ〳〵降り出した。

六日、曇、もう女子文壇の〆切が近づくのに私は一枚も書けて居ない。朝から室に閉ぢこもり妹の羽織を縫ひ乍ら考へ〳〵したけれど双方とも些とも捗がゆきやしない、おまけに夕方掃除の時自分の机のインキつぼをひつくらかへしてひどいお小言を頂戴した。

七日、晴、昨日からあんまり頭をつからしたので十一

時過ぎぼんやり柱にもたれ通りを見てると、めづらしく學生が通る。兄妹とは決して見えぬむつまじい二人連れ、女は縫模様のある空色の洋傘なんかさして袴は穿いて居ないが藤紫の被布に髮はマガレット、併し二十世紀の美人としちや少し背が足りない、並んで歩く角帽の肩のあたりまでしきやない、そして私をぢろ〳〵見てほほ〳〵と笑ひ乍ら行く。失敬な、だから女學生は氣に食はぬと云ふんだ、あれだつて投書したらボツのお仲間だらうと妙なとこに痛快の念が湧いてベッ〳〵と二三度つばをはいた。

夕方花輪さんからのお返事がつく、相變らず美しいお手蹟、私なんかおはづかしいわ何度もキッスして手箱にをさめた。



收穫　　　下谷　佐野貞子

八日、晴、今日髮結が來たので久しぶりに桃割に結つた。おまへ何うしても日本髮の方が色が白く見えるよつて母樣は喜んで被居る、縫かけの羽織を午まへ仕上げて了ふ。午後茂さんが見えた、クシャ〳〵の角帽かぶつてカビの生へたやうな小倉の袴をはいてカバンひつさげた風つたらない、顔を見るといきなり、やア美江さん丸く成つたね？ほんとに馬鹿にしてるわ。お土産に大きなリボンを頂いた。夜は東屋に友達が來て居るからつて遊びに行かれたから富子さんへの手紙書き乍ら私だけ起きて居たらおそくお歸りになつたが、ふはりと後から肩をおさへて、サンキユ、君、小松君

のとこて盛んに君のうはさが出たよ、是非紹介してくれと云つとつた、〇〇によく投書してる由香利さんとは君の事たつてね、何故僕には默つて居たの、と云ふ。私は手を握つて甘へてやつた。

姫御前のあられもないと一言の下に葬つて了へば、それまでのものだが、斯う云ふことを書いて怪まなくなつた現代の風潮を示すべく、埋沒させるには惜しいので、聊か恐縮し、聊か困つたけれど、原文のまゝを掲げる。批評は諸嬢の自由たるべし(評)

○寫字日記

岐阜市　篠田とみ子

四日。今日はしつとりと雨がふるので、底の底迄心が落ちついてゐる、隣の子が金剛石をしきりに唄ふのを聞き乍ら、硝子窓ごしに木々の葉から落ちる露の白玉を眺め乍ら、理科の部を書きにかゝる、旅人木から世界の最大樹迄、是で一枚、時計をみると五十分計りかゝつた、簡易三菱玻璃の處へ來ると、竹を斜に切つて水入口をつけて人が覗く處頗丈書く譜、是を書くのが嬉しくてかなわぬ、こうして一日机の前で紙や筆と首つぴき、午後になるとそろ〳〵欠伸が出る肩が引きしまる、ふと手が女子文壇にとまる急ぎ物とは知り乍ら、文壇は私をはなれぬ自分のを又讀む、眼の中へは入るような字で刷つてあつても自分のは飽が來ぬ、人間とは勝手なもの。

五日。藁灰の効能からかく、朝寢したので仲々はかが行かぬ、まだ雨はやまぬ、今日は昨日に引きかへて雨がうつとうしい、かたい事計では肩がいたいから午後一口噺にする、書を能くする人を書家といふ、馬によく乘る人を、馬鹿と書いて一人でふき出してる、咽のかわく時には氷をIce、ほんとにそうだ朝から晩まで机の前で、安樂さうに人は思ふであらうが仲々そうはまいらぬ、可愛さうに右の小指がいたくなる、膝ふしが時々やめる、つと立つても足が立たぬ事もある、けど今日はだいぶ慣れたのでよ程樂になつた、もう二三日ですむからいゝけど、こんな事、四年もやつて居たなら、病氣になつて死んでしまふだらうと思ふ。

寫字と云ふことも興味あり、但し理科は知らず(評)

○茶の湯

淺草　綠子

四月廿八日日記の一ふし

もう今月きりで爐をふせますから皆様で御名殘の御稽古致しませう、といつて御招ぎしたのは、日頃親しい方々五六名、定めの時刻までには殘らず四疊半の茶室に打ち揃うた。床には眺め涼しき隅田川に、向島の花の盛りをうつした掛軸、一輪挿には牡丹が得意氣に笑みを見せてゐる、爐にかけた茶釜からは松風の音、いとも床しう立つてゐる。

やがてさら〳〵と絹ずれの音して太鼓張りの襖をあけていとつゝましやかにあいさつをなさるのは一番年長のよし子さん、すつきりと立つた姿のさてもいゝこと、紺の糸織の御召に緋縮緬に疋田形の襦袢の袖のうつりもよく羽二重地に百合の花をあしらつた御み帯高島田の根に白と赤とのたけながをかけたのもことさらに氣高い、御濃茶の御盆立いつもながら落ち付きのある、そしてあまりかど〳〵しからぬこなし先生のおほめになるのも無理はない、御手を動かす度にリングがきらりと光る、一同

は電氣にでも吸ひつけられたやうにまばたきもせず一心に見つめてゐた、と床の牡丹が一ひらはらりと散つた。

○當選

小石川　三宅恒子

四月二十九日

『お目出度う』と御荷物を置くが早いか、いきなり妹が前にすわる。何が？びつくりして針の手をとめる。お目出たう――いやな人！何にも御目出度事なんか無くつてよ――かくして入つしやるのね、隨分だわ。と獨ににこしてる。考へてもく分らぬ。姉ちやん、お願だから後生だから、敎へて頂戴な……全く？姉樣！と未だ疑はしい目で見ながら……文壇に出てよ。お目出度う――さう。小つぽけな字で――いゝえ――ぢや、秀逸？どう致しまして――賞に入る筈なくつてよ――アラ天だは……と高聲で云つて笑ふ。かつぐんだなと思つて顏があつく成る。――そんな夢み度いな事があるもんですか。オホ、實際よ。見て御らんなさいよ……五月のを出して與れたけれどこはい物にでもさはる樣に手が出ない。嘘よく。と其まゝせつせとうつむいて針の手を動かす。母樣が呼ばれたので妹は立つてゆく。影の消えたのを見きはめといて、どきく胸をさせながらそつと紙をあける。名がある。私のく……ほんとでよかつた……知らずに溜息が出た。こんな下手なのが撰に入つたかと思ふと恥かしい樣な……嬉しい樣な……いつの間にか仕事のかはりに文壇がひざに乘つてしまつて、一紙毎に新らしい香に醉ひながら夢中によみふける。寧志樣のがある。入軍樣のがある。いつもの樣に。頭の中にお二人のみ姿をゑがいて見る。どうしてこんなに御上手なのでせう。及ばぬ望ながら……百分の一でも此才にあやかり度もの。天の文讀みながら血が湧立つ樣な氣がする……オイ。姉樣……お茶だよ。先刻から呼むでるのに……知らんふりして本から目を離さないでる。姉樣の分僕が食べてやるぞ……御勝手に……とうつむきのまゝ答へるとうまい／＼ととんでつてしまつた。靜かだれと母樣が來られた。ふと顏を上げる。お前の顏は眞青ですよ。靈聲で云はれた。氣がつくとマアいやな。お庭に向いてたので新綠の影がうつゝたのでした。

○素人寫眞

清[illegible]　重長孤女

四月二十五日、お友達の糸子さんと鉞代さんと二人連れて遊びに被入て、兄さんも一郎樣も大連行きだそうですから留守仕事に一枚撮つて與れと賴まれる、兄さんには何だか賴み惡いてと附加へて、實際妾は未熟ながら寫眞を撮ることを覺て居ます、これも何時も兄樣の道樂の助手に使はれたからで……兄樣は何日も機械を肩にして郊外を遣遙つき、妾は家に、現象や映畫の專任、で撮ることも仕上ることも兄樣に負けぬ位出來る如になつて居ります、

て今日も撮つて見ましよ、と諧合て今更の如に空模樣を見る、どんより曇つた空色は丁度宜いわ、と獨り背首き天幕は其儘にして置て、造花の櫻は横に、椅子を一つ、卓上には花瓶をあしらつて暗き暗室へ乾板取りに行つたが、扨手札にしやうか、カビネにしやうか？、二人故カビネにと取枠に嵌めた原板を懷に、姿見前に髮を撫でたり口紅を施したりして居る二人を撮影場に導て糸子さんを右に立たせ鉞代さんを椅子に、姿勢を正して上げて、黑布を被つて摺硝子に映る二人の倒影を見ると何とも言へぬ美しさ、堅く結だ糸子樣の口が動く、と見ると「花子樣成るべくネ」と其言葉の意味千萬無量！

妾も可成うまく撮りたひ、併し美しく撮れた糸子樣の寫眞を一郎樣が見られたら大變、と妾の胸には不安の雲がもらむらと起る、何故か人は知らぬ、無意識の中にしぼりの加減かして呼吸を計り撮つた、がしかし一週間の後には什麽寫眞が出來るだらう。

○英國一貴婦人の敎育費　▲當歳より八歳まで毎年二千圓（計一萬六千圓）▲九歳より十五歳迄毎年三千圓（音樂舞踏の敎育費を含む計二萬一千圓）▲十六歳より十八歳まで毎年四千五百圓（計一萬三千五百圓）▲十九歳一年七千五百圓（佛二國遊歴費を含む）▲二十歳三個月三萬圓（參内及時季の交際費を含む）以上總計八萬八千圓也

和歌

與謝野晶子選



○規定　別に新派舊派の名稱にかゝはらずと雖も成るべく清新の作を迎ふ一人一首限りにて必ず半紙又は罫紙に認むること一人にて二首以上ある時は沒書とす兩種の賞を送呈す

○（天賞）　讃岐　小野定子

時鳥さら〳〵水のはしりゆく野の上にさぬ曉にして

○（地賞）　熊本　峽よし子

詐りの涙と知れど目をすりて跪づく子を慰めぬわれ

○（人賞）　寺尾　荒井豐子

夏の月君のみ顔を照しけり金井の山の頂に居て

【秀逸】

○　近江　伊藤定子

この悲しみ又來たる日の嬉と比較て見れど別れは悲し

○　長野　山西くに子

少女子は其端をだに言はずして一人苦しき物思ひする

○　愛知　加藤眞佐子

大夏の日さしかしこみ緑葉の蔭に隱れぬ風の走り男

○　丹波　鹽見喜代子

君といふ人あり我を天地に二なき者とも思ひゐませる

○　石狩　石川恒代

徽と吹く風の匂ひに誘はれて行けばイむうばらの少女

○　伊賀　山村龍子

君が瞳の涙ぐみたるその色とひとしき色の朝顔の花

○　下谷　谷口桂子

五月雨は海のおどろし果もなき黒き世界に灯の一つ

○　大阪　梅本八重子

捨てられし時の心と一條の髮の落るといづれさびしき

○　熊本　金子苺子

憂人もよろしき人もまさぬ故五月の森に安らかに泣く

○　麻布　花子

破れたる戀の思ひに破れたる若き心に歌よみそめぬ

○　山口　酒匂とし子

山吹の露墨にすりゆく春を叔母の御尼に文かきしかな

○　豐後　吉良靜子

天地の香あつめてつゝましう夏野に開くひなげしの花

山城　山田幸子

○夢に見ぬ君が住む野の白百合に紅羽の蝶と成て舞しを
陸前　二階英子

○芍薬も牡丹も罌粟も撫子も咲きぬるものをわが心うし
伊豆　金井深雪

○神のいふ罪の外なる心地して又しのびけり其の春の夢
京都　渡邊文子

○かをる風夕庭吹けば天上の御園の様に花散りしきる
大阪　順子

○音羽山上れば青き遠方の鞍馬ぞ見ゆれ昔思ほゆ
佐賀　田中美枝子

○君を得し嬉さをしりそのたゞち後の悲しさ覺えぬ我は
大阪　梅本龍子

○尊かる心たやすし盗まれてかたしろの如く弄ばれぬ
芝區　三村かめ子

○紫の袖を君とは見たれども絹傘深く前をすぎゆく
本郷　長尾咲子

○かくばかりつれなき人を戀ひそめし心のうちの恨めしきかな
肥前　長尾錦子

○夕霞うすら棚引きしづかなる山に谺す石砕く音
茨城　風見貞子

○鶏に餌をやる妹の稚子髷に黄なるリボンかとまれる胡蝶
熊本　平野まさ子

○山の鳥小魚ふくみて朝川のをちを飛びゆく静なるかな
安藝　石田ときの

○別れても又逢ふまでのかたみぞとくれぬ小さき小さき花を
肥前　西澤みつ子

○晩秋の丘にし立てば亡き背子の聲ともおぼえ雁なきわたる
信濃　赤津晴子

○赤き緒の草履を見つゝ嬉しげに初夏の野をそひも來ましぬ
牛込　眞壁しげ子

○山櫻花ちる庭に四五人の童あそべりしづかなるひる
喜惠子

○かくまでにおもへるものをかにかくとまぎらし給ふおん心かな
門司　鈴木静枝

○はるかなる八雲の外とみし人もわが手枕の中に見るかな
ふく子

○心なくも軒の鳥かごぬらしけり音なく落つる春の小雨に
三重　富佐子

○曇りなき月の光を心からうれしくも又かなしくも見し
横濱　くは

○雲とぢてそこともしらぬ天城山村雨ふりぬやどる岩屋に
樺太　敏子

○赤き灯の見ゆる頃なり我胸は人に知られぬ人を思ひぬ
四谷　齋藤みよ子

○けふもまた枕ゆめみぬ窓掛の暗き外の面に五月雨ぞふる
四谷　味方こう子

○この文はおぼろに君のおん影の見ゆとばかりにとりとめもなき
兵庫　菅原しづゑ

○ふりかえるそのたまゆらの紅に燃えたる頬をば君に見られじ
横濱　北原仙子

○小ゆるぎの磯の小さき圓石は眞珠の如し月の光に
千葉　宇井花月

○雨の宵妹がつめ彈く琴の音に思ひを合せ目を閉ぢて居ぬ
札幌　山彩子

○若鮎汲む早き川瀬に山吹の花のながるゝ春の明方

和歌

○　沼津　渡邊とよな
籠に滿し花賣りつくし歸るさの菜の花みちに春の月見る
○　靜岡　土屋勢巡子
ゆゑわかぬ愁に一人物思ふおばしま近くほとゝぎす鳴く
○　長野　若林政子
恐しきまぼろし見いておのゝきぬ古沼の[illegible]我を追ふとも
○　千葉　安井ひて子
ひた泣きに泣きぬ戀しき人にして二心ある君と知りし日
○　下総　相川みよ
春は來ぬあばら屋にまで春は來ぬ垣根に赤き芍藥の芽よ
○　駿河　藤森きん
何となくたゞ悲しさに心なく暮れ行く空を仰ぎ見しかな
○　羽前　白秋女
雛芥子のたよわ姿は人を待つ花と云はまし主人にか似る
○　岐阜　あやめ
君の目と君のうしろの物かげをこもごも眺め二十日程經ぬ
○　藤澤　常盤幸子
我胸のおもひのうたの高鳴りは曉寄する新潮のごと
○　下総　月沖百合子
虞美人草や菫の匂ひにわが君と相見てし日のまぼろしの見ゆ
○　本郷　相樂きみ
君が家は青葉若葉にうづもれてかすかにもるゝ窓のともしび
○　臺北　山口蕗子
流れゆるき小川に螢の月見えて櫻散るなり水清き里
○　岡山　高木清子
眼路遙く霞める春の月影に胡蝶となりて君訪れむ
○　愛知　庫屋敷政子
螢とぶ交野の道は天の川星の中ゆく心地こそすれ
○　東京　和子
我が戀は硫黄ふくなる山の如たゞ烟のみ君にしられぬ
○　丹後　高田蓮花

今日もまた青田の中に草を取る里の少女の唄を聞くかな
○　高岡市　篠原みゆき
島つゝむあやめ色なる霞中を白帆はいてぬあけぼのの空
○　千葉　岩田よし子
おぼろ月湯舟の中のわが素はだ思ひくらべぬ散りし牡丹に
○　福岡　角銅翠波子
郭公暗きみ空を鳴きすぎて卯の花垣根小雨そぼふる
○　新潟　村山しほ子
靜かなる夜なり二尺の中おきて君がれ息の熱き頰にくる
○　大阪　片山清子
おぼろ夜を花のふゞきの中に立ち小扇かざすうつくしの君
○　駿河　大瀨梅子
かくの如風になびける青柳の姿を人の心ともかな
○　大阪　孤舟
新星のほのめくあたり水見えて風なよやかに青柳を吹く
○　備中　原こみれ
まがどりのわが眼を拔くと夢さめぬ春の夜なれどすさまじきかな
○　千葉　渋邊輪光子
大ぞらの星の雫か東雲の野路美しき葉末の露よ
○　羽前　橋本いつ
淺ちふやあれたるやどのつぼすみれたれむらさきの色に染けん
○　安房　佐久間かう子
むら鵆のいまとびたちて荒磯のいはほの上の松しづかなり
○　千葉　峰島和枝
急坂に荷重き車ひくににて早く行かむと心はやれど
○　大阪　西戸政江子
春の磯紅絹につゝみし貝殼を忘れて去にし人をし思ふ
○　赤阪　福島美代子
入日燃え御空こがしぬ我西の人を戀するそれにも似たる
○　丹波　藤原文子
夕榮の寂しく消ゆる秋の野に我れ獨り立ち若き日を戀ふ

○　牛込　塚原けん子
沈む日をおほへる雲を見るときに生のきはみの不安を思ふ
○　加賀　美子
川風の吹き來るまゝになよ／＼となびく柳はいとあはれなり
○　千葉　高須春枝
若うして妻となる子は木像の櫻にも立ちて物見ては居ぬ
○　牛込　平塚白百合
髮すきて島の少女は丹つゝじの花かざしけりうらゝかなる日
○　宮崎　岩切綠蔭
父の墓もうでゝ歸る路の邊に鈴虫の聲あはれに聞ゆ
○　羽後　佐々木溪子
へだてなき君が心の親しきは語らふことにあらはれにけり
○　北見　沼田ひて
なるまゝにまかせてをかん亂れ髮元結ゆるみ肩に垂るとも
○　北見　今村りせ
幾年か泣くを忘れしわが淚今新らしき泉をつくる
○　土佐　梶原しげ子
おん文を燒くも悲しくさりとても燒かねはつらし弱き心に
○　神田　三好ふく子
なつかしき父のみ墓に我れ立てば櫻散りけりみ墓の上に
○　尾張　廣瀨かなえ
三日の月塔にかくれぬ觀音の堂のあたりに時鳥鳴く
○　京都　井上すみ子
かぎりなく花のおくにも花ふりてかすみにくもる仁和寺の園
○　茨城　富田花子
常盤なる松に交りてさくら花散るてふことの悲しうつくし
○　伊豫　宮脇朝香
生ける日はかならず神の婢女よ醜のために榮えける身は
○　茨城　寺門つち子
夕月は霞か浦に朧なり東より來る水の上の風
○　長野　野中泰子

相抱き永劫に眠りし罪の子をせちに羨むものうき日かな
○　信濃　藤澤里子
朝ぎりや撫子咲ける堤に聞く湖の向ふのふる寺のかね
○　下総　仁條
かけはしのいと美しき藤の花うつる水見て君が名をよぶ
○　豐後　藤田富子
幾千世と誓ひてしひと見送りて袂ぬらしぬ春雨の夕
○　京都　なみ子
たへがたき深きなやみも知らせじとひそかになくか山ほとゝぎす
○　淡路　加藤菊子
人皆は花にあこがれ美しき柳のみどり知らぬがごとし
○　秋田　加藤うん子
逢いども君の笑顏は目のまえにほのかに見えて消えも行くかな
○　秋田　いな子
なにとなく春の心地とわれなりて見れば野山もうすみどりする
○　若狹　瀧本なみ
頬のほてる程にもあらず瞼をば少し赤むる程に思ひぬ
○　羽後　三浦ふみ
ゆくりなく君を思ひて春夕べくれゆく雲に淚流れぬ
○　札幌　小島はな子
たが住むやいと美しく東屋を咲きめぐりたる紫の藤
○　備中　篠原しげ子
小川邊に朝露踏みて只一人水鏡見る少女の君よ
○　上総　森ふみ
幼きに母亡ひし我なればなにをかねがふ惱りの世に
○　埼玉　栗原稲子
なつかしき朧月夜よ良き人の姿かくせし白萩の花
○　長野　大平直江
病みぬれば地の底のやみ唯ひとりあゆむ心地す悲しき日かな
○　茨城　文子
鐘の音は遠くうすれぬ旅の宿小雨に暮るゝ小筑波の山

若狹　津田たき子
○ほの見ゆる讃岐の濱にこなたみる同じ想ひの人もあるらむ
信濃　岩波むら子
○床の間に活けし小百合のほろ〳〵とこぼるゝ如く君は逝きけり
牛込　佐藤しづ子
○あたゝかう浴けやもすらむ日を浴びて人と語れる若草のうへ
德島　野澤紫水
○三月の御寺の庭に落椿集めし人のなつかしきかな
大阪　平尾とき子
○あはれなる人のなげきを聞くがごと心淋しき五月雨の音
播磨　紫水
○靜にて物あはれにも淋しきは我が影這う地に曳く夕
島根　長崎春子
○夏雲は緋衣したる僧千人修法するとも見えてうつくし
房陽　安藤富美子
○第一の感じに上るこしかたの戀の疲れと友にきくかな
月陽
○ふとしたる影より出てし我むれのおそれつゝまんうすぎぬもて來
高知　桃の花
○何心なくも笑みしをとがめられ面赤うしぬ戀せる我れは
秋田　萩原とよ子
○釣垂れし里の小川の青柳にかはせみ鳴きて春雨の降る
伊豆　木村綾野
○遊びにき砂に字畫く子木の枝を削りて笑む子人形だく子
川越　青葉
○懷むなる土橋に立ちて母君の歸り遲しと待ちけり昔
神田　足達はる子
○さくらちる音なき雨にさくらちる涙とともに山ざくらちる
横須賀　森瀧子
○水鳥の白きつばさをうち延べて波の上まふ夕まぐれかな
兵庫　杉山春翠

わかれ來しふるさと戀ひてゆめに見し寢ざめわびしく時鳥なく
韓國　富永清子
○天地にまたなく戀しその君をまたなく惡く呪ひぬわれは
下野　しのぶ
○わか菜つむ京の少女を思ふかな春風ふきてやはらかなる日
筑後　梧桐知登子
○ほがらかよあゝ熱烈よ淋しみよつひに冷たき人の世なりき
大阪　梅村愛子
○つゞみ敲小傘にうたひ三五人京の舞子がすぎぬ夏の夜
兵庫　さゝ舟
○夕日さす青草の野にわれ一人うたたねすれば人なつかしき
德島　野菫
○みひたひの白きとたけの黑髮がうつりよき子の月を見るかな
德島　西野ひさし
○夏姫の眉とも見ゆる三日の月み空にありぬ山ほとゝぎす
埼玉　楓子
○うれしさをこまかく針に縫ひこめて嫁ぐよき日をかぞへつるかな
信濃　宮島千代子
○さやかなる月にうかれて花かげにハモニカふけば君も來ましぬ
大阪　中野喜代子
○やうやくに胸のむら雲立消えて清き月見ぬ君のおん前
京都　吉田里子
○おんなさけ深くもこれにこもるかなたゞ一ひらのお文なれど
信濃　山本操
○一ひらの雲きれとぶと見るままに海の上には夕立のきぬ
備中　馬越昌子
○風わたる若葉の衣の象頭山笛の音もるゝ金比羅の宮
山口　河村しづ子
○白き橋天よりながくかけられぬ吾それによぢ高く遊びぬ
相模　上原露葉子
○春の花色をも香をも見てあきぬいて物を言ふ林に入らむ

○伊豆　さわらび女
わが樞かつがむ人もまじろべし故郷のまつりの午のどよめき
○大阪　鹿島綾子
少女子の心に似たる白百合に甘き蜜吸ふ蜂を呪ひぬ
○東京　江森笑
行く雲を一人立たずみ眺むれは胸にも湧きぬ雲の一ひら
○芝區　朝倉千代子
美くしき君を見ぬ日は何となく物足りぬげの思ひわくかな
○安房　安藤貞子
黄昏や花のやうなる何ものか我が胸の野にうかび來しかな
○美濃　篠田欣子
幸多き吾が身も今はこちたけれ野の少女よし磯少女よし
○美濃　加藤芳子
七日して歸ると聞しその日より淋しさ覺ゆ君と語れど
○美濃　堀ときわ子
ある事を又も思ひて哀愁に閉されし夜を不如歸啼く
○肥後　佐々木美智惠
夏の朝長くあけざれあさがほの露に等しき命のために
○横濱　ゆき子
月の露屋のしたゝり香を吐きて明け行くものか春の夜のさま
○明石　田中落葉子
あゝ君が三年振りなる舞姿扇の風もなつかしきかな
○美濃　酒井とみ子
白藤に小雨靜けきたそかれにわがゆきしとて文とぢし君
○靜岡　杉山よう
我が思千々にくだけて朧夜の柳の影をゆくやとおもふ
○廣島　山崎數枝
鄙歌も長閑にすげの笠二つ麥の畑がくれ歸り行く見ゆ
○河内　木村しま子
樫の葉の楓わか葉になゝかへりみつかひをする蜘蛛の絲かな
○常陸　初澤さく子

許しませ君歎きしその罪の今後悔の涙に住む身
○大阪　田中とき
森の中に湛へし池よ我心波立つ川の世の人の胸
○奈良　白ぎく
櫻さく里の夕の細き道君と歩めば雨降り出てぬ
○隴前　大塚ちよせ
幾人の男を暗に放ちたる女よわれは罪多きかな
○韓國　原登里子
心いま君を想ひぬわが手なる衣縫ふ針の動かぬまでに
○浪花　岩淵國子
この君の二た年前の戀かたり吉野の宿のつれ〴〵に聞く
○德島　吉田紫花
十歳にして逝きにし妹のいとしさに指の數さへ恨みても見る
○神田　木村花枝
銀燭にはゆる姿の高殿に袖ふる君をおもひそめてき
○日暮里　細谷鏡子
落日する窓に身をよせ病人はつやなき髮をまさぐりて泣く
○靜岡　池田よし子
母君は春の朧夜故郷にわが住む方の山を見るらむ
○千葉　美濃輪亮子
野の牧や日暮るゝ際の春風に馬の背かすめつと燕とぶ
○大阪　香崎靜子
はら〳〵と木の葉の散るを犬の子は面白げなるかほをして見る
○奈良　中富よしみ
杜鵑一人をかこつ筆をきて聞くや暮れ行く山里の家
○加賀　勝崎菊子
紅と眞白とつゝじゐならびてともにうなだれ雨になやみぬ
○紀伊　室井白萍子
曉月夜ひとつましろき蕣のひらく幽けきひゞきを聞くも
○兵庫　祥子
螢とぶ川邊に我はたゝずみぬ君くる舟のおそき夏の夜

○　大分　泉田澤子

筆とらぬ立願やせし憂き人は情け冷ゑしかたよりだになし

○　紀伊　榎本千鳥

紅蕾の小つぼの七つ色泌せぬわが世さみしく花ちるひまに

○　紀伊　島淵品子

見てあれば紫となり紅となり微笑むに似る夜の星かな

○　鳥取　桑本きさ

泣きてもみ笑みてもみれど我心たゞ何となく物足らぬ日よ

○　駿河　池田繁子

姉妹は朝野の露をふみわけてある日楽しくなてしこつみぬ

○　本郷　北林峯子

軒近く葉隠れに見しひと花の燕紅ゆゑに君をおもひぬ

○　仙臺　泉田香子

小雨する若葉の森に初夢の神がささやきいますと思ふ

○　松江　鈴木早苗

許らざりき歌のなかにまれに見る二つの舌を君はもつてふ

○　伊賀　岡　花子

戀なりや折々君をぬすみ見る淋しき癖をいつか覺えぬ

○　米國　秋山初子

春風やそよ／＼と吹く心地よさいざや是れより君をたづれむ

○　讃岐　衣輪たか子

くろ髪にたもと覆ひてあかつきの雨にぬれつついちご摘むかな

○　千葉　秋山のぶ子

むぎ青き山畑のへにふぢ咲て鳥あまたとぶふるさとの春

○　備前　風間董子

夢の如蝶を追ひ行く花の野の遠にかすみぬ岡山の城

○　北海道　伊東小百合

春風にさそはれいでゝさまよひぬかげろふもゆる磯の砂原

○　若狹　前川蝶夢子

胸に咲く戀てふ花の色あせて寂寞の實を結びぬるかな

○　大阪　土橋仙花女

あれはてし我家の裏の古池のほとりに咲きぬしらふぢの花

○　廣島　靜波

乳色ににごりし水を白藤の根もとにすてし若き絵師かな

○　三河　永田舞鶴子

ほとゝぎす血を吐くごとき聲きゝて亡き戀人のいまはをおもふ

○　茨城　岡田きよ子

夏姫が化粧の料と紅花のつゝじを植ゑぬ二反ばかりを

○　備後　かず枝

すさまじく火あぐる山をあふぎ見る一つのかげのやせて小さし

○　山梨　小林田鶴子

つく鐘は青葉の中に消え行きぬいとゞ涼しき山寺の夏

○　德島　思出草

ふみたどるこゝろくらさのかつそひて賴み淋しきともしびなれや

○　宮城　沼倉磊子

ゆく春の躑躅の山にうらわかきわが戀人と手をとりてゆく

○　愛知　成田石子

得知らずと彼方向きてぞ泣きましぬたはぶれはこの君にせぬこと

○　備後　藤井國子

仰き見て涙さしぐむ日の空にたゞ白き日の冷たく光る

○　松山　月岡光

若葉するその夏毎にわれ思ふ森にさそひし御手の君をば

○　靜岡　鈴木こぎく子

さくらちる野中の家の水車暮れ行く春を獨りめぐりぬ

○　淺草　飯塚歌子

森つゝむ霧はれゆきて木かげより朝日子のかげほの見えそめぬ

○　大阪　服部きよ子

幸あれと祈りし文を彼の君は何と讀みけむのろふなど云ふ

○　大阪　石田のぶ子

恐ろしや肉に餓えし狼が口あけてくろ夢見ぬわれは

○　京橋　幸子

うれしかる二十の春の惜まれて花ぞめごろも更へうかりけり

○　小石川　海老原得子
心強き女と人に呼ばれ居ぬよき名とこれをおもふならねど
○　京都　大井順子
萬物のよみがへるべき春なれば蕾は咲きぬ日の蔭にさへ
○　沼津　入代美代子
長き日を目病みて暮す思ひしてわれは受け居ぬ人の玉章
○　名古屋　渡邊みつ
けふもまた黒き煙は薄くもる不安の空に立ち昇り行く
○　信濃　きし子
端午の日二つの兄はあやめ草大刀になぞらへ吾れを泣かせき
○　仙臺　南もり子
一束の文かくひまに夏の夜の明けやすくして白み初めけり
○　大阪　今西春江子
美しき白きあなうら蹈書きて猫に食まさば面白からむ
○　美彌子
唯一人淋しさまゝよ菫さく野に花はつめども
○　横濱　端枝
我とわが呼吸に驚きいとわかき命もつ子と知りける春
○　三重　山崎初子
何となくをしきこゝ地に見かへりぬ十束あまりの人の玉づさ
○　西多摩　三ヶ島よし
うす色の牡丹の花にいだかれて白き胡蝶よ何を夢みし
○　大阪　春子
河原風騒ぎたる七人の袖しめらせぬ撫子の花
○　岩代　橋本いち子
櫻咲く五十鈴の川の邊に居れば神風にちる花びらも見ゆ
○　進きく女
この少女されども君がみひとみのすゞしきを見て安らかにゐる
○　沼津　中村松雨
八重櫻みとりの森にうなだれてくれ行く春の雨に泣くかな
○　茨城　功野春梅子

墨色に君のやさしき影見えて情の香ふ文をえしかな
○　京橋　しらはぎ
戀しとも思へど言はぬ我が心つよきもだえにもだえて死なむ
○　ゆり子
少女子の胸の小琴をうらならしかきみだしつゝ春の雨ふる
○　讃岐　西川よし子
逆しまに風ふき來りわか焔終にわか身をやきつくしける
○　讃岐　かず子
御ひとみまともに射れどかれはしもまばゆくもなし去年に似ぬかな
○　信濃　若林俊子
名をしらぬ花も一本まじへけるつとにと手折る野の秋草に
○　伊豫　浮草
墨染めの衣まとへる若き僧宿乞ひましぬ藤棚の下
○　金澤　島崎初
夕雨のつゝじに細くけぶる時琴かきならしかきならし待つ
○　東京　佳菊子
傘さして五月雨の日を沼に立ち花菖蒲剪る君を見しかな
○　小池いち子
九里の路われ古郷に急ぎけり飯綱の山の裾をめぐりて
○　伊勢　小宮糸子
美くしき蕾に言葉ふくめては人に送りぬ物思ふころ
○　山城　木の花
きのふまで母のみひざを煩はし泣きしその日の安さはあらず
○　大阪　本澤きよ
心強しふと大なる力得て常世に生くるこゝちこそすれ
○　こすもす
うす衣につゝむとも見し十六宵の月と花とはいづれまされる
○　大阪　房子
雪ながら我が歌そへて紅梅を君に贈らん春寒むの朝
○　杷伊　蒼生枝
春の雨庭のさくらに音きえて夜は更け行きぬわれ物思ふ

○徳島　佐川かをる

緋縅のをさの響や誘ひけん背戸の椿の花ぞこぼるゝ

○　田中文子

誰をしも待つともあらぬ春の宵灯ゆれぬ繪卷の上に

○安房　阿部けん子

君われを戀しと云ひぬわれ君を懐しと云ひ文まゐらせぬ

○神戸　倉本笑代子

春の野はいつしか暮れて見ゆるなり里の灯火ところどころに

○攝津　寺部君子

姉君のみ幸なるらんおくつきのほとりにうたう鶯のこゑ

○香川　山地紫利子

賤が家の垣のあたりは白妙に雪とも咲けるつま梨の花

○廣島　兒玉萩村

南縁に佛を刻む若人にほろ〳〵散りぬ白桃の花

○下總　三橋鈴子

水の面に姿うつしてほゝゑめり池のみぎはのひめ桃の花

○岐阜市　山本滿佐子

夕まぐれ霞の中を見渡せばほのかに青む天の橋立

○千葉　秋波日出子

あら可笑君と抱きて思ふこと云ふことなきに涙のおつる

○和歌山　神下りき江

わづらへるかなしき夏よ思はるゝ身をかへりみてしとゞに泣きぬ

○兵庫　辻井浪子

うぐひすの初音をききぬうたを詠む友をたづれてかえる夕に

○信濃　みゆき

わが夢は授戒の僧の天國へゆるすと告げし時醒めにけり

○金澤　花子

紅に將た黄に明けし海原や初日登りて白き島とぶ

○岡山　國澤安子

あら玉の年立けさは天地の分れし時の心地こそすれ

○佐賀　交野こはぎ

君とわかれ空虚の中に只一人投られしごとさびしさに泣く

○相模　大岡清子

日の出入日々に時刻をたがへゆく君の心もそれに似るかな

○淡海　細野その

人をまつおもひもけふはとどまりぬふるしら雪の小やみなければ

○日本橋　佐藤みどり

烈しかる語をくりかへし君思ひ十九の年をおくる幸かも

○千葉　北村花枝

春の海曙なれば大海も黄金色なる潮流るらむ

○秋田　梅澤すみれ子

戀ひぬれば西に東に神おはし運命の糸をたぐると見つる

○安房　伊丹花子

大漁のあさり舟行くその跡は波はたたずに水白く見ゆ

○越後　加藤花子

なつかしさ戀しき今はかず知れず菫咲く野にあそびし春よ

○紀伊　谷田筆子

春の山六位の中に四位三位まじる紙はひに藤つゝじ咲く

○臺灣　大坪かつ

雪深く風はた寒き春ながらものの青きを麥の芽に見る

○熊本　福島枯葉

君來ると文よこしたる其日より夢見心地に十日もすぎぬ

○芝區　岡田白百合

大空の星の一つの消えしとき生れましたる君にやはあらぬ

○豆州　木村春枝

病人が今はの果にうめくごと大野の小草ゆるがしぬ風

○常陸　宮田げん子

青柳のけふりも添へて霞むなり春風ぬるき利根の川つら

○紀伊　三栖つるゑ

梅見つつ微笑みもらす友も無し京の社の春の宵月

○本郷　船越桂子

我思春の眞砂に床つりて白帆眺めて君と語らむ

新論文



○規定　論文と云へどむづかしきことにあらず諸嬢が考へしこと思ひしこと文學上又は一般女子に就いての平易なる論談を歡迎す二十四字詰三十行以内一人一章に限る乙種の賞を送呈す

○日記帳（地賞）

高岡市　篠原みゆき

日記帳は必要であるのみか、是れ程趣味の多いものはありますまい、日記は即ち自分一代の道中記であると共に無類の親友であります、と申すのは友人にも打明けられぬ事を日記帳に書いて置けば、自分が他人に見せぬ限り、日記帳に於て他言する氣遣はありませぬ、爾うして是れを見て自ら愉快を感ずる事が出來ます。私は本年で四ヶ年間繼續して居りますて益々面白く感じます、皆様の中でも來年こそは日記を書かうと思つて、お求めなさるてせうが、さて年も改まつて元旦、二日、三日、と先づ一週間位は精勤であるが、どうにかすると、ウッカリ書くのを忘れると云ふ始末で、三四日分を一度に書かうとするとツイ以前の事が記憶に存じて居ないので書く事がない、終には白い日が出來る、もう白い日が出來る位なら、寧ろ止そうと云ふ氣になつて、捨て了ふ、そこで私は斯様な弊害に落ちぬやう左の規則を守つてをります、則ち事件があらうとなからうと、自分一人の日刊新聞を編輯する積りで當用日記十行に一つぱい書きます、一行も餘白を殘しません、書く事が有らうが無からうが一切頓着致しませぬ、萬一什しても書く事のない場合は、感想でも、述懷でも、友人の評判でもお構なしに片つ端から書きます、亦文章は決して氣張らず、只思ふた通りを書きます、斯く習慣性になると、最早書くのは、毎朝顔を洗ふと同一で、何等の痛苦も感じませぬ、つけずに床へ入るとかへつて氣が咎める位です、私は一生書く積りてをりますが、纔つて未だ書きなさらぬお方や中絶なさつたお方にぜひお勸めいたします。

其日の事を就眠前に極めて書くと云ふことは、意志の鍛錬の上に於いても好き方法の一つだと思ひます、其日記を孤獨ならしめず貧弱ならしめざる手段として此論の如き方法も至極面白いと思ひます、尤もあまり形式に陷ちるのもよくない事は勿論です（評）

○身躰と衛生

（人選）滋賀縣　磨志緒

近頃一般に衛生と云ふ事がやかましくなつて來るにも係はらず段々人間の身躰が弱くなるやうに思ひます。是れは不思議な事でありますが、考へて見れば又あまり身躰を搆ひ過ぐる弊かと思ひます勿論衣食住につき種々の注意をするのは當然のことですが身躰を大切にすると言ふよりは如何なる塲合にも病に打勝といふ樣にして置かねばなるまいと存じます、よく見る事實ですが今日食ふや食はずに働いて居る人の子供は、冬でも足袋もなく羽織もない、三度の食事も御馳走どころか、お漬物ばかりで衛生家に言はせたら定めし營養不良だとか何とか言ふでせう、ところが至つて健全で太て丸々して居ます感冒一つひきません、之と反對に立派なお家の孃樣と呼ばるゝ人達は一寸寒くても一枚多く着る風邪ひいたと言つては直ぐ醫者よ薬よと騒ぐ、御飯といへばいつも、お肴のお料理、其お肴も消化の好い滋養に富て居るものばかりと此樣な家庭の子供は常に病氣がちで困つてゐる、前者は來るべき病に打勝ち、後者は病の來るを辛うじて防いでゐるのです、平常粗食の人が御馳走食べたとて害には成りますまいが常に消化好き滋養物のみ食して居る人が時に不消化物を少し食べても直に異常の起るものです、て私は子供の時から何でも食べる習慣を付て置く必要があると信じます、でないと家に計り居る者ならば、ともかく一寸お友達のお宅へ伺つて何か頂いて、それが爲胃や腸を惡しくする樣な事が度々あるでせう食物のみでなく衣類でも多く着てゐる子供は一寸薄着すると直ぐ風邪ひきます、澤山着せて感冒せぬ樣注意するよりは如何な寒さにも風にも慣れて少しも病を起さぬ樣した方が好いだらうと存じます、御覧なさい日一日と醫術が進歩するに從つて人は皆薄弱となり昔の人の名も知らぬ病も今多く出來ました之は餘り衛生を重ずる結果自然體質を惡しくし病の豫防はなしつゝ之に打勝つ事が出來ぬのであります。　健康なる精神は健康なる身體に宿るとやらどうしても身體は健康でなければなりません。

議論は一々妥當の見とも思へませんが、たしかに一面の眞理を道破したものでせう、つまり消極的の防禦から積極的征服の態度にならねばならぬと云ふものであらうと思はれる、それにしても刻苦とか鍛錬とかのいかに貴く、偷安姑息のいかに害あるかゞ分りませう。（評）

【秀逸】

○偶像に就いて

近江　細野その

今日は唯佛敎と基督敎について申ます、佛敎は見るも眩ゆい位な偶像の前て、經を讀み禮をするが、其人等

は偶像に威壓されて、其前で畏まるのだと思ひます、而して其前では此御像が私等を見て居られる、だから善いヿをしてはならんと云ふ樣に、心身共に堅くなつてゐるが、一度お寺を出るか、又家庭にしても佛壇の室を出ると、張りつめた氣が緩るんで、やれやれ一寸まあ一服吸ひましようと云ふ樣になつて、而してつくねんと莨を吹かして居る中には色々な惡念が起つて來ないとも云へません、それでなくとも偶像のない所では、少し位の惡事に近い事はする人が有るだらうと考へます、それに引き換へて基督教の方は、像どころか御弊一つ有りません、其れなら目に浮べる物もなしに堅く信仰するヿが出來ないだらうと常の人は（偶像を拜する人）思ふてしよう、然し基督教の信者は天に在ます神は何時も我々の近くに居られて、我我のする事なすヿを見て居られる、神の前では我等は裸身も同じ事であるから、何を秘したとて駄目であると云ふ觀念が深く刻まれてあ



學校通ひ　振津淺子

る、此故に片時も惡心を起す事なく、絶えず心の駒に訓戒を與へて居る、だから偶像に依つて堅められた信仰よりも偶像なしに堅めた方がよいだらうと思ひます。

神は靈なれば汝等も靈と至誠を以て拜すべし」と云ふのは基督の趣意です、しかし佛敎の信仰も大乘のは偶像以上で、その篤信敬虔がかゝる表象即ち偶像を作り出したのであります、いづれに致しても要は至誠の情です心だに誠の道に叶ひなばと云ふ事もありますから、（評）

○苦學

羽前　白萩女

富家の一粒種と生れ、ちやほや育てられ、ねだる所は許され、何事も思ふまゝになりて生長するは、果して幸てせうか。之に反して貧家に生れ、學資も思ふまゝならず、種々の艱難と闘ふて苦學するは、果して不幸てせうか。

富家の甘き父母の下に、温かき家庭に生ちたる人は、どことなく鷹揚て、無邪氣な所がある、僻み根生がなくこせつかない。これ其長所です。けれども思ひやりがなく、わけがわからず、お察しがなく、意志弱く、艱難に打勝つの氣性がない。これ其短所です。

貧賤の中に苦學した人は、意志强く、思ひやりがある。これ其長所です。けれども、疑が深く、僻み根生があつて、こせつく。これ其短所です。けれども、この短所のあるのは平凡な人てす。少しても常人より上に出た人には、毫もこのような短所はないてせう。

要するに、若い時代の苦學は、人を玉にする所以てあるから、いたづらに、富家に生れたものを羨んだり、學資の乏しいのを嘆いたりせず、勅語の御趣意を體し一心に勉强するのが、吾々の第一に心掛けなければならぬのであります。

よくその長短を比し得たり、富んで驕らず貧にして屈せざれば境遇の順逆は共に天の恩惠なり、予は貧者を奬勵すると共に又富者に戒告して其の順境を善用せられん事を望む（評）

○短歌に對する妾の主張

美濃　をとめ

妾の和歌に對する考は新らしい歌を詠んてほしいことてあります、妾は現今の歌壇が振はないのが殘念てございます。

進歩した新らしい歌の形式て、到底歌を作る資格がないなどゝ被仰る方もありますが、かう云ふ方は徒らに古典くさい歌をつくつて一人よがりに得意がる方でございましやう、或る程度までは古典にも執著するも必要でございます、而し一つの形式の虜となつて進むことを知らず、國語を古典に求めて生命のない歌を作り新らしい歌と反抗しようとする方は恐かてはございませんか、妾は世の進歩と共に古い形式を脫して新らしい試をする方が淸新の生命ある歌を作る方で、來るべき反動と戰ふ勇ましい方だと思ひます、以上を語をかへて申しますと、古い形式に束縛されたり古人の模倣に勉めないで新しい形式を立てゝ下さいと云ふのでご

ざいます、新しい試に成功する方は屹度未來の晶子先生となることが出來ましやう、而し突飛な難解の漢語を綴り込むのが新らしい試みてはございません、眞實と云ふ方面に近づいてお詠みになつたのが畢竟新らしい歌てございます、古い歌と云ふのもこの眞實に遠ざかつて居るに過ぎないと思ひます、現今の歌學雜誌の中にも意外に平凡な歌が多いのは、作者が撰者の歌を模倣して形式の虜となつたからだと思ひます、殊に近頃一部の歌人は短歌に飽いて居ます、新進の作家に乘ずべき機會を與へて居るのでございます、妾はこの點から眞實の描出につとめてほしいと思ひます、
要するに妾は現在の歌人を批難するのではございません、只短歌の前途が希望に充ちて居ると云ふ事を云つた迄てございます、

槪括的論議は多く効なし、乞ふ直ちに歌ひ初められん事を（評）

○子供の教育

越後　木島しのぶ

子供の時の教育は一番大切だと常々先生や兩親から聞いて居ましたが、此頃しみ〴〵さう思ひました。
先日家へ客が參りまして色々話して居ますと、其人の子が用があるからと迎へに來ましたのです、母がお上りなさいと云ふと、ちやんと上つて母のそばへ座つて甘つたれた調子てこすりついて居るんてす、客は迎へを受け乍ら行かうともせず、子供も使に來乍ら歸らうともせぬ、私がわきのお菓子を二ッ取つてやると、「有難たう」と云つて食た、暫くすると母の面色を見い〳〵手を出し始めまして、親の未だ一ッもやらないうちに、早や大半を占めた、實に不行儀の子です、親もしだらのない樣です。
それからお茶を飲んで火鉢の隅へこぼすのです、毎日篩い清めて置く火鉢に茶の滓渣等こぼされてたまりません、其子はともあれ第一親の罪にします、子供一人の不行儀が位置ある親、果ては一家を汚すと云ふ譯てすから中々氣を付けなければなりません、良いも惡いもわからない中から、務めて良い方へ導かなければなりません。

「子供の教育」と云へば云ふもの〻この一例などはむしろ子供の躾け方の注意と云ふものでせう、勿論これも惡くないが、もつと深いもつと大きいところを云つて顏負けしない樣に願ひます（評）

○笑ひ方

名古屋市　渡邊みつ

私は思ひ付いた儘を述べて見たいと思ひます。
此間、私が何か少し間違をしましたら、水野さんがオホヽヽと御笑ひなさいました。それが如何にも私を嘲笑なさいました樣て、心平らかならずには居られませんてしたことが御座います。
それから私達は長屋の女房さんたちが、はしやいだ卑しい高い聲て笑つてるのに、屡出會ふ事がありますが誠に聞き苦しいものであると思ひます。

「笑ふ」のは必ず心に可笑しく、又眞實に愉快の時でなくては出ない筈のものであります。若しそれが心にもない笑を出す事があれば、それは嘲弄となり、阿諛となるのであります。

實に「笑ふ」てふ事は其人の、品性に大いに關係があると思ひます。即ち卑しいはしやいだ笑ひ聲は、賣春婦の樣で嫌でムいます。又優しい笑ひ方の御方は何となく慕しうムいます。ハキ〳〵した笑ひ方は快活を表してゐます。

私等は感情の動物である以上、悲しい時には泣き、嬉しい時には笑はずには居られませぬ。併しはしやいだ笑、嘲笑、阿諛の笑などは絶對に排斥して飽くまでも、女性の優しみを表さねばなりませぬ。

是れはふだんの心懸一つて、心立の優しい方は笑ひ聲も優しいのですか、禮儀を重んぜぬ方は、相手かまわず笑つて相手に嫌な感情を起させます。

「笑ひ方」は末の事です、おのづからもの優しい笑ひが出るやうな穩やかな思ひを持つ心掛が本です（評）

○理想

福島市　齋藤田鶴子

私、夕べ散歩に出ましたら丁度月が清かつたので私の影がはつきり地上にうつるのですね

それから小供の樣に、自分の影の頭を踏まうと思つて追ひかける、やつとの思ひて追ひつきそうになるとひよつこり一間も先の方に頭が出てしまふいくらぬき足さし足てしてもやつぱりだめ

あまりの馬鹿らしさ子供らしさに自分で自分を笑つてしまひました、然しよく〳〵考へて見ると決して一時の笑ひごとてはない

自分によい敎訓をしてくれたのてはあるまいか丁度理想といふものは諸孃も御存じの通り自分に取つてはもう一つの缺點のない最上の考てすね諸孃もそれに追ひつかうとまア毎日勉强して居なさるのてせう然し人といふものは向上心の强いものその理想境に着く頃にはやはりさつきの影のやうに一間も先に理想の頭が現はれるものてせうだから今大層女學生間に理想々々と流行するやうてすが流行熱に目かされて一時にあまり擴大な理想を描かずに自分の出來得る範圍内に於て、自分にふさはしい理想を描きその理想を實現し得たら又その上の理想を描くといふ樣に急激てなくだん〳〵と進んで行つたなら決して世にいふ女學生の理想は理想てなくて空想てあるなどの冷評を受けることはあるまいなどとまあこんな手前勝手なことを考へたので御座います。

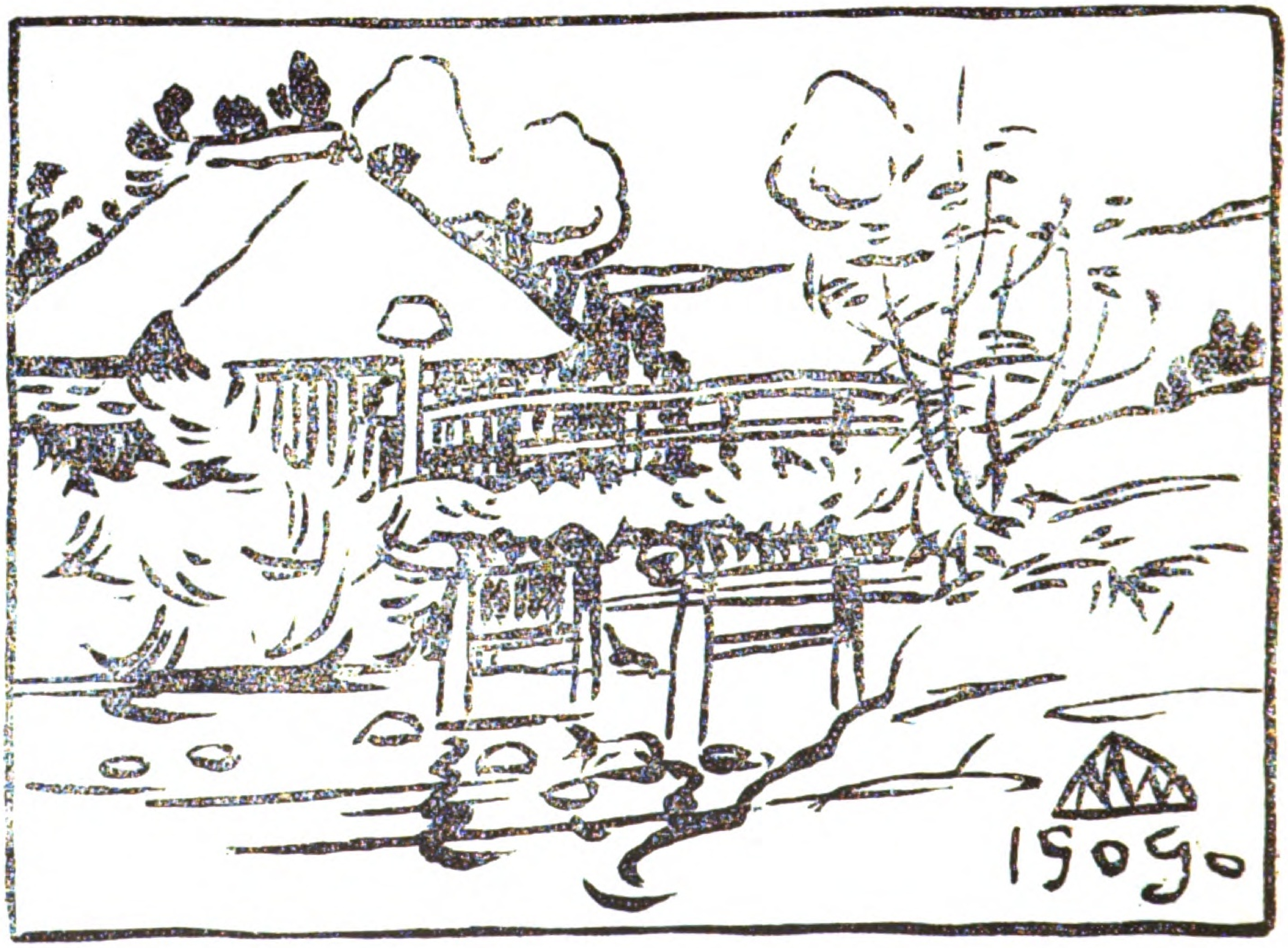
穩健（評）

○心と行

消閑　孤女

凡そ躬行實賤と言ひ言行一致と言ふことの六ケ敷い事は今更言ふ迄もありませぬが世の中に言と行と寸分違

はぬと保證の出來る御方が幾人有りましよう、言行一致はさて置き其心と行の一致せぬ事に至ては猶更甚しいと思ひます、妾も覺へが御座いますが大層腹の立つた時や、氣持ちの好く無い時には心にも無い事を言て見たり、意外な失禮な素振りをすることもあります、併し後に於て、ああ惡い事て有た、二度とあんな事をしてはならぬ、と自分の心に誓ひます、が、其後同じ樣な事の有つた時、前の事を思ひ出して自分の虫を殺して辛抱して居るてありましようか、又又同じ短氣が出て前と同じ事を繰り返す事が多うございます、これは妾のみては無からうと思ひます、是れ取りも直さず心と行と一致しな



梅田川　　仙臺　佐藤たすく

い證據ては御座いませぬか、て、自分の心で誓つた事も斯く破られる樣では迚も口から外へ出したことの實行は六しからうと思ひます、是は如何言ふ事に原因すると謂へば、自分の身に叶はぬ事を口にするからてあらうと思ひます、皆樣も同感だらうと思ひますが人から破約されたり、又言行の一致せぬ御方と交際するのは餘り宜い氣持のものでは有ませぬ、て、妾は人樣と約束をしたり、お話しする時などには妾の身に叶ふだけのことをする心算てあります。

妥當（評）

○女のステツキ　フランスの巴里では女の散歩杖が流行し出した、帽の色や帶の色に配合させたり、花て飾つたりする

散文詩



○規定　詩歌的情緒を口語を以て綴るべし形式は問はず凡て自由なり所謂口語詩の類にても可なり二十九行以内にて凡て振假名を要す賞は乙種

○黒い花（地賞）

大阪市　わだつみ子

黒い土に黒い花が咲いてゐる。
その前に立つて自分はじつと見てゐた、
と、その黒い花が微かにゆれる
おや！と思つて見てゐると
黒い衣を着た、小さい婆さんが一人
その黒い花片の間から出て來た。
黄ろい萎びた顔、赤いたゞれた目、
『お前は誰だへ？』怪しんで問ふた、
と、婆さんはにやりと笑つた、
『黒い花、妬の木に咲く黒い花』
低い沈んだ聲、自分はぞつとした
ふと目を開くと机の上にくるみが二つ、
静かに載つてゐる——是だ
これを蒔くと黒い花が咲くのだらう
それにしても今の婆さんはどこにゐるのだらう——自分は二つのくるみをすかして見た。

思ひつきにしても上手なものです近代人の歎てす、終りの胡桃を透かして見たのは少し芝居氣がありすぎると云ふものです（評）

○鐘（人賞）

明石　田中ますゑ

ごーん、ごーん——ん
鐘がなる静かに頭の上の方から
あゝ罪の消える鐘、誰がついて居るのだらう
何だか恐しくて仰向くことが出來ぬ
僧も俗も、せつせと登つて行く
暖い日和だ、白い躑躅に紅い躑躅
あせつてもあせつても登られぬ
今自分と一所に歩いて居た人は
あんなに高い所まで登つて居るのに
あゝ私は罪が深いのだらうか
あゝあの鐘の傍に早く行きたい

意味がある、情緒の方をも少し活かして居たら恐らく傑作になつたでせう（評）

【秀逸】

○夢

大阪　中野喜代子

あら厭ですよ妾を捨てゝ、
貴君、貴君、何所へ行くの
吉子さんと。
妾しも一緒につれて行つて、
頂戴な。
厭ですつて、まア——、
屹度〳〵、覺へて入らッしやい、
妾は死んで、羨みます、
そして吉子さんと、貴君と、
共に〳〵のろひます。
目がさめた、

前が明るい、床の中で
汗をかいて居た、冷たい、
あゝ、苦しかつた、恐しい、
夢を見た。

夢でよかつたと思ふ夢、而かも拒み得ない夢、別に刺戟的の文字は使つて居ないで、人を刺戟する詩です（評）

○風の日に

信濃　きし子

今日は大好な風の吹く日、野を歩いてゐる。
スッすッと何かの影が足先を横切る
あゝつばめだ、山つばめだ。
心地がいゝ、
一團、二團と白いきれいな雲が北へ北へととぶ、足早に――。
みどりの大地を、ぐんぐんと黒い塊がとぶ。
なんて心もちのいゝ現象だらう。大好々々、今、麥畑のまん中に來た、
ゆたりゆたりと波のように畝だつてなびく、
たゞ何の事なしに送り迎へてゐる――
―胸はいつか海にとんで
これが海だつたら、海だつたら
そしたらあの山の出さきが「みさき」
といふもので、
遠いあの雲のあたりが沖合で、
ちらちらとするあの白壁が白帆だ、
なんだかもう自分ぢやない氣がする
きゝたいわ、濤の音、見たいわ、
白い砂路、
どんどんと風は若葉の梢に鳴つて、
地をあふるよう。
（この身も吹き上げてどこかへつれていつてくれればいゝに）
なんて思つてたゞ歩いてゐる。

「これが海だつたら」以下のところは、山が何々で、壁が白帆でと一々説明しないで、全然海にしてしまつた方が好かつたのです比喩のつもりでせうけれど、却つて感興を殺ぎました、風の吹く日の野の壯大な印象は十分と云ふところまでゆきかれました。（評）

○夕暮

丹波　鹽見喜代子

夕暮、田舍町を一人で歩いて行く。
薄明り――自分の顔の青い影がふらふらと幻影の樣に眼の前をちらつく
暗い家が兩側に並んで居る。さびしい。穴へでも這入つて行く樣な心持
身も心も滅入りさうだ。あゝ光が戀しい。ぱつと眼の覺める樣な、華やかな世界が戀しい。
青い顏した人が、充らなさゝうに暗い家の門口に立つてゐる。
彼等は唯充らないと思ふ計りで、此暗い家で夢の樣に終るんだ。大自然の恐ろしい闇の手におとなしく捉へられるんだ――無意識に。
私は一人藻搔いてゐる。蜘蛛の圍にかゝつた蝶の樣に、藻搔いて藻搔いて……も、あゝやつぱりこうして闇の手の中に、葬られるのか。

模倣が勝つて、創意が少い、器用ですが、先づ試作として留きませう（評）

○闇の鐘

函館　谷内ふさ子

薄ら寒い空氣の張つてる、
眞暗な夜だ。
四階櫓の、高い軒から下つてる、黒い、小さい鐘を見て、
私は非常に、怖しさを感じた。
｜闇に｜｜
風が吹き荒んだ後の、此の寂しい、
寒い空に、強い響をもつた彼の鐘が、
鳴り渡りはせぬかしら、
もし、彼の小さな鐘が今、
撞き鳴らされたらどうだらう……
と、ぐわん〳〵と、耳がなる。
私は耳を確と壓へた。
――彼の鐘が風に乗つて、段々と響いた時、愕いて、駈け廻る數多の人々を思ひ出す。
――また、渦巻き狂ふ火と、赤い煙を見て喚き叫んで、泣き狂ふみだらな女の姿を想ふた。

何處となく強い響があつて好い（評）

○わが心

信濃　ふみ子

アヽ又嫌だ、
向ふから若い男が來る、何處の者だか知らないけれど――、
私は男と云ふ男の顏、見るのも嫌だ、
ぞく〳〵と身ぶるひがする。
戀！
それは知つて居る、色て例へれば、
淡い紅、青、濃い紫、そして黑――
つい男とすり逢つた、
刹那に私の顏を見て、さげすみの眼にほゝ笑んだ、
さも私の心を解したと云ふ風に――
けれど、私の心が何て解されやう、
解し得るものは一人だつて無い。

「解し得るものは」の次に「全世界に」と云ふ一句がありましたけれど除いた（評）

○森の中

盛岡　白桃子

おや？、私は立ちどまつた、どこまて行くんだか解らなくなつて。一體マア私は、何のために來たんだらうこんな淋しい森の中に、行つても行つても森の中は眞暗だ、明るいところに出るだらうと思つたのに。もうよそう、行つたつてだめなんだものあゝ淋しい。薄氣味の惡い森の中私はこんなところが好きだ、人に見られるのが厭でたまらない。ふと、空を仰ぐと、小さな光が葉と葉との間からもれてゐる。星だ。小さな星の光だ。それがあのウッ〳〵した木の葉を透して森の中を照つて居る。全く自分といふものを知らすために。私はさとつた、深く〳〵さとつた。そして急いて森を出た。

斯う云ふのも自然主義の理屈から云ふと、解決詩であつて邪道かも知れないが、邪道

ても一寸面白い暗示があると思ひます(評)

○壹岐ノ島　伊知子

雨は漸く止んだ。
雲が切れる、青い空が現れてきた。
隣のお爺さんがお婆さんを呼んでゐる。あわてた聲で――
「ばあさん〱一寸出て來て見な、そらそこに島が見えるからよ」
わたしも見度くなつた、築山の涼み場へ出て見た。
ほんにまあ近くなつたこと、島に足が出來て歩いて來たのでないかしら
「まあほんとに〱、明日は久しぶりの天氣ですは――」
「島が近いぞ、鬼でも渡つて來ようぞや」
「沖に行かんすなよ、ナア爺さん、昔から云ふじやあないか」
私は更に目覺めたやうな壹岐の島を迎へるのであつた。

「雨は漸く止んだ」と云ふ首句を除いて其あとは皆原作を直したのです、原作のやうではたゞの散文で、散文詩と云ふにほひが何處にも見られませんでした(評)

○雲雀かしら　近江　小倉壽榮

おや又鳴いてゐる――、
新建の二階の小室にいそぎの針の手をとめた、
――雲雀かしら…每日樂しそうにさへづつて居るのだ。でもこんな建て込んだ處に…けれ共お天氣のよい日は空高く歌ふのがきこえるもの――
小窓をあけた、と黑い點々が空に動いてゐる。
雲雀かしら……

○雨の日　京橋　しらはぎ

雨がしと〱と降つて居る、
灰色のどんよりした雲が、空一面ひろがつて、うす暗い、いやな日だ
やむかと思ふと、また雨がしと〱と降つて來る
窓から外を眺めて居ると、傘をさして、道を行く人の陰が、遠くの方へ消えて行く樣
ぢつと考へ込んで居ると、自分がどことも知れぬ、深い深い穴の中へ落ちて行く樣だ
ひやつとした、氣がつくと雨だれが襟もとへ落ちたのだ、雨だれは軒をつたつて、落ちて居る
ふと私は思つた
こんないやな日に、重い罪惡が行はれるのではないかと。

○お母樣　岡山縣　すみれ女

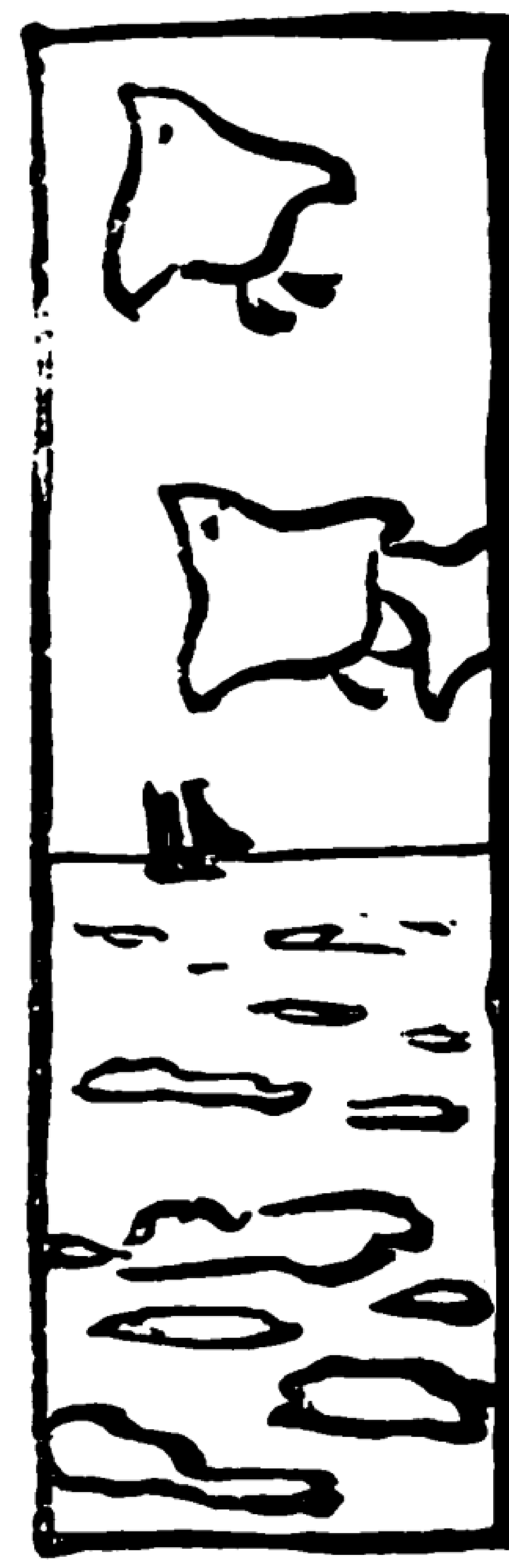
紅さした雲は…夕日を慕うて行つてしまひ、
樺色も次第にうすれる。
綠の山も黑うそまる。
私の胸も曇つて來た。
私のお母樣…お母樣、
お母樣は遠い。
あの山を越して――河を渡つて、
いゝえ。…いゝえ。
あのお日樣よりも御月樣よりも、
もつと、もつと彼方…あゝおなつかしい。
あゝ悲しい。
お父樣…お父樣。
お母樣の所へ、行かして頂戴。
おなつかしいお母樣。
私は…每日、御迎へ申して居りますよ。
御日樣と御月樣との御入りなさるを見ては。
早うかへつて頂戴な。
ホーホーと梟が鳴き出した、
私の頰に涙が流れる。

○桐の花　府下三ヶ島　よし子

今朝から絕え間なしに雨が降つてゐるので、
窓の障子を開けて見たら、眠い眼が醒めた、
桑畑と麥畑との間にある桐の木が花盛りだ。
藤の色よりは紫が醒めてゐる。
今雨は多くの人に吸はれてゐる、
私は昨日あの桐の花に白い蝶が止つたのを見た、
あの高みに舞ふのを見た。
今雨が降つてゐる、どうして紫の壺はそれをうけないでみな下へむけてこぼして了ふのでせう。
だれに吸はせるつもりで。

短文

中村文學士選



○規定　短くして氣の利いた文章を募る十六字詰七行以內凡て振假名つきハガキは許さず一人一章に限ること賞は丙種を送呈す

○初夏（地賞）

名古屋　胡てふ

めつきりと暑う成つた、今前茶の間の時計が一時打つた、靜かな風も何んにもない、庭木が大きな黑い影を寫して居る、隱居所の新築最中で新木の香りが生暖い風に送られて鼻を打つ、表を金魚賣りが暑さうに語尾長う眠さうに通つた、大工も晝休みか鑿の音もせぬ靜な、靜かな眞晝。

妙手。

○野路（人賞）

川越　青葉女

柔らかい春風に五寸計りの青麥がそよ〳〵動いて居る、ぴんと折の付いた二子羽織を着た爺さん、歩きながらハークションと一つ、時は十一時頃、ぽか〳〵暖かい空を、小鳥がのどかにないてすぎた。

凡にして而も妙、

【秀逸】

○菜種

藤澤　常盤幸子

何處からか、種がこぼれて、たつた一本生へた菜種に青い實がなつた。お祖母さまは「何にもならないから取つて捨てろ」と仰在る。可愛想に此の菜種だつて無意味に實を結んだのぢやないものを、せめて實の熟するまてと其のまゝ其處へ置いてやつた。

意味深き詞、うれし。

○時

高知　桃の花

親友の露樣に、「第一の日野樣が萬朝の和歌て當選したつて」「オヤそう！だけどあの人何歲てしたつけ？」「何でも十九だつたと思ひますが」。露樣はホッと安心した樣に、「其年なら當前だわ私だつてもう三年もすれば、其れ位のことして見せるわ。」

面白い、

○山吹の花

牛込　平塚白百合

チリリーンと二三度呼鈴押すと、程なく腰元が靜に手をつかへてご用を伺ふ。ゴールドチエンンでもリングでも思ひの儘に飾つてさて、馬車かゴム輪の車に。ヴアニテーもゆる少女心には錦に包まれた氷の心、山吹は美しくとも實は結びませんとよ。

褒辭、嫉妬、警告。

○晩春　熊本市　峡よし子

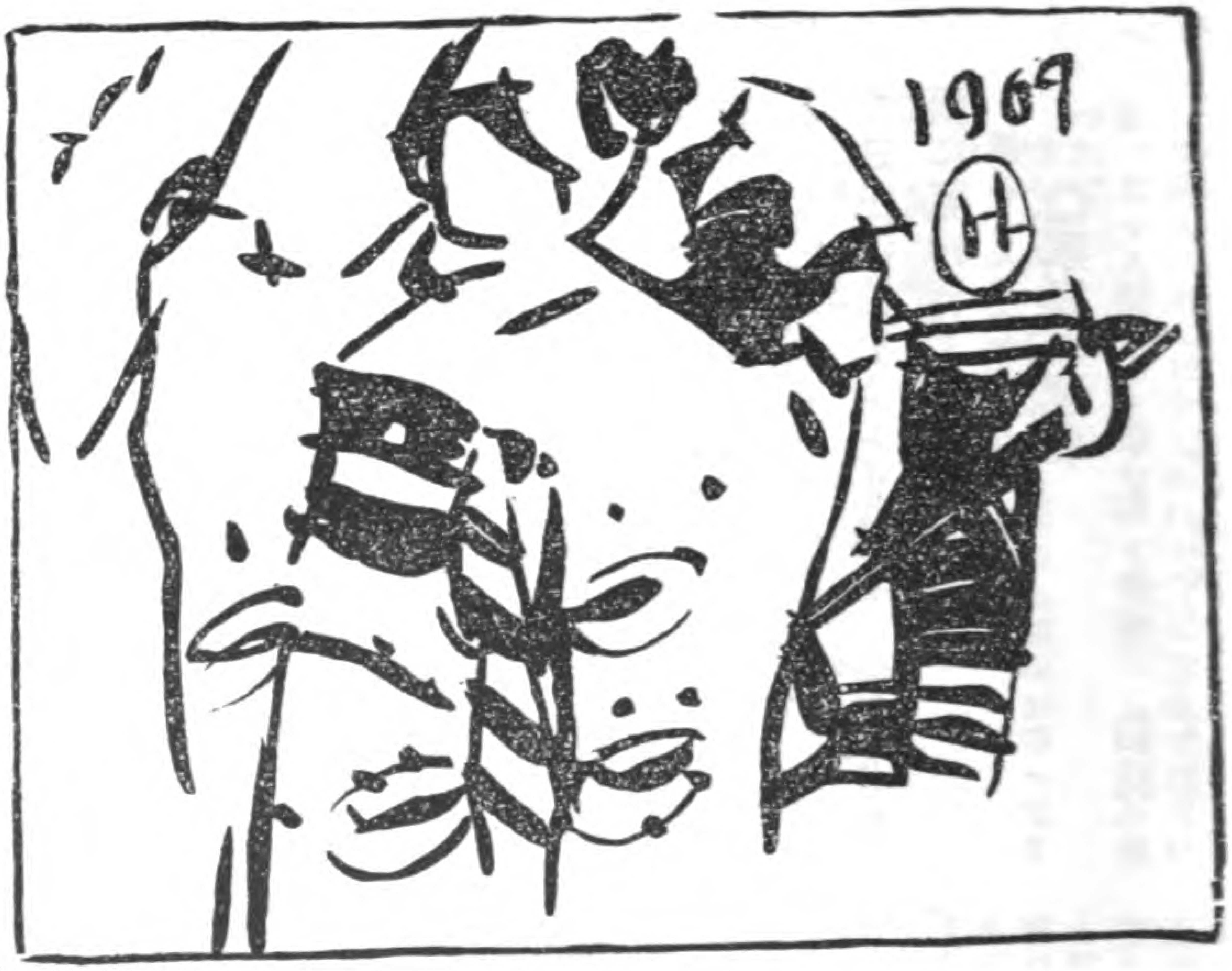
花は千古の史を秘めて地にかへる、晩春の夕べ、傷める胸を抱いて河畔に立てば夕陽西山に傾いて牧童の影徒らに長く地に曳く、岸の楊柳夕靄に煙つて天地寂靜……嗟この時遊子の胸中はた如何に？

感慨深し、

○川端　德島　野菫

きらきら、波に暖かい光がまぶしう照らしてゐる、川端の日陰の岩に里の子が草を摘んて來て遊でゐる、其姿、（さよなら）と聲してお客様が砂路を歸る姿が靜な水にはつきり映つた、紅帶、白リボン、西洋前掛が繪を見る様に

――美しい景色です。



かどづけ　京橋　三國秀子

○月蔭　高岡　篠原みゆき

葉櫻を洩るゝ月蔭は如何にも過去を想像せしめる、友と花の香渡る樹蔭て、功名の夢に憧憬れしは今宵の様な良夜てあつた、處世の憂苦を味はつた私には、あの時友と語り合つた様な功名心は再び求められまいと、つく〴〵思ふ。

穩健の筆、

○女子文壇　備後　百合子

私は女子文壇を讀んでゐると夢中になります今が樂天地だと思はれて嬉しくて〳〵なりません。ふと忙がしくしてゐる家人に氣がつくと氣兼て氣兼てなりませんけれどさてまた文壇と離れるのはつらいのです。青春の戀に醉つてゐる人は斯様のでは無いか知ら。

うまい觀察。

○城壕の邊にて　岡山市　岡本あさ子

病院の電燈が獨り物靜かな光を投げてゐる、お壕の邊に立つた。私はふとお爺さんの背で小石を拾つて頂いては投げつけ、どぶんといつては畫く波紋を見て喜んだ當時を思ひ出しました。最う十三年！いひ知らぬ寂しさが逼る。空は眞黑です。

戀しき過去

○柿の花　千葉　春枝

柿の花がはら〱と散つた。下に遊んでゐた雛の群の一羽が、それをついばんだ。傍に居た三羽が追驅ける。妾は餘り可笑いので遂吹き出した。雛がそれに吃驚して、キヨッと皆立て居る。柿の花をば地に落して。

いよ〱可笑しい、

○雨の日　韓國　原登里子

何を思ふともなく、お緣の柱にもたれて、雨にぬれた庭を眺める。昨日まで美しく咲き亂れて居た花も哀れ一夜のうちに地に落されてしまつた。雨はまだやまない、と何處からか濕つた三味線の音が響ひてくる、云ひ知れない、思ひが胸に迫る、こんな日に春は逝くのでせう。

戀しき事のみ思はれて……

○日記　小石川　三宅恒子

十歳から日毎染めて來た日記の色！幼心の嬉しさも悲しさも今見れば淡い〱野菊の花に似て居ますけれど、五年……十年……絶えず染めて行く私の未來の白いページはまあ、どんな色に變るのでせう？寂しく成て日記の筆をふと止める。音無き春雨に更け行く夜です。

眞にどんな色でせうか、

○家庭展覽會　盛岡　米澤白桃

お祖母樣が栗と柿の受持ちて父樣が桑の受持ち母樣は野菜物で兄樣は林檎、梨、梅、桃の受持ち私は苺と花の受持ちて毎日裏の畑へ出ては皆で一生懸命働いて居ります。やがての事に展覽會の開かる時一等賞をとらうとまるで無中。

羨やましい事です。

○何故？　近江　小西愛子

父がまだ會社へ務めて居た時分に毎日の樣にいらつして、そして來る度に屹度何か持つていらつした石澤さんが、父が會社を退いてからはちつともいらつしやらない、餘りお可しいから父に聞くと笑ひながら「世の中はそうしたものさ」と許り、何故であらう？

こんな事がわからないでは、

○夢のやうな　樺太　桂花

間に立つ。

昨日も、一昨日も、そして今日も、私はなぜ毎日この關に立つのでしやう、もしか！ もしか！ 夢でも見て迷うて來たのではないかしら、いへ全く迷うて來たのです。

中野さんのお家がよく見えますので、何日まで立つのでせうか。

○子供好

姫路　富岡　綾子

私は子供好てす、殊に三歳四歳の お子達はどの位可愛いてせう。白い頬 桃色の唇、大きな眼、小さな齒、莞爾と笑まるゝと、もう吸ひ付いて吸ひ付いて花に遊つた蝶の様、心ゆくまで 吸ひ付きます。それて私は厭世とか 悲觀とかは夢にも知りませぬ、かうして神のやうな人達と戯るゝと。

怪我をさせない様に願みます。

○何故か

石見　小松原德子

四邊寂たる夜中、ふと目が醒めた、すると天井でドサ〳〵と、今にも落ちん大騒ぎ、ネズミだなーと、成るべく思つた――若しあの節穴からギラ〳〵の目玉が覗いたら――思はず 蒲團をスポリ、眼を閉づると大きな目玉が双つヒカヒカ眼に映じた。

臆病の様思はれたり。

○全じ運命

のぎく

自分は今、縁の柱にもたれて 金魚を眺めて居る

與へられた餌をたべては フンを出す事をくり返して居る、あゝ自分もあれと全じ 運命てはないか、たゞ人間はつまらないものだと しみぢみ思つた。

樂その内にありとの 孔子の御詞をお考へなさい。

○親方と弟子

長野　川端　周子

金太、倒れたら右へ行け、ハイ！と返事と共に、ガシン〳〵、刹那ミシリ、ドシン、黒い 大木は地上へ横はりました。

金太や……ハイ……

おゝまめだつたか、あゝ 嬉しい、四方は闇がかこんで來る。

佳

○京人形

露　子

妾の本箱の上には いつも人形が飾てあります可愛顏してますが、着物と 云つたら、たしかに一昔前のてす皆は 着せかへたらと 云ひますけれど妾きゝません の、だつて 之は妾が三つの時、亡くなつた御母さんが 着せて下すつたので今はたつた一つの片身てすもの。

折角御可愛がりなさい。

○春

三重縣　花　聲　子

凝と耳を澄して居ると 遠くから鶯の啼く音がれむそうに聞えてくる、雲雀は 空高う囀きつゝ舞上つた。毎日の忙しさに 氣づかなかつた柳は若芽を吐き出した、すぐ脾の櫻は 紅の色深う今にも綻びそうてある、塀から覗いてゐる 木蓮は彩筆の先に似てゐる、スーとなまぬるい風、――もう 凝として居られない。

げに心浮き立つは春にこそ。

○乳

伊豫　淺　香

『一寸見せて御覽』と妹の 手から、可愛らしいお雛樣を受取つて、種々と 操し乍ら、肌をすかして、小さい乳房を口に當てがふと、不意に「アラ姉さん、お乳が出るの」と 餘りに 大聲て叫ぶので、私は吃驚して お雛樣を投げ出すと、憐れや御首がポクリ……。

オヤ〳〵。

○いやな事

丹　波　鹽見喜代子

私は朝起きて 節々のゆるんだ、けだるい體てお床をあけるのと、町へお使ひに 行かせられるのと、道て嫌な男のお方に 出會ふのと、數學の先生のお顏を 見るのと、死ぬのと、お嫁に行くのが一ばんいやてす。

今にいやてなくなる事もありませう。

○五月雨の宵

長野市　西條宇女子

蕭々と降り續いた雨は 宵に入つて漸くやんだ、

だが空は眞暗て星の影さへ見えない、濕ぽい空氣が肌にヒヤリ／＼とする、キヽと鳴く不如歸の聲は闇に消えて邊りは唯暗、遙か西の方に唯一點、赤色の弦月が柳の枝をすかして見える、人の殺さるゝもかかる晩には多いのだらう。
陰氣。

○琴の音

大阪　平尾とき子

お向ひから床しい琴の音がもれて聞えます、私は想像しました。髷は高島田金の水引銀の平打當世流行の縮模樣帶は立矢の字……お琴はやみました同時に張立の障子にくつきり寫つたは似ても似つかぬ髮を分けた若い男のお方、まあ何うてしよう。
驚いた內にやゝ安心の氣味はありませんてしたか。

○世界一

美千子

當地の芝生山といふ所に高さが、何間といふ程の、大きな、さつきがあります。見物に行つた人が、大層美事てすれおそらく日本一てせうと云ふと其の持主は大層氣を惡くして、世界一だと賞めれば、滿足しないさうてす。
いゝ心掛け。

○螢

加賀　美子

岸の柳に、すつきりとした三日月が懸つて。涼風が颯と浴衣の袂を拂ふ。川邊の蘆に螢が小なる光を放つて、それが亡き妹の魂の樣に。思はれるぢつと見て居ると突然後て姉樣螢捕つて。可愛弟の聲、噫、如何て捕られう儚ない露を吸つて。生きてる螢を……
結句味ふべし。

○鐘の音

若狹　津田たき子

鐘が鳴つた、靜かな野べに、古色を帶びた、餘韻が長く嫋々として。馬を牽きたる男、兒を負ひたる若嫁鍬を肩にしたる老爺、目笊を脇にしたる嫗、麥笛を含みたる小童。みなその音に平和と希望とを感謝しつゝ家路を辿る。
かくて日も靜に暮れる。

○ためらひ

名古屋　渡邊みつ

眞夜中にふと眼が醒めた。私は若しや夢が——慈母の死んだ——現實されはしないか？ともう心配て々々暗い影が胸を掩ふ……スルリと夜着を脫けて、隣の御室を窺うた。明けやうか？若し御眼醒になつたら……ても心配だワ。私は障子に手をかけた儘耳を澄した。
心臟の鼓動が……。

○石南花

西多摩　三ケ島よし子

冬も枯れないゆづり葉のやうな葉の上に棒のやうな蕾が出て海棠に似た色の花が躑躅のやうに集まつて咲く庭の石南花、盛も長いので來る人毎に種々に賞せられましたが學校の先生に「趣がない不完全花てすれ」といはれた時私はつくづくと赤い花莖をみつめました。
學者の長所にて又同時に缺點たるところ。

○あはれな身

十勝　雨內靜江

嗚呼私は何てこんな處に來てをつたのか、あの、親しかつた、たか子さんと、別れて、熊棲むてふ、山徑深き此の里に、またとたかさんの樣な優しい友はないものを。柏が一面鬱々たる中に、ポチンと遺られた町の淋しいこと。ああ、今更此のあはれな身を訪ふものは、あの月あの星それに殊更障子に莞ぶ春風とばかりてある。
ほんとに寂しいてせう。

○文明

美濃　堀ときわ

二年目にお歸りなすつた芳子さんに遇つた時私は吃驚しました、內氣な溫和しい娘さんて在つたお方が、言葉から格好迄嫁に氣取て居らつしやつて人を馬鹿にした樣な目付文明文明と口癖の樣、怎しても親いお友達て在つた芳子樣とは思へませぬ。
よくある事てす。

○到來物

名古屋　珠子

食べてしまうは如何にも惜しいと、もらつたお

菓子を戸棚の奥へしまひ込んで五六日。「ヤア奥くなつたぞ、早く食つてしまわんか」今更ながら大狼狽のお祖父様。さすがに執心深かりし清坊も最早斯様なつた上からは「僕アいらないや、そんなのは」同時に申込んで、一言の許にはねつけられた兄さんに時子。向ふの隅で、ウフ……オホ……。

祖父の落膽顔察しえたり。

○夕暮

大阪　鹿島綾子

土藏の白壁には赤い／＼夕月が彩られて、何處からともなく工場の暮六時の汽笛が聞えて來ます。鴉が二羽啼いて故郷の方へ飛んで往きますので、妾は其鴉の行衛を凝と見守つて居ました。すると何だか急に戀しくなつて來て思はず涙が零れました。いつの夕べか不明ですね。

○感

熊本　雨森あい子

コトッと柱時計が止つた、小さいさびしい音だ。妾もこの時計のやうに、命の子マが弛み弛むで、何時かは休息する時があるのだと思ふと一時に何だか悲しい。

未だ云ひ足らぬところあるべし。

○お花

明石　黛汀女

私は毎日學校から歸りに、道を迂廻して、淺野山へ寄つて紅や白の躑躅を折つて、お母様のお墓へそなへます。これを知つて居るものは、一人もありません。躑躅の花が咲かなくなつたら、今度は、何に致さうと、考へて居ます。

やさしい心掛。



スケッチ　室蘭　大板なほ子

○兄弟

河内　倉とし子

私は弟が三人と妹が二人あります。それて、いつも一人娘の春様が「本當にあなたがうらやましいわ、にぎやかてさぞお樂みてせう」と云はれますが實際はなか／＼喧嘩の仲裁やらご飯のお手傳やらて筆持つ間もない位。

彼は善をのみ見我は惡をのみ見る。

○俳句

三田　橋本とみ子

此土手に登るべからずと書いてある、警視廳の制札が、和田倉門の土手に立てゝあります、學校の歸りに毎日それをよんて往きましたが、此間其札を何の氣無に、「此土手に、登るべからず、警視廳」と、續けて讀みましたら俳句になりました。

古くから云はれたことです。

○女

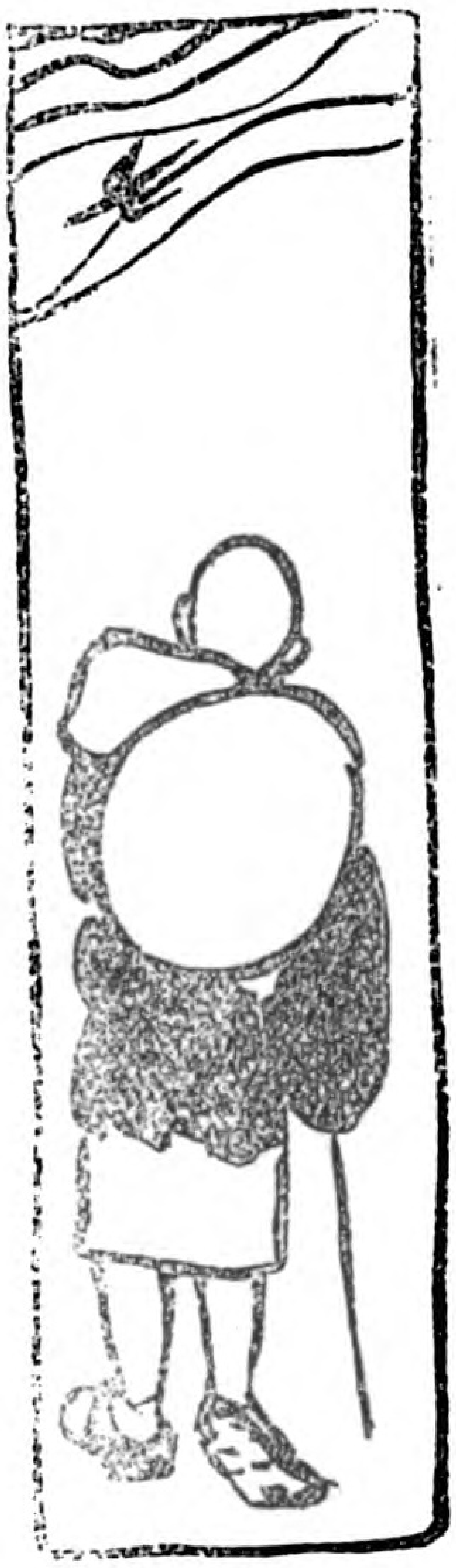
靜岡　鈴木砂千子

五月雨上がりの夕方、私は二階の窓から首だけ出して痛む頭を風に當てゝ居りますと工場の歸りてせう、鉢卷した女の子にヤン／＼泣く子を負ぶせて片手に破け傘と穢ない風呂敷に包むだお辨當箱を提げ泣く子の背をヨイ／＼叩きながら行く女の人を見ました、そして私はアレても一生かと泌々感じました、て頭の痛むのを忘れて急いて机に向ひました。

さなり。かゝる人又美しき完全なる一生を送り得べきなり。

俳句

内藤鳴雪選



○規定　同じ材料で二度以上使へば陳腐になるとか剽竊になるとか言ふ人もあるが餘計な心配である前の人と異つて他に轉換して活用して居れば幾度同じ材料を使ても差支たい（鳴雪）一人一句限賞丙種

○（天賞）

白百合に人つれなさの歌もあらん　山口　西園きみ子

○（地賞）

漂ひて海に一夜の月見舟　新潟　村山潮子

○（人賞）

朝顔に朝風水の如きかな　横須賀　齋藤松代子

【秀逸】

春月やわが持つ花に影を見る　伊勢　つるへ子

山櫻散りて吉野の鮎となる　大阪　白梅女

凩や秋の夕殘りの破れ笠　大阪　美津枝

凉しさや淀のお城に灯の燈る　大阪　稻本清子

河骨や燈心蜻蛉水に來る　横濱　鈴木重子

春雨や小褄かゝげて花の下　長崎　秋山虎子

仇名して土筆の坊と申しけり　肥後　豐永みどり

銅像に油蟬なく西日かな　横濱　伊藤千代子

春の水淺きに鶴の歩みかな　下谷　魚谷浪子

紫に山みな高し春の空　下總　ふさえ女史

音樂の會の踊りや朧月　能登　播田清子

更衣妹は眞白くなりにけり　茨城　宇野ふみ子

杣人の焚火するなり春の雪　丹波　並河なみえ

五月雨のしげきが中に菖蒲かな　石川縣　石本縫子

栗の花や湖南の風の喚き　兵庫　河井つれ子

山越えて里一面や桃の花　新潟　渡邊やい子

入港の南蠻船や朧月　宮城縣　北里みち子

水汲めば手桶に春の魚二つ　札幌　董子

燈籠に灯ともせば花散りにけり　京橋　三輪李子

繪貝皿あらへば蛙泳ぎ去る　弘前　對馬てる子

一字あり瀧のしぶきて駒鳥の聲　弘前　三浦かをる

炭がまの側に咲きけり白菫　石川　ぬい子

片かげる信濃の山や青嵐　信濃　ふみ子

稚子を膝に立たせて衣更　岐阜　林庫子

梢を干す籠の庇や冬構　弘前　西澤みつ子

築山に女松なつかし夏の朝　札幌　竹中巴子

稻掛けて遠くなりたる君が家　若狹　山田小濱子

麗なる五重の塔や夏の月　みさを

出代りの身の上語る燈かな　青森　掛端杉女

玉人の座石冷たし玉の屑　南筑　城戸風韻

夏の夜や佳人の群れて連歌かな　府下　並木蝶子

陽炎や塵の煙れる田舍路　陸奧　賀智子

川水に月動く夜の風凉し　茨城　梅子

ひるのかれながれ來る野の長閑かな　諏訪　時雨子
野の夕百合折れば白き蝶飛びぬ　京橋　佐菊子
涼しさや水髮にさす黄楊の櫛　大阪市　木村花子
鴫立つや川添三里草の風　百合子
明月の中切つてゆく烏かな　麹町　牧野銀杏庵
朝戸出の袷涼しき若葉哉　伊豫　浮草
かげろふの我身はなれぬ暑さ哉　岐阜市　篠田とみ子
圓につる蚊帳に月の白さかな　大阪　龍子
木母寺の夜は靜かなり子規　大阪市　鹿島綾子
葉がくれの花を牡丹の姿かな　伊豆　さわらび女
夕立の後を素足の女哉　下總　胡蝶女
葦原に水雞啼くなり月暗く　下總　若草舍　桃の人
夏の月辨天堂の堂巡り　下總　渡邊恒女
帆洗ふ里の男や杜若　下總　篠原たけ
玉襷掛け干す稻や神の秋　上總　石川靜子
かへらんかわが家もなき秋の風　門司市　鈴木靜枝
糸遊や野守の庭に機をへる　靜岡　池田芳子
高殿は月に更けゆく踊かな　神田　木村紅花
海苔干すや眞晝靜けき磯の町　若狹　前川蝶夢子
山門に尼君まして躑躅咲く　廣島縣　靜波
泉水に影をうつして白躑躅　紀伊　室井白萍子
鳥の巣に夕日さしこむ靑葉かな　山城　山田幸子
妹をつれて夏の月夜にさまよひぬ　長野　小池一子
下手のこぐ舟は流れて猶ほ涼し　碓井郡　明星
女房の紅皿誂せて春の逝く　紀州　榎本千鳥
行春の一夜返歌に苦吟哉　紀伊　鳥淵品子
吾人の顏みな赤し山の火事　熊本　雨森あい子
湖の水が溢るゝ月夜かな　備後　藤井國子
月落ちて湖上淋しく杜鵑啼く　靜岡縣　波多野いち
物戀ふる春の夕日の濱邊かな　在米　秋山初子
短夜の窓より人を起しけり　讃岐　衣輪たか子

燈籠の長き火かげや池の水　兵庫　祥子
窓の月落ちて藤の花朧　靜岡縣　大瀧貞子
桃散りて破れ障子の風ぬるし　遠江　淺倉ひさ子
白帆一つ歸る浦輪や杜宇　奈良　白ぎく
亡き妹によく似た雛や春の燭　明石　落葉子
テニスする芝生の上の小春かな　備後　かず枝
鳥雲に入るや遊行の笠の上　越後　中島入寸女
雨に暮るゝ櫻若葉や華頂山　越後　藤原泣黒子
いざ行かん岩の淸水を嗽ぎ　牛込　千鳥
炎天の道に川あり水涸れて　兵庫　杉山春翠
東風吹いて君が手植の櫻咲く　土佐　桃の花
更けて行く夜のしるしや荻の音　長野　川端靜子
あぜ道に螢待つ間を月入りぬ　岡山縣　すみれ女
掛香のそれもなつかし蟄殺起　水戸市　島田徽潮子
春の日やぬれてはかわく濱の砂　京都　井上すみ子
竹植へて月が出るなり竹の隙　茨城縣　寺門いち子
若葉せし山に誰が焚くかゞり哉　信濃　野中小よせ
うたひつゝうゝる早苗や雨一過　讃岐　白井雪水女史
五月雨の家このまゝに朽ちぬべし　相模　とよ子
明け鴉暮れ鷄啼く山の村　東寺尾　大平直江
忘れじとちかいの神や子規　茨城縣　鈴木きよ子
戀するや草葉の露の夏の月　茨城　文子
朧月花盜人の小唄哉　水戸市　根崎とら子
桃咲きて背戸に月見る人の姿　北海道　今村りせ
そは〳〵と急ぐ女や蟬の聲　京都府　中西なみ子
五月雨に聲も濡れたり時鳥　秋田縣　いな子
踊り合はす袖の匂や薔薇の花　長野　津金泣月
繪はがきに春惜みける發句哉　秋田縣　佐々木萬子
陣頭に駒いなゝくや青嵐　大阪市　草村君子
風涼し湖水に月を動かして　上總　奈樂子
蛙鳴いて雨つちくれを動かしぬ　陸奥　山田とめ子

教への庭



○規定　此欄の投稿は女教師の方に限る十六字詰十行賞は丙賞

○新入學（地賞）

名古屋　多美子

四月一日、赤いリボンの夢二の畫いた眼のような子や、荒い飛白で上下揃へた馴々しい男の子が、五十人ばかり入學した。「皆さん私が放課ッと言ひましたら、（自分はこの時兩手を高くあげて）ドッと一所に立つのですよ」と。放課ッ。すると、皆一齊に「ドッ」と一聲高く叫んで、兩手を上げて立つた、その顔、その風……自分はもう可笑しいといふ境を通り越して、狼狽の結果は泣きたくなつた。噫如何して敎へたらよからう？……。

○歸りたい？（人賞）

山城　木の花

子供を遊ばしておいて、皆が用事をしてゐました、すると五六と一二年とが包を持つて歸ります、三四年も包をこしらへて歸りかけますので、お歸りなさいと申しましたかといひますと、妙な顔をして默つて包をしまひます、後の方では何か小言をいつてゐますので、「歸りたいのですか」「歸りたくない」と申しますけれど土曜だから歸してあげますと、もうしました、喜んで包を致します、やはり早く歸りたいのでせうといひますと、歸りたくないといつてゐて包をこしらへてゐます……。

○野外敎授

山口　なでして

尋常五年に鄕土地誌を敎へるため一日山に登りました。ここは町一面が目の下に見えますので、地圖について敎へるよりはよほどよくわかり、兒童はよろこんておぼえました。それから思ひ思ひに遊び取つたつつじの花て花行列をして歸りました。翌日其綴方をさせましたら誠によい成績てした。野外敎授の効を今更に深く感じました。

○姉と妹

播磨　紫水

私の受持に姉妹もと同學年のものがあります。どちらも尋常四年なのです。そして妹の方が何てもずつと、よくできるのです。ある日、姉の方に、「日本の三景は何處何處か。」と問ひますと、例の不得要領な顔をして、ボンヤリと、私の顔を見てゐます。ソッと妹の顔をのぞいて見ては、私の顔を見、ソハソハして落付かないのです。私はそれを見て、可愛さうになつて來て、再び問ひかへす勇氣がありませんてした。

○同情の涙

伊知子

尋常三四年に復式の修身書て二ノ宮金次郎先生が御兩親に死なれて兄弟三人後に殘された時の先生の御心の内は如何だつたらうと私は涙ぐんて話して居ました。女生徒は皆頭を下げて泣いて居るのを見ましたら遂に最う話すことが出來ず中途て止めました。

○感染

大阪　管野政

場所が場所だけに妾の受持つて居る女生徒三十名の内八名まて遊廓から通ふて居ります、運動場などて襁をとつて可笑しな風に藝者の眞似して居るのをチョイ〳〵見受ますが或る時皆さん大きくなつたら何になりたいてすかと問ふと色々な可愛らしい答があつた中に藝者さんにと云ふのが五名あつた、妾はフト不安な一種何とも云へない嫌な思ひがしました。





○規定　毎號課題を出して諸嬢の餘興に供す十六字詰十行迄一人一章に限丙種の賞を送呈すべし新題は卷末にあり見落す勿れ

我が机上（課題）

○女文字（天賞）

牛込　千鳥

私が上京後四五日しての或晩、近所の古道具屋から兄さんがさげてゐらしつたのがこの机。次の日私が小刀の瑕跡やインキの染て大部汚れたその上を拭ひ去らうとしたら、端の方に優しい女文字で『今日まではこよなき友と思ひしに明日は誰が家の窓に侍らん』とほのかに讀まるゝ薄黒の走書。私は今も讀書に倦むだ徒然には時々これに眼をやつて、この机の以前の若い持主を想像して見ては獨なつかしく思ひます。

物語めきて興味深し

○裁板兼用（地賞）

韓國　原登里

旅の身の、机と云つても持たぬので、三尺程の裁ち板に八寸程の脚をつけたもの、之れが私の机、此上で縫物もし、書きものもするのです。鋏や物差の乘る事もあり、夜は例も硯、筆、紙、女子文壇が乘ります、其の外には何の飾もありません。今も此の上で書いて居ります。折ふしおかしさに、一人で笑ふ事もあります。けれど、此上で書いたものでも誌上に乘れば結搆だと思ひます。

女ならては用ゐぬ机

○獅子（人賞）

岐阜市　篠田とみ子

瀬戸の秋月さんから、私の誕生日に祝品として獅子の置きものを送つて下さいました。處がその添書に、今日から此獅子があなたの御机の上であなたの一擧一動を見はりますから……燒芋をお上りなさる時壁の方をむけないように願ひますよ、としてありました。こう言はれてみると、うしろめたい樣な氣が致しまして、机の前で何か頂く時がありますと、箱のふたでぽんとふせたり致しますわ。

奇警を愛す

【秀逸】

○弟と共同

信濃　優梨子

私の机！と云つても、今年尋常一年の弟と一所です。私が美しい花でも挿して置けば、弟は花びらを机の上に一杯に散らします。私の本を机の上へ載せて置くと、何時か弟はそれを下へおろして、自分の本をチヤンと載せて置きます。此四月から、私の机でも私の思ふ樣に一日もな

つて居りません、

○犬

府下　けふ子

私の机の上には兄樣から送られたカードの可愛い犬が飾られて有ます、此犬は八方にらみて私がどこへ行つてもぢつと見て居ますですから何だか番をされてる樣な氣がしてつひ勉强致ます。私が嬉しい時見ると矢張犬の顔も嬉し相です又腹立た時見ると氣のせいか犬の顔も恐ろしく見えますですから私は此犬に兄樣のお心がこもつて居るのだと信じて居ますの。……

○ありのまゝ

阿波　曾我部菊子

一、人形樣。明石からのお土産の人形樣が筆短册で居られるお姿の置物時によると私の筆をお頭へもたしかけます。

二、水いれ。京からのお土産。府草の金模樣がついてる上品なんです。祖母樣がいつも水を入れてて下さいます。（花世。これでいいか）つて。

三、手紙さし。只今さしてあるのが、山田邦樣。きし子樣。韓國からのが三通です。

○六十年

姫路市　富岡綾子

私は日々お古い大きな机の前に座ることに、「六十年」と云ふことを思ふのです。滑かな机の面には右向に左向に荒彫の大小の文字――神武、攘夷、勤王、討幕などゝ四十餘字――が埃に埋められてゐるのです、これは當時祖父さまの思はず刀で彫られたのです。それから六十年。不成蹟ながらも私はこの世紀――開化――の數奮をこの机上で受けつゝあるのです。殊に不得手な英書研究をせうとする時は、わけて「六十年」を思ふのです。

○即興詩人

四谷　靜江

硯箱は父樣の樺太土産とゞ松にアイヌの小刀細工、墨をたつぷり含んだ小筆はかなが立てゝある。筆筒は砲彈の空なのを父樣から、深紅のアネモネ二輪さした花瓶の側に復活日に戴いたカード、左手には病骨錄の上に小形の聖書と讃附の讃美歌がある。前の曆は病みし時多くの友が手製の賜物、今日は、「主は我が牧者、吾乏しき所なし」と誌廿三篇を書いて「文子」としてある、今明いて居るのが即興詩人下卷の五十八頁。

○飾り物

常陸　木村那賀子

右手の方には、小學時代の賞與の本が六册、其次はお隣りの修さんから頂いた加賀の千代子俳句集、他に食道樂合本四册、乳姉妹前後、中央には民子樣が京都見物のお土産、關西名所寫眞ブック、親友のが七枚、次にはヒイお祖父樣がお用ひなされた蒔繪の硯箱、左の方には四季をり〳〵の花を挿す花瓶、之だけ置きならべた机上は、本を讀むだり字を書いたりする所がなくて、あたら床の間の前に、飾り物となつて居ります。

○使ふだけの筆

徳島縣　吉田紫花

紫檀の机、蒔繪の硯箱などは及びもない、妾の机は白木製の粗末なもの、小學時代に學校で貰つた梨地の硯箱と、陸前松島の土產で一面に貝がらのついてゐる硯とが机上の寶、それに鑿痕の植物だといふ猿の面の樣な木目のある筆立てには使ふだけの筆が二三本、禿びた筆を澤山置くのは嫌い、鉛筆はいつもきれいに削つて置くのが好き、書物は讀む時々に出します、折々妹が蓮だの鈴かけだの取つて來て水入れにさして呉れるのは嬉しいが、ぬけてきたリボンを其儘机の上になげ出して行くので、其度に疊んでは硯の下に敷いて置きます。

○無粧飾

下谷　望みなき人の子

私だつて風雅のたしなみが無い筈ではないが、諸嬢樣の樣に別に裝飾とてはありません、只だ赤き机掛を掛けたる一脚に右手の隅にインクと筆立を置くのみです、――之も日日の必要に餘儀なくされる爲め、色々な物が目に映つては眞の勉强は出來ないと聞いて居りましたから。其れでも時々は美しい花を飾りますが、讀書の時には必ず下します。

○鏡

淡路　加藤菊子

寄宿舍に居ました時からの習慣で私の机上には文房具の外に鏡が乘つて居升、それを妹たちが見習つて、皆それ〳〵自分の机上に鏡を立てゝ毎朝髮を梳いて居ます、以前は亡き母さまの鏡

盃の前て先を爭つて居ましたが、此頃それがなくなつたゞけても、姉となる身は嬉しく思ふのてす。

○教科書　　牛込　塚原けん子

藍色の机掛けの上には右側に硯箱があつて、その前にインキ壺が赤に黒と二ッ並んてあります。その前に筆立があつて、眞正面は枕時計なんてす。左側は私の好きな本ばかり入册並んてあつて、一等上が女子文壇、その次ぎが藤村様の詩集、その次ぎが秋聲様の母の血と段々見下ろしましたらば、嫌やだわれえ、教科書が一等下なんてすもの!。

○卦算　　火阪　的場一葉

私の机上には、一つの石の卦算がございます。丁度私が入つの春、父と故郷の双子山に遊んだ時の事てございました。ホロ〳〵と散る山櫻な何所までもと流して行く谷川のほとりに、白い可愛らしい小石が一つ、ころがつて居ました。けれど惜しい事には、一面に、點々と茶色の斑紋がございます。私は歸ると直、懸命になつて其斑紋をとらうと、他の石てこすりました。はたして斑紋はとれたてせうか。九年たつた今日、斑紋は依然と、九つございます。

○母の面影に　　栃木　しのぶ

右の端には硯箱と小竿の水入、その向ふには小さな鏡と櫛がおいてあります、左の方には産婆學、藥物學、解剖生理、女子文壇、日記帳、バイブルに聖書の友、讃美歌などがきちんとおいてあります、これらはみんないく萬かの汗水が心を同じうして產み落した分子てあります、又毎日目のとゞく様に日課表と、天國にゐます母上の面影ものせてあります。

○まア　　丹波　鹽見喜代子

私の机の上は大變なのよ。いつも赤や青の原稿紙が撒き散らかしてあつて、それを取退けるとやう〳〵二三册の雑誌と、先の禿びた筆が十二三本ごろ〳〵してゐます。流木のまゝて上散もなく、右手の硯の向ふに、香油の空罎へ根のついたまゝの蓮がくしや〳〵と挿してあるばかり。皆様に御覧に入れたら、まあ!と眼を圓くしてお驚きなさるてせう。

○机上の花　　土佐　まさ子

けさ露にぬれて咲いてゐたばかりの花が何だか懷しふて摘て花瓶にさしました淋しい夕方一人机に向ふ時は必ずこのばらを眺め讀書に疲れた私の目はいつも〳〵淸き花の奥に迷ひ入りますあゝ私は人にこそ云はない試驗の成績もこのばらにのみは語りませう　そして畷い花の息も嗅ぎませう惡の水は朝夕注ぎますけれど美しい色はもう榮へないてせうか私は只花の命の永かれと祈つてゐます。

○机と我　　河内　木村しま子

文壇か何かゞ二三册、切り立ての薔薇か撫子が粟田やきの花瓶にさゝれて、硯箱のふたに影み

せて居る時は、私が消い想に耽つて居る日、遺花のお道具の乘る日は、よろこびの頰に上る日、徒書された巻紙の横はる日は、愁にしづむ日、くし、かんざし爪箱手帖と不行儀に行列してゐる日は、髮もとかずにお床に横はつて居る日て御座います。

○妹の轉寢　　下谷　小川友子

今し方まで驛突をお人形のお布團だと云つて、遊んて居た妹。兩手をわが机の上にして轉寢をしてゐます。正面には軍服姿の兄の寫眞を飾り、其の側に五六册の本と文壇があります。此文壇は昨日來たばかりなのに、今朝弟と妹が口繪を見んとてひつぱり合つたので、表紙が破れてゐます。あたりは寂として只「スヤ〳〵」と妹の寢息のみ姿は靜かに、表紙の繕ひを初めました。

○古い机　　常陸　初澤さく子

百年も前に寺小屋て用ひたような、まつ黒い疵だらけのわが机の上には毎月毎月僅かの月給を裂いても、必ず送つて與れる優しい兄様から頂いた女子文壇が二三十册、其の外には何の飾りもありません、だけど私はこの机に向へば、どんな淋しさもどんな悲しさも自然と忘れてしまひます。

○母の晩年　　根室　弦子

ま、貧女にも似合はない此の机の殺風景な、それもその筈一頁張りの小机の正面には亡母様の

病中の寫眞に薩摩燒の一輪さしに造花が一つさしてあるばかり、ふとした事から落目になつて其どん底に落つた時母樣は病みつかれて養生も出來ず遂に逝かれた、その時何時迄も目下の心持ちて……後はたゞ涙てした、間もなく一家は四國からこゝへ渡つて巳に五年の春秋をすぎ今ては その日〳〵に困る樣な事はないが、そこは女のはかなさ人の美服が目について羨やましくなる、その時、こゝに端座瞑目して、昔は御家老の姫樣てあつた母上の晩年を思つてあきらめますの。

○清書　山城　木の花

修身の時間に、二宮金次郎先生の事をお話致しました、後それを綴らしました、大へんよく聞いて居たと思ひましたら、どれが惡いといふ樣な作文はありませんので誠に嬉しうございます。今その作文が私の机の上に山積みになつてゐます、可愛い子供の お清書も積んてあります、これが一週間の力の 固りかと思ひますと、悅んて甲乙丙の印を つけます、私はその子供の悅びがすきてございますもの……。

○聖書　信濃　うめ子

机の上には私の最も愛する 千島の姉から土產に頂いた 一輪挿に、幼稚園より貰つた眞紅の薔薇がさしあります、 筆立の側に 姉樣から揩緬て拵らへて頂いた兎と小さい鏡があります、右の方には聖書と讃美歌とが 積むてあつて前には無邪氣な子供の繪葉書が飾つてあります、さてこれらは 皆私の慰藉者て、眞紅の薔薇は私の目を賑はせ、鏡は私の心を清くさせ、聖書と讃美歌は父母て、繪葉書と兎は私の妹てよく私になつきます。

○四季　德島　思出草

私の机の上に 著物のあるのは復習の時ばかりにて常はたゞ硯箱と私が水をやつて育てゝ居る小さな植木鉢とを 置いてありますそれて私は四季中部屋に居りながら 青葉或は紅葉落葉などを見つゝ此生木の變化すると共に自分の智も進みうつゝて行く樣にと勉强致して居ります。

○慰藉者　奈良　白ぎく

事務室の机の上に、始終置かれてある 一輪挿の花瓶、これには奇麗な花の絶えることはありません、花が萎れる頃になると、まだ八つ九つのお下げの可愛い敎へ子が、交々持つて來てくれますもの。今は美しい 彼等の頰のそれのやうな、薔薇の花が 挿されてあります、愛兒の無邪氣な、天眞爛漫な 椅が一一、現はれてゐますもの日日の授業の疲れも、 これて慰められ るのてございます。

○太古の硯　青葉女

白金巾のさつぱりした 机かけの上、右手が硯箱、黑ぬり波に千鳥が二羽、父樣のお古る、硯は去年倉の隅からさがしして來た大古の遺物支那て山來た得難い物とは鑑定して下すつた先生の お言葉。ずつと手前は、透明な硝子びん、清い水の中には八重山吹が さしてある、 左手の方には雜誌やその外いろ〳〵、一番眞中には 私の愛する〳〵お人形さんが友禪のお召を着て大人しう鎭て居ます。

○ちる櫻　信濃　東條周子

筆をとるのも 雜誌を讀むにも物をかんがへるにも机の上、朝は暗い中から夕は星の光の見ゆる迄野邊に働く妾らは花をいけ花の香りをかぐのさへ机の上てす ある夜妾が晝の疲れにウト〳〵と雜誌へつゝぶして眠りますと ヒヤリと何物かハツト思つて手をやつて 見ますれば花瓶から櫻の花が……

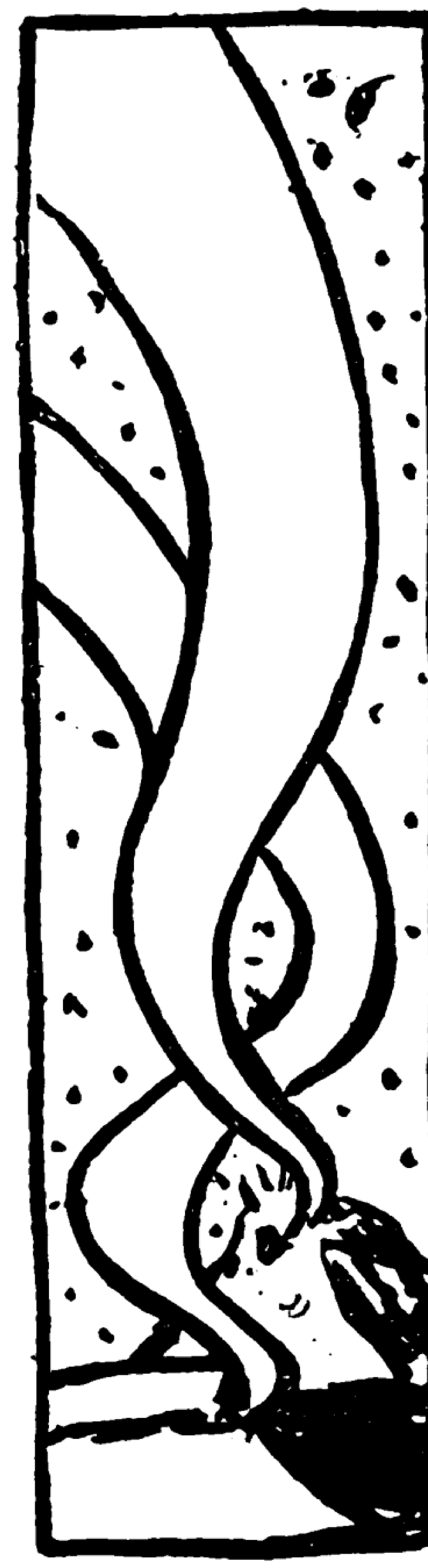
○繪葉書帖　札幌　杉葉女

夏は東秋は 北冬は西に春は南と向きを換へて置く妾しの机、兄が曾て 滿州から送つて下さつた敵の砲彈の筒に 立てゝある櫻の一枝は、圓山觀櫻會のとき手折り 來たもの、埋木の文鎭は仙臺の姉さんより送られた品、栞のいろ〳〵は 誌友のみな〳〵樣がたに惠まれたものばかり、其他友達のかたから深い お情や 新らしい智識を含まれた 繪葉書のお便りは二册のブツクに丁寧に挾まれて、 煤つた机上を飾つて居るの です。

○弓の形　相模　とよ子

私の机は、 兄さんが幼さい時から使つていたのて、弓やら矢やら 人形やら、一面に書いてあるのてす、それを私は 丹誠して每日〳〵拭いて居ます。 又小刀の疵があつて、鉛筆が陥りますから、 机懸をして置きます。 兄さんは、弓の形が上手だつたとかて、小學校の机の上にも大きな弓が彫つてありました。

新歌謠



〇規定　古來の俗謠の形式を取りて專ら優美洒脱なる作を歡迎す野卑猥雑なるものは斷る一人一章限りにして半紙又は罫紙に認むること丙種の賞を送呈すべし

〇（地賞）
山て子が泣く山師の子ぢやろ山師やもめて子はもたぬ　日向　綠蔭
古意あり

〇（人賞）
京は床しや若葉の加茂に葵祭りのねりばやし　神戸　尾崎ます子
涼し、清し

【秀逸】

〇東米山西能登岬沖の青いのは佐渡が島　越後　木島しのぶ

〇天の稚兒等は星拾ひませ私や川原で石拾ふ　明石　田中落葉子

〇青い簾に白い手かけて富士見える迄捲き上げる　信州　野中小よせ

〇牧場の青草だん／＼伸びりや馬は日増しに強くなる　長野　川端靜子

〇向のお山は今雨はれて虹が越えたよ眞先に　大阪　和田五月子

〇春の小雨に山火事消えた白いけむりに夜が明ける　四ツ谷　味方こう子

〇鎌で鉛筆削つてわたし文字を書きます田の畔で　信濃　東條周子

〇妾しや十八未だ未だ子供肩上げ取るのがはづかしい　北海道　淺川華子

〇春の女神のたわむれかいなとけては結ぶ糸やなぎ　石川縣　清香

〇なさぬ仲とてあれいぢらしい髮を結合ふ姉妹　臺北　山口嘉子

〇月もよろしいみなさん今夜舟で一晩遊びましよう　新潟縣　土田りた

〇花のお江戸は妾しや行かないが叔母の土産の繪て知つた　大阪　西戸政江子

〇若葉木蔭に妹のまろ寢どんな夢だか覗きたい　大阪市　草村きみ子

加賀美子

花に結むだ胡蝶の夢がさめて青葉が繁り行く　滋賀縣 中守久子

○赤いたすきを十字にかけて聲を自慢の茶摘みうた　高岡市 後藤みゆき

○紅い椿のなげきは何よ今日も涙をはら／＼と　釜山港 富永清子

○花にや今年も盗が來たに何故に人には二度と來ぬ　石見 德子

○彼方は櫻で此方は桃てなかを行く人迷ひます　大阪 中野喜代子

○奈良は淋しや三笠の山に牡鹿啼く夜の一時雨　三重縣 入亜子

○消き月夜に光を浴びて笛ふく姿が目に浮ぶ　伊豫 あさか

○妻よ母よと云はるゝよりも矢張り海老茶でゐたい主義　岐阜縣 村井かれ

○長良川には鵜飼の舟が篝つけます七月にや　伊豫 浮草

○風にちら／＼散る花びらを蝶が追ひます追はれます　大阪 とき子

○九年經つたら私は二十九末の妹は十歳になる　長野縣 小池天涙

○薑石鹼の香に送られて私しや靜に湯屋を出た　韓國 厚登里子

○戀の愛のと云ふたとて實んの親の情にや勝りやせぬ　靜岡縣 波多野いち

○父は闘京 母懐京都 妾しや濱松 波の中　山口 酒向とし子

○何とまつかなあの椽のぼたんとりたいけれども他家の庭　神田 足遂はる子

越しとふないが越さにや行かれぬ御城下　おぐさ子

○春のかすみは七重に八重に君の住む島見えぬ迄　茨城縣 橋本光子

○家の人達邪魔をすれば妾や夜中に歌さらへ　名古屋 たみ子

○同じ女と生れた甲斐にや振袖姿もして見たい　常陸 木村那賀子

○咲いたと思ふとすぐ散る柿の花はこまかな白い花　三河 永田舞鶴子

○出來ることなら昨夜の夢を寫眞にうつして飾りたい　美濃 芳子

○兄は紙漉妾は織女職はかわれど家のため　秋田縣 良子

○夏が來たとて百合姫樣は花の姿でおでむかへ　伊豆 鈴木安子

○風がそよ吹きや風鈴チリヽ窓に螢が灯をともす　岐阜市 篠田とみ子

○詩材につかへて表へ出たら可愛い胡蝶が美人草に　大阪 龍子

○春の女神の殘した臙脂の珠が咲きます撫子に　信濃 優翠子

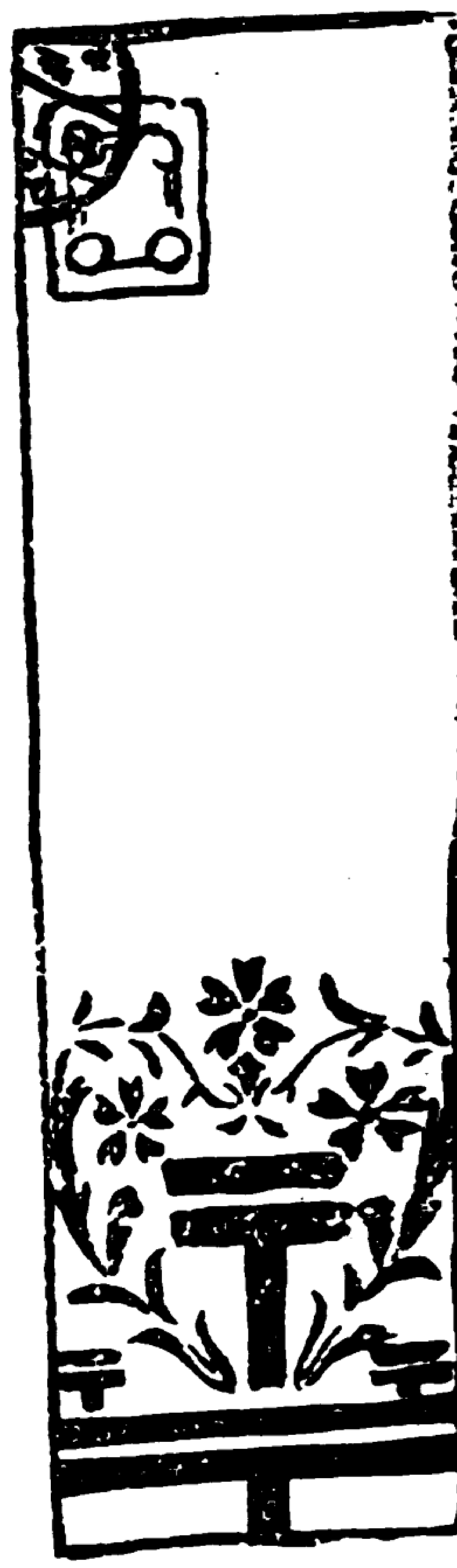
○春が遅いと思ふた信濃いつか若葉に風薫る　本郷 相楽きみ子

○刈つた野の草はお馬にのせて私しや引きます山道を　岐阜 あやめ

○藤の房からこぼれる露は草を育てるお乳やら　仙臺 泉田香子

○牡丹散せます名取の徒花によふ似た娘もふたり　盛岡 桃の山人

○夏が來た／＼山越え野越え青葉若葉に鳥が啼く



○規定　手紙又はハガキの通常の書信文を云ふ候文口語體何れにても闊達なり成るべく意味の透徹したる作を採る二十四字詰二十行以内とす一人一章に限る巻紙を用ゆべからず乙種の賞を送呈す

○從妹の露さんへ　（推賞）

藤澤常盤幸子

露さん何う遊して被入るの、私淋しくつて、困つて居りますわ。何故つて、箱根の父様母様、まだ歸つて、被在らないんですもの、隨分てせう。いつかは私只ひとり、廣い屋敷の靜寂に、心ゆくまで、暮れ行く春を、惜しんで見たいと、願つたものですが、扨て願ひの叶つた今の有様は、露さん、ちつともよかァなくつてよ。大俗物の私には、眞實に三文の値ひもございませんわ、留守はね、彼のツラ、耳の少し遠い吾助爺と松やと私てせう、お話しも何もありやしない、不用心だと云つて、まだ明るい中にすつかり戸を閉めさせて仕舞ひますし、お机の前に端然と坐るどころか、茶の間のお火鉢にかぢり付いてますのよ、するとねお裏の山邊りでこ、こ、つてふくろが鳴くの、モチの樹の葉がサラ〳〵と雨戸に當りますと、其の音でせうね、何だか知れませんが、うす闇い奥のお座敷の方で衣ずれの音でもする樣に聞えるんですもの、もう〳〵私淋しくつて、困つてますのよ、露さん、後生てすから、直ぐ被入つて頂戴よ、それにねお庭の躑躅もお池の菖蒲も今が見頃よ、兄さまの大事の〳〵寫眞機お倉からソツト出して置いてよ。二人てさんざ使つてやりませう、だけど内密よ、先日甲府の聯隊へお移りなさつた兄樣から露さんと私につて屆いたものがあるのよ早く御目に掛つて差上げたいと思ひますから是非々々被入いましよ、露さんは御都合惡くつたつて、乾度被入ると、私は思ひますわ。そうして、私は、石垣の上に出て、待つてますわ。さ樣なら

露さんの都合が惡くても乾度出て來させる丈けの筆致十分、長ろしいチヤームを有し給ふもの哉、（評）所謂「大俗物」の見たる平凡な周圍のさびしさを訴へた丈けて詩的な主觀的な要素を現はさなかつたのも畜輪としては厭味がなかつた　（又曰）

○蓬を送る（入賞）

根室　弦子

寒い〳〵と言ひ暮した根室も、內地の春の御流頂戴して、大分暖かく、そろ〳〵ストーブをとりのけてもいゝ位になりました、土筆やよもぎも餘程のびまして、たまには雲雀の歌もきこえますの、
これは毎日〳〵いたづらまぎれに、弟らが取つてきた蓬の莖をうでて皮をむき乾燥させたものでございます、沸湯をかけますと、柔かになります故、それを適宜に切り胡麻か豆腐で和へますと一寸頂かれますの、香が高うございます故、私も今年初めて食べてみましたよもぎの御きらいな明さんにはむきますまいが、おば樣のお口にはきつとあふ事と存じます、春菊のかわりに清汁の汲口にもようございますの、當地ではこれを越年までしまつておきますのですつて、
御地はもうお暑いでせうね、皆樣によろしく〳〵、

簡潔、よく調へり（許）

【秀逸】

○離緣となりし義姉へ

日本橋　佐藤萬壽

義姉樣、妾どうしたらいゝんでしやう、何と御詫申上たら宜しいんでしやう、あゝ堪忍して下さい、義姉樣、義姉樣はさぞ、母樣や兄樣を恨んで泣て被居るでしやうね、私は何だか自分の親ながら惡らしいと思つて恨んで居ります、あゝ、御父樣が被居つたら此樣な事にはなりますまいものを…皆な兄樣が意氣地がないからです、何ても母樣が一人で宜い樣にして居るからですわ――妾は悲しう御座います、なぜ此樣に御優しい、宜い義姉樣を嫌ふ人を母樣に持たんでしよう、義姉樣、さぞお口惜しう御座いましようね、御實家へ御歸りになつても御母樣は被居らないし…其れに昨日我家の國が義姉樣のお內の君やと云ふ女中に會つて聞たと申ましたが、嫂樣は意地が惡いんですつてね、姉義樣、義姉樣はまあどの樣にお辛いでしよう、妾もう御察し申して居ります、どうしてまあ此樣に御不運な方なんでしやうね、あゝ是も皆な妾等親子が惡いからです、御許し下さい、しかし義姉樣は私の心をよく御存じてすわねえ、義姉樣、神樣はよく御らん遊ばして被居います今は御不幸な御身の上もやがては幸な光に包まれましよう、餘りくよ〳〵なさつて御病氣になぞなつて下さいますな、其からあのう…一ッ只た一ッ御願ひが有るんですが義姉樣どうぞ〳〵御聞下さいまし、今までは義姉樣てすけれど、も早我家の方ではないんてすから、ほんとなら他人にならなければなりませんけ

れど妾はどうしても嫌です、義姉様後生ですから、どうぞ、どうぞ何日までも、何日までも、妾が死て仕舞ふまで姉様と云はして下さい、誠の姉様に成て下さい、ね、外の事はもう何も申ません、是だけはどうぞ御聞入下さる樣御願ひ申ます……。

もう〳〵つまらない事を云ふのはよしましやうね、妾もつと澤山書きたいんですけれど母樣に目つかると大變ですからもうよします、走り書でわからないかも知れませんがどうぞ御察し下さいませ、左樣なら

一切事情の錯綜纒綿を盡きつくして、少女の眼中たゞ眞情あるのみそれを憚らず打出したところにこの書の特色も亦存する也(評)



若　小樽　鈴木とみ子

○同窓會のしらせ

阿波　長曾我部菊子

牡丹花くづれて芍藥咲くべう相成候。御近況いかが。例の御むさた勝にて御わび申し上げやうも覺え候はず。御かんべん下され度候。さて私先月二十八日同窓會に出席いたし候。その際の樣子は次の如くに候何かさて卒業してより四年もたつての事に候へば、私存

じの人たちは五十人にもみたず候、先生も殘りたまへるは四人だけにて候ひき。會場はおなじみの雨天體操場に候。同級なりし方にして此の日お逢ひ申せしは××様等の四人、私ともに五人の連中は會場の東側に一かたまりとなりて思出話など樂しく致し候ひぬ。振鈴のしらせにいよいよ開會と相成り、寄藤校長様が「笑」といふ題目のもとに一條の講話よく心に泌み申候。次に何とかいはるゝ先生のお話しありて唱歌となり候。そは別におそへ申す「ぷろぐらむ」にて御承知下されたく。會員の講話のときとなりて誰れもおはなしなさる人見えざりしより私出てゝ「所感」——父亡後の涙と苦悶とが同窓會によりて復活と勇氣とになつた——をはなし申候。實際私は友にあひその話をききき多大の利益を得候ひぬ。しづを様。其はなし中かかる事出來候ひき。「私は前の月の七日に父にわかれました……」とまで言ひきたつて、いかにかしけん、身中をのゝき聲つぶれてしまひ候ひし故。唇きとかみしめ片手を胸にあてていつまでも立ちつくし候。この間の私の眞情の世にもあはれなるものにて候ひしと見え、一百の會員の頭自ら俛れ、かしこゝに私のために一掬の涙をそゝぎ下さるも見うけ申し候ひぬ、しかし私は強く、言はんとするだけ言ひ、出來る丈け平静なる態度をもつてはなしをはり申候ひぬ。校長様の「笑」なる御話はかくして私が同窓會よりもらひ歸りし大なる力とぞなり候ひし。しづを様。何やかやお察し下されたく候。次々は餘興にて、六段合奏や、謠曲「羅生門」や、「賢女の胸中」といふ女の二先生の御うたひなされしや「白虎隊」を木太刀さしたる裝で表情いたしたるなど、みな面白く存じ候ひき。しづを様。かかる事申すにつけても幸あらばいつかは吾と同窓會場に御拜眉得候はん。それたのしみにいたすべく候。まづは。かしこ

暢達にして淑やかなる筆つき例によりて可し。(評)

○宮まうで

千葉　東條桂子

私此頃姉様と一所に、あの、森の中の教會へ參りますの。私、クリスチャンになりましたのよ。今日から六度後の日曜てした。其日姉様は、あの黑い、房々した毛をエス巻に取り上げて、(棟厚の三枚櫛を目立たぬ程にさし、金の細緣の眼鏡を掛けて、右手には黑表紙の讃美歌の本を持て瀟洒なふうで例のやうに出て行かうとなさいました。行て見度い行て見たいと遙に憧憬れて居た教會、面白そうな讃美歌の聲の洩れて來るあの會堂、其日は何故か知ら餘計にそんな思ひがこみ上げて、堪らず御側へ走て行て、姉様、私も連れて行て頂戴て申ましたら、「さあちやんは讃美歌知てゝ、」て笑ひながら仰有るので、「知てますわ、姉様がいつもお歌ひなさるてせう。ねえ、可いてせう。」てお袖を引張て、

一生懸命おたのみしましたら、「其ぢやあ連れて行て上げませう」てやつと許された時の嬉しかつた事と云たら、着物も著替へず、すぐと御姉様の後について、綺麗な小さい花の咲き續いた田舎道を、日光に輝いて一きは美しい、あの森の中の教會へと參りました。姉様が女の方達に、「小クリスチャンを連れて參りました。」て申ましたら、「まあ可愛らしい方」だの「お姉様によく似ていらして。」だのて方々から云はれて私眞實に極りが惡かつたのですよ。聖書についての御話しに、解らない處があつたので、其は家に歸てから、姉様によく伺ひました。そうして行く度毎にお話しも段々と解て來ますし、何かしら、偉きな神様のお力を胸にうけ得るやうで、限りない嬉しさを覺えます。教會の方達も皆私を可愛がつて呉れますの。而して、此頃では、あの廣い會堂で、大勢の方達と共に讃美歌をうたうのが何よりも好になりました。

無邪氣な報告、諸兄さんも定めし破顔一笑せられた事でせう(評)

○別れし北海の友に

羽後　菊池りう子

想起を歌へるのはいつてせう、卒業するのはいつ。いつてせうと數へてる間にもう二人はいつか卒業して、然もちり〳〵に、山河幾百里も離れてるんですわね。

女の最も變化する時期、十五から十八迄を他郷に送りなすつて見違へる程御成人遊した其お姿を母様はまあどんなにお喜び遊した事か。お妹様が恥しがりなすつたつて……。懐しいわね、校舎の裏でクローバー摘んで始業の鐘をきゝもらして叱られた時代——。其頃ね、久しく皆様に逢ひたいので懐しさ限りなく母校で級會を開きましたのよ。午後一時の開會にね、私は午前九時から行きましたのよさだめし皆小踊りして集合する物と思つて……そしたらね集る者僅に十三人。てんで着物の品や髮の結び方抔をぢろ〳〵見て、まるで彼ぢやにらめくらだつたわ。そしてね電氣の點る迄の豫定がまだ日の高い内に皆別々の思ひを抱き乍ら別れつちやつたの。噫去年の花の頃でしたわね。四里許り隔つた所に出張演奏をやつたのは。花をかざした小舟の中で——私共のクラスはよく歌ふ組だつたわ——ローレライや何かを歌ひ乍ら畳の様な表の最上川の上で約した言葉、清かつたわ美しかつたわ。幾年經たとて變るまじ五十年の博覧會の時は必ず皆東京てあふ事と。彼時の皆ならもう一點の隔もなかつたわ。噫人間の心つてこう束の間に變化する物でせうか。彼時水野様一人が微笑んで、もう三年經た後皆様けふの事をお思ひ遊せと仰有つた時私共はむきになつて攻撃しましたつけ。矢張水野様は賢くゐらしつたのですね。是がまあ去年の彼人達かと思つて校門を見かへつて泣きました。貴女

は「自分が好んで勉强した許りで——勉强さへしなきや故郷の村で幼な友達に滿足して居られるのに……寂しい」と仰有いましたね、けど君樣、學問が何でせう。貴女を貴女は平和な淸い北海の岸なる村に名も位も知らぬ其鄙小女と安らかにお暮し遊せ。別るゝ前夜宅の門前の石橋の電燈の下に四人握手した……彼をも遂には忘れて了ふのぢやないかしら……。北海の春を封じてお返し下さいまし、左樣なら。

相變らず美しい夢の樣な事を仰しやいますね、かう云ふことも亦水の流るゝ樣に逝て了ふのですなア(評)

○舊師の上京に就いて友へ

本郷　千とせ

第一信

只今嬉しい〳〵お手紙が參りましたよ……遠方から、當てゝ御覧遊ばせ、いつぞや一寸お噂した事が有りますから大抵お分りに成るでせうよ、私二三日前からちと風氣で臥つて居りましたが、此のお手紙を半ばまで見ましたらもうすつかり氣分が好く成つて起きられ相なの、ですが終り迄獨で讀むのは餘り惜しいやうで……吁早くあなたを悦ばせて上げ度いわ、芳子さん今何して被入るの、學科の復習?、夫ともお琴、裁縫、大方又「光君」に耽つて被入るのでせう、お手間は取らせません、只御一緒に讀て御一緒にお返事を認める計りですから萬障御差繰て入らして頂戴な、吁あなたのお草履が玄關へ揃へられる頃には屹度頭痛も熱も取れて了ふだらうと思ひ升、左樣なら。

第二信

昨晩は折角御勉强の處を遲く迄お邪魔致しまして嘸御迷惑でしたらう、宅へ歸りましたらもう十時なのですもの、あなた餘りです事、三十分も進んで居るつて嘘おつき遊ばして……オヽ其時若も叱かられたらお詫して上げると仰在つたわね、「只今」つて云ふより早く、女の癖につて散々母にお小言を頂きましたから早く謝りに入らして頂戴なァ……、實は今村岡さん始め他三人の委員が被入つて先生の歡迎會の事に就いていろいろ相談最中なのですが、肝腎の幹事が御出席無くてはどうしても纏りませんから、度々おはこびを願つて何とも恐れ入りますがモ一度お出遊ばして下さいませんか、成べくは此の使ひの者と一緒に、一同鶴首してお待ち申升。

第三信

芳子さん、早くお仕度遊ばして頂戴、只今先生から、「イチバンデタツタデムカヒタノム」と云ふ電報が參りましたの、夫で何時の御着かとしらべましたら三時四十分、すればもう間も無い事ですから私獨で參らうかと存じましたが、後でのお恨みが恐しうムい升ので大急ぎでお知らせ申します、私、今車の來る迄一寸髮を

……廂の修繕だけ致しまして直ぐお宅へ伺ひますから、御門に待つて被入つて下さいな、あなたのお車も用意して参ります。

スワ目睫に迫れる一大事、委員の幹事のとゴッタ返す青春の眞面目がよく見えて面白い、(評)

○故郷の母へ

牛込　千

母上様、御送りの麥麨と御團子の粉は、確に届きました。昨日早速戸山の原から雑子ケ谷の方へ摘草に出掛け今日は日曜て兄さんも御宅なのを幸に、草の花團子を拵らへました。水鉢がないので、仕方なしに御鉢の蓋て揑ねました。懷しい草の香、故郷の野の樣が夢の樣に思ひ出されます。美味しい〳〵といつて、兄さんも澤山召上りました。麥麨は永き日を讀書に倦むだ徒然に、睡氣覺ましにと戴いてゐます。今年は御養蠶が四枚ださうですね、さぞ御忙しい事と御察し申し上げます。まゝに成る身躰ならすぐにも歸郷して、雲雀囀づる廣々とした野の中で桑摘がしたう御座います。都もすでに春行きて、櫻の梢は恐く青葉に變り、早稲田田圃にはことことゝ田螺が鳴き始めます。これから又四つ目の牡丹、龜井戸の藤、大久保の躑躅と何も都會の人は倦まずによく遊ぶことてしやう。然し私の耳の底には『本



スケッチ　青森　稲垣かをる

當に忌々しいつてないは、田舍はこれから忙しくなると云ふのに、東京の人は今を一年中の遊び時にしてゐてさ」と、あの四五年前のもうそろ〳〵養蠶時になると云ふ時に新聞投げやつて歎息なされた母上の御言葉が、今も記憶を去らずに殘つてゐます。然しさうくよ〳〵なされますな。やがて御養蠶も上り、大掃除も濟むだ日の夕、南風の涼しく入るあの廣い座敷には、雪のやうな白い繭ばかり、その中で笑ひさゞめきながら揃つて食べる夕飯の時の樂は、埃にまみれた都會の人には迚も夢に見ることとすら出來ませぬ。私も次の日曜には郊外へ出て、汗みづくになつて鍬とる人を見て樂しみましやう。

趣味ある好書翰(評)

○兒が淵より

百合子

今四邊には人もなく候。貝とらんとて底にくゞる海士さへも。浪の荒さにおぢて候。左すれば例の釣橋めきたるが。半ばは波の下にゆられ居り候。後にはこごしも岩、前は只白浪のよするも返るも見え候はずくだけて飛沫の散る斗り。さながら烟と見え參らせし。吹き卷く嵐に袖を拂ひ裾を拂ひて。身さへあやふく覺え候。舟の道ははたと絕へて灰色雲は西へ〳〵と走りて候。只黑ずみたる冲の浪に。一點二點白う見ゆるは。驚かされて磯をはなれし。鳥のゆくへにもや候ふらむ。水や空。空や水なる此夕暮。此夕べの淵にひとり立ちて。我さかしらに物おもふは。あまりに似げなき小さき想ひと。御さげすみも候ふべくや。さりながら、妾は只妾の心のゆくに任せて候。かしこ

達者な筆なれど戀に氣取りたるは感心せず(評)

書簡文に就いて

○前號で申しました論文に次て振はないのが書簡文です、尤も是れは大抵或る程度まで調つて居ますが拔群なのが少い、書簡文は論文の樣に何處までも公開的で衆人の判斷に供する必要は無いので、其興味は發信者と受信者との間にさへあらば宜いのですが、矢張り面白い書簡は貰つた宛名以外の者が見ても面白い。選者の申し度い注意點はつまり爰にあるのです。

○其弊を云ふと、取材の陳腐、書き方の千篇一律、月並文句の羅列なぞでありますが、も一つは矢張り本誌上に分けられて居る他の欄の作物と混同しさうな點であります、例へて云ふと旅行先から旅行の狀況を報らせるのですが、いかにも他鄕の異つた風物や、又其の新らしいものに出會つた最初の情がよく出て居るのもあります、けれ共只其れ丈けの事なら日記なり紀行文なりにすれば宜いので、是れが書簡として見て意味が無くなる、隨つてさうなると書簡としての價値が下るのです、つまり書簡は其人に話すのですから、其人に對して書くと云ふ心持を何處までも失はないことが必要と思ひます。

○諸孃の採用になる題はいかにも狹隘です、尤も未だ世に經驗も少いことだから、無理もないことゝは思ひますが、同じ『都の友へ』とか『鄙の姥へ』とか或は『寧公中の弟へ』とか云ふのにしても、普通一偏の手紙以上に何か動かない用向とか感興とか云ふ中心が取れないものでせうか。書簡文は決して六つかしい事を書くことは入らない、美くしい辭ばかりを列べて能事了れりとするのも間違ひなんて、くだらない事にせよ、非常な事にせよ、其必要な塲合とか感興に乘じた時とかに僞らざる情を以て書いたのが尤も人を動かすのです。唯手紙の書き方が大切なばかりや無い、感情を練つたり、處世について考へたりする上にも必要なのであります。(選者)

お伽噺

巌谷小波選



○規定　新しきお伽噺を作ること土地の口碑傳説を採用して材料とするは宜しけれど既に在るお伽噺の焼き直しは許さず二十四字入十行以内凡て振假名つき罫紙又は半紙に認めること賞は乙種を送呈す

○不性な梟（地賞）

岐阜　菖蒲女

昔々、或お山の谷に一羽の不性な梟が住んで居りました。他のお友達は皆晝の明い間は寐て夜の暗い頃はたらきますのに此梟は晝はボカンとして、夜明してはない晝暮しをして夜になると眠つて何もいたしません、ですから「不性」と云ふ渾名さへ付けられて笑はれて居ました。すると可笑しい事には晝起きて居るのでありますからだん／＼目が見えるようになつて遂には全く晝間でも物がわかるようになりました、斯うなると不性は大得意になつて彼方此方を飛んで歩きましたがやがて谷を出て里の方へ參りました、こんな所ではうまい食物もないから他所へ行つて取つて來てやらうと考へたからです。扨里へ來たけれど皆梟の食ふような鳥や虫は晝だから、「ソリヤ來た逃げよ」と皆逃げて行つてしまひますいくら追つてもだめばかり疲れ切つてある木の枝に休息んで居りますと里の子供が「ヤア梟が居る捕まへ／＼」と集つて來て攻め立てます仕方無しにやう／＼の事自分の谷へ逃げ延びて來ましたが腹がたつてなりませんから一つ己を笑やがつた友達をいぢめてやらうと思ひました、斯う思ふと又元氣が出て今迄里でひどい目に遇つた腹癒せにと飛んだ仇討を思ひたち夫から木に止つて寐て居るのを引きずり落したり洞に眠つて居るのを引ばり出して泣かせたりして一人て面白がつて居ました、すると大變です、今迄は晝て物が見えて居たてよかつたが追々日の暮れるに從つて目が霞んで見えないようになる、之はいつも夜寐て居た罰です。そうすると他の梟はだん／＼目が見えるようになつて今迄威張り散らして居た不性を大勢て取

り圍み以後の見せしめにとサンザンひどい目に遇はせました、不性は之こそほんとうのふくろ叩きにされて之より皆の言ふ事をきいてはたらくやうになりましたとサめでたし〳〵。

（評）かくの如きお伽噺は彼の人情の本とせるものに比して無邪氣にして愛すべきものである

○魔法の金　（入賞）

細井小夜子

或處に一人の盜賊が御座いました、其の盜賊が或夜、水の流れも止まると云ふ樣な、閑寂とした丑の刻時分に、何處からか澤山お金を盜んで、一散に奥深い森へ逃げ込みまして、ホッと一息つきましたと思ふと、恐い苦笑方をしまして「マア、好い仕事を爲つた、旣う此處迄來れば安心だ――そう〳〵何程有るんだらう」と獨言をしながら懷中へ手を入れて、お金を査べ樣としました處が驚いた、財布は有りましても、お金は一文も有りません、サア大變、蒼く成つて帶を解くやら着物を脫ぐやら、査べましたけれども、什麼しても有りません、途中へ落したのかしらん、シッ、骨折損!」と空財布を叩きつけて、頻りに無念がつて居りましたが、急ふに着物を着て、元の道へ馳け戻つて行きました機に、自分の衣服が何んだかピカ〳〵光つた



ので、變だなアと思つて見ますと、驚いたの驚かないのつて恰ど錦の衣服の樣に光つて居りました「何んだ此れは」と熟視ると、又一層驚ろきました、其れは自分が盜んて來ました金貨や銀貨が、悉皆密着いて居つたのてす「妙な事が有るものだな、併し恁う爲つては貫けない何時お巡査樣が、鷹の目玉をして來るか知れない」と呟きながら取り剝がさうとしましたが、容易に剝れません「こりや變だア」と此度はウンと力を出しました處が、出せば出す程お金が益々密着いて、遂には着物を透して肌に減込んて仕舞つて、血は出て來る、痛くて〳〵忍耐えられません、さうかと言つて、漸々東も白みますから、此の儘ては居られないと、狂人の樣に悶きましたが、到頭不可能てした、又危險て〳〵出ても歩けませんものてすから、遂には饑く成つて、グンナリと衰弱つて仕舞ひました。

或日一人の樵お爺樣が來まして、其處に倒れて居る血粉れの光つて居ります盜賊を、不審さうに見守つて「妙な物だ――何んだらう、孔雀ては無論ない、豹てもない、綺麗なものじや」と獨言しながら、恐しさうに遠くより延首して、其の周圍をグル〳〵と廻つて居りました。盜賊は其の足音に、微と力のない、恐怖の目光て、お爺樣を見まして、お巡査樣て無かつたものですから、幸ひだと、衰弱り極つた身體を起そうとしました處が、お爺樣驚駭いて、逃げ出さうと致しましたものですから盜賊は「お爺樣！」と呼び留めましたお爺樣は怖々して、變な逃げ仕度の腰容をして、默つて振向きました。

「恐くも何も有りません、私は貴方に御頼みが有るのです、何卒訊いて下さい」と盜賊は手を合掌せて、拜みました。

お爺樣は、彼れても人間なのか、變な人間だな、併し綺麗だア、何んでも此の世の人ては有りません、乾度神樣の御使に違ひは御座いません、彼麽處に、誠に勿體無と、心に思ひまして又も默つて、不思議な顔してジロ〳〵と、凝視めて居りましたものですから、盜賊は自分の身體を指差しまして、

「他の事ては御座いません、此れを何卒剝つて下さいませんか」

「何んてす、其れは」とお爺樣は、始めて言ひました

「お金てすよ」

「お金！」

「其うてすとも、此れを剝つて下されば、悉皆差上げ

ますから」

「下さる！悉皆！」

と、お金に拔け目のないお爺樣、もう、恐怖いのも何も忘れて仕舞ひまして、恐氣もなく近寄つて見ますと、成程立派な、金貨や銀貨て有りましたものてすから、もう欲しくて忍耐りませんので、什麼して恁麼事にと、訊こうとしましたが、其れも忘れて仕舞つて、「容易いことてす、直ぐ剝つて上げませう」

と、お爺樣は肌脫に成りまして、汗をタラ〳〵流して、何程意氣んても矢張り剝れません、其れで此度は大きい釘拔を持つて參りまして、漸つと一枚剝れましたと思ふと、不思議や又、ピタリと、お爺樣の額に密着いて離れません、到頭慾に手を出しましたお爺樣、可憐そうにも、泣き〳〵歸つて仕舞いました。

盗賊は益々衰弱り際て、今にも飢死仕そうに成りました、或夜立派な白い長い髯のお翁樣が、何處からともなく現れまして「改心するか？するなら剝つてやる」と、恐ろしい聲て、呶鳴付けまして又「實は私が汝に改心させる爲めに、態と魔法の金と云ふものを盗ましたのだ」と言ひましたものてすから、盗賊は今更の樣に驚きまして「此度改心致しますから、何卒剝つて下さいます樣に」と淚ながらに御願申しまして、漸つと剝つて戴きました。其の後、樵お爺樣も剝つて戴きまして、共に正直な良民となりました。

（評）やゝ複雜に失した嫌はあるが教訓的お伽噺として一寸面白し

【秀逸】

○夢の世界

丹波　鹽見喜代子

軟らかい草がむく〳〵と今生え出したばかりの野を、散步唱歌を唄ひながら千代ちやんは歩いて行ました。圓い〳〵山が幾つも〳〵連つて、見る物皆が淸う見えます。千代ちやんは自分てうたふ歌に聞き恍れながら夢見心地にふら〳〵と何處ともなし、何か向うから眼に見えぬ强い力て引きつけられる樣に、可愛らしい足拍子をとりながら行くのてす。すると其邊りには蕨やぐみが幾らても好きな程ありますので、「千代ちやんは嬉しくて〳〵兩方の手に蕨やぐみを餘る程持つて相變らず散步唱歌をうたつて行きます。

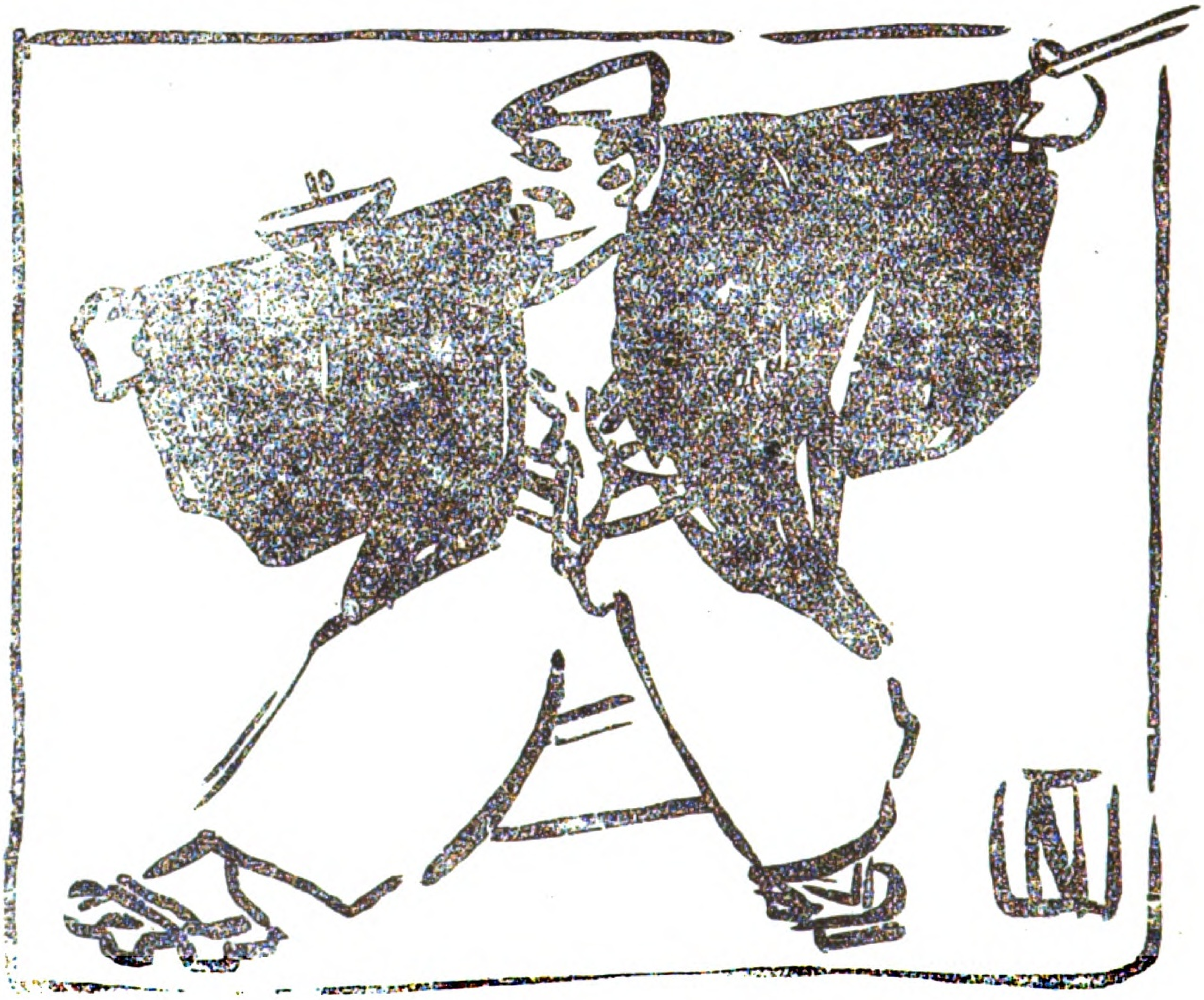
ふと上を向くと、これはどうしたのてしやう、今迄高い〳〵處にありなされたと思つてゐたお星樣がすぐ眼の前てにこ〳〵笑ふてゐられます。幾千とも限り知られぬお星樣が、皆な綺麗な、繪でみた羽衣とかいふのを着て、孔雀の樣なぴか〳〵の羽根をつけて、面白さうに遊んてゐられます。ちら〳〵と飛び交ふてゐるさまを眺めてゐると眼が廻りさうてす。すると一人のお

星樣がそをつと千代ちやんの側へ寄られて、《千代ちやん！》と可愛らしい聲で呼ばれます。始めは恐ろしい樣な氣もしましたが、それも忘れて、ふと自分を見ると、自分にも小さいながらに綺麗な羽根が生えてゐるのですもの、

《はい、》

《いゝ子ね。いま歌つてゐらつした唱歌、唄つて頂戴な、》と言はれるのです。

千代ちやんは何もかも忘れて、《日は暖かに……》とうたひだしました。そして澤山のお星樣と手を引き合つて唄つてゐると、お星さんは皆な美くしい眼で千代ちやんをご覽になつて、《いゝ聲ね。本當にほれ〴〵するわ。》など、お褒めなさる。そして仕舞には、皆のお星さんが一處に唄つて下さる。何處からともなく音樂が聞えて今迄よりも一層賑やかになりました。お日さんは譬へ樣のない美くしい紫の着物を着られて、舞はれます。明るい黄ろな光りはそこいら中に漲つて、何とも言へぬ美くしい眺めです。



曲獨樂　　府下 中島ぬひ子

やがて一人のお星さまがお出でになつて、《あなたはまだ始めてでしやうから、星の世界をつれて廻つてあげやう》と仰つて、こちらへと云つて飛んで行かれます。千代ちやんはもう嬉しくて〳〵仕樣がありません。ぱた〳〵と羽ばたきをすると、すうつと體が夢の樣に浮き上つて、ふわ〳〵と飛んで行けます。前のお星樣が此處が花園です、と言はれるので見ると、これ迄見たのは櫻ばかりで、其他は見た事のない赤や白や紫やの花が一ぱいに咲き誇つてゐます。

《一つ折つてあげませう》と言はれて、大きな紫の花のさいた木を折つて下さりました。

お星さまはまた、此方へお出て、と言はれて飛んで行かれるのでついて行くと、大きな／＼門があつてそれをくゞると、これはまた映ゆい程綺麗な建物がずうつと奥の方迄續いてゐます。それは／＼美くしい高樓て、金や銀で屋根を葺いて、大理石の柱に處々眞珠の大きな玉が鏤めてあります。美くしい繪や彫刻物など數限りなく澤山に据ゑつけてあります。何階も々々々床があつて、其中には是迄見た事のない物計り、一つぱいにあります。千代ちやんはぼうつとなつて見恍れてゐると、お星樣が、《これが星の宮殿です。》と言ひなさる。そしてあの今迄遊んでゐたのが散歩場です。またお出てなさいといはれるので蹤いて行くと、《是處が天の川》と言はれるので、氣がつくと知らぬ間に美くしい河原に來てゐます。清い清い流れが霞の中から流れ出て、限りなく遠くへ流れて行つてゐます。河の上にはあちらこちらに小舟が浮んでゐて、盛裝したお星樣が船遊びをしてゐられます。ちよちやんも澤山の小星樣の乘つてゐられる船に乘つて、こゝでも得意の散歩唱歌を歌ひながら遊びました。

（評）前半は殊にうつくしい

○神のお使ひ　岩代　宮田千代子

清子さんのお母さんは漸く十歳の春を迎へたばかりの可愛い可愛い清子さんとポチとを遺して死んで終われたのですお仕立の事やお飯たきの事をする人がないので文子さんと云ふ娘のあるお母さんをお貰ひなすつたのです清子さんは極やさしく容色も優れて居るのに繼母のため不容色な意地の惡るい妹よりも始終憎まれてばかり居るのでした清子さんのお父さんは商賣のためいつも留守なのです邪見のお母さんはそれを善い事にして自分達ばかりはおいしいものを食べ新しい着物を着たりしてやさしい清子さんには殘りものを食べさせそればかりか秋の末つ方寒い／＼山おろしの風には時々雪がちら／＼まぢつて來る頃でさへ垢染みた單物のまゝで石でも金でもない清子さんの身に取つたら何れ程つらかつたでせうその上何につけお小言などばかり仰るのですそれでも柔順な清子さんは少しも恨まずいつも機嫌よくまめやかに働いて居るのです情のないお母さんと文子さんは何にも分らないポチにまでお飯もやらず見る度毎に打たり踏だりそれは／＼ひどい事ばかりなさるのを見て居る神樣のやうな清子さんの心は如何でありませうあゝ可愛そうにと出る事はならずいつも障子の破れからのぞきながら泣いて居るのですポチのお腹をすかして居るのを見るに忍びず清子さんはいつも自分のお飯を半分のこしてポチにやつて居りましたポチは口こそきけずともいつも清子さんのお情けには涙を流して居りました清子さんは悲しい事があつてもなぐさめて呉れる人はなく天にも地にも唯一人の

お父さんはいつも留守なので亡母さんともお父さんともお友達とも相手になつて呉れるのはこの廣い世にポチの外にはないのでかなしい事やつらい事がある毎にポチの所へ行つて話しますとポチは殊勝にも涙を流して合點合點をして聞いて居るのです或る朝の事清子さんは自分のお飯をやらうと思つて行つて見ますといつも嬉しそうに尾を振つて出て來るポチはよべどさけべど影も姿も見えません清子さんは驚いてあちこちを尋ねましたけれども少しも分りませんでしたので眼には涙を一パイ浮べて其日のみは仕事も手につかずポチの事のみ思ひつゞけて其夜はまんぢりともしませんでしたが東の空の白みかけた頃夢か現か今まで泣き焦れて居たポチが常の元氣は何處へか失せて涙ながらに清子さん私はあなた樣に長々お世話になりましたが日頃非どい目に會されて居つたあの邪見のお母さんと文子さんに昨日の暮れ方清子さんのお留守の時此東の古沼へ入れられて到々殺されてしまひました私は殘念で〳〵堪りません此の思ひが何處へ參りませう清子さん後生だから彼の沼の西にある松の木をこのポチと思召して花を一枝手向けて下さいそうすれば私は天上する事が出來ますから乾度お願ひ上げますよ私が居ない後はさぞお淋しいでせうがいつかは善い時が來ますからつらくともお忍び遊ばして其折をお待ちなさい然らば清子さん然らばさらばよおゝポチと抱き上げやうとしましたらふと目が醒めてポチの姿は消え失せてしまひました清子さんはあまり〳〵の悲しさに誰も目を醒さないのを幸ひ裏口から飛び出してとろんとした古沼へ行つて見ますと憐れやポチは葦の澤山生へて居る中へ投げ込まれて死んで居りました一目見るや清子さんは氣も狂ふばかりに泣き悲みましたけれども今更何とも致し方ありません漸く我にかへつて松の木に情のこもつた美しい花を手向けてしほ〳〵とかへりましたそして清子さんは生きて居る時のやうにお飯もやり花も手向て居りますと又それをお母さんと文子さんは忌々しく思ひ清子さんもポチの樣にしてやらうと相談致しましたそれとは知らず清子さんは花を持つて松の木へ參りあゝポチよ明けても暮てもお前の事ばかり思つて今日で四十九日を泣き明した情があらば今一度元のポチに成て一目會つてお呉れと言ひも終らず泣き崩れました蔭に見て居つたお母さんと文子は突き落してやらうと思つても少しもうごく事か出來ませんあれと云ふとたん天から紫の雲に立派な犬が金の箱を持つれて清子さんの前へ下りました今まで泣崩れて居た清子さんは呆れて見ておりますと犬はやさしく清子さん私あなたにお世話になつたポチです邪見のお母さんに殺されたポチですが今では天上して月姫樣の御殿に事へて居りますあなた樣の美しい御心を天の神樣はお見知りになつて私は命令でお迎に參りました。と言つて金箱をひらくや埃染みた清子さんは忽ち立派な天女となつて見る〳〵天へ登つてしまひました邪見の母子は神樣のお咎で其まゝ死んで終ひました。清子さんは今でも月姫樣のお側にポチとたのしく暮して居りますとさ、めでたし〳〵。

(評)かゝるものは私は採らない主義で居るが參考の爲にもとて掲ぐ

少女文壇



○規定　本欄は十五歳以下の少女に限り投書するを得文章和歌俳句唱歌等を採用す年齢及び住所姓名學校等を明記すること用紙は半紙賞は丙種を呈す

○くだもの（地賞）

沼津　青木信子（才十二）

昨日の日曜日に私はうちのお庭のくだものの木をみな數へて見ましたらお柿が十二本にみかんが十本、梨とりんごが二本、それから桃とビハとブドウが一本づゝありました。その中でもみかんは私の生れた年におじい樣が「信が大きくなつて取る樣に」といつて植えたのださうです其ころは皆が永いことだと笑つたと母さんが云ひましたが、今ではみな大きくなつてたくさんのみがなります。私のうちではおつかい物にはたいていくだものを上げます又お客のある時にもすぐに庭からとつて上ますとおかしなどよりも大そうおよろこびなさいます。

誰ても書けさうて書けません、眞に少女の文章の好い手本だと思ひます（評）

○遠足

土佐　馨田知惠子（才十三）

五月八日

今日は私らの、遠足です、家を出て、先づじゆんかふせんにのり、しよう歌を、うたつて居るまに早やうらどにつきました、すこし歩んて行きますと、なみの、音が、きこへだしました、ちら／＼と松が見えてまもなく、はまにつきました、ここが月の名所のかつらはまです、はてもなく海がつゞいて居て、りようしのふねが小さく見えます、なみが、ちら／＼とちつてくる、岩の上で、食事をすまして、貝がらや、美しいいしなどをひらひ、妹に、たのまれて、ゐたので、だいじにもつて、それから、かへる事になりました、かへりには、うつのとふげ、を、こへるといふことてすから、いつそうみがろに、かまへました、しばらく、小さな道をあゆみ、うつのとふげ、に、つきました、道がけはしくてのぼるになか／＼、こんなんです、かたわらに美しい花が、さいて居てもとろきには、なりません、この山は五百尺に、たらないそうですが、私らはもう、つかれてしまひました、山の上からは、高知市も目の下に、見え、南には、むろとざきがぼうと見え、私らの、歩んて、きた道も、わけなく見えて居ます、まもなく山を下つて、なつかしい蓟野の里にかへりました。

○今頃は

浦賀町　長島みち子（才十四）

今ごろは端書と一處におばあ樣のお手許にとゞいてゐるてせう。あの寫眞を見て何と御思ひなさるてせう。まあ大きうなつたとは必つと云つて下さるに違ない。そして又あんな涙もろい方だから必つと御泣き遊ばすてあらふ。父樣が御いてになつたらさぞ御喜びなさるだらふと。又御笑ひ遊ばすかも知れない。ずいぶんハイカラになつたと。

私は遠く西に居らるゝ一人のおばあ樣の許にみにくい寫眞を送つてから五日目の夕こんな事を思ひました。

○夏の山

長野縣　小池和

ほそい煙が山にたなびいて、若葉の中にかつこんがないて居ます、さびしい聲てある、山みちを白い馬が行く、馬子は長い手綱をひいてうたをうたつて行く、それが山にひゞひて面白い。

○和歌

德島　吉田千代子（才十三）

○

蓮の葉の露さはればひよろ／＼と青き蛙の落ちさうに見ゆ

笑話



○規定　面白い話なれば何でもよし實際の話でも一口話でも隨意なり賞丙種

○それでもよいけれど（天賞）　米國シアトル　ふたば

ある牧師が、拾番目のお子樣に「今夜神樣がもう一人妹をあなたに下さいました。」と言ひなさいますと、孃樣ぢつと父樣を見て、「それでもよいけれど父樣、私達はもつと外に頂きたいものがありますのに……。」

○靴墨（地賞）　姫路市　冨岡綾子

今度來た下女に帽子と刷毛とを渡して「よく塵をとつて下さい」と命令しました、後程見ると是れは大變！靴墨を付けてガシガシやつてゐるのではありませんか。

○坊チャンのおしごと（人賞）　盛岡　桃の人

或る日私が買物をしての歸り一寸友達のところへよつたら、是非這入て呉れろといふから買つて來たお魚を入口に置いてお話をして居ると、其家のお母樣がいらして「マア結構なお魚を誠にありがたうございました」と風呂敷計りよこしたので今更何といふ樣もなく「どう致しまして」と申して歸りました、そしたらそれは四つの坊チャンのおしごとでしたよあとて大笑ひ。

○ハイカラ　茨城縣　橋本光子

弟「兄さんあの馬もハイカラだれ。」
兄「何故、」
弟「だつて頭の毛を分けて居るもの。」

○お魚　大阪　琴技

母「種さん最うお魚煮えましたか」
娘「エヽ一寸まつて頂戴な食べて見ますから…」

○病氣　千葉縣　安井ひて子

妾は先日から病氣で學校を休んで居ると、ある日信仰者の（マキ）さんが見舞に來て、「今日は如何てすな御病氣は、」「ハイ有難う……如何も捗々しく治らぬて困ります、」「左樣てすか、そんなら天理敎へ這入つて信心なさい、」「私嫌てす、」あの敎會は天理王の命屋敷を拂つて立退き玉へと、拜みますから……と云ふたら大笑い。

○小僧の電話　備後　百合子

電話室が店から遠いのでベルがなりましても電話口に出るのがいつも後れますので交換手に叱られました處店の小僧がベルがなると直ぐ電話室に走つて行きながら高い聲て、ハイハイく

○見習奉公　越後　木島さう子

奧樣「おさんお前はよく間食が好きだれ、ちつとおたしなみ。」
下女「だつて奧樣私こちら樣へは見習に參つてるのですもの、萬事貴女に……。」

○袋物　木島すゑ子

師匠「皆樣今度袋物を敎へて上げませう。」
弟子「ジヤ先生私に樋口のしまつた掛忍袋を。」

○口が小さい　靑葉女

叔母「ネー美ちやんほんの一口だから殘さずにお食りなさいよ、」
美「だつて叔母さん私の口は叔母さんの口より餘程小さいもの、とても一口には食べられないわ。」

○ソコ豆　千葉縣　美濃輪亮子

母「露ちやん、學校てお前のことを何んと云ふの」露子「皆さんがれソコ豆ていふの」母「何してれ」露子「いつても級の一番下に居るから。」

○古跡　張　榊原つた子

或人「お爺さん此の邊に名高い名所か古跡がありますかれ」
老人「はい、ありますとも、戸籍ならもう一丁もゆきますと、あの——役場に……」

衛生問答



産科婦人科專門
醫學士　北畠孝夫述

○規定　女子の身體に就て衛生生理疾病等各種の質問に應ず薬書差支なし、毎月一日〆切翌月發表す

第七十六問　未婚者でも　夏時を除く外正午頃より顔ほてり、同時に鼻腔に腫物が出來て痛みます。何事にも感じやすい質てす。子宮にも幾分病がある樣てすが子宮病は未婚者にもあるものてすか。(廿四才未婚女)

答　一寸伺つた丈けては分明しませんがヒステリー症狀を具へてなる樣てあります、生殖器障害が原因となりてヒステリー狀態となる人は隨分少くありません又よし生殖器疾患なくもヒステリー症に罹れる人もあります、生殖器疾患は既婚者、未婚者を問はず犯し來る者てあります。

第七十七問　姙娠期　隔月に姙娠期が來るものだといふ說がありますか實際でせうか。尙姙娠するは月經前後何れの時てすか。(加江子)

答　婦人には月經時期を除くの外不健康ならざる限り受胎作用があります、敢て姙娠期と申して特別に姙娠する時期又姙娠せぬ時と申す事は有りません、月經終了后より次の月經時期迄は受胎し得べきものである。

第七十八問　室内運動　(1)女子の室内運動には何が適當てせう。(2)妾の鼻は少も嗅げず、常に塞つてゐます、何故てせうか。(十九女)

答　(1)婦人の室内運動に適する者は矢張り亞鈴、徒手、矯正體操等てありませう、是等は敢て廣き場所を要する事てなき故へ差支へはありません然し可成は障子を開放してなさい。
(2)鼻カタルの爲めと考へられます。

第七十九問　鼻が赤い　私は鼻が赤いのてすが、何かよい藥はありませんか。(心配女)

答　耳鼻科專門醫の治療を御受けなされ。

第八十問　腫物　私は顔にニキビとは違ふ腫物か出來ました、療法はありませんか。(天鹽、愛讀女)

答　「にきび」てなき顔の腫物と申す丈けては御答は出來ません。

第八十一問　毛髮多きため　私の毛髮は鯨尺で三尺あまりてあります、母などはこれゆゑの頭痛てはないかと申され、一尺二三寸に切りてはと申されますが、毛の多いため頭痛といふことがありますか。此頃は少しの物事にも驚くのですが、腦神經衰弱の初期てはありませんか、腦神經衰弱に犯されれば全快の望はありませんか。又シゲイ齒を直すに齒を一本拔かればならぬといふことですが、拔ても別に身體に差支はありませんか。(花子)

答　婦人の頭髮の長きは美の一條件てあります、頭髮の長きが爲めに頭痛を來す抔は健康體には無き事てあります、夢々切る必要は無いです、殊に貴下は頭痛の他に神經過敏症樣の御訴へが有ります所を伺ひますれば矢張り神經衰弱若くはヒステリー等の如き疾患に罹れる者の如し、神經衰弱ヒステリー等は不治の疾患ては有りません　次に拔齒の事に就て御尋れてすが齒科醫が診察して必要上拔齒を御勸めした者ならばその命に從ふが宜しいてしやう、然し一寸御注意しておき度きは齒は一つの消化器てありますから猥りに拔去すべき者てはありません、巨

歯科醫に確たる診斷治療を御受けなされ。

第八十二問 譫語 私は睡眠中にウワ語を發して困ります。又十八ケ月間一日の休みもなく夢を見ました。神經衰弱の爲でせうか。(長崎女)

答 睡眠中の譫語は夢が動機となつて發する者であります、あなたの樣に永らく夜毎に夢み給ふは恐らく何か精神上に纒綿する事が有る爲めでは有りませんか若し之なしとすれば仰せの通り神經衰弱ヒステリー等の疾患の爲め神經過敏症を來し少かの刺戟が夜中に夢となりて現はれ夢又譫言を發する動機となるのでしよう眞醫に診察を御受けなさい。

第八十三問 肺病? たへづ頭痛して日に數回、薄墨いろにして黒色の斑體ある痰が出ます、強く呼吸する每に咽喉、胸に非常の苦痛を感じます。私は不治の病かと心配です。又肺病は遺傳性體質でなくも傳染するものですか。又患者に接するにはどのやうな注意が必要ですか。(一愛讀女)

答 御訴へ丈けでは肺病(肺結核?)と申す斷言は出來兼ます、或は單純の肋膜神經痛かも知れませんそれに咽喉、咽頭等の炎症が加はりなるのかも知れません不治の疾患と速斷なさるのは餘り早計であります醫士に診斷を御受けなさい、又肺病殊に肺結核は直接傳染すべき者です、患者に接するのは頗る危險であります、殊にあなたの樣に不健康の方では最も注意すべき事です。

第八十四問 月經に就いて 十四才より經行ありて歳を老るに隨ゐ量多くなるやう感ぜられます。普通は追々少くなるものゝやうきゝ及び候がいかゞ。經行は月每になくれ、又四五日位少量の白血下り候(廿八歳女)

答 仰せの通り年齢の長ずるに從ひ月經期間は短縮し且つ月經量も減少するものであります然るにあなたのはそれに反比例してなると申されるし又白帶下の排出もあるとの事なれば生殖器に疾患あるらしく考へられます、月經前後若くはその時期に他に異常は有りませんか又月經が先きへ先きへと延長し行く事は餘り重きをおく必要は有りません疾患が之を原因すると申す事は無いです、兎に角診察の上健康の眞不眞を決定せぬ以上は療法を示すべき方針がつき兼ねます。

第八十五問 子宮下垂 私は先月月經後より子宮著しく縮少して垂下せし樣覺え、朝夕下腹部の疼痛を感じ又腰部冷え、誠に心配でなりません。(妻子)

答 月經後子宮が縮小して垂下すると申す事は絶對に有りません、子宮の下垂は醫士の往々認むる事であります然し御婦人が子宮後屈を誤りて下垂と思ひ能く吾々醫士に訴へて來らるゝ事が有ります、それですからあなたのも診察の上でなくば斷言出來ません、然し朝夕に下腹部の疼痛が有るとの仰せに依りて考ふれば何か婦人科的疾患が有るらしく考へられます、專門醫に診察を御受けなさい。

第八十六問 脚氣の豫防 脚氣の豫防法をお教へ下さい。(長崎、さつき)

答 麥飯を喫し轉地(無脚氣地へ)せられよ、海岸よりも高山の方が宜しい。

第八十七問 多血性 私は多血性で顏が赤くて困ります、普通にするにはどうすればよろしきか。(肥前、多血女)

答 適宜に運動し、適宜に働き、安佚に流れず惰眠を食らず、冷水浴を執り、且つ攝食の上に注意し行けば漸次に淸楚優容の人となられます、

第八十八問 ワキガ ワキガの治療法をお敎へ下さい。(福岡縣、うれひ女)

答 腋臭の治療は到底素人では出來兼ねます、皮膚科專門醫に就て治療を御受けなされ。

第八十九問 腋毛 十三の末頃から腋に毛が生えました、病的ではありませんか。(朝顏

女）

答　春機發動期の頃より腋毛は生ずるものであります病的と申す事はありません。

第九十問　月經なりや　私は三日間腹痛の上、四日目より五日間少量の出血がありました。月經てせうか、始てゞわかりません。（下總、若菜子十八才）

答　多分御說の通り月經初潮なるべし、月經の事に就ては前號に詳く述べてありますゆゑ御參照なされ

第九十一問　根治されたのでせうか　私は十六才の時瘰癧が出來て七月手術して貰ひましたが又出來て、十一月と翌年五月と都合三度手術しました、その後今日まで出來ませんが、根治されたのでせうか。又腺病質のものは肺病、貧血病になりやすいといひますが本當でせうか。（東京、お尋女）

答　瘰癧と申すは頸部の瘰癧性淋巴腺炎を指示する病名であります、淋巴腺は頸部に於ては澤山ありますから此疾病に犯される時は一二に留まらずそれ以上多く腫脹するのであります。それも一樣に全じ大さでなく大小種々の大さがある加之ならず深部に在るものもあり表在性のものもありますから二三部を摘除したからとてそれて全部を除き去りたりと申す事は出來ません、從つて根治したと斷言もなり兼ねます又瘰癧症即ち腺病質の人は多く肺結核の素因を具有する事故ゑ健康の上に殊に注意を要する次第であります。

第九十二問　冷水摩擦　わきがはどうすればなほりますか。冷水摩擦は朝するがよいてすか。（十七才女）

答　腋臭の治療は專門醫に就て（皮膚科）御受けなされ自家姑息的療法ては到底全治しません、冷水摩擦の効力は冷水浴のそれに劣れり然し爲さゞるに勝る成るべく朝起直に履行なさるべし。

第九十三問　バセドー氏病　バセドー氏病とはいかなる病氣て、その原因はなんてせうか。（心配娘）

答　バセドー氏病の病理及び本性に就ては醫學上尙ほ不明なり此疾患に犯されば甲狀腺腫脹、眼球突隆、心悸亢進を起し來り之が此疾患の三大特徵候である、此疾患の素因となる可き者は春機發動期、萎黃病、姙娠、產褥期、月經閉止期等にして男女兩性の中女性に多きを認むその他病理解剖的原因としては此疾患に對し未だ全く知悉せられざるなり以上餘り醫科學的の事は述ぶ可き必要は無いと考へます。

第九十四問　乳房肥大　私は乳房も身體も總じて肥大で見苦しくて困ります、これを小くする法はありませんか。（北陸、梅ケ谷）

答　乳房の豐肥なるは決して恥づ可き事ではありますまい、之を小くする方法と申す事は無いです、年を經て家庭裡の主婦となられたる時には身體の發育已に完成して軀幹四肢悉く能く調節適合するに至り乳房も自然その釣合ひ能くなります御心配御無用！

第九十五問　(1)脚氣　(2)痔　(3)頭痛　脚氣は遺傳、又は傳染するものでせうか。痔は遺傳しますか、又治療法はありますか。頭痛は如何にせば治りますか。（以上、駿河愛讀女）

答　(1)脚氣には疾病遺傳と申す事は無いです、然し體質遺傳は或は有る可きか之は醫家の論題なり、又傳染の有無に就ても疑問未だ決定しません今は脚氣に就ての研究時代てある。(2)痔と申すも種類數多ありますが遺傳と申す事は有りません、治療法は種々あります、醫士てなければ行なふ可き者てありません。(3)頭痛は種々の原因に據りて起ります、原因より全然治療しなければ根治し難いてす。

第九十六問　月經に就て　二十才の處女十五才の秋より白帶血あり十八才の四月初經を見ました。初め二三日は一時間と間がない位て、腰が拔ける樣に痛みます。昨年の夏頃醫師に見

て貰ひましたら位置が曲つてゐるとかて、洗滌して球藥を入れてゐましたがよくなりません。常に惡夢におそはれます、神經衰弱てせうか。その爲に此頃は大變悲觀する樣になりました。どうしたら生殖器を完全に發達せしめる事が出來ますか。（悲觀女）

答　質問の要領は漠然として捕捉するに苦む次第でありますが要するに御訴への所は月經血の多量、月經痛、白帶下、惡夢、瘦削等にあるかの如く考へられます　診察の上でなくんば確實の診斷及び治療法を示す事は不可能であります屢々女子文壇衛生顧問部に於て月經異常、白帶下、月經痛等に就て述べおきました故ゑ彼是綜合して御覽なされ。御說の神經衰弱の狀態は恐らく婦人科的疾患の爲め又た之を苦慮するの餘り起りたる影響と見做して差支へない樣てす何れにしても經驗ある專門家に診療を仰ぐ可き必要があります。あなたに對する健康法はその醫家の司どる所なりと考へます。

第九十七問　胸苦し

二年前より胸苦しく、息つまる樣の感あり。談話、唱歌、讀書等をなす毎にこの感じことに甚しく、その後には咽喉たゞれ、痛みを感じます。右の樣な有樣て殆ど二年を經ましたがさ程の異りもありません。そのまゝに捨て置きて差支なきか。（長野、苦悶女）

答　唯だ御記載の文面のみでは要領を得るに困りますが現時健康（全身狀態に於ては）にして唯だ咽喉部附近に異常の感覺（發聲を多く要する際）起るものとすれば單に咽喉、咽頭、喉頭等にのみ加答留性病態が存在するものゝ如し然し自覺的に全身狀態は健康なりと考へて居られても恐る可き呼吸器疾患の潜伏（經驗ある醫士が診察すれば明かに發見し得べけんも）する事もある故に之を忽せにするは不覺の基なれば倘ほ再三然る可き醫士に就て診察を受けられよ。

第九十八問　癲癇

癲癇は不治の病に候や。（二十一歲女）

答　癲癇と申す疾患は先づ以て根治する事は甚だ難し然し近頃の外科的に治療を試み成績を得たると云ふ報告もあります兎に角神經科專門大家及び外科知名の巨醫に就て診察を受け御相談なされ。

第九十九問　瘢痕

瘢痕は除き去る事が出來ますか。（困つた女）

答　瘢痕は拭ひ去り難し之を除かんとすれば更に創傷の跡を大きくするのみてす。

第百問　自家療法

十六才の冬初經、それより毎時月經時には下腹痛み甚しく、又常に白帶血が絶へません。硼酸水て洗滌して居りますが、お醫者樣の診察を受けるのは死んでも嫌ですから、何卒手輕な自家療法をお敎へ下さい。又私は髮など結ひますときまつて二日位は頭痛がいたします。（二十三歲の未婚女）

答　月經時の下腹痛及び不斷の白帶下は婦人科的疾患を證據立てゝ居ります自家療法は何等の功を奏する事も出來ません唯だ硼酸水を以て膣腔を洗滌したりとて子宮疾患、卵巢疾患、輸卵管疾患、若くは附屬器疾患等に何等の影響はありません人智發達の今日、生存競爭の世に處して自家の健康を保つ事の最も必要なるに拘はらず徒に醫士の診察治療を忌避せらるるは失禮ながら愚と考へられます　三者を煩はしたし又習慣性頭痛を御訴への樣てすが之も恐らく婦人科的疾患の影響と考へられます　根本より治療せられよ。

第百一問　神經衰弱と胃腸

私は日頃神經衰弱の氣味にて、又時々胃、腸が痛みます、如何なる譯てせうか。（和子）

答　神經衰弱症よりして胃疾患を來すあり、又胃の疾患よりして神經衰弱症を招く事もあり兩者關聯する所多し。醫治に據らずんば根治し難からん。

讀友倶樂部



○規定　本欄は讀友諸嬢の機關として隨意に使用あれ各自に誠實を守られたし不確實の投稿は投書とす住所本名は詳記すると字體の明瞭を要す

○注意　讀友くらぶは本號から多少體裁を變へました、諸孃も氣を付けて成るべく本欄を有益に又有趣味になるやうにして下さい、體裁は記者がつけるのですが、內容は諸孃のはたらきですから、誠實と愉快と實益の三つを根本にして、ます〳〵本欄の隆盛を世間に誇るやうにして頂きたい、又一人ていろ〳〵の注文を並べないやうに、一つのことを眞面目に考へて言ひ出すやうにして下さい（記者）

交際を望む

○地方の人　汚れた都會の風に染まない、清い地方人と交はりたし。海國、山國、いづれにても宜ろし。なるべく人里はなれたる地の人を望む。お心のある方は下名までお手紙ちようだい。（大阪東區高麗橋詰町拾三番屋敷、今西春江）

○ハイカラでない方　文學美術音樂の好みがあつてハイカラでない方と寫眞繪ハガキ玉章の交換を願ひます。（大阪市北區西野田今開町伊東時房樣方、上田安子）

○むし齒で困る方　むし齒でお困りの方に三種で全快する藥を無代進呈いたします。（靜岡縣引佐郡奧山村柄傘、高田元子）

○十四歲の少女　皆樣私は十四歲になる一少女です只一人此四月からなつかしい家を離れて當地の學校に入りました、何卒御玉章など下さい、お返事は必ずいたします。（金澤市寶船路町七〇鈴木森正方、石本かずの）

○音樂御好きの方へ　妾は音樂非常に好きで何時でも學校から歸つて來るとオルガンやヴアイオリンを彈いて遊ぶのが例であります。皆樣の內で同趣味の御有りなさる方が御座いましたら末永く交際を願ひます。手許に樂譜十五六ありますから合せて樂譜の交換も願升。（岩手縣一關地主町二階堂方佐藤廉子）

○上海より　我愛する讀友の君よ。妾は此度慈愛深き兩親をはじめ親切なる友愛らしき妹弟をあとに見て泣く良人と共に上海に參りましたのよだから異國の空に互ひに語りあふ友もなく只一人ぼつちの哀れな者です何卒御手紙下さいそして行末ながく御交際いたしませうれ。（淸國上海三井洋行與舘、小山照子）

○眞の姉樣に　眞の姉さんのやうに愛して下さる方にお願ひします、何うぞ親しく御交際下さい。（靜岡縣引佐郡都田新木區寺前、鈴木とも子）

○方言　私は諸孃の方言をしらべたいと思つてゐます、かた〳〵御交際下さい。（青森縣師範學校第一種補習科第一寄宿舍、小笠原友子）

○凉しい手紙　われ〳〵のやうな贅澤な避暑も出來ない者の爲に、凉しい手紙を下さい、そして凉しいリボンに歌を書いて交換をいたしませう、送つて下さい。（牛込區市谷佐內坂町三八小山方、佐藤いつ子）

○同縣人　妾は長野縣松本ですが、去年から東京で勉强する事になりました、同縣の人は勿論讀友の皆樣方ぜひとも交際をして下さい。（東京青山南丁六丁目一〇一番地鈴木舘方、細川英好子）

○外國の方にも　なつかしの諸孃樣方よ私は今年詔島の女學校を卒業したものですが何卒御玉章を御めぐみ下さいませんか御返事は必らずいたします外國にいらしやる方にもねがひます。（東京市牛込區神樂坂若宮町十九番地末弘樣方、村上弦子）

○今年の卒業　皆樣の內でながく交際のしたい方は玉章くださいまし私もきつとさし上げますしかし男子の方はいやですよ男子とみとめた方は御返事をだしませんよしかし私は今年三月女學校を卒業しました者ですがどうぞ御交際をね年は廿歲ですから年のしたの人でも上の人でもよろしいから玉章を下さいまし天地にちかつて上げますよ物をくだされば相當の物をかへしますよ。（名古屋市本重町五丁目、花岡二三子）

○北海より　なつかしき讀友の皆樣、鯨臭い

と云ふ此の地につの風れられて可惜花は脆くも散り果てゝ仕舞ひました。野に山に生氣の漲る緑の葉、碧の海、紫の空、北海の天地も今や活動の時季になりました。――けれども、けれども――吁、…妾はなぜ懲う淋しいでせう、十一の春から妾はまだ、眞に楽しい、眞に喜ばしいと云ふことを味はつた事はありません。何卒皆様、此の後とも文のお友達となつて、終生妾を慰めて與れませんか、どうぞれ…。（函館旭町二四〇、谷内ふさ子）

○左に掲げたる諸孃は皆新しく交際を望まれてきた方々てす、大抵は同じやうな文句てすから住所姓名だけ掲げることに致しました、多くは手紙繪葉書寫眞の交換を願ふといふのてす、個人〳〵嗜好も希望も違うてせうから其邊は先づ初めに名刺代りの葉書ても御交換なさいました上て、相互の意志を疏通せしめ、それから誠實なる交際を結ばれたら宜しからうと思ひます。（記者）

○京都市五條通油小路東入、大島裁縫練習所第二年生桂千代子。
○廣島縣賀茂郡阿賀町字四町、宮尾梅子。
○石川縣鳳至郡七浦村、松枝とき子。
○大阪西區九條町二番道路五丁目三百四番、廣島作子。
○臺灣台北府後街三丁目二番戸、内藤しげ子。
○京都五條通油小路東、大島裁縫科一年生、吉村君子。
○伊豆下田局區内中村、村山操。
○青森縣北津輕郡五所川原平井町、林ちゑ子。
○東京府南多摩郡忠生村上小山田、中島靜花。
○千葉縣山武郡増穂村北横川、森川靜江。
○栃木縣下都賀郡寺尾村、小林みち子。
○千葉縣東葛飾郡福田村上三ヶ尾四一二、光松げん子。
○京都市室町五條上、杉山方、今坂なら枝。
○下野壬生局管内國谷渡邊やす方、一枝子。
○栃木縣下都賀郡寺尾村大字尻内福富ちか子。
○京橋區靈岸島銀町十六波多野方、佳菊子。
○牛込區市ヶ谷鷹匠町八番地、眞壁しげ子。
○靜岡縣引佐郡都田村新木北、鈴木小ぎく子。
○岩手縣九戸郡輕米村大町、堀米郁子。
○信濃東筑摩郡坂井村權現原、安坂富美子。
○千葉縣香取郡日吉村、宇井多津代。
○栃木縣下都賀郡寺尾村尻内、福富梅雄子。
○北海道根室郡和田村三〇三番地、平田富美子。
○長野縣南安曇郡南穂高村細萱丸山茂吉方、丸山ます江子。
○岡山縣勝田郡廣戸村廣戸大吉、竹内章女。
○京都市上京區日暮通下立賣上、木村方、みやま木。
○大阪市南區鰻谷東ノ町二三六番屋敷、小山方、小山はま子。
○北海道根室國和田村、伴ちよ子。
○大阪西區松島二丁目丸山まつ方、岡田千代子。
○新潟縣三島郡塚野山内山次郎方、内山きよ。
○北海道夕張炭山斜坑ノ上、加藤ふさ子。
○本郷區元町二ノ六六玉翠館内、山口壽美子。
○奈良縣吉野郡賀名生村、中垣芳子。
○信濃加茂郡黒川村益淵野田塢、鈴村春江子。
○岐阜縣加茂郡黒川村大字中新田鷲見ちえ子
○秋田縣北秋田郡阿仁合町善導寺内、小原あき子。
○近江彦根京橋通り上本町西入、桝田はな代。
○近江彦根川原町久左之辻南角、太田君子。
○越後加茂町、近藤のり子。
○山形縣西置賜郡白鷹村大字中山、大瀧すみれ。
○金澤市香林坊美川屋方、後藤芳子。
○四谷須賀町二十五天野櫟方、松原とみ子。
○福島縣磐城國相馬郡中村町字多川町、齋藤くに子。
○福島縣相馬郡中村町、鷹谷やす子。
○新潟縣刈羽郡相野町字新田、巻淵とい子。
○北海道渡島國松前郡福山大松草町、平田宮子。
○東京府下青梅町森下、粕谷方、吉田花子。
○京都府下紀伊郡上島村大橋兵衛方植野亜子。
○京橋區靈岸島町六只見方、高橋やま子。
○福島縣河沼郡堂島村大字岡田、鈴木葉陰。
○三重縣紀伊國北牟婁郡尾鷲町、逸見隆子。
○大阪市東區紀伊國町九一二家苗丘吉方、大島よし子。
○大阪府下堺市甲斐町西二丁目馬場内平川芳子。
○岡山縣苫田郡芳野村、平賀綾野。
○青森縣弘前市上瓦町三十一番地森井方、長尾にしき子。
○美濃國賀茂郡黒川村鮎淵、長瀬しげ子。
○岐阜縣加茂郡和知村下牧野日置綴次郎方日置桃花亭。

記者と讀者

○雨が降り續いて不順な頃で御座いますが記者様御一同お變りも御座いませんか。私は始終本誌を愛讀して居りまして今迄度々投稿も致しま

したが其都度おのせ下されて有がたう存じます。私も本年漸々長い寄宿舍生活を出てゝ家の人となりましたから、閑にまかせてこんなものを又作りました。何卒お目通し下さいませ。終りに皆樣の御健康を祈ります。忘れましたが寫眞は裏に乞返送とかいて切手を入れるので御座いますか一寸どうぞ。實は父が四月樺太守備隊より歸りましたので彼地の寫眞百枚近く持ちかへりましたから、少しお目にかけたいと存じまして。別に母校の雜誌一部お送り致しますお慰みになれば結構と存じます。（靜江）（記者曰、目出度く御卒業の由およろこび申します、御作も面白く拜見して居ります、寫眞は別に切手封入せずとも「乞返送」とお書き下されればお返し申します、樺太の風景試みに二三枚送つてみて下さい）○私はまだ十六歳の少女ですが、本がすきて文壇を愛讀して居りまして、記者樣や諸姉樣の美しい筆つきを拜しては、自分は此の樣なりつぱな文を作る力は持つてゐないが、自分の書いたものが後の方でも印刷してあるのを見たい、と思ふのでございます、ですから御社へ投稿しようと思つて書いた事はございましたが、文も下手文字も下手て、はづかしいとそれなりにして居りましたが、下手だといつてそれなりにしておいては、やつぱり、下手て何時までも上手にはなれないと考へたものですから、下手てすけれど別紙にある樣なのを書きました。どうぞ、記者樣、後の方でもよろしうございますから、記者先生の御考へを書いていたゞきたうございます。（茨城縣功野蕎梅子）（記者曰、下手だといつていつまでもうちやつて置いても上手にならぬとは平凡なやうで眞理です、下手でも努めて上手にならうと云ふには人中へ出るに限ります）○記者樣、誠に御手數ですが與謝野晶子樣のみだれ髮の發賣元と其の番地を教へて下さい。（三河永田舞鶴子）（記者曰、みだれ髮は目下絶版の樣子だらうと思ひます、寧ろ誌友の方の中には所持されて居るてせうから何かと交換なさつては何うです）○岩代佐藤やいさんに、紙上でも二十四字詰になつてゐる處は然うして下さい、然うてない處はかまひません、ペンてもきれいに書いて下されば差支ないのです。（記者）○近江、小倉藤嘉さんに、寫眞の裏紙の表に「乞返送」と書いて下さい、切手は入りません、又投稿に編輯係の字はあつた方がよろしい。（記者）○茨城の愛讀者さんに、何うも御出京の上てなければ詳しいことは分りますまい、北島氏の住宅は東京府下千駄谷町九〇九です。（記者）○武藏、白百合さんに、折角ひいきして本誌を讀んて下さるのに、皆樣のお作が發表されないて誠に申譯がありません、もう少し怒らずに辛棒して投書を續けて下さい、御勉強して下されば乾度出るやうになるわけです、投書は非常な數てすから何うしても好いお作てないと出かれます。（記者）○よれ子さんに。繪葉書てはいけません。（記者）○西山蕎美さんに、別に、お疑ひしたこともありませんが何かの間違ひてはありませんか。（記者）○片桐せき子さんに、女學生倶樂部とやら云ふ雜誌と本誌とは何等の關係もないことてすから一向存じません。（記者）○下に芳名を記す諸孃には別に一々お返事は申しませんけれど、お尋ねのことは大抵よろしうございます、又御あいさつは謹て聞きました。伊豆、村山操。武藏、うらみ少女。福島、愛讀者。本所、武林朝子。越後、井上貞子。山形、玉蕊きん。福島、荒井ひさ子。武藏、關はる子。金澤、石本かづの。三春、橋本ふさ子。愛讀者、正女。背山、細川美好。石川大子。錦葉子。美哉子。信濃、せい子。富田美彌子。下野、坂野。龜井賢子。常陸、貞子。はま子。はな子。名古屋、渡邊みつ子。春江子。鹽原幸子。高知、佐々山靜子。小石川、菊地雅子。かつら子。下野、今井きよ子。金井孝子。近藤則。郁葉。小山照子。橋本いつ子。金澤、後藤芳子。長野、よし子。

○三河の永田舞鶴子さんに　矢作町には似よりの名が無いとの附箋であなたに上げた手紙が戻つて來たから誌上て申上る。私の態度があまり嚴峻に過ぎたとは内々悔ても居るし何處までも窮迫するなんてそんな冷酷な人間ては無い、たゞ男の僻に、女のかつぎに隱れて白日意氣揚々と往來を歩くのが齒がゆく情なく面にくゝ馬鹿らしくてたまらぬからてあつた。山田服部高仲岡田太田の諸子がわれ／＼に優待さるゝにも拘はらず、その人達よりもむしろ上手に詩を作り小說を作る某々の變性男子が今だに頭が上らずあはれむべき境地に沈めるをごらんなさい、欺かるゝは忍ぶべし、弄ばるゝに至つてはゆるすとが出來ないばかりか、女子文壇の撰者としてはあくまでも女子にくみし女子に蕪せればならぬのです。且かぎりある誌上て限りなき人の作を載せ切れぬとはご存じてせう、小說、美文の撰者は知らず、私だけは直接に詩を見て上げ

てもよいと思うてゐる、どこが拙くて沒書になつたか知りたい方はなぜ手紙を下さらないのか、それだけ熱心な人なら喜んで答へてあげる。十年のむかし自分にも投書家時代があつた、今選者となりて怨嗟の聲を聴くに忍びず。敢て告ぐ。（夜雨生）

各地通信

○酒田より　私の住むでる酒田といふ小さい町にも春は春らしい事が多く行はれます。牡丹の盛り五月二十日は例年鎭守様、日枝神社の祭禮で郡小女は一年中其日を晴に櫃の底起して着飾つて棧敷の上から見下す者、或は塵の中を群歩く者、其は賑かです。十日過ぎから諸國の藝人見物抔が集つて人氣は別になります。其日は上下二つに別れて町中若衆が山車をひきます。そして後には神官や美しい神馬や古昔其儘に刄を持つ者槍をかつぐ者、何丁ともなく續きます。今年は電氣電話の柱の爲に山車はひけないと申ます。又當地から五里離れた大山といふ所ではお祭りの時に村中で一番美しい娘に最も美しく粧はせて山轎にのせて其後から一疋の大犬をつけてお宮に行く相です。是は昔の人見御供の風が殘つてるので犬についても面白い理由があるのですが長くなるからよします。とにかく私は郡祭りといふ事に多大の興味を持て居ます。一々由來を調べたら面白い參考になる事と思ひます何卒皆様各地の郡祭の模樣を御通信下さい。（菊池りう子）

繪葉書に限る

○特に繪葉書交換のみ望まれる方が左の通りありました、同好の諸嬢に紹介いたします。
○長野縣伊那郡平出町、中村廣子
○東京京橋區木挽町三丁目倉田德次郎方、山本君枝（三枚以上を乞ふ）
○横須賀市山王町二六塚田方照沼勇子（全國の學校寫眞繪葉書帖を作りますから御持の方は交換して下さい）
○信濃北安曇郡廣津村、丸山清子（御禮には山濟路繪はがき）
○横濱市三吉町一ノ一田中方、喜多原（自筆水彩畫葉書に限る、用紙はワットマンを好しとす、端に御自作の詩歌俳の類あれば更に結構、一時的でも永久的でも關する處にあらず）
○奈良縣生駒郡山町豆腐町北條方、霞子（四十一年大演習紀念繪葉書がありますから何か紀念物と交換して下さい）

寫眞

○名所外國繪葉書編物雜誌小說類御送り下さらば田舍のお多福の寫眞にて御返し致します。（水戶上市鐵砲町三十二、橋詰道子）○妾共は姉妹です、姉は芳子で妹は靜子です、芳子の方に御寫眞送り下さらばハモニカに自分の寫眞をつけて、靜子の方に送り下さらば自分の寫眞にリボンと香水とを添へて御返禮いたします、なほ御手紙繪葉書新聞雜誌などの交換もねがひます。（大阪市東區上本町九丁目一五三阪田清方、芳子、靜子）○妾は北海道へ移住してから二年になります、諸姉さんアイヌのなかまいりをして居る妾とまじめな交際をして下さいませんかたゞうはべばかりの交際はあまりのぞましくはありません眞心から御寫眞を送つて呉れた御方には五名にかぎりアイヌ婦人と共に寫した妾の見にくい寫眞をあげますその外の御方にはアイヌの繪葉書をあげますきつとです。（北海道十勝國帶廣西一條七丁目十二番地、雨內靜江）○妾は今年十七歲の淺學な者です、若し未使用の繪葉書御送りの姉上には見苦しき妾の寫眞送り申ます。（大阪市西區松島一丁目丸山まつ方、岡田千代子）○お手紙の交際も望みますがなほ寫眞を御送りの方には私の所有の小說に私の見にくい寫眞を添えてさし上ます。（新潟縣三島郡塚野山內山代次郎宅內山きよ子）○御姉上樣方よ、妾は草深き片田舍にて何の樂もなく通學して居りますから懇切に御交際下さいませ、寫眞も二組ありますかられ、之をも御交換願ますよ。（茨城縣筑波郡小野川村大字小野崎、高野たみい子）○お寫眞お送り下さい、お禮は妾の寫眞に奈良名勝繪ハガキや栞など添へて致します。（奈良縣山邊郡朝和村大字長柄四、山崎安子）○何卒御寫眞を送つて下さい見苦しい妾の面影に名勝繪葉書を添えて差上げます。（岩代原局下共和乙、中村濟子）

品物交換

○切手　誌友の諸姉上樣皆樣の內に東洋の舊切手を御持ちの御方は何卒西洋の舊切手と御交換を願ひます猶皆樣の寫眞か舊切手保存帖か紀念繪葉書又は紀念スタンプ付きのを御惠送下されたる御方には外國の美しき繪葉書か舊切手を以て御禮申上ます英字新聞、雜記なども御好の方

へ送て上ます。(北米加洲ソラノ郡バカベル市郵便函三九五、阿久津波月女史、From. H, akutsu, Vacrille Solano. Co, D, O, Bor, 395, Cas)

○スタンプ　親愛なる諸兄姉樣方私は世界各國のスタンプを集め樣と存じて居ります、英、米、佛、獨等の文明國を除き、亞細亞、亞弗利加、其他歐洲はなるべく野蠻國の諸切手御持の方は私の日本各種、米、英數種、其他香港、ハンガリー、ヴイクトリヤ、タスマニヤ、外數種か或は當地名所エハガキなどゝ御交換下さいな。(神戸市中山手通り一丁目四十六ノ十四、岸本新子)

○裁縫が好き　おなつかしき諸友の皆樣、私編物や縫物大好て御在いますの、皆樣の中、どなた樣か私と同じ趣味をお持ちなさる方は、珍らしい物お知らせ下さい、私も數十種位は存じて居ますから、くはしく御しらせ致します、(岩代若松市七日町五丁目、吉田きち子)

○何卒繪葉書や、編物、しをり、ひじつき、夏前掛、皆絹製の物を御送り下さいませんか、返禮には私の寫眞に成田山のお守、名物を添へて送ります、尙先着者には下總、香取神社の流行病安全のお守を差上ます、但し男子のお方はいやですよ。(茨城縣稲敷郡柴崎村字成渡り、山口うち子)○お姉樣方どなたでも御自製の深お持ちの方お惠み下されませ御禮はきつと致します。(京都市西洞院錦上ル佐々木繁子)○皆樣のお手許に御不用の二絃琴お持ちなさいます方はお申し兼れますがお讓り下さいまし又女持ちの尺八もお持ちなさいます方はお分け下さいませ共にお願ひいたします。(大阪市南區阪町二二八番屋敷、加藤菊子)○皆樣私の手もとにヴワキオリン寫眞機械上等手風琴月琴ハーモニカ等ありますから女子文壇五冊以上送られた方に差上げますしかし男の方はおことはり致します。(兵庫縣川邊郡長尾村口谷阪土留造方、かめ子)○妾は今回、婦人用コンパスが不用になりましたから、讓りますわ。(東濃加茂郡黒川村益淵、廣瀬舍內、古田とし子)○皆樣!妾は四國第一番より第五番迄と第六十九番より八十七番迄と弘法大師誕生所善通寺及び智證大師誕生所、讃岐象頭山金刀比羅宮、屋島古戰場、佐藤嗣信の碑文、源氏の總門、那須の與市駒立の岩等の印譜及び石摺葉書澤山持つて居りますから彩色繪葉書と御交換下さい、御送付下さいました物品に相當する丈の印捺物を差上ます、コロタイプ物及び五枚以下の交換は御斷り。(香川縣高松市內町、津井磯子)○なつかしき誌友の皆樣あたしの手もとに上等寫眞器械手風琴ヴアイオリンが不用ですから皆樣の中で中等學生作文寶鑑か實用普通作文寶鑑かお持ちの御方はどちらなと一冊でもかまひませんから送つて頂戴、すぐ希望なのを一部づゝ送ります。(攝津小濱局區谷阪留方、龜子)○御手製のしをりひじつき御めぐみ下さいました方には高野山の繪はがき其他美人繪はがきて御禮いたします。(和歌山伊都郡九度山村九度山木澤てる子)○お情深き姉樣方のお手許に手風琴の不用が御座いますなれば何卒下名までお知らせ下さい。(近江神崎郡山上村山寺久子)

文學上の交際

○皆樣私は出來ぬくせに文字狂てすとりわけ俳句狂てす、俳句を二句かぎりかいて送つて下さいきつとお禮は致します。(下關赤間町富田樣方上杉玉子)○皆樣のお內で小品文、和歌、俳句、新體詩等に趣味をお持ちのお方は、何卒お送り下さいませ。(東京市京橋區木挽町三丁目楓文學社にて玉野水子)○皆樣和歌俳句の短冊など交換うつしゑの交換を願ひます、しかし男子の方はおことはりいたします。(山口縣玖珂郡桑根村字南桑藤井英樹樣內にて、川上たか子)

男子にても

○妾は遠く故郷をはなれ西の都に遊學いたして居ります諸姉樣と御交際をねがひます尙男子の方にても潔白なる交際なればよろしく候。(京都市一條通千本西入土肥樣方、岡田清子)○私は學校へも行くことも出來ず淋しく暮らしてゐますお手紙繪葉書などの交際を望みます、男子の方にてもいとひません。(下總三里塚、武井秋波子)○妾は片田舍の不束者てすが繪葉書寫眞玉章の交換を御願申します御返事は順を追て差上ます恥かしながら男子にても正しい御方なれば交際を…栞六組持つてゐますから、之も交換致します。(大阪府東成郡中本村大字本庄七百九十五番福井太郎方、東艶子)○何卒御交際を願ひます繪葉書や玉章の交換も御願ひします雜誌小說もよ御返事は神にちかつて差上ますよ男子にても清い御方なれば恥かしながら、御交際して頂戴。(大阪市東區佐官町八、三二番、吉田久子)○諸友の諸姉樣妾は不束者てすが御交際を願ます男子にても清い方なれば恥かしながら御交際下さいれ。(大阪市東區龍造寺町九九屋敷、辰巳留次郎方、長谷川政子)○本誌愛讀の諸姉樣妾

は不束者ですがれ御交際を願ます男子でも清き心の御方なれば恥ながら御交際下さいませ御返事はすぐ差上ますよ。(大阪市南區内安堂寺町一丁目四〇八、上野新太郎方、伊藤滑子)

持つてゐる書物

讀みたい書物

○全書、辭書、歌書　誌友諸姉様の中に、博文館發行の、日本文學全書、壹より廿四編迄て全部、同日本歌學全書、壹より十二卷迄て全部、晶子女史著歌集、何にてもよろし、スバル、三月號以後の物、新體詩集、女子雜誌、上等寫眞かけ、ひぢつき、(あまり古くないもの)お持ちの方は、私しの、和漢三才圖會(二、〇〇)、石田道三郎著、書翰文辭書(一、二〇)以上は箱入り、實驗應用寫眞稽古(九〇)、小林鶯里著、日用百科寶典(二、〇〇)蘆園著、小詩國、ファイオーリン譜、千鳥の曲、以上は極新らしき物、女子書翰文例、日本婦人、婦人世界、女學世界、本誌、及び小說背果集、慘風悲雨世路日記、など相當代品と交換、又は讓受渡して下されても宜敷からお願申します、尤も男子の方でもよろしいからお望みの方は下記迄て御一報下さいませ。(備後國福山町字笠岡町　藤井関右衛門内かず枝)

○新美文　諸姉様の中で、女子文壇二月第一增刊の新美文が不用でしたら一部惠んで下さいませんか、それ相當なお禮は致しますから。(三河國碧海郡矢作町橋目永田舞鶴子)

○あめりか物語其他　妾の手許に緑園生著大石內藏助、小杉天外著コブシ前編、永井荷風著あめりか物語、等ありますが相當の者御送りになれば御送本致します又讓渡しても宜しい名所繪はがき未使用の者不用がありましたら御送り下さい御返禮は致します尙水彩畫の手本も讓受たう御座います。(名古屋市中區門前町二丁目太田五三郎方、太田香園)

○譜　姉様方、何卒不遇な妹を慰めて下さい。御願ひでございますから、離れ小島、須磨の曲、殘夢御持ちの方は寫したのでもよいのですから御送り下さい、御禮には松島以上といはるゝ當男鹿名勝ゑはがき五枚づゝ差上ます、又小說女判任官がよければ御送りいたします。(秋田縣秋田郡新沼町、石井いし子)

○切拔小說　私大阪朝日新聞切拔小說、後藤隱岐、人の羅、白梅紅梅、式部小路、青松葉、高倉長衛門、花夜叉、眞淸水、涙枕、楠正儀、綱手綱、松山颪、長恨歌、島守、懺悔、宗行卿、世界の大寶庫、野分、坑夫、上方見物、海、元祿女、及び海底軍艦、武俠の日本、武俠の艦隊等その他多く有ます、御望の方は、金色夜叉合本、小猫、大英遊記、世界的大戰爭にて御申込下さい着次第御送致します。(吳市二ツ町西本通二丁目、碓井吳竹)

○記念のため　四方の山山は早や青葉とかはり申し候妾しも先月より女子文壇の愛讀者の一人となりましたから記念の爲め御交際下さる方に妾所有の竹取物語、社會的衞生論、春色梅曆、小鼓、英文不如歸、子猫、日の出島、花籠男女の硏究等色々ありますから御望みの方は寫眞か又は繪はがき五枚以上と御交換いたします　しかし先着拾名様に限ります　何れ又次號にゆづります左様なら。(京都府南桑田郡東別院村字東掛、高なみ子)

○紅葉、樗牛全集　私の許にふた昔、伯爵夫人、己が罪、紅葉全集、一二三五　六樗牛全集、全部、文藝倶樂部第八卷一號より十五卷八號まで全部等有りますが諸姉上様の内で鎌倉守、透谷全集、日本演劇史、福彥傑作等と御交換致したいのです。(茨城縣那珂郡額田村寺門くに子)

○水彩畫の參考　誌友の皆々様御不沙汰して相濟みません其後妾は一心になつて水彩畫のお稽古をして居りますから同志のお方は以後親しく御交りをお願ひ致します、お近くの方は何時なりともお遊びにお越し下さい大抵は宅に居りますから又皆様の内に、何か水彩畫やスケッチ鉛筆畫等の參考になる本や畫を御持ちの方は妾の何かと御交換下さいな。(京都市油小路五條北入大森與兵衞方　はる)

○聖書　誌友諸姉様の内に本譜付(但しソルファ共)讚美歌、及び上製小形詩篇付聖書の御不用のが御座いますなら至急御送り下さいましな。御禮は必ず致しますよ。(神戶市中山手通り壹丁目四十六ノ十四、岸本君子)

○雜誌と編物　私に新小說、女學世界、詩人、帝國文學、明治の家庭、少年、女子文壇(交換するは卅九年度のみ)外に詩集、小說なんど御座いますが只今は雜誌だけとしまして皆様の内昨年中の婦人クラブ、少女世界と交換して下さいませんかなほレース編物枝折など珍らしき巾着などの交換もお願申ます私の住所は。(福井縣坂井郡東十郷村、多田入重子)

○習字帖と琴の譜　私の手元に今小野鵞堂先

生の習字帖二册と獨習の出來る箏の譜本とを持つて居ります御望の御方に御讓り致しますから諾上て御知らせ下さい住所氏名明記して(靜代)

○漱石の作　皆樣の中で夏目先生の御作の小說がありましたらおゆづり下さい又詩集二十五位御持ちてしたらどうぞ願ひます私の手許に女子文壇數十册ございますから絵端書送つて下さるればいつても上げます但し餘りつまらんのでは……(越後中魚沼郡十日町、根津やす子)

○料理談　皆樣の御手許に、弦齋夫人の料理談御不用の方は、今月の十日までに、下へ向けて御一報下さいませ。(横濱市南太田町二〇九横山書院方、小田切錦子)

○御禮に書物　諸姉樣よ私は去年病氣で高等女學校を中途で退學し今は毎日氣の向くまゝ皆樣の寫眞を見たり文章を讀んだりしてゐる者てす。家内は母と弟と私きりてす。みなさけ深き姉樣方病む私の爲に何卒寫眞や繪葉書玉章等を送つて下さいれ御禮はきつと致します。女學世界、不如歸、ハイネの詩、玉虫、少女世界、新文林、寫生文、新寫生文、等以上の書物て。(千葉縣夷隅郡千町村上須賀谷、峯島和華)

○只今手許に「女子職業案内」「日用百科寶典」の二册、不用になつて居ります皆樣のうちて「言海」「辭典」また「藤村全集」「二十八宿」とお交換下さいな、其他何本てもかまいません。(岩代國喜多方町新中、佐藤やい)

○本誌愛讀の諸姉上樣よ、私の手元に婦人世界、女學世界、文庫、秀才文壇、綠葉、家庭の友中學生などの不用雜誌が澤山あります、皆樣方の内にムラサキ、流行、心の花、新聲、衛生新報などの雜誌がありましたら送つて下さい着次第に一册に付二册宛差上ます屹度よ(佐渡畑野村栗野江、谷川かつら子)

○妾は小說が大好てすから皆樣の御許の乳姉妹、金色夜叉、己が罪などと妾の女學世界・婦人世界、新文林、文章世界などと御交換下さい先着三名の御方には拙き私のうつしゑを御禮に差上げ致します。(周防國熊毛郡山布施村波野村御瀬戸、藤井あや子)

○皆樣の内に詩集、歌集、美文、韻文、散文、種々の辭書類、其の他一葉全集、花袋集等名高きお方の作集の如き、文學書類をお持ちの方は、何ても類は選びませんから何うぞ御送り下さいお禮には私の手許に有ります七十餘册の雜誌の內に、手製の花瓶敷か松島の繪葉書を添へて必ず〳〵致しますわ。(仙臺市南町通り五、佐藤たか子)

○誌友の皆樣妾は未使用のエハがキ澤山集めてゐるの、文庫か新潮か趣味かと交換して下さる方はありませんか又言海か辭林か御不用の方は妾の鳴潮餘沫花紅葉、新赤毛布、長劍短刀、其他の雜誌、エハカキと交換して頂戴。(大阪南區谷町六丁目五服部喜代子)

○私不用の「女學世界」「女子文壇」「少女界」「婦人世界昨年中一綴ありますから編物、小說、名所エハがキと御交換願ひます。(京都市小川二條上ル清水多笑子)

○妾の村に、今度雜誌繪葉書交換會と言ふ者が設立されました、發起者は九人て女子文壇愛讀者及び大日本國民中學會女學部會員て只今の所數百册の書物があります諸姉樣よ安心して御申込みなさい大丈夫なる事は妾が保證します、最も送本郵税は交換者の自辨だそうてす申込者は左の所へ。(茨城縣稻敷郡柴崎村茂波新田橋本宅內、文友倶樂部てす)

○諸姉樣妾のもとに女學世界、少女世界、婦人世界、少女の友、婦人畫報等諸雜誌澤山ありますから諸姉樣「シホリ」リボン繪葉書などと御交換下さい(東京市京橋區大鋸町野口方、山松和代)

○皆樣の手許に本誌四、五月號御持の方は御送りを願ひます御送り被下御方には松島の名勝繪葉書一組(十二枚)御送申します。(陸前小牛田町下小牛田、赤坂春江)

○皆樣小說の交換をねがいます。妾のは春潮、天才の末路、怪光、魔風戀風、夫婦波、片戀、野の花、同情、良人の自白、妻君の自白、夫人の自白、吹雪の夜、當世女夫の氣質、花魂、月魄、不死の誓、噫無情、麗子、雨美人、旭櫻、意中の人、愁芙蓉、うらおもて、小弓御所蔡埒、想夫憐、其他色々ございます。双眼鏡及園藝書類等お持ちの方は以上のと交換下さいませ。(佐賀縣小城町蛭子町、田尻貞子)

○新文林、ハガキ文學五六册不用が(但し近刊)有りますから入用のお方はエハガキか何かて申込て下さい早速送ります。(栃木縣足利町祭町柳田喜一郎方、白露)

○御悲み深き方に願ひます怪奇小說、新クレオパトラ、同續クレオパトラ、家庭小說ハイカラ田舍娘、可憐孃、戀か夢か、新婦の秘密等何れなりとも御持合せの方は一寸御知らせ下さい外に露營の夢等も(羽前國天童町字田町鈴木庄助方牧子)

○諸姉樣の內て、コブシ中下、御不用の方は私の「富と愛」「夢物語」か編物て御交換下さい、又お借りしてもよろしうございます、先に一寸ハガキて御知らせ下さいまし。(福島縣伊達郡川俣村字五町一番地氏家英楠內、同イチ子)

○昔のは竹取、伊勢、住吉、源氏の物語、土佐、

更科、紫式部の日記、枕草子、徒然草、方丈記の關華。今のは三四郎、まひろの、みだれ髮、夢の花、出產、靈か肉か、眞人の自白、生、天打つ浪、魔風戀風、草枕、春、龍子、朝ばれ、坊つちやん、多情多恨、虞美人草、不如歸、靑春、常夏、いざさらば、金色夜叉、思出の記、己が罪、無花果、濱子、女夫浪、夏子、伯爵夫人、破戒、花袋集の一と二、紅塵、桐一葉、樗牛全集、透谷全集、響、我輩は猫である。何處へ、獨步集、武藏野、運命、靑果集、紅葉全集、あめりか物語。それからヴアイオリン。永く濟いおつきあいをして下さる方ならば、どなたにても寫眞を添えて申込次第、直樣お貸し致します。寫眞は本と引きかへにお返し致します。又相當の物品とお取かへ致して宜しうございます。但し家庭が嚴しいから御婦人に限ります。（福島縣伊達郡掛田町、佐藤照子）○皆樣只今私の手許に女學生訓、美文精選、入學豫習算術、新家庭、女夫波（小說二册）人の罪、怪光、其他雜誌類の不要者がございます、いつでもこれだけは交換致します、そして文章新辭典を購求しましたけれど、これもお交換致しませう、多くは文章書類、國文典、のようなもの、詩集、文集何でもよろしうございます、本誌四十年以前のお持ちの方は何號でもよろしい私のムラサキ四十年後の本誌、女學世界と交換しませう、それから詩や文を美しく書いて送つて下すつた方にはお望によつて拙いものもお目に掛けます、また花紅葉、金色夜叉の歌等差上てもよろしうございます。（岩代國喜多方新仲町、五十嵐清子）○妾は文學斷片、美辭大觀、小文學、文藝評論、詠歎の栞など持つて居ります、ハイネ、バイロン、ゲーテの詩の中御持ちの方は交換を願ひます、新聞雜誌繪端書の交換もどうぞ。（茨城縣土浦町外西町二五、山中蝶子）○諸姉樣私の手許に白玉姬、夏草、不如歸、新不如歸、思出の記、金色夜叉等ありますから新刊の小說と御交換下さいませ。（千葉縣東葛飾郡田中村船戶運河口にて平久浪子）○諸姉樣の御內で思出の記か金色夜叉御持ちの方はお送り下さい、私の寫眞と不如歸、乳姉妹、多情多恨の中御望みのを添へて御禮致します。（茨城縣稻敷郡源淸田村古河林、松本くに子）○諸友諸姉樣の御手許に小說魔風戀風中下、相思怨續篇、露子夫人御不用の御方は右一冊にてもかまひません御讓り下さいませんかもし讓つて下さる御方は御手數恐れ入りましたが御一報下さい。（北海道有珠郡有珠村、矢內菊江）○妾の許に寒潮、春潮、春日野若子、新嫁ケ淵、新己が罪、笛子、夏子、夫の自白、魔風戀風三册とが御座ゐますから諸姉上樣の新小說ヴアイオリン繪葉書に寫眞手製のシチリ、リボンなぞそへおのぞみの小說と及び玉章も交換下さい御返禮は神にちかつて致しますわ男子の方でもきよい方なら交換も致しますわ。（奈良縣山邊郡朝和村長柄西尾伊久方、西尾かめ子）

注意

○皆樣よく御注意遊ばせ、世の中には眞實に不埒な者が居りますよ五月の文壇で品物交換の中に鶴見局區金子うた子と云ふのがヴアイオリン交換したいつて皆さん、御存じでせう私丁度それ欲しいと思ひましたから早速葉書で照會したら封書で御返事きたのよヴアイオリン持つてるが貴孃を疑ふ譯てはないけれど當方から先へは送れませぬ流行の取つぱなしは致しませんから辭書を先きへ送くつて吳れとれそれは〳〵丁寧に書いてありますの其時日曜でしたから辭書を持たして弟をやりましたのそこの家で尋れて見ましたらそんな女は居ないと云ふんですよ十八九位の厭やな男が居ましたつて、それよ、うた子と假名してるのは、ヴアイオリンなんて持つてる處か肥汲男だとの事でしたよ私は今少して辭書を只取りされるとこ、恐ろしいわれ、御參考迄てに私最近の失敗談を申上ます。御文通を願ひます、珍らしい唱歌の略譜を御送り下さいな御禮は失禮ですけど當地のエハがキで。（東海道藤澤町、常磐幸子）○韓國釜山幸ノ町二ノ六土肥方向井操子さん五月三日附てお送りした品物まだお受取なさらぬと云ふことは御座いますまいれ。（神戶、岸本）○盛北愛讀女の君へ――六月二日附のお葉書昨日落手私の素行をよく御存じなら何故立派に住所をお記しなさいません卑怯でせう、私は熊本などへ行つた事もありません故鄉は岩手縣盛岡市てす發女などになつた事はかつて無い生れて今まで稗貫みつてすよ、且つ私は學生の身てす嫁してとは何のお言葉てすか、お文意によれば「女學校へも入つて居ない辭に」との事どつちがあきれるか考へて御覽なさい、抑も私が女學校に居るか居ぬかを何をもて說明なさいますか、不束ながら私は盛北高等女學校三學年の西組に居ります、私は信者のまれてはありませんが立派に受洗して信仰の道を歩いて居ます私の言語を

疑はれるなら高等女學校と西門外街の日本基督教會とに問ふて下さい必ずです。萬一此葉書が人ちがひとすれば貴君は餘程輕卒な行の正しからぬ人間たる事を信じます、疑惑の眼を以て人を躊傷するとは随分可笑しな行爲ぢやありませんか、「みつ」と云ふ名の人は臺北に幾人もあるのにその疑ひに當つた私こそいゝ迷惑です、餘り失禮な人と思ひましたから此處で辨明します（臺灣、稗貫みつ子）

右の辨明文を讀めば略ぼ分りませうが、なほ稗貫みつ子さんからは此辨明文に添へて、臺北の愛讀女といふ人のみつ子さんに宛てたハガキも來ました一見するにみつ子さんの腹立たれる通り、随分亂暴狼藉なものです、併し第一本名を明かさない事、第二生地を間違へてゐる事、第三現在の有樣を知らぬ事、第四文章の要領を得かれる事、それらを綜合して考へてみると、中傷にしては餘り愚劣であることが知れる、先づ人違ひでせうが、それにしては念入り過ぎる、何れにせよ常識ある者のすることゝも思はれません。みつ子さんが未だ純潔なる女學生であることは記者が保證するまでもなく、御父兄なり、學校の先生なり周圍の方が熟知されてゐる事實です、それに夫のある人だとか、夫の手をかりて作つたとか、熊本の生れだらうとか第一事實を間違へてゐるやうでは稗貫みつ子さんと云ふ人に對して云つてゐるのではありません、狂者の獨言に對してはくど〳〵と辨明の必要を認めません、再び何を言つても對手をなさらない方が宜しからうと思ひます、一言御注意まで。（記者）

問合せ

○若杉とり子樣　おとだへ申してまことに恐うございました。茨城古河の若杉とり子樣。おつゝがあらせられずやかつての私のはがきお手許にとどきましたでせうか、あなたの御健康をいのります。（長曾我部菊子）

○大磯の木村綾野樣　貴女はもしや神田の日本女學校にお在になつた方ではありませんか。（伊原千代）

○山梨の牛越武子樣　妾の母さんは本年三月死去されました爲に本年四月松本女子師範學校を三學年級で退學致しまして只今は家に歸へりまして祖父と父と兄姉さん等と五人ですから八月暑中休みには三好先生と御遊びにユル〳〵と御出でなさいよ。（長野縣北安曇郡廣津山清路、丸山清子）

○梶本友子樣　去年大坂で御遊學の方現在の御住所を御承知の方は何卒〳〵誌上で御聞かせ下され、失禮ですが三越店特別品リボン御返禮致します。（大阪、山田光子）

○阿部梅子樣　足利で生れて目下は東都に居られる方です、皆樣の中で現住所御存知の方がありましたらお知らせ下さいお禮は必ず致します。（フレンド女）

○岡田梅子樣　紙上でお尋ね下さいまして有りがたう、上京中御無沙汰をしてゐますおかげ樣で病氣全快いたしましたから御安心下さい。（倉持美音子）

○京都の佐々木繁子樣　御手紙有りがたう存じますが御住所がすつかり分りませんて困つてをります。（和歌山市、諏訪玉子）

○韓國、露萩子樣　四月の本誌で御作を拜見して陰ながら安心いたしました、其後何うなさいましたか國許の姉からも度々樣子を聞きに參りました早速姉にも知らしてやりませう。（秀子）

○下谷の燕雨子樣　四月に私の寫眞を送りましたら戻つて來ました、葉書も二度ばかり出して戻つて來ました、何處へ御轉居ですか、私は横濱のキリスト敎の某高女の寄宿舍に入りましたから御安心下さい。（K女）

○神奈川の稲葉てる子樣　出した手紙が戻つて參りました、御移轉なさつたのですか、それとも何かお氣に障つたのですか、合點が參りません。（神田、素世子）

剽竊注意

第五號　短文地賞、私の想ひ（京橋、琴調子）は詩的小品文集中の鈴木淳子の作を剽竊せしものなり。（長野、菜女）

第七號　新作家三等賞　縁（木村しづゑ）はかつて趣味三卷三號に出てたる尾島菊子氏作、緣の縁を短く縮めたるものとみとむ。

第八號　笑話人賞　頓智のよい小僧（神奈川、森田靜江）萬朝報より剽竊せしもの也。（讀友某）

右三篇共懸賞無効とす。

雜報

雨聲會

雨聲會と云ふのは、一昨年西園寺侯爵が總理大臣の頃、駿河臺の私邸に小説家を招待したのが元で、其後招待を受けた側より返禮の宴を紅葉館で催ふした際、雨聲會と云ふ名前が付いたので、續いて同侯の招宴が開かれたさうですが、今度も矢張り侯爵の招待で、第三回を六月十六日の午後六時から、日本橋區濱町花屋敷常磐で開かれました。黒塗二頭立の馬車で、同侯の御入來と前後して、柳浪、澁柿、花袋、藤村、鏡花、天外、晉風、宙外、小波、春葉、鷗外、秋聲の諸文星招きに應じて參着、主人側からは竹越三叉氏が出席した。露伴、桂月、風葉諸氏は欠席せられたさうです。是れまで此會の開かるゝ每に、いつも雨が降るので、雨聲の名も付いたのださうですが、當夜は雲の徂徠怪しいながら降りもせず、燈影しめやかにおこる談笑のうちに、自慢の珍味で杯が初まる、初めの程には眉山獨歩四迷諸氏を失つた懷舊談などもあつたが、興が加はるにつけ、快談百出進んで座に侍べりし妓の、『山姥』の踊とやらがあつて一同わつと感嘆せられし趣、主客十分の歡を盡くして散會したのは十時過ぎだつたさうです、當夜も先例により、寄せ書きをして後日の紀念とせられたさうです。

○赤十字社總會

日本赤十字社第十七回總會は、六月四日午前十時より日比谷公園で擧行せられました、明るき初夏の日射しに、滿目の緑鮮かなる式場の、衣香傘影眼まぐるしい程で、參列社員四萬と註せられた盛會であつた、當日臨御の國母陛下は、御手づから令旨をひらきて御朗讀遊ばされました、其左には東宮殿下の軍服姿の雄々しいのと、左に居列び給へる、東宮妃殿下、伏見若宮妃殿下、東伏見宮妃殿下の雪白の御洋裝ボンネットの花やかな御姿、仰ぐも眩ゆきばかりでありました。口繪の寫眞は其光景であります。

文界消息

▲昴第四號所載森鷗外氏作脚本『假面』を新富座に於いて、伊井、村田等の一座が演じた、舞臺上の評判が惡かつた。

▲故二葉亭四迷氏の遺骨が着いたので、六月二日染井の墓地で莊嚴なる神葬式が行はれた、會葬者一代の文星朝野の名士婦人等二百數十名。

▲六月の作物にして好評なりしものに藤村氏の『弟子』鷗外氏の『魔睡』等がある、風葉氏の『姉の妹』所載の中央公論は發賣禁止となつた。

▲三宅野花氏譯『モーパスサン短篇傑作集』と云ふのが大阪の杉本梁江堂から出た、直ちに發賣禁止となる。

▲太平洋畫會は上野公園二號館北部で六月五日から第七回製作品展覽會が開かれた、滿谷氏の『モデル』が尤も好評である。

▲巽畫會も六月二日から卅日まで、同竹の臺陳列館で第九回の展覽會が開かれた。

▲北原白秋太田正雄長田秀雄三氏の編輯で『屋上庭園』と名くる文學雜誌が七月一日發行される筈である。

▲高濱長江氏主幹にてほのほ會より發行して居た、雜誌『火柱』は今度廢刊した。

▲森鷗外氏夫人は先頃女子安產、杏奴（アンヌ）と命名された由。

▲一昨年三月文部省より派遣された、音樂學校助教授神戸絢子女史は、巴里にて專らピアノの研究を爲し、六月十七日歸朝した由である。

▲溝口白羊氏は六月上旬出京、千駄ヶ谷に卜居した。

硝子の金魚入の水が青く濁つて、のろりと澱んで居るのを緣に眺めてさへ倦き夏が思はれます、室内の寒暖計は日に〳〵騰つて參ります、綠葉も倦みて沈んだやうな午下、眼を擧げてたゞ眩むなる光景にうたるゝのです ▲郊遊の季節もしばらく是れを限りと、滿都の士女は盛んに出る野外運動として、ベースボールの試合、テニスの競技等盛に行はれた ▲遅れて建築中であつた兩國の相撲常設館も愈々出來、國技館と名けて六月四日に其開館式が擧行されました、相撲の人氣も大したもので日々幾萬と云ふ見物だつたと云ふことであります。

○音樂夏季講習會

神田錦町三丁目の日本音樂協會では、男女を問はず普く音樂科教員志望者並びに音樂學校入學志望者、其の他一般音樂研究志望者の爲め、來る八月一日より廿一日迄、向ふ三週間第七回夏季講習會を開設する由であります、講習科目は唱歌、ピアノ、オルガン、ヴアイオリン、和聲學、講師は山田源一郎氏外六

名、申込は七月二十九日までださうです。

○婦人興風會の夏期講習會　小石川丸山町田澤幸枝女史の經營せる婦人興風會では、七、八の二ヶ月間、一般休學の女學生及び平素用事の爲め學問の出來ない人の爲め、家事、英語、裁縫、洋書、其他普通學及び技藝の夏期講習會を開設する由であります。

○少年の友の革新　神田旅籠町文光堂發行の『少年の友』は時勢の必要に鑑みて、此度七月號より大革新を施し、立志成功の四字を冠し、記事にも實業上、社會上の新知識、新修養を得らるべきものを多く掲げ、實益のある雜誌にするさうです、既に秀才文壇に於て成功せる同社のことですから必ず『少年の友』も此方面に一新境を開拓してゆくでせう。

○寄贈を受けた雜誌　六月號『新小說』宙外氏の『五日市』は未完▲『スバル』卷頭に永井荷風氏の『なかしき唄』▲『趣味』は雜俎多く『新潮』は評論に富む▲『無名通信』例に依て辛辣、十五日發號の非風俗壞亂號尤も振へり▲『緑熱』二號を發行した、口語句が目的、『おい春の山！僕はつまらないんだ！』は其試み中の一例▲『新牛面』も若き人に依て成る俳句雜誌だが、又新らしき藝術に對する憧憬を見ることが出來る▲『ほとゝぎす』卷頭虛子氏の『興福寺の寫眞』が一般に好評であつた。

新刊

○近代文藝の研究　島村瀧太郎著

『在るがまゝの現實に即して全的存在の意義を發揮す、觀照の世界也、味に徹したる人生也、此の心境を藝術といふ』と本書全體の前提を此數言に約して表紙にも印刷してあります、換言すれは新興自然主義の境地は本書に據りて窺ひ得ると云ふ意味にもなります、流石は時代文藝の主張者だけありて、論旨の明晰なるは優に群評論家を抜いて居ます、多くは早稻田『文學』などに出たものですけれど、皆書物として永く保存するに足るべき價値ある論文です、研究、時評、談話の三つに大別してありますが、研究の中の『美學と生の興味』などは情緒のゆたかな學者離れのした好い論文だと思ひます、抱月氏の論文は一見論文として活氣がないやうに見えますが、其代り空氣焰の爲に威嚇されると云ふことはないかみしめてみると味ひの出る親切な論文だと思ひます、文學を愛するものは創作を愛すると共に此等親切なる評論をも讀み味つて所謂批評眼を養ふことも大切だらうと思ひます（正價一圓八十錢、早稻田大學出版部發兌）

○作と評論　坪內雄藏著

坪內博士が最近二三年間の隨處に發表されたる評論と作物とを集めたるものです、卷頭には『エニスの商人』法庭の場の譯がある、此れほど自在な譯は外にあるまい、面白いと云ふだけが野暮でせう、其外希臘劇の梗概、イプセンの『亡魂』ハウプトマンの『孤衾』の梗概もある、評論と云つても多くは劇に關する意見で、脚本の事、俳優の事、劇場の事、音樂の事、背景の事、舞踊のことなどこまぐと注意されてある。博士の意見は一面理想的であると共に、一面實行的です出來ない相談は持出さない方ですから、實際に劇に志あるものは少からぬ參考となるのです、沙翁劇に就いても博士獨得の新説を散見する、學説と經驗の上から言論を起さるゝ博士の說に對しては吾等も多大の尊敬を拂つて之を傾聽するものです。（正價金一圓四十錢、早稻田大學出版部發兌）

○佐保姬　與謝野晶子作

與謝野夫人の作歌はますく圓熟してきました、本書はその最近作、約五百首を集めて一冊としたものです例の通り一頁二首宛組んでありますから讀み易く、且製本も高雅です、集中の二三首を左に抄記します。（定價金一圓、神田表神保町日吉丸書房發兌）

夕風や蝶のやうなる生ものゝかはほり飛べる東大寺かな
來よといひし林なれどもわが歩む路の無ければ萩の葉を踏む
ちぬの海淡路につゞく平らなる潮干の海に琴置き彈かむ

○少女小說　御殿さくら　尾島菊子著

雛江と普と二人の母が入院中、品川の本邸では園遊會が開かれて、其日から知らぬ女が這入る、其れが爲に二人は遠さけらると云ふ悲劇が、事業の失敗、病氣、女の逃亡、母の誠實な看護等から、父も悔悟して元の平和に復ると云つた筋、時間の短かいのが感じを弱めては居るが、なだらかに好く書けて居ます、家庭での上乘な讀物でしやう。（定價廿錢、本町三丁目金港堂發行）

○妻　　田山　花袋著

『妻』はかつて日本新聞に連載されたのを、今度単行本として出したものであります。花袋氏が晩近文壇に於ける努力は實に目覺しいもので、本年になつてから既に『花袋集』第二の發兌もあつたことですが、これは纏つた長篇で、菊判五百頁餘にわたる大作であります、詳しく內容を紹介することが出來ないのは遺憾ですが、妻となつて家庭に入てから、社會に觸れ、母となりして行く間の、新らしい經驗やら、古い回想やらが、悠揚として迫らず描かれ、又其周圍の事象の發展やら推移が自然に出て居ります、前の『生』はお婆さん中心であつたが、これは若々しい『妻』である丈けそれだけ……、筆端にみづ〳〵しいところがあつて快い、出る人物にもモデルがありさうで其れも一つの興味を自ら呼ぶ。兎に角近來稀なる大貢獻なるが嬉しいのである、製本も頗る美麗。(定價一圓五十錢、日本橋區馬喰町三丁目今古堂發兌)

○謎の女　　生田　葵山著

葵山氏の近業七篇を收めたものです、中には嘗て異なつた題でお目にかゝつたのもあります、氏の小說は風俗壞亂とかで度々發賣禁止の厄に會ひましたが、今度のは其樣な事もありますまい、しかし油氣の有る刺戟に富んだ文には變りない、諡かに氏の一長所でしやう、卷頭の『謎の女』は集中の長篇ですが、其ヒロインの性格の出し方が最初から解らぬ謎て、わざと朦朧にした氣味が無いでもありませんが、兎に角お仕舞まで引きつけられます、製本も美しく、表紙をあけろと夫人と並んだ作者の肖像が出て居ります。(麹町區飯田町六丁目易風社發行、定價八十五錢)

○算術倶樂部　　第二篇　後藤　靜香著

數字の槪念及び智識を、小說體の說話中に敎へんと試みた極めて有益な書であります、幾多の問題解釋もありますから、數學嫌ひの人でも、樂に學ぶ事が出來やうと思はれます。(定價四十五錢、日本橋區本石町三丁目寶文館發兌)

○新選俳句集　　高濱　虛子選

『秀才文壇』に掲載した俳句を集輯したので、俳壇千百の健兒が躍々ろ淸新の趣味、潑剌の活氣の滿紙橫溢する槪があります。鳴雪翁の獻啚と虛子題句の口繪は頗る珍、挿畫數十葉のスケッチも俳趣に富むで居ろ、附錄には久保天隨氏の、百頁に亘ろ俳文評釋がある、是れも再讀して味ふべきものでせう。(定價四十五錢、神田旅籠町一丁目文光堂發兌)

○自然と印象　　自由詩社

第二が出た、加藤介春君の新作三篇と今井白楊君の新作三篇とがある、介春君のストーブの前は最も感興が乘つてゐました、白楊君のは何處となく淋ひな持つてゐます。

○花の趣味　　三宅　花圃著

ゼラニアム、クローカス、梅、ヒヤシンス、ベイチレット、櫻、ホツヒー、デイジー、アマリヽス、谷中村の草花、シチラソヤ、シクラメン、數山の草花以下凡て二十五六種の題があります、文章は古雅姸麗、當年の花圃女史一流の才筆を揮つて、いろ〳〵其花に就いての感想や話を書綴つたものです、和洋さま〴〵の彩色畫を見たゞけても先づほれ〴〵として了ひます。(定價九十錢、日本橋大倉書店發行)

餘興課題　電車

嘗て『汽車』の題を出した事がありますが、今回は電車です。大要は▲電車に乘つた時の或る感想▲自分の目擊した電車中の面白い出來事▲電車內の人物や風俗のさま〴〵▲朝、晝、夜の乘客の相違▲注意すべきこと▲失敗したことや、危險であつたことや、困つたことや、氣の毒てあつたことなど實際の經驗談▲未だ電車を見たことのない人の想像談▲東京の電車と地方の電車の比較▲每日通ふ電車に就いて▲其他電車に就いて一切のこと何でもよし▲原稿は十六字詰十行內外▲賞品は例の通り▲しめきり本月十五日

短篇小說！

目下編輯に着手中の本誌臨時增刊『短篇小說』は優勝の原稿に富るは勿論附錄は當代第一流の名家に托して既に新篇に執筆中なり

月刊雜誌『少女』の創刊

來る九月一日女子文壇の妹として『少女』生れんとす
わが社が雜誌事業に於ける誠實と努力とは愛讀諸君の信用を博し得たる處―更に多言せず『少女』の躰裁內容等は別項（本文四十八九頁の間に挿入せり）就て見らるべし

お伽噺

『少女』の發刊に就き從來本誌に募集掲載し來りしお伽噺は『少女』の方に移し本誌には八月號限り掲載せず、猶募集は從來の如く引續いて行ひ『少女』に掲載したるものには相當の報酬を呈することゝせり、投稿者諸孃も其積りにて更に面白きお伽噺を續々寄稿せられたし。

なほ少女文壇の欄も八月號限り本誌より除き更に『少女』紙上に於て大々的少女の歌文を募集すべし

▲投稿締切日　凡ての投書は毎月十五日堅く締切ます

○女子文壇投稿各種懸賞定額

（甲乙丙の各欄を通じて最も優秀と認むる作物ある場合に之を呈す）

▲特別賞金五圓

▲甲種（短篇小說、美文）
天賞金參圓。地賞金壹圓五拾錢。人賞金七拾錢。

▲乙種（お伽噺、家庭日記、新論文、書簡文、新體詩、散文詩）
天賞金貳圓。地賞金八拾錢。人賞金四拾錢。

▲丙種（和歌、俳句、短文、餘興、笑話、歌論、敎への庭、少女文壇 歌稿は二寸の三寸の大さにて薄き日本紙に限る）
天賞金壹圓。地賞金五拾錢。人賞金貳拾錢。

◉各種とも金壹圓以上の當選者には相當の價格の吳服物。小間物。文房具。日用具等凡て物品にて贈呈す
壹圓以下は便利圖書切符を以て贈呈す

◉賞品發送は作物發表の翌月末日に贈呈す、（但他人の作物を剽窃したるものは無効とす）

社告

女子文壇定價明細表

振替貯金口座 東京第壹七貳九番

○定期發行分　▲毎月一回（一日定期發行）

一册（一回分）	定價金拾五錢	郵税一錢五厘	計金拾六錢五厘
三册（三月分）	同前金四拾三錢五厘	同四錢五厘	計金四拾八錢
六册（半年分）	同前金八拾四錢	同九錢	計金九拾三錢
十二册（壹年分）	同前金壹圓五拾六錢	同拾八錢	計金壹圓七拾四錢

○臨時增刊分　▲年四回（二月、五月、八月、十一月臨時增刊）

一册（一回分）	定價金貳拾錢	郵税一錢五厘	計金貳拾一錢五厘
二册（半年分）	同前金三拾八錢	同三錢	計金四拾壹錢
四册（壹年分）	同前金七拾貳錢	同六錢	計金七拾八錢

○定期發行及び臨時增刊とも全部―十六回

四册（三月分）	定價金六拾三錢五厘	郵税六錢	計金六拾九錢五厘
八册（半年分）	同前金壹圓二拾二錢	同拾貳錢	計金壹圓三拾四錢
十六册（壹年分）	同前金貳圓二拾八錢	同二拾四錢	計金貳圓五拾二錢

▼申込注意―振替にて拂込む時は諸代の外に貳錢登記料増すこと、郵便爲替は中橋和泉町局、郵便切手代用は必ず壹割增（收入印紙謝絕）、凡て前金拂込に限る

廣告料金

特等	上等	普通
一頁三十圓	一頁廿五圓	一頁廿三圓
半頁……	半頁……	半頁十二圓

一行四拾錢　部數多く有効に比し無類の割安
〆切 每號十五日前

特約取扱　○京橋 日本電報通信社 ○京橋 明治廣告社 ○神田 博報堂

明治四十二年六月廿八日印刷
明治四十二年七月 一 日發行

定價金拾五錢

不許轉載

編輯兼發行者　東京市京橋區大鋸町十一番地　野口竹次郎
印刷者　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　石川金太郎
印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍

發行所　東京市京橋區大鋸町十、十一番地　電話（本局六〇七番）　女子文壇社

特約賣捌元　○東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、至誠堂、良明堂

（坪内）

【明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可】



女子文壇定價金拾五錢　郵税

【東京秀英舍印刷】